

国立国語研究所学術情報リポジトリ

昭和32年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001185

昭和32年度
国立国語研究所年報

—9—

国立国語研究所

1958

はじめに

昭和32年度は、国立国語研究所の設置法が出てから第10年目に当る。研究所では、国民の言語生活の実状を明かにし、国語問題解決の基礎資料を得るために、課題を設定し、共同研究によって仕事を進めて来ている。

本書は、研究所が32年度の一年間に行った調査研究の報告書である。ここでは、われわれが研究を進めるに当って、どのような方法を取り、どのような手続をとったかを明かにしている。なお研究成果のまとまったものについては、別に公刊することとしている。

国語研究所の研究活動に対して大方の批判をいただくことが出来ればまことに幸いである。

昭和33年12月

国立国語研究所長 西 尾 実

目 次

はじめに

昭和32年度の調査研究のあらまし	1
話しことばの調査研究	
話しことばの文型の調査研究	5
書きことばの調査研究	
総合雑誌の用語の調査	25
語構成に関する分析	31
雑誌一般の用語の概観調査	37
地域社会の言語生活の調査研究	
日本言語地図作成のための調査	38
琉球首里語辞典の編修	62
国語教育に関する調査研究	
言語能力の発達に関する調査研究	63
言語の効果に関する調査研究	
新聞の文章の漢字使用に関する実験的研究	102
国語の歴史的発達に関する調査研究	
明治時代語の調査研究	119
特殊問題の調査研究	142
国語関係文献の調査	169
図書収集と整理	170
庶務報告	180

昭和32年度の研究のあらまし

本年度の研究題目および分担は次の通りである。

- | | |
|---|----------|
| (1) 話しことばの文法に関する調査研究(継続) | 話しことば研究室 |
| (2) 現代語の語彙調査(継続) | 書きことば研究室 |
| (3) 日本語の言語地理学的研究(継続) | 地方言語研究室 |
| (4) 言語能力の発達に関する調査研究(継続) | 国語教育研究室 |
| (5) 新聞・放送の用語文体に関する調査研究(継続) | 言語効果研究室 |
| (6) 明治時代語の調査研究(継続) | 近代語研究室 |
| (7) 1. ソナグラフによる日本語の音声学的研究
2. 漢字の字体に関する基礎的研究
3. 正書法に関する基礎的問題 | 資料調査室 |
| (8) 文獻目録の作成 | 同上 |

現在われわれの使っている現代語では、主として音声で表現される話しことばと、主として文字で表現される書きことばとの間に、かなり大きな隔りのあることは、明かな事実である。従って現在の国語の実状をとらえるには、この二つの面から見て行かなければならない。話しことば研究室と書きことば研究室とに分けて、調査研究を始めたのは、この理由による。

話しことばについての研究は、これまでの所、そう多いとは言えない。そこで、われわれは、まず、話しことばがどのような特性を持っているかを大きくとらえることに努めたが、次いで昨年度から、話しことばの文法を研究することとして、始めに、話しことばの文型にどのようなものがあるかを明かにしようとして来た。現実の話しことばを資料とする時、文がどこで完結しているのかということは、かなりむずかしい問題がある。文をとらえなければ、従って文型も明かにはならない。そこで、構造と、休止と、文末イントネーションによって文をとらえ、そして文型の最も大きな特徴は文末部にあるという考えで、文末部に主として調査の目をそそいだ。イントネーションに関しては、機械の力を借りることが望ましい。ピッチレコーダーを活用することが考えられたが、それは十分とまでは行かなかった。(なお、ピッチレコーダーは昭和33年度にいたって、研究所に備え付けられる。)

書きことばについては、その文法方面に関する研究は少なくない。そこでわれわれは、主として語彙の面に力をそそぐこととした。現在および将来の国語問題を考える時、日本語の語彙整理は最も重要なことであり、また、表記法の整頓も、語彙整理を基としなければならない。一体、われわれが現在使用している語彙がどのようなものであるかをとらえるのは、そう簡単なことではない。最も経済的な方法であり、しかも信頼しうる結果を得ることの出来る方法を考えて調査しなければならない。われわれは、理論と経験とに基づいて、ようやく調査方法を確立した。先には、婦人雑誌を資料として、主として実用方面の語彙をとらえたが、次に総合雑誌を資料として、主として文化的な方面の語彙をとらえた。次いで、国語の語彙を広く見渡す必要を感じて、各種の多数の雑誌を資料として、概観的な調査を試みることにした。この調査が終れば、日本語の語彙について少なくとも書きことばに用いられる語彙については、一応の見通しが付けられるはずである。出現度数に基づく重要度の順位が考えられ、やがて基本語彙を作成するための見当がつくであろう。

書きことばにおいては、表記のしかたが問題になる。総合雑誌を資料として得られた語彙に基づいて、その表記の実状を明かにしようとしている。また一方、いわゆる正書法についての各方面の人々の考えかたを整理し、中でも送り仮名について、現に行われている仮名の送りがたの規準を整理してみた。また漢字の字体について中国で行われている簡素化の行きかたを中心として、字体整理の方向を知ろうとした。

なお書きことばで表現される新聞の文章が、果して、一般国民にどの程度理解されているものであろうか。また、どのような点が困難と感じられているか、どのように改めたなら、読みやすくなるであろうか。理解と表現との関係で、新聞の文章をながめて行こうとしたのが、言語効果研究室の仕事である。本年度は主として新聞文章の漢字の使用について実験的な調査を行った。

わが国の書きことばが話しことばと隔りのある理由として考えられるのは歴史的に見て、明治以降の書きことばが、漢文書き下し体から出発したということである。そして、漢文書き下し体というものから必然的に起って来る漢語の使用とあわせて、急速に吸収した西洋の事物を表わすために、漢語の形で多く

の新しい造語をしたということによって、実に多くの漢語が出現することとなった。その明治初期の実状を明かにしようとして、明治十年前後の郵便報知新聞を資料として語彙の調査を行った。

各地域によって、言語の異なることは一般に知られているが、それがどのような実状であるかを、言語地理学的方法で調査を始めた。前年度までいろいろ準備的な調査を行い、調査項目(230語)などを決定したが、本年から七年計画で実施することとした。予定の2000地点うち、本年度は、323地点を完了した。

言語の普及発展は、学校教育の力にまつことが多いが、児童が小学校に入学して卒業するまでの間に、言語能力がどのように伸びて行くかをくわしく知ろうとしたが、本年度は調査対象の児童もいよいよ五年生となった。来年度で一応小学校在学中の言語能力の発達のみかたが押えられるわけである。このような継続的研究は、今までほとんど行われなかったものであるから、この研究調査は貴重な資料を提供するものとなるであろう。

本年度の研究機構および配置は次の通りである。

第一研究部	(部長) 岩淵悦太郎				
	話しことば研究室 (主任)	大石初太郎	飯豊毅一	宮地 裕	吉沢典男
	書きことば研究室 (主任)	林 大	斎賀秀夫	水谷静夫	石綿敏雄
第二研究部	地方言語研究室 (主任)	柴田 武	野元菊雄	上村幸雄	徳川宗賢
	(部長) 興水 実				
	国語教育研究室 (主任)	興水 実	芦沢 節	高橋太郎	村石昭三
第三研究部	言語効果研究室 (主任)	永野 賢	林 四郎	渡辺友左	
	(部長) 山田 巖				
	近代語研究室 (主任)	山田 巖	見坊豪紀	広浜文雄	市川 孝
資料調査室	(主任) 岩淵悦太郎				
	調査室 (主任)	松尾 捨	村尾 力	大久保 愛	
	編集室 (主任)	上甲幹一	高田正治	芳賀清一郎	
	文献室 (主任)	高橋一夫	有賀憲三		

なお、本年度内に刊行したものは次の通りである。

国立国語研究所年報 8 (昭和31年度)

総合雑誌の用語 (後編)

中学年の読み書き能力

以上のほか、前年度に引き続き32年版の国語年鑑を秀英出版から刊行した。
雑誌「言語生活」は78号を重ねた。

(岩淵悦太郎)

話しことばの文型の調査研究

A. 調査の計画と前年度の作業

話しことば研究室は、前年度から話しことばの文法についての調査研究を課題として選んでいるが、その第1段の仕事として、話しことばの文型を明らかにしようとしている。これらの趣旨については、前年度の年報で述べた。

話しことばの文型の調査研究にとりかかるに当ってわれわれの立てた計画の要点は、だいたい次のとおりであった。

- (1) 作業期間——3か年
- (2) 資料——共通語における各種の日常談話語を中心とする。(資料の操作に合わせて内省によるものが加えられる。)
- (3) 方法の基本線——表現意図と形式とはどのように対応するか、構文にどのような秩序があるか、イントネーションはどういう体系をもつか。そうして、表現意図・構文・イントネーションの総合において、文型はどうとらえられるか。

作業第1年度としての前年度は、資料の収集を一方において進めながら、主としては、表現意図・構文・イントネーションのそれぞれの根本的な研究に当てられた。いうまでもなく、表現意図やイントネーションについては、これまで開拓されているところが少なく、十分に整理してとらえられてはいない。構文についても、問題としては表現意図やイントネーションに比べて新しくないといえるかもしれないが、未決定の問題を多分に含む状態にある。われわれとしては何とんでもこれらについて一応解決をつけ、その上に文型のための方法を立てなければならない。この基礎的な部面が解明されたときは、すでに文型そのものについて要点が明らかにされたといってもいい。こうしてわれわれはこれらの基礎的部面の討究からスタートした。研究作業の第1年が終わったとき、三つの問題の間に進度の差はあったが、いずれもお残されるところがあり、この基礎的部面について、容易でないもののあることをわれわれは感じさせられた。そうして、本年度の作業は、この基礎的部面の研究の続行から始め

られることになった。

B. 担当者

前年度に引きつづいて話しことば研究室の下記4名が当たったが、表現意図・構文・イントネーションの研究は付記するような分担により、随時これを共同討議にかけて進めた。

大石初太郎 飯豊毅一（構文） 宮地 裕（表現意図）

吉沢典男（イントネーション）

なお、臨時筆生2名が作業を補助した。

C. 作業の概要

(1) 資料について

前年度各種の日常談話語（NHKの放送によるものなども含む）を録音収集し、これをカナタイプの専門業者に委嘱して文字化した。本年度さらにこれを補充して、あわせて45の場面の資料を得た。文字化は最も忠実な再現を要求したが、できあがりには誤りやもれも少なくないので、さらに厳密な訂補を加えた。忠実な再現の困難は、訂補作業においても、われわれの経験するところであった。それは録音器・レーザー等の機械の能力に制限されるところもあるが、作業者の聞取り方に属するところもある。録音状態のあまりよくない材料については、同一のものが別の作業者によって違うものに聞き取られたり、時間を隔てると、同一作業者に同一材料が違うものと聞き取られたりすることも珍しくない。作業者の生理的条件や心理的条件に影響されるところがあるものと見られる。この種の話しことばの操作に当っては、この困難は多かれ少なかれ避けがたいところと思われる。われわれはこのようにして起るゆれをできるかぎり防ごうとして、この作業にもかなりの労力を費した。しかもなお、結果として正確な聞取り不能の部分は、われわれの資料からははずさなければならなかった。

また、言いさし切れ、首尾の不照応等、いわゆる不整表現に属するものが資料の中に少なくないが、これもまた文型研究のためには当然除外されなければならない。いわゆる誤用の類の中にも、文型のためには捨てなければならないものがある。ただし、個々にあたって捨てるべきものか採るべきものかの判定

には慎重な吟味を要する。もちろん日常談話のような話しことばには、とりわけ場面に依存した表現が多い。また、抑揚だの^{こわね}声だの口つきだの言われるような具体音声の変化や、身ぶり・表情等の身体的変化などの、主として主体的表出をになう要素によりかかった表現が多い。そうして、それらに關した不整と見られる類も少なくない。しかしまた、不整に似て実は話しことばの中の一つの典型に当ると見られるようなものもないとはいえない。これは軽々に捨てることはできない。このあたりに、たとえば省略形が言いさし切れかのような問題も生じるのである。また、次に触れる文の切り取り方とも関連しあうところがある。いうまでもなく、われわれの立場は臨時的個々の現象を整理したり解釈したりしようとする立場でなく、習慣をささえている体系をとらえようとする立場であるから、社会習慣として認容される形をなすものについて作業を進めようとする。しかし、話しことばの取扱いにおいては、以上のような意味で、取捨にはとりわけ慎重を要すると考える。ここで特に問題となるものは、具体音声の変化とのからまりのおさえ方だと思われる。イントネーションはもちろんだが、その他の音声的要素にも目を向けて、困難の大きいことではあるが、理論的にも作業的にもここをさらにはっきりさせ、たしかにしていきたい。以上、資料の取扱い方の態度について一言ふれた。

訂補作業の終わったものについて、次に、文に切る作業を行ったが、話しことばについてのこの作業が単純なものでないことはいうまでもない。従来行われて来た文の定義ないし説明の類は、われわれの具体的な作業のためにはきめ手になるものではない。われわれは資料に即して具体的な処理の方針をきめるほかはなかった。われわれのやり方については、いずれ詳しく報告することになるであろうが、方針だけをここで言えば、意味の切れつづき（構文や言語記号による形式で示される）に第一の目やすをおき、イントネーション・間等の音声的要素の裏づけを見て文末を認定しようとした。しかも實際上処置の困難な例は少なくなかった。文をどう切り取るかは文型研究のためには基盤となる問題で、文型のとらえ方に直接つながるところである。したがって、文型のまとめ方に見通しないし方針を立てた上で、それに即して文の取扱い方を考えることも必要だともいえる。実際は両面から攻めてみななければならない。その意味

で、文を整理する仕事がさらに次年度に残された。

資料のうち、特に6種のを共通資料と定めた。その仮称に、人の性別、年配、文体の大体を付記する。分量はそれぞれ録音30分。

新聞人二十のとびら（男，壮年，デス）

学生座談（男，青年，ダ）

女性雑談（女，青年，ダ）

“葦”雑談（男女，青年，ダ）

職安女子部（男女，青・壮，デス）

結婚式申込（男女，青・壮，デス）

内容に多様性をもたせて選んだこの共通資料であらましの成果は期待されるので、3要素総合による文型把握の仕事を、方法確立のためにも、まずこれで行ってみようとするわけである。それぞれの作業の立場から、この共通資料の操作がなされたが、総合の仕事は次年度にもちこされることになった。

もちろん、取り扱う資料をこの共通資料に限ったわけではない。表現意図・構文・イントネーションそれぞれの作業において、必要の見通しに基いてこのほか多種の資料を取り扱った。われわれの仕事は本来、数量的調査ではなく、類型をとらえる仕事であるから、実地の録音資料の上に考察が限定されるべきものでもなく、また録音資料の数量に重大な意味がおかれるものでもない。しかし類型をもらさずとらえようとするためには、やはり実地資料をできるだけ広範に得てこれからさぐることは必要である。そのために、共通資料のほかに幅を広める目的で多種の資料に当り、また後述の実験的調査も行った。

(2) 表現意図について

表現意図に関する作業は、前年度において意図の分類を得たが、本年度さらにくわしくするところがあり、つづいて意図と形式との対応の整理を行った。これは主として文末に着目したもので、表現意図に応ずる文末形式を整理したものである。しかしなお全面的に整理しあげるにいたらず、一部次年度の考察に残されたところがあり、また、整理のしかたについてもさらに考えようとしている。（以上についてくわしくは別項「表現意図の研究」を参照）

また、表現意図に応ずる発話の実験的調査を行った。これは数名の被験者に

一定の条件を与えて発話させる実験で、目的は主として、能率的に必要な資料を補充することであり、また、一定の条件のもとでの結果の出かたを比べてみることも考えたものである。被験者は劇団“葦”の若手俳優ないし研究生男女各3名、すべて東京生れ東京育ち。被験者を劇団関係の人に選んだのは、いわゆる場なれがしており、談話を演ずることになれている人たちは、要求された条件に沿ってものをいうことも容易であろうと考えたからである。結果については便宜別項「表現意図の研究」に示されるが、調査内容の概略を次に示す。

1. 面接録音調査（被験者に面接して質問等を行い、録音する。6名に対して同一調査を行う。以下同じ。）

問答による身上調査

あいさつ・雑談など

質問10項（次に問題を例示する。）

1. ある朝のことです。出勤の家人（登校の弟妹）が、起きなければならない時刻が来ました。あなたは何とおこしますか。一度おこしても、また、ねてしまったようです。二度目におこすとき、あなたは何と言いますか。
4. 自宅から外出しようとするあなたは、家にちかい取りつけの肉屋にたち寄って、豚肉の上を100匁と牛のひき肉50匁を、あとで、家にとどけておいてもらいたい、ということをつたえます。そのとき、このまえもらった豚肉は、アブラ身がおおすぎて、まずかったので、そんなことではこまるともんくをつけ、そんなことがないようにしてほしいと注意します。これらのことを、あなたはどのように言いますか。

2. 行動発話録音調査（発話を要する行動をさせ、録音する。）

用事伝言

時刻知らせ

電話かけ（テーブコーダー電話用ピックアップを用い、被験者にはつくりごととさとらせぬようにした。次に問題を例示する。）

- (B) 次に「清川」といううどん屋へ注文して下さい。

当方は国語研究所大会議室です。

注文するもの。

- たぬきうどん 3つ ○ きつねうどん 2つ
○ たぬきそば 1つ ○ なべやきうどん 2つ
○ たまごどんぶり 1つ

あと三十分したら届けてほしいという趣旨を言して下さい。（お代はあ
とばらいです）なにかが、ないとか、何とか言ったら、これもあなたの

判断で、似よったものを適宜に、とりよせて下さい。

3. 家庭取材

被験者の家庭における談話のうち、頼み・願い・いいつけ等、要求するところのある表現、いいあい・けんかのような場面での表現、たしなめ・こごとなどの表現を、手書きによって記録することを求めた。

以上の調査は、宮地裕が中心となり、他の室員全員が協力して、立案し実行し、また宮地が結果を整理した。しかしこれの結果は構文やイントネーションの角度からも利用されるところがあるはずであるから、なおほかの手によって整理や操作が行われることがあるであろう。

(3) 構文について

構文については、前年度の基礎的研究に基いて分析の方法を立て、理論的考察と資料の実際への照合とにより、補正を重ねた。骨組みは、成分の格関係による文の分析といういき方である。しかし実際に資料の操作を進めるに当っては、格の見定め方に困難な場合があり、また成分の切り方に困る場合もある。これらの処理については、さらに次年度に残されるものがある。表現意図についての作業では文末形式との対応がとらえられたが、それはその間に最も緊密なものがあると見られるからであった。構文についても、文末部（述語）に中心を置く整理のしかたが一つ意味をもつものと考えられるし、総合的作業のためにも便利と考えられるので、その方法について考えを進めた。構文については、今後の作業によってそれ自体の秩序がとらえられるはずであるが、さらに表現意図・イントネーションとの関連が目ざされるわけである。（くわしくは別項「構文の研究」を参照）

(4) イントネーションについて

イントネーションは前年度において、実験的に得たものをピッチレコーダーによって分析する作業を行ったが、本年度はそれの整理から出発した。この仕事の結果を一つのよりどころとし、さらに実地資料にも照らしなどして考察を加えた末、イントネーション観、イントネーションの型のとらえ方等に一步を進めて、前年度一応まとめたものに修正を加えるところがあった。また、その表記法を定めた。イントネーションも文末にあらわれるところを最も重視すべきだとして、その立場で録音資料の分析を進めた。なお、今後の作業によって

表現意図や文末形式との対応を明らかにしていかなければならないが、さらにイントネーションの本質・機能等に関してはいっそう見方を固めていきたいと考える。次年度の作業のうちには、もう一度、実験的研究を予定したい。(くわしくは別項「イントネーションの研究」を参照) (大石)

表現意図の研究

1. この章についても、前年度年報に記述したことがらは、格別の必要がないかぎり、省略する。ここでの格別の必要とは、分担部分についての研究経過の概略が、本年報だけでも、ある程度、全般的に見とおしうることであり、また、次第に構文およびイントネーションの問題とかかわりを生ずるために、関連する全体のなかで、分担部分が占める位置を、最低限、明瞭にすることである。
2. 文型とは、依然、前年度年報に記述したように、“文の類型”であり、“一般的表現意図に対応して、一般者としての話し手が、一般者としての聞き手に対してもちいるところの、文形式の類型”である。しかし、一般的表現意図でさえも、(個別的表現意図はもちろんのこと、)その分化は、かなり多様である可能性がある。それゆえ、一般的表現意図の、それ自体の分化を考究していくばあいには、かなり微細な、心理的解釈をせねばならない。もとより、一般的表現意図とは、前年度年報に記述したように、“文形式との社会的習慣としての対応を持つ”ものであって、いわば、その場その場の、ことばのうらの意味を生むことがないものである。ことばのうらの意味を生むのは、個別的表現意図であるとしたのであるから、個別的表現意図のほうは、それ自体、無限に微細な分化をとげている可能性がある。しかし、一般的表現意図のほうは、これと同様ではない。たとえ、その可能性があるとしても、実は、それに対応するのは、語または語の組みあわせのうむ意義であって、文の類型としての種々相が、きわめて多様なのではない、とかがえる。逆に言えば、文の類型を、そのようにかがえるのである。したがって、いくつかの微細な表現意図の群を特定の一つの類型が、になることにもなりうるであろう。のみならず、われわれの目的は、一般的表現意図自体の分析にあるのではない。してみれば、ある程度以上の分析は、心理的解釈としては可能であっても、われわれにとっては

不要であろうとおもわれる。もとより、その、ある程度の分析までについては、その方法と結果に関して、特定の観点からすれば、理論的にも現実的にも、承認されうるだけの根拠をしめすことが必要である。しかし、その分析を、さらにこまかく押しすすめることよりは、これを言語の問題自体のために、つまりは当面の文型の問題のために、有効に、また、具体的に、駆使することのほうが、一層重要なことであろうとおもわれる。もともと、話し手の聞き手に対する言語的影響力という観点を中心として、表現意図の分析をこころみたのであるから、両者は、はじめから、不可分な関係にあるものであって、単に、心理的分析を、言語以外のものごとを媒介として、こころみたものではない。記述のうえで、この分担部分が、もしも、この共同研究全体のための手段の説明、あるいは、言語以外の世界から導入された研究法の応用についての解説、などであるかのごとき観を呈するとすれば、それは、この記述がまずいのであり、あるいは簡略にすぎるのである。構文から考究をすすめても、イントネーションから考究をすすめても、それが、文の問題に関するかぎり、いずれは、この表現意図（その名称はどうであろうとも）の問題にとりくまねばならず、それゆえにも、独立的に、また、相関的に、分担考究されるべき必要がある。この部分が、他の二部門に比して、相対的に、やや意味論的であり、理論的である外貌を持つとしても、それは、まったく単に相対的な問題にすぎない。

3. 一般的表現意図の分類の大略は、前年度年報に記述したとおりであって、現在のところ、変更しないはずである。すなわち、

○言語主体の 表現意図	{	A. 話し手の表現 意図	{	I	聞き手にもとめるところのない表現意図	{	(1)	感覚・感情の表明
		II		聞き手にもとめるところのある表現意図			(2)	
B. 聞き手の表現 意図	{	III	受け手・答え手としての表現意図		{	(3)	発言要求の表明	
				(4)		行為要求の表明		
					(5)		受容応待の表明	
					(6)	返答の表明		

しかし、これらは、なお、こまかく分類することができないではない。とくに、文の類型としての分化も、かなり見られるばあいには、当然、相関的に、なおこまかく分類するほうが便利である。たとえば、「II 聞き手にもとめるところのある表現意図」の(3)(4)は、“もとめるところ”の種々な内容と、文の類

型とに、かなりの分化がみられることが、一層はっきりしてきた。そこで、概略、つぎのような下位の意図分類を、これについては、おこなうこととした。

- | | | |
|---------------|-------------|---------------|
| { (3) 発言要求の表明 | { ① 肯否要求 | { (1) 確認要求 |
| | | { (2) 判定要求 |
| { (4) 行為要求の表明 | { ② 選述要求 | { (3) 選択要求 |
| | | { (4) 説明要求 |
| | { ③ 消極的行為要求 | { (5) すすめ・さそい |
| | | { ④ 積極的行為要求 |

なお、「よびかけ」「うながし」「疑念の」表明は、これらの前段階に置き、「わかれ」の表明は（たとえば、「サヨナラ」「ジャー」など）、これらの後段階に置くべきかとおもわれる。とくに、「よびかけ」と「わかれ」とは、それぞれ、コミュニケーションの成立と断止とに関するものであって、コミュニケーションの成否自体にかかわるものとして、他の、コミュニケーションの内容にかかわるものとは区別するほうがよいとおもわれる。

これら、(3)・(4)類に対して、(1)感覚・感情の表明は、意図分化もこまかくはなく、文の類型も単純ですくないとおもわれる。また、(2)叙述・判断の表明は、かなり、さまざまな様相を持つが、大体、いわゆる助動詞の意義分化としてみることができる。その細別よりは、むしろ大別の観点が、他との関連において問題となる。確定・不確定の別を、まず立てることも一法であるが、なお、考慮中である。反語の表現は、やや複雑で、(2)と(3)とにわたるが、なお、結果としては(2)であるゆえに、反語というのであり、反唱の表現は、叙述・判断の前段階の、表象的表現であって、引用の表現と相關する。上記(3)・(4)が、ややこまかく分類されたのは、その特有の性質であるところの“話し手が聞き手にもとめるところがある”という理由によるものとおもわれる。(5)・(6)も、類型としては単純なものようであるが、(1)と相關するところもあり、また、(6)は、答え手から話し手へ、言語主体の移行する段階の連続性がみとめられるゆえに、(2)と相關するところがある。

4. 以上の考慮をふくみつつ、このへんで、形式との対応を見ることとした。表現意図のために、文形式のうえで、決定権を持つのは、そのうち、とくに文末部分であることは、多くのばあい、ほぼ、まちがいないことであるから、文

末部分が、意図との相関において、どのような特徴的形式を持つか、に中心を置いた。いうまでもなく、それは、構文・イントネーションとの関連を考究するのに便利でもあり、それゆえ、全体の秩序を立てるのにも、有効な手がかりを提供するであろうという予想による。ここに現実の発話による文例を、いくつかしめせば、つぎのようである。

- (1)○ (ウフフ、ハハハ、オッホホホホ、)
- ア、アー、アラ、エ、オ、オー、ウー、ウーン、フン、フーン、
 - ウマイ、オイシイ、バカバカシイ、
 - ウマイナー、キタナイネ、イヤーネ、エライモンド、
 - スゴイ生活ダネー、大変な役者ダナー、
- (2)○ ボクハ6年、1日30エン、オボエガワルイ、イナカヘイケバオオキイ、ワタシハ草加焼ガスキダ、イッテミタコトナイ、
- イイキモチノモンジャナイ、コレカラナンデス、戒名ガカイテアル、カラダノ構造ガチガウンデショ、ワリアイヨクトレテル、
 - ソウイウトコロアルネ、モウスコシオソイノ、ハジメテダワ、タペラレナイワ、アッサリシタヒトラシイナ、スゴイミリョクネ、タイヘンダッタヨ、コワイワネ、自分デツクッタハウガイイワヨ、ホトンド標準語ニナッテルノヨネ、
 - ドウモアリガトウ、オソレイリマス、オマタセイタシマシタ、オメデトウゴザイマス、
- (3)(イ) ナラッタコトナインデスネ？ 31ニチニ変更ニナッテオリマスネ？ サッキ言ッタデショウ？ ワカラナイハズナイデシヨウ？
- (ロ) 通勤希望デスカ？ 店員サンデスカ？ ホカニモタクサンオデシサンイルノ？ ヨゴレナイ？ 新劇ダッタ？
- (ハ) アサデスカ、バンデスカ？ ソウイウコト知ッテテ、知ラナカッタ？
- (ニ) ドウシテダロウ？ オンゴトハナニヲ希望シマス？ ドコデ会ッタノ？
- (4)(イ) スポーツノハナシデモドウデスカ、イカガデスカ、デハツギノモンダイヘマリマシヨウ、シナモノキメマシヨウ、行コウ、
- (ロ) オクッテイタダキマシヨウ、アマリ変ナコト言ワナイデクレヨ、ナニカジャベッテ、アンタモナンカナサイ、9番ノマエデオマチニナッテクダサイ、上⁷ゲテ上⁷ゲテ、
- (5)○ ハー、ハハー、ヘエ、ヘーエ、フン、フーン、ホー、ハイ、
- ソウ、ソウネ、ソウダネ、ソリャマーソウネ、ソウカネ、ソウイウノカネ、ソウカシラネ、
 - サー、イエ、イヤ、イヤイヤ、ウウン、
 - ソウジャナイ、ソウイウンジャナイ、ソウイウコトデハアリマセン、ジャナイ、
- (6)○ ホントウネ、ヨロシユウゴザイマス、承知イタシマシタ、結構デス、イイデシ

ョウ、

○ チガウ、トンデモナイ、信ジラレナイ、ドウカー、

文例は、すべて、現実に発話されたものの録音資料による。これらが、現代日本語として、社会習慣に反するものではないということは、われわれの認定によるものであるが、これについての疑いは、まず、ないであろう。しかし、これらの文例自体は、もとより、文型ではないばかりでなく、これらが、共通語的でなくて東京方言的だとか、男女の性差があるとか、さまざまな問題があるけれども、なお、いくらかの資料を加えることと、われわれの内省とによって、構文上・イントネーション上の類型をみいだすための、基礎的な資料とすることは、できると思われる。このしごとの、かなりの部分は、次年度におこなう。ただし、上例をその一部とするかなりの文例について、いくつかの解釈を加え、分類に際して考慮したことは、すでに上記分類にとり入れられているところがあり、また本稿では、これに、「よびかけ」「うながし」「疑念」および「わかれ」を加えることは、さしひかえておいた。なおかなりの考察を要すると思うからである。

5. 本年度の、他の一つのしごとは、実験的な小調査であった。この小調査をおこなったおもな理由は、つぎのとおりである。録音を経て、記載された文例を通覧すると、(1)・(4)の文例が、比較的少数であった。ある条件下での、各表現の実現数を比較することは、それ自体無意味ではないこともあるが、われわれの目的は、数量の比較にはないから、ある部分の文例が、他にくらべて、あまり少数では困る。つまり、文型を考究する基礎資料として、その部分が、あまり少数では、ごく普通の問題をも、見のがすようなあやまちを、おかさなくてもないであろう。そこで所要の資料を補充するためには、そのような表現の実現する可能性の多いと思われる現場で、録音を採集することが望ましい。しかし、現実には、(1)感覚・感情の表明や、(4)行為要求の表明の発話を録音することは、かならずしも容易なことではない。昨年度の録音その他から、経験的にも、そうであるし、一二の特定の現場だけでは済まない以上、かなりの労力と時間を要することを避けたい。実態調査を目的とするものでないならば、もっと能率よく録音を採集することが望ましいことは、いうまでもない。そこ

で、設定された条件下で、一種のおしぼいのような調査によって、所期の結果を得よう、と考えた。要するに、主として能率的に、条件を一定とし、比較に便利なようにして、資料を補充したいという理由から、この実験的小調査をおこなったのである。

6. その作業概要は「総説」に述べられているが、結果の一部をつぎに例示する。下記 a・b・c・d・e・f とは、6人の被験者、a・b・cは男性、d・e・fは女性である。「質問3の1」などとあるのは、「質問十項」のうちの一部であることをしめす。

質問3の1

あなたのうちに、ガスの集金人が集金にまわって来ました。しかしあなたは、いま、おかねを十分に持っていないので、しばらくをしばらくのばしてもらいたいとおもいます。あなたはどう言いますか。

- a. イマウチノモノガイナインデスケドネー、チョットスミマセンケドー、マタコノツギーツイデノトキニモ、マワッテキテイタダケマスカ。
- b. アアー、チョットオフクロガ、イマ、イナインデー、キョウハワカラナインダケドナー、キョウオフクロガーオカネモッチャッテルモンデ、マターアシタデモキテクレナイカナ、アシタナラオフクロイルカラ。
- c. スミマセンケド、モウスコソ、マッテクレマセンカ。
- d. スミマセンケド、モウスコソ、マッテイタダケナイデシヨウカ、チョットイマ、モチアワセガナインデスケド。
- e. イマー、オカネナインデスケドー、マタキテイタダケマセン?
- f. アンー、スミマセンケドー、イマチョット、ハハガデテイナイモンデスカラー、マタアトニシテイタダケマセンカ。

質問3の2

集金人が言うのには、「いまいただければ早取料金で、いくぶんやすいのですが、おそくなると遅取料金で、すこしたかくなりますよ。よろしいですか。」あなたははどう言いますか。

- a. イツマデガソウシュウリョウウキンナノカ、ナルベクソノトキニシテモラエナイカシラ、モンキョウマデデドウンテモグアイガワルイノダッタラ、ショウガナイケドモ。
- b. ウン、アー、アシタナライル。モン、イナカッタラ、キョウノウユウガタナラカエッテタルカラ、キョウ、キテモイインダケド、ソッチガツゴウワルインナラ、アシタナラ、カナラズウチニイチンチイルカラ、イチンチグライイイヨ、アンー、タカクナッテモ。
- c. アー、リンダトオモッテ、ハライマスヨ。

- d. シカタガナイワ、ケッコウデス。
- e. ニー、ショウガナイデス。マターオネガイシマス、ドウモゴクロウサマデシタ。
- f. エニー、チョットイマオカネガナイモンデスカラ、スミマセン、アトニシテイタダキタインデスケド。

以上は、「質問十項」についての6人のこたえの一部であるが、以下に、「電話かけ」のその一部をしめす。〔1〕などとあるのは、対照部分を一括したものの番号である。

〔1〕

- a. オソレイリマスガネー、ハイアノー、ヘンシュウノワタナベサンオネガイシタインデゴザイマスカ。
- b. アノー、ヘンシュウノワタナベサンニツナイデホシ……イタダキタインデスケド。
- c. ヘンシュウノワタナベサン、オネガイシマス。
- d. モシモン、コクゴケンキュウジョデスケレド、アノヘンシュウノワタナベサンニ、ツナイデイタダキタインデス。
- e. オソレイリマスケド、ヘンシュウノワタナベサン、オネガイシマス。
- f. モシモン、アノ、ヘンシュウノワタナベサン、オネガイシタインデスケド。

〔9〕

- a. デ、アノー、デマシタラネ、ハイハイスミマセンケド、アノ、イツモヨンサツイタダイテルンデスヨ、ハイデ、ソレ、アノー、ロッカソハ、アノー、ゴサツトリヨセテホシインデスカ。
- b. アノー、アレデスネ、ハイイツモ、アノ、ヨンサツイタダイテルンデスケド、ハイアノ、ダイロッカソ、モン、デマシタラ、アノー、ゴサツトリヨセテホシインデス。
- c. ジツハデスネ、ソレガモン、アノ、デマシタラデスネ、ハーハーエーット、イママデイタダイテルンデスケレドモ、ソノヨンサツイママデモラッテタソダスガネ、ハーハー、ハーソレ、ゴサツトリヨセテホシインデゴザイマスカ。
- d. ト、スミマセンケドネ、エッアノ、イツモヨンサツ、イタダイテルンデスケド、エエダイロッカソダケ、ゴサツトリヨセテイタダキタインデスケド。
- e. ジャ、アノー、モンデマンタラネ、ハイアノー、イツモヨンサツーイタダイテルンデスネ、ハイデスケド、アノ、ロッカソダケゴサツイタダキタイン……。
- f. アノー、ト、ジャ、デマシタラネー、ハイハイイママデヨンサツイタ

ダイタンスケドネ、(〇ハーハー、エエ)〇ロックンハゴサツトリ……ゴサツトリヨセテイダゲタインスケド。

以上の、発話からの文例についても、いくらかの特定な表現意図に対応する。いくつかの文の類型を求めることができるように思われる。その整理は、比較的簡単なことであるけれども、もちろん、それで、その特定表現意図のもとでの文の類型の、すべてを尽すとは限らないし、結果を見れば、いままで求められた文の類型と重複するものも、少なくなかった。つまり、すべてが、所期の目的にかなうものばかりではなかった。しかし、この小調査によっても、特定表現意図に対応する文の形式については、(イントネーションなどの音声要素を除外したものとしても、)かなり、種々雑多なものでありうること、また、要求的表現にあっては、かなり婉曲な表現が、日常談話としては、とられることが多い、などの推測がなされる。もとより、われわれは、これらの結果から抽象することによってのみ、文型を求めるつもりでもなく、これを本格的な実験調査とするつもりでもない。一つの補充資料として、また一つの小調査として、場合によっては、本格的実験調査の準備調査ともないうところがあるう、という程度に考えている。

なお、これらの文例を、前年度以来の作業とおなじく、意図分類に応じて分類し、さらに要すれば、文末形式などについて、ややこまかく分類した。これらは、これまでの多くの分類された文例とともに、ただし、混同はせずに、文型を求める基礎的資料に加えられる。その例示は、すべて報告書にゆずって、ここでは省略にしたがう。

(宮地)

構文の研究

1. はじめに

本年度も前年度に引き続き調査方法の検討を行なった。

前年度は小学校教科書2種、外国人のための日本語教科書1種を主な資料として、構文からの文型調査の方法を検討したのであった。

その結果、大体の方針として、文の構成要素(「部」—後述)の相互関係に幾つかの関係方式を認め、このような相互関係にある文の構成要素の配列や組合

せの方式によって調査することにした。なお、このような構成要素の相互関係を示す上で助詞・助動詞の機能は重要であると認められるので、特に助詞・助動詞を重視することにした。また、調査の規模としては文末述語を中心として、それと一次的に結合関係を結んでいる構成要素（これを「一次の部」と称する。これについては年報8, p.20参照）の相互関係をまずとりあげることとし、必要に応じて一次の部内の構造をも考察しようとした。しかし、そのそれぞれにおいて多くの問題が本年度に持ちこされた。

本年度は各種場面における日常談話の録音資料、約7時間分より約3,000文例を選びこれを主な資料として、昨年度の作業において残された問題を検討しつつ、調査方法の確立に努めた。そのあらまは次のようである。（説明の便宜上、昨年度の作業の分についても、少しふれることにする。）

2. 部

話しことばにおいても、一つの単位として、文を認めることができる。（具体的な話しことばにおいては、どこまでを文とするか判定に困難を感じる場合が少なくないが。）文表現において、文を構成している要素として単語を認めることができるが、単語と文との中間の単位として「部」をたてることができる。つまり文表現内において自立して相互に規定し合っており、素材的客体的概念が主体によって関係づけられている文構成要素を部と称し、部にして述語を含んでいるものを「句」と称する。

部は文内において相互に規定し合っているものであるから、どの部とどの部が直接に関係し合っているかはその文によってみななければならない。たとえば「空をとぶ鳥をながめる。」においては、

空をとぶ鳥をながめる。
 ───────────→←──────────
 ───────────→←
 ───────────→←

まず「空をとぶ鳥を」と「ながめる」との二つの部の関係をとらえることができる。「空をとぶ鳥を」においてはさらに、「空をとぶ」の部（句）と「鳥」との関係のみることができるし、さらに「空をとぶ」においては「空を」と「とぶ」との関係のみすることができる。つまり、「空をとぶ鳥を」という部はさら

に「空をとぶ」という部（句）を含み、また「空をとぶ」という部（句）は「空を」という部を含んでいると考えられるのである。

以上のように、文内の部の関係のしかたは、緊張体系としてのその文全体の結構において把握されるのである。なお最小の部はいわゆる文節にあたるものである。このようにして、文の構成要素としての部を認め、幾つかの関係方式をもって結合している部の配列や組合せを調査し、その型を明らかにするという方法で構文の調査を進めようとしている。

3. 述語と構文

ところで、構文からする文型の調査においては、文末述語を重視すべきであると思う。文末述語がどのようなものであるかということ、つまり文末述語における詞が名詞であるか、動詞であるか、形容詞であるか、あるいはさらにどのような動詞であり、どのような助動詞がついているかなどということと構文の型との間には密接な関係があると思われる。

「彼が当番だ」「花が咲く」「子どもが歌う」

の三つの文はいずれも主・述の関係にある二つの部を持っており、ことに後の二例は「……が……スル」の型として考えることができるが、しかし、この三つの文の分化した表現である次の文

「彼が昨日から当番だ」「花が夏に山で咲く」

「子どもが学校で友だちと童謡を歌う」

などは構文上違いがある。（「……が……を当番だ」「……が……を咲く」のような表現は一般的ではない。）どのような種類の連用修飾語を、どのような結構で、持っているかということは文末述語の性質と関係があると考えてよい。

「僕は水がのみたい。」 「象は鼻が長い。」

なども、その構文は文末述語の性質との関係において説明することもできるであろう。同様に、

- (1) 牛がゆっくり歩く。
- (2) 景色がまったく美しい。
- (3) 君が歌え。
- (4) 花よ咲け。（「花が咲け。」は一般的でない。）

などの文について考えるに「ゆっくり美しい」ということはなく、また「まったく歩く」というのも普通ではない。ある類の副詞（たとえば、マダ・カナリ・スコシなど）はある類の述語（動詞・形容詞などによるもの）を修飾し、また別なある類の副詞（たとえば、トツゼン・ユックリ・ワザワザなど）はある類の述語（動詞によるもの）を修飾するということが考えられる。副詞もまたどのような述語を修飾するかという観点から分類することができるであろう。いわゆる情態の副詞・程度の副詞などもこのような観点から新たに見なおすべきものがあるだろう。(3)と(4)においても文末述語の性質との関係において考えられる構文の違いがあるということができよう。

このようなわけであるので、構文の調査においても文末述語を特に重視しつつ調査を進めようとしている。

4. 一次の部

述語を中心に構文を考えるゆえ、まず文末述語と直接的、一次的に結合関係を結んでいる部を一次の部（一次の成分）とし、この相互関係を持つ一次の部の配列、組合せによって構文をみようとする。たとえば、先にあげた例

空を飛ぶ鳥をながめる。

—————→←○

———→←

において文末述語「ながめる」に直接に関係している「空を飛ぶ鳥を」は一次の部である。その一次の部の中に含まれている「空を飛ぶ」は「鳥」と関係しているのであって、「ながめる」には間接的に関係を持つに過ぎないゆえ、これは二次の部である。さらに二次の部「空を飛ぶ」の中の「空を」は「鳥」に対して間接的な関係であるゆえ、三次の部である、と認めることができる。同様にして、

小島のいその砂浜で泣く。

—————→←○

———→←

は「小島のいその砂浜で」は一次の部、「小島のいその」は二次の部、「小島の」は三次の部、と認める。

ただし、「美しい景色ですね」の「美しい」は文末述語「景色ですね」のうちの「景色」を修飾していると考えられるが、これは一次の部とは認めない。「景色」はそれ自身だけでは述語になりえないからである。

ところで、「鳥が空を飛ぶ。」は、

鳥が空を飛ぶ。
→←
→←

のようにとらえられるのであるが、文末述語「飛ぶ」を中心として考えると、

鳥が
空を } 飛ぶ。

のように理解することもできる。つまり「鳥が」と「空を」はともに「飛ぶ」に統一され、一次的に関係し合っていると考えられるので、「鳥が」「空を」をともに一次の部であると認める。

理想、これこそが大事です。

しかし、それはおかしいよ。

における「理想」、「しかし」などは文末述語と孤立的な関係を持つものである。これも一次に準ずる部であると認める。

このようにして話しことばの文表現を一次の部に分析すると、たとえば次のようになる。

- ソウシテネー／マド／アケチャイマシタヨ。
- ワタシハネー／シンコクニ／「ケッコウシテモウ」ナンテ／オモイマセンネ。
- ソレデモ／ワタシハ／ホントウニ／イヤーナオバアサンニナルノダケハヨソウト／オモウヨ。

ところで一次の部といっても、その文内の構成要素としての機能にはかなり違いがみられるものがある。二つ以上の部がきわめて緊密に結合しているものもあるし、そうでないものもある。前者を連部と称する。ここでいう連部とは、その間に他の部を挿入することが不可能であるか、あるいは他の部を挿入すればきわめて不自然な表現になる種類のものに限ってこれを認める。連部は一つの部と同様に取扱う。たとえば次のようなものがある。

○ゲタ／ソロエテアゲルデショウ。

- キリノナカニ／バット／キエテイクノ。
- ナンカマチガイオコソテシマッタラ／マニアワナイ。
- ドウモ／アリガトウゴザイマシタ。
- ドウニモ／ショウガナイ。
- ハガニエッタラ／アリヤシナイ。

5. 格

このように文末述語を中心として一次の部の結合関係の方式や、それに基づく、部の配列、組合せにおける型を明らかにするという方法で構文を調査することにしたが、部と部の結合関係の方式には幾つかの型がある。(詳しくは部と語との結合関係を見る場合を含む。)この部と部との結合関係における資格と名づけるなら、格には次のようなものを認めることができよう。

部の格	(1)主・述の関係 (2)対述修飾・述の関係 (3)並立対等の関係	{ 体言的・述 副詞的・述	私が行く。
			本を読む。
			ゆっくり読む。
句の格	(1)対述修飾・述の関係 (2)並立対等の関係	{ 対等 (並立)	私が、彼が、先生が読む。
			読めば わかる。
			勉強もし、運動もする。 読まないから、関心を持たないから わからない。
部内格	(1)連体修飾・被修飾の関係 (2)連用修飾・被修飾の関係 (3)並立対等の関係	{ 体言的 用言的 連体詞的	私が行く。
			本を読む人 あの人
			非常にゆっくり歩く。
	{ 対等 (並立)	{ 体言的 用言的	彼と私が行く。
			出たり 入ったりする。
			私の 彼の先生
孤立格	(1)論理的关系分化表現内にあるもの (2)論理的关系未分化表現	{ 文内成分 (提示) 部内連結 部連結 句連結 文連結	再軍備 これがまた問題だ。 山または川です。 私にそして彼にこう話した。 学校に行き、そして本をよむ。 道を曲った。と、犬がいた。 あの一、私が行きました。

(注) 並立対等の関係にあるもののうち、カッコを施したものは構文調査のため便宜上とりあげたものである。

なお、いわゆる主題あるいは対象語などの取り扱いについては、さらに考え

てみたい。

6. 今後の見とおし

以上おおまかに構文の調査方法について述べたが、なお、問題が残っておりそれは次年度に持ちこされた。次年度には、残された問題に検討を加えて方法を確立した上で、表現意図やイントネーションとの総合において、話しことばの文型を明らかにしたい。

(飯豊)

イントネーションの研究

1. イントネーションは「文末のイントネーション」すなわち、文の終りに該当する発話段落にみられる高低変化を中心に、仕事を進めていくという態度については、年報8に述べたが、形式観・表記法・実験結果の整理など、残された問題が多かった。

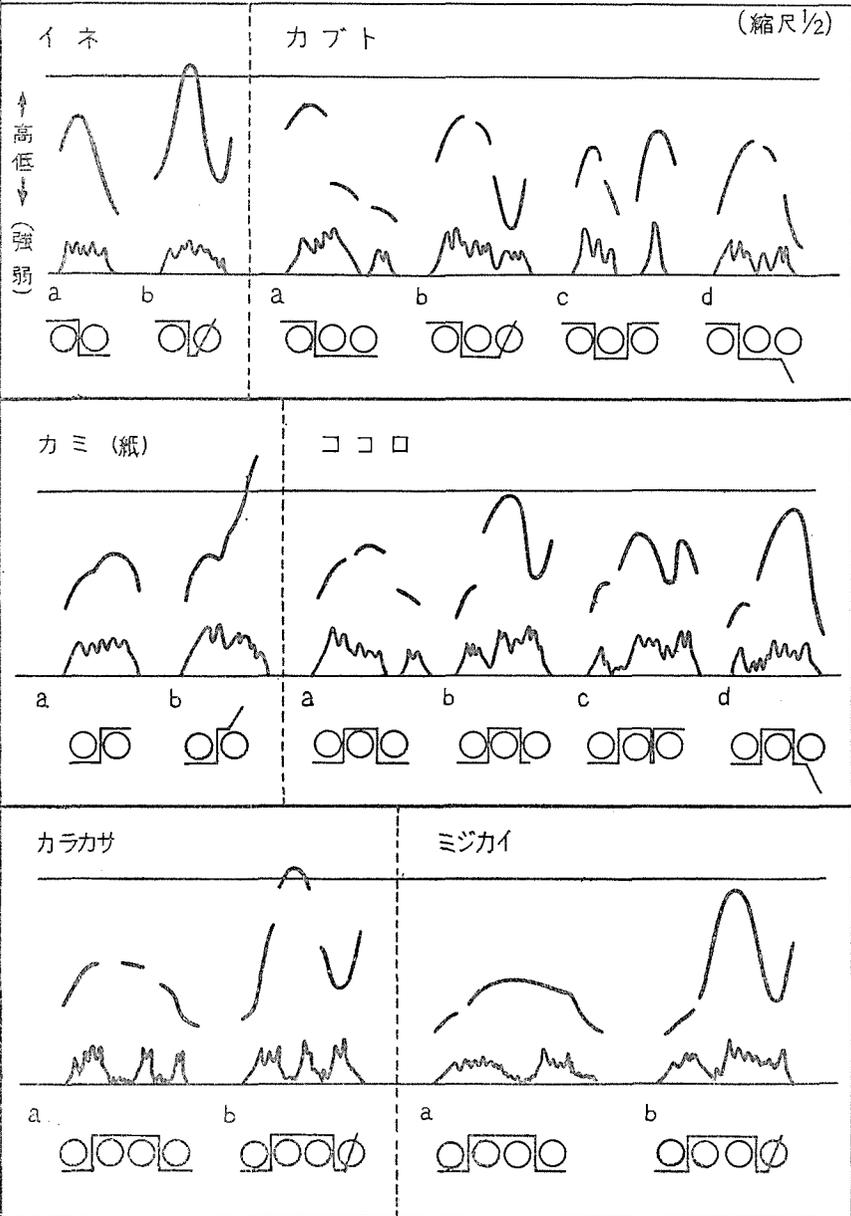
本年度は、形式観・表記法をさらに検討し、実験結果（ピッチグラム）を整理分析した。また一方、イントネーション観その他についても内省・観察によって検討を進めた。

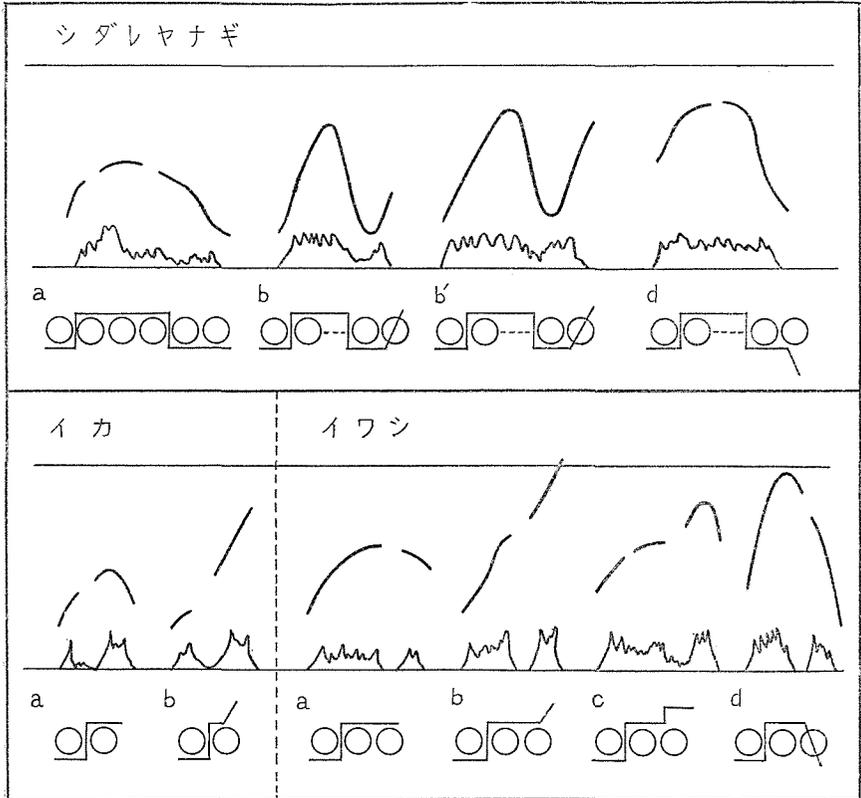
2. 文末のイントネーションの形式をどうとらえるかということについては、年報8で簡単にふれた。平調・昇調・降調の3種がそれであるが、これらは、文末部の、平らな調子・上昇的傾向・下降的傾向という、それぞれの特徴に従ったものである。

こういう形式観が妥当であるかどうか、実際の例を処理するにあたって不都合が生ずることはないかどうか、といった点を中心にして検討を進めた。

また、実験資料（録音）をピッチレコーダーによって分析撮影して得たピッチグラム（年報8参照）を整理して、形式観の参考とした。その例を示せば、次ページ以下の図のようである。

ピッチグラム(透写図)とその 模式図





(被験者 A.K.32歳男子)

<注> A. ピッチグラムの写真そのものでは、現象ムラなどがあってはっきりしないものもあるので、ここにはそれを、透写した図によって示した。原写真では、高低変化を示している黒白の境界線を、この透写図では線にして示し、同じく上下対称形に波線状にあらわれている強弱変化については、便宜上、上半分に限って示してある。それぞれのピッチグラムの下に $\overline{\bigcirc}\bigcirc$ のように示してあるものは、その模式図である。

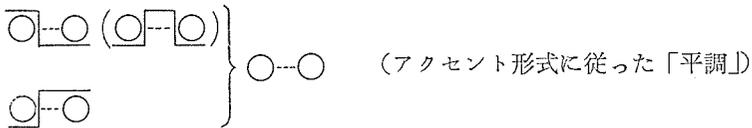
B. 模式図の左肩に記した a, b, c, d などの記号は、それぞれ実験のときに被験者に与えた条件の違いを示している。それは次の通りである。

- a …… コレハ「カブト」デスのつもりで。
- b …… コレハ「カブト」デスカ? のつもりで。
- b' …… コレガ「カブト」ダッテ (反問) のつもりで。
- c …… コレハ「カブト」ダヨ (何回言ッたらワカルンダ) (念押し) のつもりで。
- d …… ナンダコレガ「カブト」カ (けいべつ) のつもりで。

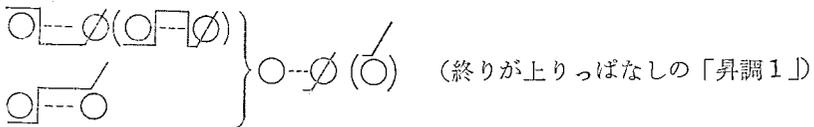
C. 実験で得たものには、上記 a～d の他にもいろいろの条件によるものがあったが、イントネーションとして高低形式をみるためには、ここに示した a～d のピッチグラムで一応充分と思われるので、その他は割愛した。

これら、ピッチグラムおよび模式図について内省的観察を加えながら形式をまとめてみると、次のように考えられる。

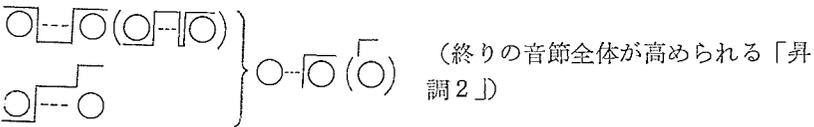
各 a からは



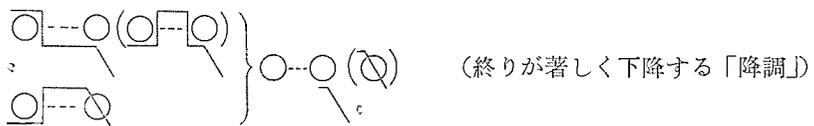
各 b からは



各 c からは



各 d からは

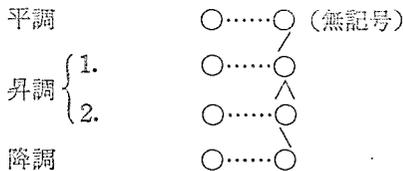


なお、b (質問) と b' (反問) とは、ピッチグラムについていえば b' の方が高低変化の幅が大きく、終りも長音化する傾向を持つなど、多少の差があるが今は本質的には「昇調1」の類と考えたい。また、「昇調」に1と2の対立を考えたように「降調」にもこれと同じような対立が考えられないこともない。たとえば、【クラウヨ】を平調(一般に言われている、「動詞+助詞のアク

セント」から)とすれば, [「ラウ」] という発話は, 終りの音節全体が低められてつくということになり, 上記dの類を「降調1」とし, これを「降調2」とすることができる。ただし, 終助詞・間投助詞など文または句の終りにつく助詞類を含んだ文節のアクセントは一般に固定しているかどうかという問題が残されているので, 一応問題として提出しておくに止めたい。

これらの, 平調・昇調1・2・降調は, 実験的に導き出されたピッチグラムに基くものであるが, この形式観は内省的観察によっても妥当と考えられ, また実際の資料にあたってみても, この形式観で仕事を進めてゆくことができるという見通しがある。実例の分析についての具体的な問題や技術的処理に関しては, なお問題があるが, いずれ機会を改めて述べたい。

4. これらのイントネーションを表記するには, 次のような記号によった。



そして, 資料分析にあたってはアクセントとしての上昇・下降をそれぞれ「」であらわし, イントネーションと区別した。

資料(カナ文字化された談話)に記入した実例を示せば次のようである。

○ソレ ク[↑]ニ シ[↑]ゴマイ

○ヨク 日[↑]レテイダ ミシナ

○オク バ[↑]ンダケド ト[↑]アエズ イマ ナニカ イ[↑]イデルノガ
アルンダッテサ

5. 上述のような形式観・表記法によって, 表現意図・構文との共通資料(テープにして6巻, 3時間分)の分析記録を行ない, また, イントネーションの立場から, 文末形式との対応・意図との対応などの問題を探りつつある。

イントネーション観, その他「文」認定とイントネーションの関係・句末イントネーションの処理・音声分析機による確かめ調査などをはじめとして, 具体的な細かい問題が沢山残されているが, 今後の調査研究と相まって解決を計りたいと考えている。

(吉沢)

総合雑誌の用語の調査（付 用字の調査）

前年度に刊行した国立国語研究所報告12『総合雑誌の用語 前編』にひきつづき、報告13『総合雑誌の用語 後編』を刊行した。この報告は、総合雑誌とそれに似寄りの雑誌との13誌の、昭和28年7月号から29年6月号までの1か年分について、書きことば研究室が行った標本調査の結果をまとめたものである。

前編には、この調査対象で割合に多く用いられていた約四千二百語について作った、五十音順語彙表と使用率順語彙表を取めたのに対し、後編では、この調査の方法と、調査対象にした語彙に関する各種の分析の結果との報告をまとめた。以下にその内容の大体を記す。

この種の調査でまず問題になる「単位量」の設定の理論的なことは付録Ⅰに実際上の扱いは§2・3と§2・4および付録Ⅲとに述べた。（今度の調査での調査単位を婦人雑誌の調査の際の単位と区別して、われわれは β 単位とよぶ。）またこの調査に用いた標本抽出法の技術的な面の事柄については、付録Ⅱに記述した。なお§2・1には、われわれが調査の企画に当って、雑誌出版社を訪問して、雑誌の編集方針その他予備知識を得たことについて述べた。

調査結果の分析については、次の三つを取り上げた。

1) 語彙構造の量的分析 (§3)——二つの問題を扱った。一つは、調査対象が全体でどのくらいの異なる語を含むか、つまり語彙量の推定である。結果は13誌全体の範囲で約四万四千語（ほとんどの助詞・助動詞を含まず、固有名詞・数詞を含む）であった。また13誌を雑誌の性格によって分けた三つの部類についても、同様の推定をした。またここで用いた推定法の理論的根拠をも明らかにした。もう一つの問題は、使用率の分布函数を求めることである。今までの諸説を簡単に紹介した上で、報告4『婦人雑誌の用語』の場合と同じく射影函数型による近似を試みたが、結果はまだあまりよくはない。

2) 意味から見た語彙の構造 (§4)——報告4の§5に発表した婦人雑誌語彙の分類法に修正を加えていく方向で、総合雑誌語彙の意味分類を行った。前編の語彙表に見出しとして掲げたすべての語はもちろん、その語彙表からは省

かれた、使用率が小さく従って推定精度も高くない語についても、おもなものをあげ、かつ『日本語基本語彙』(1944)の二千語と対照ができるようにした。

(重出を含めて九千語弱)ただ、集計の単位とした β 単位の語形によったので、それらの複合した形や慣用句などはあげてない。

3) 語構成に関する分析 (§5)——標本の前半部をなす延べ約十二万語のうち現われた語、かつその標本使用度数が10以上の語をおもな対象として、語の結合力、語と語との結合形式、語の内部における結合形式等について検討した。結合の意味的關係には触れられなかったが、総合雑誌に現われた漢語と和語との構造について、一応の見通しをつけることが出来た。なお、語構成に関する分析に付随して、標本の前半部で採集されたすべての語の、品詞別による分布について、一つの結果を得た。

以上は報告13の内容の大体である。このほか、語構成に関して更に詳しく分析した結果については、この年報の31ページ以下に、項を改めて報告する。

また、この語彙調査の一環として、同じ範囲の標本について、語の表記および漢字の用法を分析した。これは、現代書きことばにおける表記・用字の実態の分析によって、表記法体系の改善への基礎的な資料を作成しようとするものであって、「当用漢字の適用によって生ずる問題とその解決法の研究」について、文部省科学試験研究費の交付を受けた。

その分類記述の項目は、大きく分けて次の三つである。

- (1) 個々の語表記形式の実態
- (2) それらの語の送りがなの実態
- (3) それらの語の表記に用いられた漢字の実態

この研究については、共同研究者のうち整理記述を主として分担した所員永野賢が、昭和31年度から言語効果研究室に移ったので、その後は同人によりその研究室で進められた。その成果は、昭和33年度に単行の報告書として公にされる予定である。

(林大)

語構成に関する分析（追報）

まえがき

これは、先に刊行した国立国語研究所報告13『総合雑誌の用語 後編』（以下「報告13」と略称）のうち、「§5 語構成に関する分析」について、更に広範囲にわたって集計した結果の追加報告である。報告13における語構成に関する分析は、標本の前半部（注1）の中から、使用度数10回以上の語（延べ八万五千、異なり千七百語）に限って集計した結果であった。その後、残りの、使用度数9回以下の語（延べ三万、異なり一万四千語）についての集計が完了したので、結局、標本の前半部全体、つまり延べ十一万六千、異なり一万六千語についての結果が明らかになった。そこで、標本の前半部全体についての結果をここに述べて、報告13において考察したところを更に確実なものとした。

ただし、標本の前半部全体について、語の結合力および語と語との結合関係を調べた結果は、先に報告13で記述した、使用度数10回以上の語についての結果と、大勢においてほとんど一致する。従って、この報告では、結果の表を掲げることが主眼として、それについての考察は、報告13の記述にゆずる。

1. 語の結合力

標本の前半部延べ十一万六千語から付属語約二千（注2）を除いた十一万四千語について、それが単独に用いられた場合と、結合の部分として用いられた場合との、それぞれの延べ語数を第1表に示す。

- 単独ならびに結合についての規定のしかた（注3）、および表の体裁等、すべて報告13のときと同様である。ただし、報告13では、和語名詞の項を「一単位、二単位、三単位以上」と三分したが、今回は第1表のように二分した。三単位以上の和語名詞が、実際にはきわめて数が少なかったためである。

（注1） 報告13 79ページ 「5・12 対象の限定」参照。

（注2） 総合雑誌の調査では、大部分の助詞・助動詞は、調査対象から除外した。しかし一部のもの、たとえば準体助詞としての《ノ》や、副助詞の《ナド マデ バカリ ノミ ダケ》、および助動詞の《ゴトッ タイ》などは、特に1B単位と認めて採集した。これらが、延べにして約二千語足らず数えられたわけである。なお、くわしくは報告13の81ページ「第1表 語の品詞別分布」を参照。

（注3） 報告13の10ページ「結合・単独ということ」を参照。

○ 各欄の下段の () の中にイタリックで示した数字は、語の種類ごとに、その延べ語数の合計に対する、用法別の延べ語数の百分比を示したものである。

第1表 語の結合力 (標本の前半における)

	単 独 の 用 法 と し て	結 合 の 用 法			計
		結 合 の 部 分 として	前 部 分 として	後 部 分 として	
漢 語 名 詞	17412 (40.2)	25914 (59.8)	12619 (29.1)	13295 (30.7)	43326 (100)
{ 一 字 二 字 三 字 以上	1784 (16.6)	8934 (83.4)	2016 (18.8)	6918 (64.6)	10718 (100)
	15543 (47.8)	16953 (52.2)	10594 (32.6)	6359 (19.6)	32496 (100)
	85 (75.9)	27 (24.1)	9 (8.0)	18 (16.1)	112 (100)
和 語 名 詞	15960 (82.1)	3492 (17.9)	1375 (7.0)	2117 (10.9)	19452 (100)
{ 一 単 位 二 単 位	13398 (81.9)	2966 (18.1)	1043 (6.4)	1923 (11.7)	16364 (100)
	2562 (82.9)	526 (17.1)	332 (10.6)	194 (6.5)	3088 (100)
洋 語 名 詞	882 (54.9)	724 (45.1)	322 (20.0)	402 (25.1)	1606 (100)
混 種 語 名 詞	458 (74.8)	154 (25.2)	93 (15.2)	61 (10.0)	612 (100)
固 有 名 詞	2777 (43.1)	3671 (56.9)	2654 (41.1)	1017 (15.8)	6448 (100)
数 詞	594 (12.5)	4160 (87.5)	2396 (50.4)	1764 (37.1)	4754 (100)
コソアド語	4440 (97.3)	122 (2.7)	122 (2.7)	—	4562 (100)
副・連体・接 続・感動詞	4358 (98.5)	67 (1.5)	55 (1.2)	12 (0.3)	4425 (100)
和 語 動 詞	22020 (83.7)	4268 (16.3)	520 (2.0)	3748 (14.3)	26288 (100)
{ 一 単 位 二 単 位	20601 (83.0)	4207 (17.0)	467 (1.9)	3740 (15.1)	24808 (100)
	1419 (95.9)	61 (4.1)	53 (3.6)	8 (0.5)	1480 (100)
形 容 詞	2526 (91.8)	225 (8.2)	33 (1.2)	192 (7.0)	2751 (100)
	71427 (62.5)	42797 (37.5)	20189 (17.7)	22608 (19.8)	114224 (100)

この表の結果から次のことが知られる。

1° 実際に使われたすべての語（ただし、付属語を除く）のうち、約三分の一あまりの語は、他とたがいに結合しあって用いられている。

2° 他の語と結合するものの大半は名詞である。

3° 和語と漢語とでは、漢語の結合力がはるかに優勢である。

このことは、報告13で述べたことと完全に一致する。なお、細かな点については、報告13の84ページ「第2表 語の結合力」と比較されたい。また、語の種類ごとに見た結果も、報告13の記述にゆずる。

2. 語と語との結合関係

ここでは、報告13に示した表（第3・1表～第3・3表）の体裁に従って、標本の前半部全体についての集計結果を示す。結果の考察については、報告13の記述に新しく加えるべき事柄もないので、省略する。

なお、報告13では割愛した洋語名詞の結合形式についても、標本の前半部全体における集計結果を、最後に掲げておく。

- 以下の表中に示した、「結合の相手」および「延べ語数」「異なり語数」の各項については、報告13の88ページを参照。
- 語例の大半は、報告13に示したものを再録したが、多少削ったり、加えたりしたものもある。

2・1 一字の漢語の結合形式

一字の漢語の結合形式を、第2・1表に示す。

第2・1表 一字の漢語の結合形式

結合の相手	前部分としての結合			後部分としての結合		
	延べ語数	異なり語数	語例	延べ語数	異なり語数	語例
① 漢語名詞						
{ 一字の	83	56	数名 御用	85	53	某氏 数年
{ 二字の	717	509	再軍備 寒社会	3534	2330	委員会 生物学
{ 三字以上の	59	53	西大戦争 大叛乱事件	507	446	自家用車 民主主義者
② 和語名詞						
{ 名詞	52	28	全組合 新家元	101	75	組合員 子供服
{ 居体言	1	1	不つりあい	15	13	乗組員 見舞客
{ 形容詞語幹	—	—	(気軽 地厚)	—	—	(長年 薄茶)
③ 洋語名詞	10	9	大ストライキ	64	59	ロマンス派

④ 混種語名詞	2	2	各サークル 名番組 <u>大</u> スパイ網	14	14	マイナス面 役付工 <u>逆</u> コース的
⑤ 固有名詞	30	(27)	新中国 <u>悪</u> フランコ	639	(283)	ソヴェト圏 <u>ぬい</u> 女
⑥ 数詞	299	(64)	第一党 <u>金</u> 十両	1878	(500)	第五 <u>条</u> <u>十五</u> 銭
⑦ その他	2	2	各読書サークル	81	69	朝鮮動乱前
⑧ 動詞《する》	761	110	(<u>愛</u> する <u>感</u> ずる <u>達</u> する)			
⑨ 《する》以外の動詞	—	—	(<u>気</u> づく <u>役</u> 立つ)			
⑩ 形容詞	—	—	(<u>縁</u> 遠い <u>欲</u> 深い)			
計	2016	861		6918	3842	

2・2 二字の漢語の結合形式

二字の漢語の結合形式を、第2・2表に示す。

第2・2表 二字の漢語の結合形式

結合の相手	前部分としての結合			後部分としての結合		
	延べ語数	異なり語数	語例	延べ語数	異なり語数	語例
① 漢語名詞						
{ 一字の	3525	2342	運動部 映画界	750	510	諸外国 大会社
{ 二字の	3033	2339	関係官庁 <u>完全</u> 犯罪	3041	2353	専門機関 <u>生産</u> 技術
{ 三字以上の	261	237	基地労働者 <u>修正</u> 資本主義	785	685	再軍備計画 <u>民主</u> 主義国家
② 和語名詞						
{ 名詞	359	232	会社側 <u>温泉</u> 宿	251	192	兄夫婦 <u>組合</u> 運動
{ 居体言	83	68	映画入り <u>現実</u> 離れ	28	19	持時間 <u>流れ</u> 作業
{ 形容詞語幹	—	—	[期待薄 <u>意</u> 地悪]	5	5	ありがた <u>迷惑</u>
③ 洋語名詞	78	62	原子エネルギー <u>独立</u> プロ	116	92	ニュース映画 サボ <u>闘</u> 争
④ 混種語名詞	16	15	工事現場 <u>農村</u> ゲリラ隊	45	43	職場交流 <u>ゴム</u> 靴製造
⑤ 固有名詞	52	(47)	<u>独立</u> 日本 <u>近代</u> ヨーロッパ	890	(525)	岸内閣 東京会談
⑥ 数詞	182	(110)	憲法第九 <u>条</u>	334	(188)	三者会談 <u>五年</u> 以上
⑦ その他	17	17	経済五カ年計画	112	103	反ファシズム <u>運動</u> ピストル自射事件
⑧ 動詞《する》	2882	1253	<u>安心</u> する <u>理解</u> する			

⑨ 《する》以外の動詞	57	56	秩序立てる <u>理屈</u> づける	
⑩ 形容詞	47	28	<u>印象</u> 強い <u>用心</u> 深い	
計	10592	6806		6357 4715

2・3 和語名詞の結合形式

和語名詞の結合形式を、第2・3表に示す。

第2・3表 和語名詞の結合形式

結合の相手	前部分としての結合		後部分としての結合		
	延べ語数	異なり語数	延べ語数	異なり語数	
① 漢語名詞					
{ 一字の	210	90	61	32	全組合 新家元
{ 二字の	234	201	454	339	和服姿 海岸通り
{ 三字以上の	17	16	86	75	純文学 <u>鼻</u> 資本家側
② 和語名詞					
{ 名詞	543	217	808	289	思い出 <u>話</u> 子守歌
{ 居体言	87	74	154	56	寝物語 <u>貸手ぬぐい</u>
{ 形容詞語幹	2	2	1	1	<u>薄黄色</u>
③ 洋語名詞	13	10	26	25	モルモット代り <u>ナ</u> イト <u>ジャツ姿</u>
④ 混種語名詞	10	9	17	17	親分は <u>だ</u> <u>浮気男</u>
⑤ 固有名詞	76 (29)		259 (93)		ライン <u>河</u> <u>イソツブ</u> <u>物語</u>
⑥ 数詞	32 (20)		225 (97)		十 <u>割</u> <u>ふた夏</u>
⑦ その他	2	2	26	23	鉄筋スタンド <u>下</u> <u>カ</u> <u>ムチャッカ沖あたり</u>
⑧ 動詞《する》	60	45			<u>物語</u> する <u>仕事</u> する
⑨ 《する》以外の動詞	29	27			<u>泡</u> 食う <u>年老</u> いる
⑩ 形容詞	59	35			<u>疑</u> 深い <u>血</u> なまぐさい
計	1374	777	2117	1047	

2・4 洋語名詞の結合形式

洋語名詞の結合形式を、第2・4表に示す。

第2・4表 洋語名詞の結合形式

結合の相手	前部分としての結合			後部分としての結合		
	延べ 語数	異なり 語数	語 例	延べ 語数	異なり 語数	語 例
① 漢語名詞						
{ 一字の	65	52	<u>アカデミー賞</u> <u>アパ</u> <u>ート風</u>	11	11	<u>大ニュース</u> <u>反フェ</u> <u>シズム</u>
{ 二字の	115	88	<u>ドル資金</u> <u>シャノン</u> <u>ン歌手</u>	69	57	<u>海軍デー</u> <u>悪性イン</u> <u>フレ</u>
{ 三字以上の	10	9	<u>アマチュア</u> <u>展覧会</u>	18	17	<u>進歩的インテリ</u>
② 和語名詞						
{ 名 詞	14	14	<u>セメント袋</u> <u>ゴール間際</u>	10	9	<u>花形スター</u> <u>為替イ</u> <u>ンフレーション</u>
{ 居体言	4	2	<u>コーヒーわかし</u> <u>エキストラ</u> <u>集め</u>	—	—	[<u>すりガラス</u>]
{ 形容詞語幹	1	1	<u>ゴール</u> <u>近</u>	—	—	[<u>安ホテル</u> <u>古レユ</u> <u>ード</u>]
③ 洋語名詞	76	71	<u>スター・システム</u> <u>アベック・カー</u>	76	70	<u>ロマンス・カー</u> <u>マ</u> <u>ジック・インキ</u>
④ 混種語名詞	2	2	<u>ダム現場</u> <u>ヒステリ</u> <u>ー気味</u>	1	1	<u>半袖セーター</u>
⑤ 固有名詞	11	8	<u>ラジオ東京</u> <u>アンチ</u> <u>吉田</u>	34	29	<u>日本アルプス</u> <u>吉田</u> <u>ワンマン</u>
⑥ 数 詞	7	6	<u>ナンバーワン</u> <u>ベス</u> <u>トテン</u>	177	40	<u>五パーセント</u> <u>十五</u> <u>ドル</u>
⑦ その他	1	1	<u>MSA</u> <u>第七次交渉</u>	6	6	<u>吉田内閣反対デモ</u>
⑧ 動詞<する>	15	14	<u>アルバイトする</u> <u>カ</u> <u>ットする</u>			
⑨ <する>以外 の動詞	1	1	<u>インテリ</u> <u>ぶる</u>			
⑩ 形容詞	—	—	[<u>インテリ</u> <u>くさい</u>]			
計	322	269		402	240	

(齋賀)

雑誌一般の用語の概観調査

従来、書きことば研究室では、婦人雑誌、総合雑誌と、雑誌形態の中のそれぞれの類について、個別的に語彙調査を行ってきたが、前年度から、あらたに各領域の雑誌にわたっての概観調査を試みることになった。

前年度には、資料として5部門91種の雑誌を選び、その昭和31年1月号から12月号まで（増刊及び付録を含む）を調査範囲として、ほぼ全資料を入手したので、今年度には、採集箇所抽出、リプリント、採集作業を実施した。この作業については、今年度も「伝達の効率化に関する基礎的言語研究」の題で、文部省科学試験研究費の交付を受けた。

雑誌の5部門91種とは、(1)評論・文芸—12種、(2)庶民—14種、(3)実用・通俗科学—15種、(4)生活・婦人—14種、(5)娯楽・趣味—36種であるが、その採集箇所としては、広告を除いたそれらの全紙面から、1/8ページ大の部分、約八千を無作為抽出した。この範囲には、全体で少なくとも延べ五十万語を含むと予定される。（調査単位には、総合雑誌の調査に用いた β 単位を踏襲し、さらに採集箇所の1/3については助詞、助動詞をも調査する。）

作業は、助詞・助動詞以外一詞一について6系列9段階(54集落)、助詞・助動詞の類一辞一について3段階(18集落)に分けて行うこととし、今年度には、各系列について、第5段階までの採集用カードの孔版印刷（採集箇所の原文をカードにリプリントする）、第3段階までの採集（採集カードへ見出し語形その他の必要事項を記入する）ならびに検査、第1段階の詞のカード整理（五十音順排列と整理票記入）を終えた。この第1段階の整理では、延べ語数（採集カード枚数）四万九千余を得た。（この数値には固有名詞や数詞を含む。）

なお、整理票には、ホールソート用カードを用いることにした。これは全体の五十音順整理及び集計に際しての類別の手間を簡単にするためである。

次年度には、詞の全9段階のうち、残り全部のリプリント、採集、整理と、辞の全段階の整理、ならびに詞辞についての語彙表作成を行なう予定である。

（林大）

日本語地図作成のための調査（第1年度）

- | | |
|-------------|-------------|
| 1 調査の目的 | 4 調査の進行状況 |
| 2 調査の機構 | 4・1 臨地面接調査 |
| 3 調査のあらまし | 4・2 調査結果の整理 |
| 3・1 調査票 | 付 方言調査基礎図 |
| 3・2 調査することば | 5 調査開始前の準備 |
| 3・3 質問の形式 | 6 来年度以降の見通し |
| 3・4 質問のしかた | |
| 3・5 表記 | |
| 3・6 被調査者 | |
| 3・7 調査地点 | |

方言言語研究室では、昭和30年度から準備*してきた“日本語地図作成のための調査”を、本年度を第1年度とする7か年計画で開始した。調査地域は全国にわたり、調査は臨地面接法によって行う。

1. 調査の目的 この調査の目的は、選ばれた単語の全国的分布を明らかにするとともに、その単語の歴史を再構することにある。これによって、単語の広がっていった道すじと単語の誕生・発展・衰滅の状況がわかり、将来における変化のしかたと方向とが推測できる。

したがって、これらの資料と推測の結果は、実施に抵抗の少ないことを目指す国語政策に役立てることができるであろう。また、各地の方言、ことに東京方言が、他の全国諸方言に対してどういう位置にあるかが明らかになるから、これらの資料は、それぞれの地域における国語教育と「標準語確立」のために利用できるであろう。

2. 調査の機構 この調査は、国立国語研究所方言言語研究室がセンターとなり、調査全般の企画・運営および結果の整理にあたり、一方、臨地調査は、地方研究員と方言言語研究室の室員が手分けして行う。

本年度の調査に従事したものは次の通りである。

* 昭和30年度および31年度に行われた準備調査・研究については、年報7・8および61ページの5参照。

調査者 番号	担当地域	氏名	勤務先(1958年4月現在)	住所(左に同じ)
01	北海道Ⅰ	五十嵐三郎	北海道大学文学部(助教授)	札幌市北28条東3丁目
02	北海道Ⅱ	長谷川清喜	北海道学芸大学(助教授)	札幌市北24条西9丁目 幌北住宅C B24
03	北海道Ⅲ	石垣 福雄	札幌北高校(教諭)	札幌市北2条西12丁目
04	青森	此島 正年	弘前大学教育学部(助教授)	青森県弘前市袋町20
05	岩手	小松代融一	県立杜陵高校(教頭)	盛岡市加賀野久保田95
06	宮城	堀籠 敬蔵	宮城県警察本部教養課(技師)	仙台市川内三十人町53の 1
07	秋田	北条 忠雄	秋田大学学芸学部(教授)	秋田市手形東新町1
08	山形	後藤 利雄	山形大学文理学部(助手) 兼教育学部(講師)	山形市緑町2丁目4の4
09	福島	菅野 宏	福島大学学芸学部(助教授)	福島市太田町208
10	茨城	宮島 達夫	科学体系研究所(所員)	東京都中野区川添町5永 井アパート
11	栃木	多々良鎮男	宇都宮大学学芸学部(助教授)	宇都宮市一の沢町196
12	群馬	上野 勇	県立沼田女子高校(教諭)	群馬県沼田市西倉内町 810
13	埼玉	大久保忠国	埼玉大学文理学部(教授)	浦和市外与野町大戸576
14	千葉	加藤 信昭	京北高校(講師) 都立大学 大学院博士課程学生	東京都渋谷区代々木上原 町1172
15	東京・神奈川	斎藤義七郎	川崎市立商業高校(教諭)	神奈川県川崎市千年新町 26
16	新潟	剣持隼一郎	県立柏崎高校(教諭)	新潟県柏崎市大字悪田北 園町若葉荘
17	富山・石川	岩井 隆盛	金沢大学教育学部(助教授)	石川県河北郡津幡町字清 水ホ313
18	福井	佐藤 茂	福井大学学芸学部(教授)	福井市湊新町66の3
19	山梨	清水 茂夫	山梨大学学芸学部(助教授)	山梨県中巨摩郡白根町百 々3062
20	長野	青木千代吉	通明中学校(教諭)	長野県更級郡更北村中水 鉤1089
21	岐阜	谷開 石雄	県立中津高校(教諭)	岐阜県中津川市淀川町伊 藤駿方
22	静岡	望月 誼三	静岡大学教育学部(教授)	静岡市小鹿1
23	愛知	山田 達也	日本福祉大学(講師)	名古屋市中区大秋町3

24	三重	堀田 要治	文部省初等中等教育局	の24 東京都板橋区常盤町4の 1 文部省宿舍第24号
47	三重	杉浦 茂夫	県立神戸高校(教諭)	三重県津市乙部730
25	京都	奥村 三雄	岐阜大学学芸学部(助教授)	岐阜市長良六本松岐大公 務員宿舍
26	大阪	前田 勇	大阪学芸大学(教授)	大阪市東住吉区田辺西の 町6の34
27	兵庫Ⅰ	和田 実	神戸大学文学部(講師)	神戸市垂水区西垂水町神 田122
28	兵庫Ⅱ	岡田 荘之輔	温泉小学校(校長)兼(幼稚園 長)	兵庫県美方郡温泉町湯 1293
29	奈良	西宮 一民	帝塚山学院短期大学(助教授)	大阪府枚岡市河内町920
30	和歌山	村内 英一	和歌山大学学芸学部(助教授)	和歌山市真砂町和歌山大 学教官住宅
31	鳥取	広戸 惇	鳥根大学文理学部(助教授)	鳥根県出雲市元宮町
32	島根	岡 義重		島根県簸川郡斐川村大字 富村
33	岡山	虫明 吉治郎	県立岡山操山高校(教諭)	岡山市高島新屋敷354
34	広島	村岡 浅夫	吉和中学校(校長)	広島県佐伯郡五日市町屋 代121
35	山口	阿波 陽	県立小野田高校(教諭)	山口県小野田市千代町神 代方
36	徳島	宮城 文雄	徳島大学学芸学部(助教授)	徳島県那賀郡那賀川町島 尻
37	香川	近石 泰秋	香川大学学芸学部(教授)	香川県丸亀市土器町3936
38	愛媛	杉山 正世	県立今治工業高校(講師)	愛媛県今治市松本通2丁 目
39	高知	土居 重俊	高知大学教育学部(助教授)	高知市彌生町44
40	福岡	都築 頼助	福岡学芸大学(教授)	福岡市高宮玉川町93
41	佐賀	小野志真男	佐賀大学教育学部(教授)	佐賀市赤松町中館
42	長崎	西島 宏	長崎大学学芸学部(講師)	長崎市城山町1の172号
43	熊本	秋山 正次	熊本大学教育学部(講師)	熊本市健軍町県営住宅 406号
44	大分	糸井 寛一	大分大学学芸学部(助教授)	大分県臼杵市海添190
45	宮崎	岩本 実	宮崎大学学芸学部(助教授)	宮崎市下鶴町190の1

46 鹿見島 上村 孝二 鹿見島大学文理学部(教授) 鹿見島市武町965
 以上地方研究員

99 柴田 武 (主任)
 98 野元 菊雄
 97 上村 幸雄
 96 徳川 宗賢

以上研究室員

なお、地方言語研究室では、この調査について言語地理学の専門家W. A. グロータース神父の協力を受け、また、研究補助員白沢宏枝が、室員の調査・研究を助けた。

3. 調査のあらまし

3・1 調査票 調査項目は230語。調査票は30項目を含む第1冊と、200項目を含む第2冊とに分けた。分冊した理由は、項目の内容に関することではない。3・63被調査者の決定を参照のこと。次に調査項目の一覧表を掲げよう。

調査項目一覧	012絵 トカゲ	031絵 アタマ
○調査項目を配列順に並べた。(数字は項目番号)	013 カナヘビ	032絵 ツムジ
○「絵」はその項目に調査用の図があることを示す。	014 イクツ	033絵 ハゲアタマ
○かたかなの項目は3・3で説明するなぞなぞ式質問の項目、ひらがなの項目はS式質問の項目である。	015 イクラ	034絵 メ(目)
	016 イクツ	035絵 マユゲ
	017絵 キイロイ	036絵 モノモライ
	018絵 アカイ	037絵 ハナ(鼻)
	019S あかい	038 ニオイ
	020S 絵あおい	039 ニオイ
第1調査票	021 ウソオ ツク	040 キナクサイ
	022絵 キュウオ スエル	041 コゲクサイ
001絵 カマキリ	023 ツクル	042 ニオイオ カグ
002絵 クモ(蜘蛛)	024 ツクル	043絵 ミミ
003絵 クモノ イト	025S なおす	044絵 クチ(口)
004絵 クモノ ス	026S なおす	045 ヨダレ
005絵 カタツムリ	027S なおす	046 ツバ(唾)
006絵 ナメクジ	028S おどろく	047絵 クチビル
007絵 オタマジャクシ	029S おどろく	048絵 シタ(舌)
008絵 カエル(蛙)	030S おどろく	049 カライ(鹹)
009絵 ヒキガエル		050 カライ(辛)
010絵 ヘビ	第2調査票	051 ウスイ
011絵 マムシ		052 アマイ(甘)
		053 スッパイ

054 イビキオ カク
 055 セキオ スル
 056絵 ホホ
 057絵 カオ
 058 アザ (痣)
 059 { アザガ デキル
 アザニ ナル
 060 ホクロ
 061 ホクロ
 062 S あぎ
 063絵 オヤニビ
 064絵 ヒトサシニビ
 065絵 ナカニビ
 066絵 クスリニビ
 067絵 コニビ
 068 シモヤケ
 069絵 カカト
 070 クスグッタイ
 071絵 アグラオ カク
 072絵 スワル
 073絵 ミズオチ
 074 アカ (垢)
 075 フケ (雲脂)
 076絵 ウロコ
 077 S こけ
 078 S 絵 こけ
 079絵 キノコ (茸)
 080 オトコ
 081 オンナ

 082絵 タコ (虱)
 083絵 タケウマ
 084絵 オテダマ (アソビ)
 085絵 オテダマ
 086絵 カタグルマ
 087絵 カタアシトビオ ス
 ル
 088 オニゴッコ
 089 カクレンボ

 090絵 オカネ

091 オツリ
 092 カゾエル
 093 カゾエル
 094 モラウ
 095 ヤル
 096 クレル (呉)
 097 S あずける
 098 S あずける
 099 カリル
 100 カス (貸)
 101 S かってくる

 102絵 キョオ (今日)
 103絵 キノオ
 104絵 オトトイ
 105絵 サキオトトイ
 106絵 サクバン
 107絵 イッサクバン
 108絵 アンタ
 109絵 アサッテ
 110絵 シアサッテ
 111絵 ヤノアサッテ
 112絵 コンバン
 113絵 アンタノ バン

 114 タイヨオ
 115 マブシイ
 116 ツキ (月)
 117 アメ (雨)
 118 ツユ (梅雨)
 119絵 ヌウダチ
 120絵 カミナリ
 121 ゴロゴロ
 122絵 イナビカリ
 123 カミナリガ オチル
 124絵 ニジ (虹)
 125絵 ヌキ (雪)
 126 コオリ (氷)
 127 コオル
 128 コオル
 129絵 ツララ

130絵 ツムジカゼ
 131 ゴミ
 132 ゴミ
 133 ホコリ (埃)
 134 ゴミ
 135 ジシン (地震)
 136 ハヤシ (林)
 137 S はやし・やま
 138 モリ (森)
 139 S はやし
 140 S もり

 141 S にわ
 142 S にわ
 143 S にわ
 144 S かど
 145 S かど
 146 S かど
 147 イド (井戸)
 148 タク (炊)
 149 ニル (煮)
 150 ハイ (灰)
 151 ハイ (灰)
 152絵 ヌゲ
 153絵 ヌゲ
 154絵 マナイタ
 155絵 スリバチ
 156絵 スリコギ
 157絵 セトモノ
 158絵 オオキイ
 159絵 チイサイ
 160絵 フトイ
 161絵 ホソイ
 162絵 アライ (粗)
 163絵 コマカイ
 164 ワタ (綿)
 165 マワタ
 166絵 イト (糸)
 167 キヌイト
 168 モメンイト

169	オリイト	190絵	トオモロコシ	211 S	はそんする
170 S	せんたくする	191絵	カボチャ	212 S	はそんする
171 S	せんたくする	192絵	スマイレ	213絵	ウマ
172 S	くさる	193絵	タンポポ	214	オウマ
173	コメ	194絵	ツクシ	215	メウマ
174	ウルチ	195絵	スギナ	216	コウマ
175	モチゴメ	196絵	ドクダミ	217絵	タテガミ
176	ハンマイ (飯米)	197絵	マツカサ	218絵	ウシ (牛)
177	コメビツ	198絵	タケ (竹)	219	オウシ
178	モミガラ	199絵	トゲ	220	メウシ
179	ヌカ	200絵	トゲ	221	コウシ (子牛)
180絵	タンポ	201 S	おちる	222	モオモオ
181絵	タンポ	202 S	すてる	223絵	モグラ
182絵	アゼ (畦)	203 S	こわい	224絵	フクロオ
183絵	ハタケ	204 S	こわい	225	ホオホオ
184	トリオドン	205 S	こわい	226絵	セキレイ
185絵	カカシ	206 S	こわい	227	チッチッ
186絵	ジャガイモ	207 S	けち (だ)	228絵	スズメ
187絵	サトイモ	208 S	けち (だ)	229	チェンチェン
188絵	サツマイモ	209 S	けち (だ)	230絵	トサカ
189 S	いも	210 S	けち (だ)		

3・2 調査することば 調査の対象とすることばは、被調査者自身が現在使っていることば、あるいは少年時代に使ったことのあることばで、しかも、くつろいだとき、親しい人たち(家族たちや幼なじみなど)と話し合うとき使うことば(いわゆる方言)とする。被調査者の使ったことのない古いことばや、現在使われていても被調査者自身が使ったことのないことば、あるいは、被調査者が使うことばでも、共通語的場面で使われるものは、参考として扱う。

3・3 質問の形式 質問には、われわれがなぞなぞ式質問・S式質問と呼ぶ二つの形式がある。ともに一定の質問文の形をとり、数十人の調査員は、これによって調査する。

3・31 [なぞなぞ式質問] たとえば、番号1の項目は次のような質問で調べることになっている。「こういう虫を何と言いますか。前足が草を刈るかまに似ています。おこるとそれを振り立てて向かって来ます。色は緑とか茶色など…」これはカマキリという虫の名を問うなぞなぞ式質問である。この調査では、共

通語を与えて方言で翻訳させるという方法はとらない。日本における共通語化のめざましい現状から、翻訳法はいろいろの点で不利と考えたことがその理由の1。共通語形と方言形との意味分野が必ずしも一致しない（極端な例だが、九州などでアザを何と言うかと尋ねて「やはりアザと言います」と答えても、それが東京方言でのホクロに当たるものとして答えているという事態が起りうる）から、翻訳法のみによることは避けるべきだと考えたことがその2。また、なぞなぞ式質問であれば、調査者相互の間に質問内容の差（たとえば、項目をミミ<耳>とだけしておく、ある調査者は聴覚器官としてのミミ<耳が聞こえないのミミ>だけを聞きとり、ある調査者はみみたぶ<耳が大きいミミ>だけを聞きとることによって生ずる差）を小さくできると考えたことがその3。要するに、このなぞなぞ式質問は、一定の質問文によって意味分野を限定し、それに当たる方言形を求めることを原則としている。

3・32 [S式質問] 番号19の項目は次のような質問文で尋ねる。「アカイということばを、明かるいことを表わすときに使いますか。ろうそくよりも電燈の方がアカイというふうに……」これは、ある一定の語形に、こちらの尋ねる意味があるかどうかのS式質問である。一般の方言調査で行われる、ある一定の事柄に対するその方言での語形を問う質問のちょうど逆と言える。共通語と同じ語形でありながら、意味・用法のことなることばを使う方言がある。この形式の質問は、そのうちのおもなものを調査するために考案された。なお、S式質問のSは Semantics の頭文字である。

3・4 質問のしかた 調査は、質問文を読んで、付図のある場合はそれを示し——調査をなめらかに進めるため、一定の図64枚が用意されている——それに対する答を求めながら進めて行く。調査は質問文によって行い、ほかのことは発言しないことを原則とする。ただし、質問文を自然な話しことばに言いかえること、適当に方言文脈を加味することはさしつかえないことになっている。質問中に起こるいろいろの場合の処理については、次のようにきめた。

- a. 答がなかなか出ないとき——質問文をくりかえし、また、質問文の範囲内で解説してみる。
- b. 共通語で答え、あるはずの方言が出ないとき——別の言い方はありませ

んか、方言（土地のことば）ではどう言いますかなどと聞いてみる。共通語や予想される方言を与え、答を誘導することは避ける。誘導の方法によって得た答は、被調査者の聞いたことのあることばであって、自身では使ったことのないことばである場合が多い。答が被調査者自身のことばであることが確かめられない限り、あとでの解釈にさしつかえこそすれ、一般に役に立たない。

C. 共通語形と違う品詞で答えたとき——同じ品詞では答えられないかどうか追究してみる。適当な答がない場合は、別の品詞でもとりあげる。

d. 答が2つ以上出たとき——それぞれの答の間の、意味上・用法上の違いを必ず確かめて注記する。これはぜひ必要なことである。民間語源説も一見無意味のようであっても記入しておく。これらの注記は、地図の解釈にとって大切な資料となる。

e. 質問の対象となっている事物が被調査者の生活圏内にない（と思われる）とき——それを確かめて注記する。

f. 見当違いのまちがった答をしたとき——質問文をくりかえし、質問文の範囲内で解説して誤解を解くようにつとめる。

g. 以上のいずれの方法でも適当な答が得られないとき——用意した質問文と別の質問によって尋ねる。この場合は、その質問を注記しておく必要がある。誘導法を避けるべきであることはbで述べた。

3・5 表記 音声の表記法は、原則として国際音声字母とし、都合によってかたかなを用いることも妨げないこととする。音声の表記以外の記入については次のような符号を用いる。まず、被調査者が答えたときの状況を、次の符号によって表わす、

- ！ おもしろがりながら答えたとき。
- ？ 疑いながら（自信なさそうに）答えたとき。
- ： はずかしそうに答えたとき。
- ＃ だいぶ考えてから答えたとき。
- * 答を訂正したとき、新しい答につける。

これらの符号は、あとで分布地図解釈の際有力な参考資料となる。なお、どうしても答が得られないときは、聞き落し、記入もれでないことを示すためNR

(No Response)と書いておく。ことばで説明した注記は、被調査者のもの・調査者自分のものなどを、次の方法で区別する。

<……> 被調査者の説明は< >で囲む。

(……) 調査者自身の加えた説明は()で囲む。

[……] 調査の場にあわせた第三者が有益な説明を加えた場合は、調査者の判断でとりあげてよい。第三者の発言した語形も被調査者の認めたものについては同じ。これは〔 〕で囲む。

さらに必要があれば、次の符号を使う。

~~~~~ この部分がはっきりしない。はっきり聞きとれなかった。

——— これで間違いでない。誤記でない。

3・6 被調査者 調査者が候補者を選び、適当であるかどうか判定して決定する。

3・61 [数] 調査地点について1名。その同じ人について項目全部を調査する。

3・62 [条件] 1903年(明治36年)以前に生まれた男子で、いわゆる言語形成期(満3歳~15歳)をずっとその地点(その集落)で過し、それ以後もよそ(その市・町・村のそと)での生活が、兵營生活など一切を含めて36か月を越えないもの。職業・学歴・階層などについては特に基準を定めないが、できるだけその地点を平均的に代表する人であることが望ましい。80%農業の集落で、会社勤めをしている人とか、その土地でひとりふたりしかいないような、学歴・階層の特に高い人などは望ましくない。なお、明治36年以前という指定だから文久・元治・慶応生まれの人でもよいわけだが、あまり高齢な人はこの種の調査の対象として適当でない場合が多い。全国の水準をそろえる上からも、明治20年以降生まれの人が望ましい。なお、1, 2か月の短期間の旅行は、よそでの生活とは見ないこととする。

さらに、次のような条件を備えている人を、被調査者として適当と考える。

a. 言語感覚が鋭い。意味のニュアンスの違いに鋭敏で、質問に対して適切な答をする。方言と共通語、敬語と卑語、日常語とあまり使わない語・現在使わない語などの区別がはっきりしている(ただし、これは方言にかたよった見解を持っているという意味ではない)。

b. ふだん、その土地のその年齢層の人としてじゅうぶん程度に方言を使っている（その土地の方言をほとんど使わない生活をしている人は、調査に向かない）。

c. 精神的・肉体的に欠陥がない（もうろくしている、歯が抜けて発音がはっきりしない、耳が遠い、付図が見えない人などは、被調査者として適当でない）。

d. そのほか、調査に協力的である。反応が早い。むだ話をしないなど。

3・63 【被調査者の決定】 以上に述べた条件を満たす人であるかどうか、ことに a から d の条件については、実際に面接調査した上でなければわからないことが多い。被調査者として適当かどうかは、ともかく調査してみて、調査票の第1分冊、30項目が終ったところで最終的に判定する。ここで適当と認めた被調査者については、引き続いて第2分冊の調査票に移る。不適当と判定した被調査者については、ここで調査を打ち切り、あらためて別の被調査者を探して、最初から調査をやり直す。

不適当と認めて調査を打ち切る場合、相手に調査を途中でやめたという印象を与えることはおもしろくない。調査票を2冊に分けたのは、そこを考えたためである。こうすれば、とにかく1冊の調査票を全部すませたことになるから、相手に悪い感じを与えないですむ。調査者の側についても、1冊目の調査票が終ったところで判定しなければならぬのだから、ぼくぜんとした不満を持ちながら調査を続ける状態に区切りをつけられて、好都合だと考えられる。

3・64 【被調査者をなれさせるには】 被調査者は、このような言語調査になれていないから、はじめは、質問に対してびったりした答をなかなかしてくれないかもしれない。また、その方があたりまえとも言える。誘導法を用いない調査法はむだな努力のように思えることもあるだろう。しかし、調査を進めて行くに従って、はじめはとまどっていた被調査者も、だんだんなれてくるはずのものと考えられる。また、そうあるべきだ。能率よく調査を進めるためには、調査のごく初期のうちに、調査をどのように進めるか、質問はどんな形式でなされるか、被調査者はそれに対してどういう答をすべきかをじゅうぶん納得させ、なれさせ、いわば積極的に訓練して行く必要がある。最初の部分にたっぶ

り時間をかけた方が、かえってあとへ行ってスピードがあがるとさえ考えられる。3・4のaからgまでの方法を、230項目すべてに使うことは、考えてもわずらわしいが、多くの場合は、調査の初期だけに用いればじゅうぶんであろう。第1分冊の調査票30項目をすませたころにも、まだこの調査になれてこない人は、この調査に適当な被調査者とは考えられない。このことは、3・63で述べた被調査者の決定の際参考となる。

**3・7 調査地点** 7か年計画で全国に約2300地点。調査地点とは、被調査者が言語形成期を過ごした集落とする。被調査者の現住所ではない。調査地点をどのあたりにとるか、何地点調査するかなどの全体の構想は、調査センターで立てる。具体的に、どの集落で調査するかは、調査者自身が決める。

調査地点全体についての構想はだいたい次の通り。

まず7か年の調査期間を前期5か年と後期2か年の2期にわけると。7か年の調査地点数約2300のうち、まず前期5か年分の約1650地点の予定地点をきめる。後期2か年分の約650地点の計画は、前期の計画が完了した上で、その調査結果から、言語的に重要な地域に集中して調査地点を選ぶ予定となっている。また前期の計画でとり残した言語的に特色のある地点も、できるだけ拾う。

前期5か年分約1650地点の計画は、すでにほぼ完了した。これは5万分の1地形図を基準に、人口・集落数を考えて、ある地方にかたよることのないように注意しながら、1地形図あたり0～3地点を選んだ結果集得られたものである。理想的には、言語基準から選ぶべきであろうが、実際にはこの調査が完了したときにはじめて可能となる。島については、人口・集落数による一定の基準から、全国で50の島を選び、さらにその規模によって各島の地点数を決定した。

調査者は、センターの選んだ調査予定地点を基準として、具体的に調査地点を決める。原則として、センターの指定した地点で調査するが、該当する被調査者がいないためなどで、どうしても調査できないならば、直線距離で5kmの範囲内で都合のよい地点を選ぶ。この場合の注意は次の通り。

- a. 社会構造・産業形態などで著しく変わっているところは避ける。
- b. 新開地など、移入者の多いところは避ける。
- c. 市街地、ことに歴史の古いところは、ことさらに避けるべきでない。

d. 言語的にめずらしいところばかりをことさらに選んではならない（このようなところは、後期2か年の計画で考慮する）。

#### 4. 調査の進行状況

4-1 臨地面接調査 昭和32年度、すなわちこの調査の第1年度は、323か所での調査を全部終了した。調査地点は次ページの図でわかるとおり、いちおう全国すみずみにまではらまかれた。

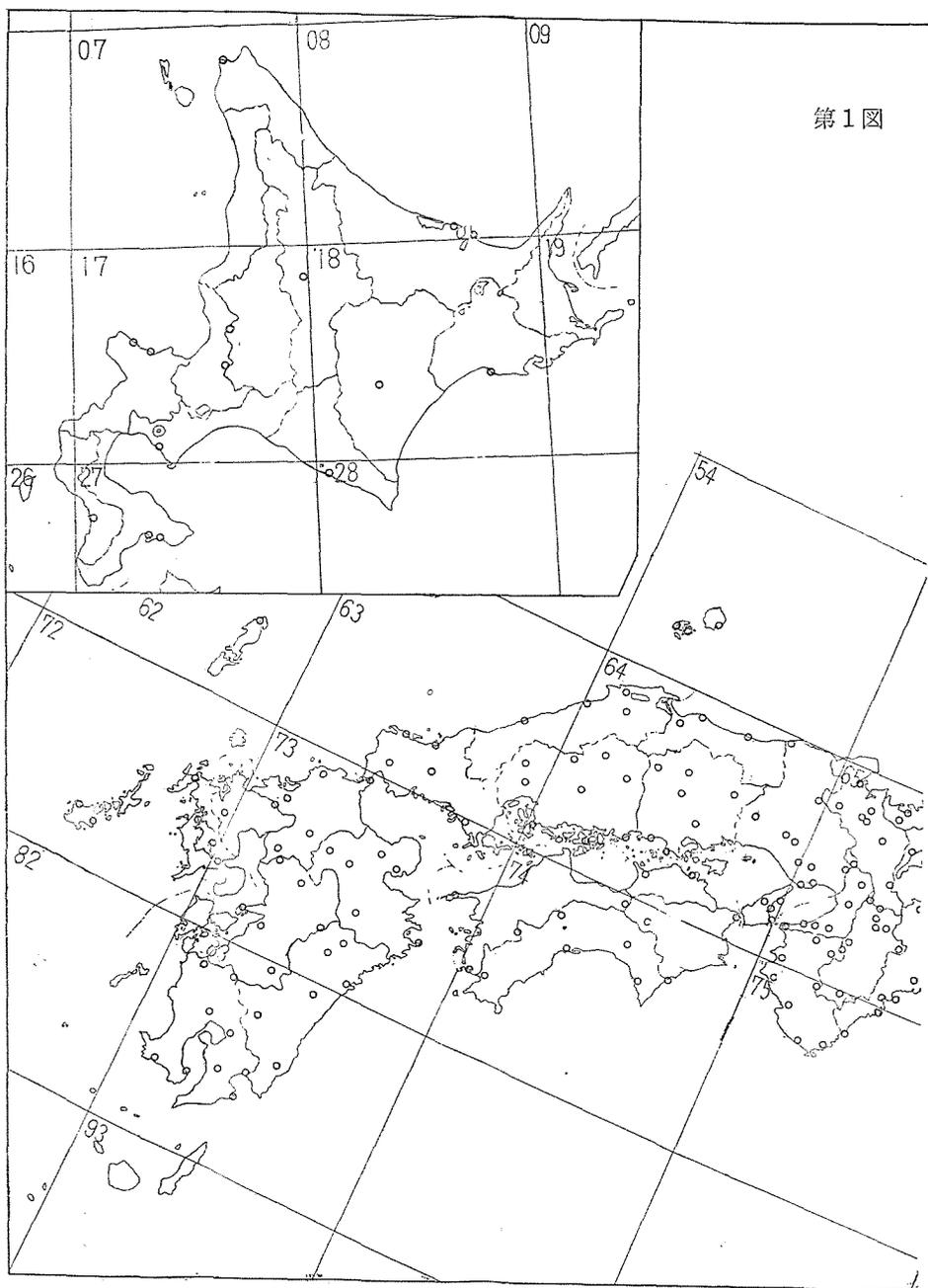
以下にその地名と、調査者の番号を示そう。

| 調査地点            | 調査者番号 | 調査地点              | 調査者番号 |
|-----------------|-------|-------------------|-------|
| <b>北海道</b>      |       | 大船渡市盛町八幡町         | 05    |
| 函館市若松町          | 03    | 北上市黒沢尻町芳町         | 05    |
| 釧路市入舟町一丁目       | 02    | 遠野市附馬牛町上柳         | 05    |
| 帯広市             | 02    | 東磐井郡千厩町本町         | 05    |
| 網走市台町           | 02    | 岩手郡玉山村大字川又        | 05    |
| 稚内市北浜通十丁目       | 01    | 和賀郡沢内村川舟          | 05    |
| 江別市八条八丁目        | 01    | 二戸郡安代町荒屋新町        | 05    |
| 亀田郡銭亀沢村字志海苔     | 03    | 二戸郡金田金田一村         | 05    |
| 檜山郡江差町豊川町       | 03    | 九戸郡大野村            | 05    |
| 余市郡余市町字港町       | 03    | <b>宮城県</b>        |       |
| 積丹郡積丹町字美国町大字船溜  | 03    | 仙台市長者荘            | 06    |
| 三石郡三石町港町        | 01    | 石巻市門脇字原田          | 06    |
| 常呂郡常呂町字トコロ      | 02    | 白石市東小路            | 06    |
| 有珠郡伊達町鹿島町       | 01    | 白石市越河五賀字馬場台       | 06    |
| 樺戸郡月形町字中野       | 01    | 黒川郡大和町吉岡字上町       | 06    |
| 上川郡東旭川村字上兵村     | 02    | 登米郡登米町寺池字鉄砲町      | 06    |
| <b>青森県</b>      |       | 加美郡小野田町東小野田字下野目大下 | 06    |
| 青森市大字新城字平岡      | 04    | <b>秋田県</b>        |       |
| 黒石市大字浅瀬石字清川     | 04    | 大館市金坂前            | 07    |
| 東津軽郡三厩村大字三厩字算用師 | 04    | 本荘市上横町            | 07    |
| 西津軽郡岩崎村大字岩崎字松原  | 04    | 男鹿市戸賀戸賀字戸賀        | 07    |
| 北津軽郡金木町大字金木字若松町 | 04    | 南秋田郡五城目町大川西野字四ッ屋  | 07    |
| 上北郡野辺地町大字野辺地字浜掛 | 04    | 鹿角郡十和田町毛馬内字山根長土路  | 07    |
| 下北郡田名部町大字田名部字赤平 | 04    | 由利郡象潟町塩越          | 07    |
| 下北郡川内町大字川内字川内   | 04    | 仙北郡角館町岩瀬町         | 07    |
| 三戸郡五戸町字市川通十文字   | 04    | 雄勝郡稲庭川連町稲庭町中町     | 07    |
| <b>岩手県</b>      |       | <b>山形県</b>        |       |
| 釜石市嬉石           | 05    | 山形市印役町            | 08    |
| 宮古市第17地割新町      | 05    | 長井市小出             | 08    |

|                     |    |                |    |
|---------------------|----|----------------|----|
| 西園賜郡小園町大字北          | 08 | 松戸市樋野口         | 14 |
| 最上郡最上町若宮            | 08 | 成田市寺台          | 14 |
| 飽海郡遊佐町吹浦            | 08 | 安房郡鴨川町貝渚       | 14 |
| <b>福島県</b>          |    | 君津郡大佐和町千種新田    | 14 |
| 福島市柳町               | 09 | 長生郡一宮町東浪見小字大村  | 14 |
| 原町市大字小浜字西内          | 09 | 市原郡姉ヶ崎町今津朝山    | 14 |
| 磐城市字横町              | 09 | <b>東京都</b>     |    |
| 東白川郡棚倉町大字棚倉字鉄砲町     | 09 | 江戸川区長島町        | 15 |
| 南会津郡只見村大字只見字沖       | 09 | 西多摩郡奥多摩町大字氷川   | 15 |
| 南会津郡館岩村大字八総字宮ノ前     | 09 | <b>神奈川県</b>    |    |
| 南会津郡檜枝岐村字下ノ台        | 09 | 横浜市中区間門町       | 15 |
| 安達郡本宮町仲町            | 09 | 川崎市登戸町         | 15 |
| 安積郡湖南村大字三代字御代       | 09 | 高座郡寒川町大字宮山字根岸  | 15 |
| 河沼郡会津坂下町西南町裏(俗, 小原) | 09 | <b>新潟県</b>     |    |
| <b>茨城県</b>          |    | 高田市大町          | 16 |
| 日立市諏訪               | 10 | 柏崎市本町二丁目       | 16 |
| 下館市末広町              | 10 | 新発田市泉町         | 16 |
| 久慈郡大子町大字浅川小字仲井      | 10 | 村上市大字岩船下大町     | 16 |
| 鹿島郡鉦田町鉦田            | 10 | 栃尾市栃尾岩神区       | 16 |
| 稲敷郡江戸崎町大宿           | 10 | 糸魚川市大字一の宮      | 16 |
| 猿島郡岩井町辺田            | 10 | 中蒲原郡小須戸町大字小須戸  | 16 |
| <b>栃木県</b>          |    | 南魚沼郡湯沢町大字湯沢一の町 | 16 |
| 佐野市高砂町              | 11 | 北魚沼郡堀之内町旭町     | 16 |
| 今市市東町               | 11 | 刈羽郡高柳町大字岡野町    | 16 |
| 真岡市大字東郷字八切          | 11 | <b>富山県</b>     |    |
| 大田原市大田原             | 11 | 富山市長柄町         | 17 |
| 塩谷郡阿久津町宝積寺          | 11 | 高岡市横田町宮の腰      | 17 |
| <b>群馬県</b>          |    | 滑川市神明町         | 17 |
| 桐生市広沢町四丁目           | 12 | 東礪波郡城端町城端      | 17 |
| 伊勢崎市今泉町             | 12 | 下新川郡宇奈月町蒲山     | 99 |
| 群馬郡箕郷町金敷平           | 12 | 下新川郡朝日町道下      | 17 |
| 吾妻郡長野原町羽根尾          | 12 | 婦負郡八尾町保内高善寺    | 99 |
| 利根郡新治村猿ヶ京           | 12 | <b>石川県</b>     |    |
| <b>埼玉県</b>          |    | 七尾市袖が江町        | 17 |
| 熊谷市大字広瀬             | 13 | 輪島市河井町新田町      | 17 |
| 北足立郡与野町大字八王子        | 13 | 江沼郡大聖寺町新組町     | 17 |
| 北足立郡北本宿村大字宮内        | 13 | 石川郡鳥越村字別宮      | 96 |
| 入間郡元狹山村二本木          | 15 | 石川郡白峰村字白峰      | 17 |
| <b>千葉県</b>          |    | 河北郡津幡町字清水      | 17 |
| 館山市笠名               | 14 | 羽咋郡富来地頭町       | 17 |

|               |    |                |    |
|---------------|----|----------------|----|
| 珠洲郡松波町字小木     | 96 | 藤枝市瀬戸谷中山       | 22 |
| <b>福井県</b>    |    | 掛川市下俣          | 22 |
| 福井市坂垣町        | 18 | 御殿場市西田中        | 22 |
| 敦賀市櫛川         | 18 | 田方郡伊豆長岡町温泉場    | 22 |
| 武生市村園町        | 18 | 富士郡白糸村字原       | 22 |
| 小浜市伏原         | 18 | 磐田郡佐久間町蒲川      | 22 |
| 大野市中野         | 18 | <b>愛知県</b>     |    |
| 勝山市下元禄        | 18 | 瀬戸市前田町         | 23 |
| 足羽郡美山村市波      | 98 | 西尾市錦城町         | 23 |
| 遠敷郡名田庄村久坂     | 98 | 西春井郡西春村徳重      | 23 |
| <b>山梨県</b>    |    | 東加茂郡足助町大字足助字石橋 | 23 |
| 甲府市和田町        | 19 | 南設楽郡鳳来町海老入洞    | 99 |
| 都留市鹿窟         | 19 | 北設楽郡設楽町大字荒尾字川角 | 23 |
| 中巨摩郡白根町百々北新居  | 19 | 知多郡美浜町河和       | 99 |
| <b>長野県</b>    |    | 知多郡知多町岡田字小石山   | 23 |
| 松本市寿区百瀬       | 20 | 碧海郡知立町牛田西屋敷    | 23 |
| 飯山市木島野坂田      | 20 | 宝飯郡御津町大字御馬     | 23 |
| 西筑摩郡大桑村長野弓矢   | 20 | 渥美郡田原町大字大久保字山下 | 23 |
| 北安曇郡白馬村神城沢渡   | 20 | <b>三重県</b>     |    |
| 北佐久郡御代田町塩野    | 20 | 津市桜橋           | 24 |
| 上水内郡戸隠村折橋     | 20 | 四日市市           | 47 |
| 上伊那郡西春近村諏訪形赤木 | 20 | 松阪市大石          | 47 |
| 下伊那郡天竜村大字平岡満島 | 20 | 尾鷲市            | 47 |
| 小県郡本原村大畑      | 20 | 尾鷲市曾根町         | 97 |
| <b>岐阜県</b>    |    | 伊勢市宇治浦田町       | 24 |
| 大垣市入方町        | 21 | 伊勢市横輪町         | 97 |
| 稲葉郡鷺沼町三ツ池     | 21 | 北牟婁郡海山町島勝      | 47 |
| 海津郡平田町昭和町     | 21 | 一志郡白山町南家城      | 47 |
| 本巣郡本巣村日当      | 21 | 度会郡紀勢町柏崎       | 47 |
| 郡上郡八幡町相生町門原   | 21 | 阿山郡春日村新堂       | 47 |
| 郡上郡奥明方村二間手    | 99 | 志摩郡志摩町和具       | 47 |
| 恵那郡明智町市場町     | 21 | <b>滋賀県</b>     |    |
| 恵那郡福岡村向田瀬     | 21 | 滋賀郡志賀町大字木戸     | 96 |
| 益田郡小坂町大島      | 21 | 甲賀郡甲賀町大字上野     | 96 |
| 大野郡丹生川村久手     | 99 | 東浅井郡湖北町字山本     | 96 |
| 大野郡荘川村新淵      | 21 | <b>京都府</b>     |    |
| 吉城郡古川町中気多     | 21 | 福知山市字十二        | 25 |
| 吉城郡神岡町土       | 21 | 綾部市八津合町字西屋     | 98 |
| <b>静岡県</b>    |    | 綾部市十倉名畑町       | 25 |
| 静岡市曲金         | 22 | 宇治市五ヶ庄字上村      | 25 |

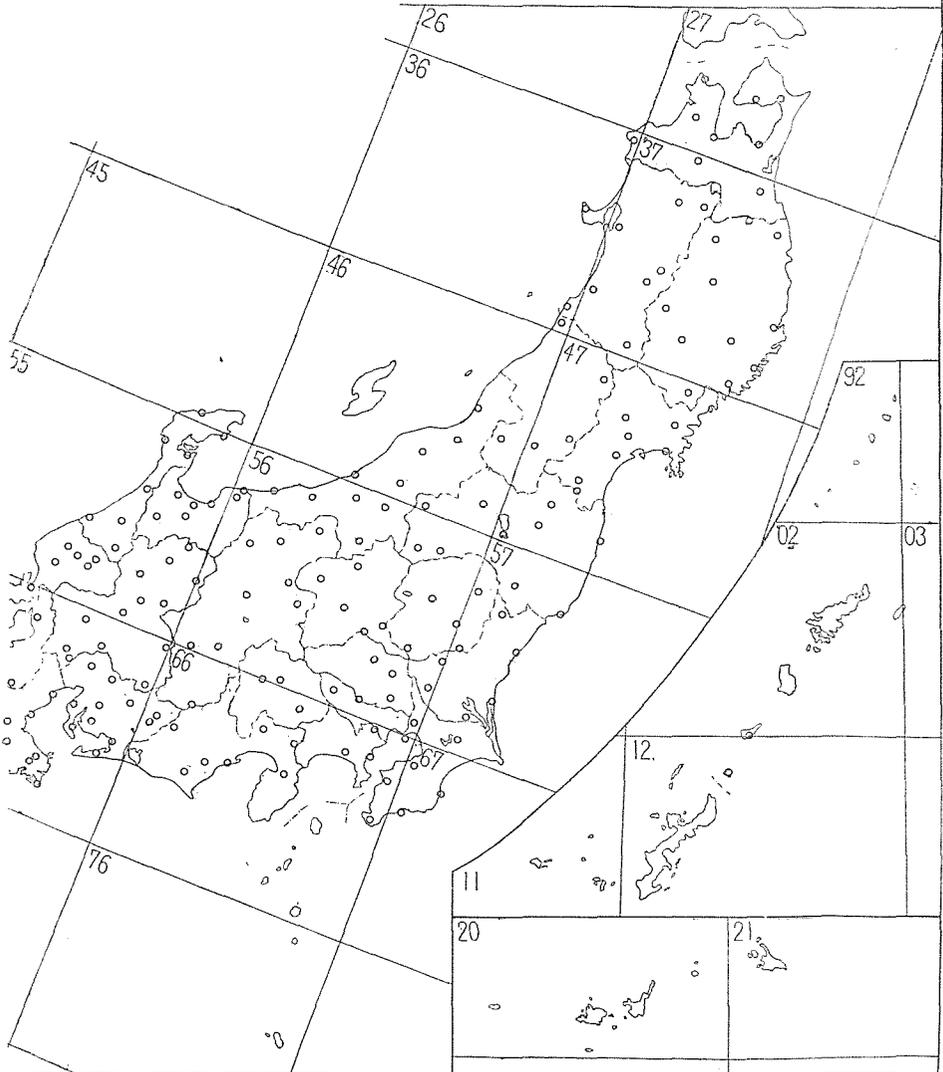
第1図



# “日本語地図作成のための調査”

## 第1年度調査地点一覧

○印は調査地点を示す



|               |    |                 |    |
|---------------|----|-----------------|----|
| 宮津市惣          | 98 | 那賀郡粉河町粉河        | 30 |
| 北桑田郡京北町西村字大坪代 | 25 | 伊都郡高野町高野山       | 30 |
| 船井郡和知町字下粟野    | 25 | 伊都郡富貴村東富貴天神垣内   | 97 |
| <b>大阪府</b>    |    | 有田郡湯浅町湯浅        | 30 |
| 大阪市東住吉区平野新町   | 26 | 日高郡竜神村竜神        | 97 |
| 高槻市富田町        | 26 | <b>鳥取県</b>      |    |
| 泉佐野市日根野町野々地藏  | 98 | 東伯郡中山村大字赤坂      | 31 |
| 和泉市父鬼町        | 26 | 西伯郡岸本町大字大殿字大寺   | 31 |
| 泉南郡南海町鳥取      | 26 | 気高郡気高町浜村        | 31 |
| <b>兵庫県</b>    |    | <b>島根県</b>      |    |
| 神戸市生田区楠町六丁目   | 27 | 浜田市日脚           | 32 |
| 神戸市垂水区西垂水町宮本  | 27 | 大田市久手町波根西       | 32 |
| 洲本市外通町五丁目     | 27 | 平田市中之島町         | 32 |
| 洲本市由良町紺屋町字天神町 | 27 | 大原郡木次町大字木次      | 32 |
| 三木市福井         | 27 | 周吉郡西郷町西町        | 32 |
| 川西市山下字大蔵      | 27 | 海士郡海士村大字海士      | 32 |
| 加西郡北条町北条      | 27 | 知夫郡西島町赤之江       | 32 |
| 美囊郡淡河村淡河町     | 27 | <b>岡山県</b>      |    |
| 神崎郡福崎町福田      | 27 | 岡山市高島新屋敷        | 33 |
| 佐用郡三日月町本郷     | 97 | 新見市上市井村         | 33 |
| 朝来郡山東町矢名瀬     | 28 | 児島市田之浦          | 33 |
| 美方郡浜坂町浜坂      | 28 | 浅口郡寄島町寄島        | 33 |
| 津名郡津名町生穂中之内兩乞 | 27 | 上房郡賀陽町田土        | 33 |
| 津名郡五色町都志角川    | 97 | 真庭郡勝山町勝山        | 33 |
| <b>奈良県</b>    |    | 勝田郡勝田町真加部       | 33 |
| 奈良市北市町        | 29 | <b>広島県</b>      |    |
| 天理市大字守目堂      | 29 | 福山市鞆町石井         | 34 |
| 桜井市大字粟殿       | 96 | 安芸郡音戸町波多見宮田     | 34 |
| 生駒郡生駒町谷田      | 98 | 佐伯郡湯来町伏谷川角      | 34 |
| 山辺郡都祁村大字吐山    | 96 | 山県郡戸内町本郷土居      | 34 |
| 宇陀郡御杖村大字菅野    | 29 | 高田郡美土里町生田中北     | 34 |
| 宇智郡五条町大字新町    | 29 | 加茂郡豊栄町清武郷谷      | 34 |
| 吉野郡十津川村大字小原   | 29 | 神石郡神石町中郷        | 34 |
| <b>和歌山県</b>   |    | 比婆郡羽羽村向泉日南      | 34 |
| 新宮市新宮         | 30 | <b>山口県</b>      |    |
| 田辺市湊          | 30 | 下関市吉田町駒辻        | 35 |
| 御坊市御坊         | 30 | 山口市大字上宇野令瀧区伊勢門前 | 35 |
| 東牟婁郡古座町下田原    | 97 | 萩市青海            | 35 |
| 西牟婁郡江住町江住     | 30 | 光市大字島田字石田       | 35 |
| 海草郡加太町加太      | 30 | 玖珂郡錦町宇佐郷紙屋      | 35 |

|                   |    |
|-------------------|----|
| 大津郡日置村大字日置上字古市    | 35 |
| <b>徳島県</b>        |    |
| 鳴門市鳴門町土佐伯字大谷      | 36 |
| 三好郡東祖谷山村大西        | 36 |
| <b>香川県</b>        |    |
| 高松市屋島西町           | 37 |
| 三豊郡三野村大見字岡崎       | 37 |
| <b>愛媛県</b>        |    |
| 東宇和郡黒瀬川村大字高野市字太郎原 | 38 |
| 西宇和郡三崎町二名津        | 38 |
| 南宇和郡城辺町長野         | 39 |
| 温泉郡中島町大浦          | 38 |
| 越智郡上浦村大字甘崎字口狭     | 38 |
| 宇摩郡新宮村大字新瀬川字土居    | 38 |
| <b>高知県</b>        |    |
| 宿毛市宿毛             | 39 |
| 須崎市多の郷神田          | 39 |
| 安芸郡甲浦町            | 36 |
| 安芸郡田野町東町          | 39 |
| 香美郡在所村木の木         | 39 |
| 吾川郡池川町東竹の谷        | 39 |
| <b>福岡県</b>        |    |
| 門司市大字田ノ浦          | 40 |
| 宗像郡宗像町字田熊         | 40 |
| 早良郡早良町字東入部        | 40 |
| 浮羽郡田主丸町新町         | 40 |
| 山門郡瀬高町下ノ庄恵比須町     | 40 |
| <b>佐賀県</b>        |    |
| 西松浦郡有田町外尾町        | 41 |
| 神埼郡三瀬村字岸高         | 41 |
| <b>長崎県</b>        |    |
| 諫早市城見町一丁目         | 42 |
| 大村市池田郷            | 42 |
| 福江市上大津            | 42 |
| 平戸市中野町山中免         | 42 |
| 西彼杵郡瀬川村横瀬本郷       | 42 |

|                  |    |
|------------------|----|
| 南松浦郡三井楽町本町浜ノ畔郷   | 42 |
| 上県郡上県町上県町佐須奈     | 42 |
| <b>熊本県</b>       |    |
| 八代市東町本町猫谷        | 43 |
| 玉名郡南関町関町堀池園      | 43 |
| 菊池郡菊池町限府横町       | 43 |
| 阿蘇郡蘇陽町菅尾字大久保     | 43 |
| 球磨郡多良木町字地藏堂      | 43 |
| 天草郡大矢野町登立新田      | 43 |
| <b>大分県</b>       |    |
| 日田市田島町字大原道       | 44 |
| 竹田市大字玉来字玉来       | 44 |
| 南海部郡鶴見村大字丹賀字丹賀   | 44 |
| 速見郡日出町大字日出字赤山    | 44 |
| 玖珠郡玖珠町大字山田字谷口    | 44 |
| 宇佐郡安心院町大字新原字峰ノ前  | 44 |
| <b>宮崎県</b>       |    |
| 日向市大字塩見字奥野       | 45 |
| 日南市大字板敷字糺        | 45 |
| 西諸県郡高原町大字蒲牟田字狭野  | 45 |
| 東臼杵郡諸塚村大字七つ山字本村  | 45 |
| 西臼杵郡日之影町大字七折字大菅  | 45 |
| 児湯郡東米良村大字尾八重字小八重 | 45 |
| <b>鹿児島県</b>      |    |
| 鹿屋市西原町           | 46 |
| 枕崎市大字枕崎高見町       | 46 |
| 指宿市大字新西方渡瀬       | 46 |
| 出水市大字武本下中        | 46 |
| 伊佐郡菱刈町大字田中       | 46 |
| 姶良郡蒲生町大字上久徳      | 46 |
| 姶良郡福山町大字福山       | 46 |
| 嚙嗚郡志布志町大字志布志中大黒  | 46 |
| 肝属郡内之浦町大字南方上礎    | 46 |
| 大島郡知名町大字瀬利覚      | 46 |
| 大島郡与論村大字茶花       | 46 |

以上 323 地点

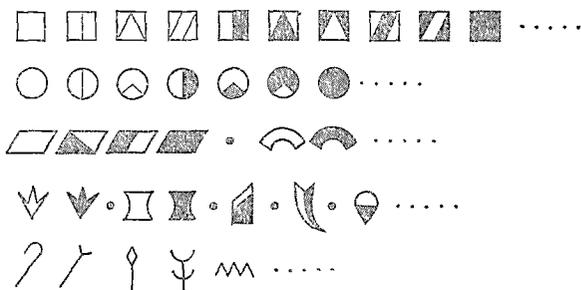
なお、下記の地点では、地方研究員と地方言語研究室員が同行して調査し、調査現場で起るいろいろな事態について打ち合わせて、全国での調査が統一して行われるようにつとめた。この打ち合わせを、同行調査とよんでいる。

| 同行調査地点名             | 地方研究員氏名 | 研究室員氏名 |
|---------------------|---------|--------|
| 石川県江沼郡大聖寺町          | 岩井 隆盛   | 徳川 宗賢  |
| 福井県福井市板垣町上南川        | 佐藤 茂    | 野元 菊雄  |
| 岐阜県郡上郡奥明方村二間手       | 谷開 石雄   | 柴田 武   |
| 愛知県東加茂郡足助町石橋        | 山田 達也   | 〃      |
| 三重県津市下戸田町           | 堀田 要治   | 上村 幸雄  |
| 京都府北桑田郡京北町西         | 奥村 三雄   | 野元 菊雄  |
| 大阪府大阪市東住吉区平野新町      | 前田 勇    | 〃      |
| 兵庫県神戸市垂水区垂水町宮本      | 和田 実    | 上村 幸雄  |
| 奈良県吉野郡下北山村池原・同村寺垣内* | 西宮 一民   | 徳川 宗賢  |
| 和歌山県御坊市御坊町          | 村内 英一   | 上村 幸雄  |

4・2 調査結果の整理 調査結果は、本報告1で示したように、項目ごと\*\*の分布地図の形で整理しつつある。

地図への記入にあたっては、語形を丸とか三角などの符号にかえて示す方法をいまのところとっている。そのために、われわれは、500種の符号（ほぼ4mm角）をほったゴム印と、8色のスタンプインキを使っている。符号の一部を例として示すと次の通り。

調査結果を記入する白地図としては方言調査基礎図を用いた。

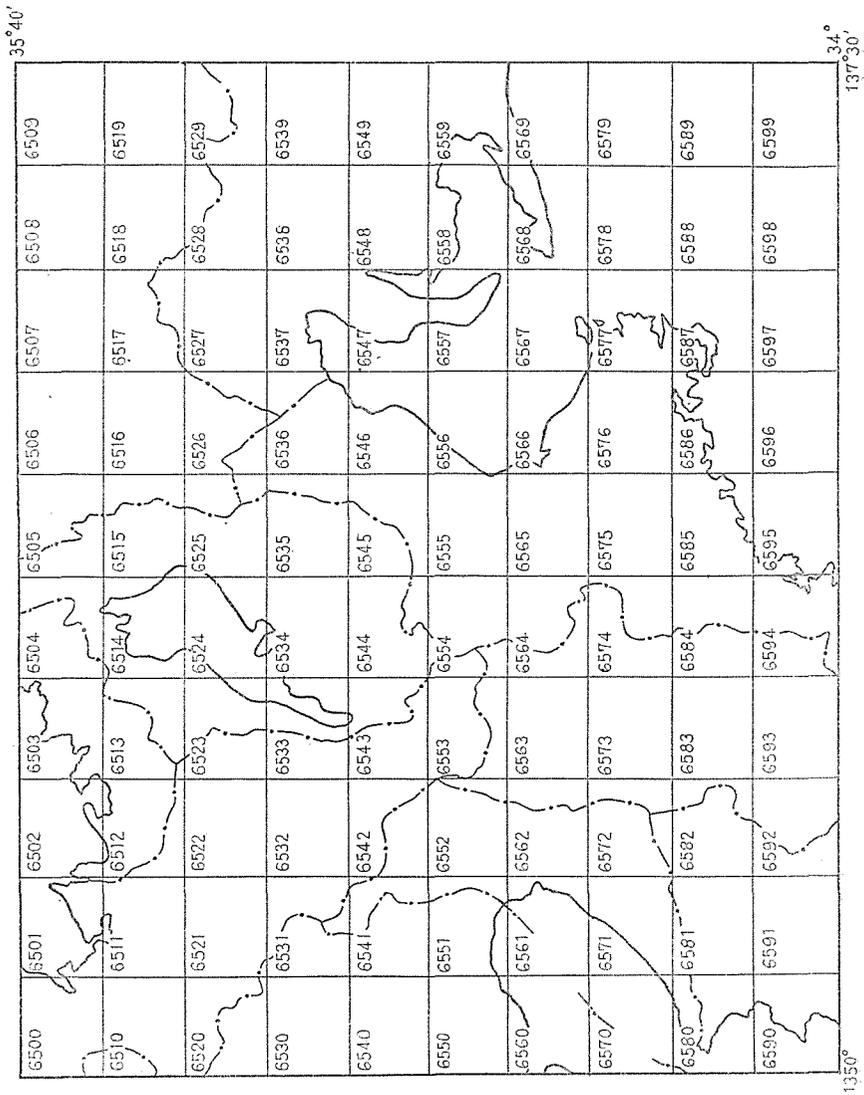


基礎図とは、言語の地理的調査をするにあたって、その調査結果を書き入れる

(整理符号の例)

ために作った特別の白地図である。単に海岸線を示しただけのものではなく、調査地点を、一定の組織によって表わしうるように工夫したものを言う。

\* この地点では適当な被調査者が得られず、完全な調査はできなかつた。  
 \*\* 各項目ごとに作られる地図は、1枚とは限らない。クsgグタイという形容詞を例にとればクスの部分の地図とグタイの部分の地図に分けた方がよいかもしれない。またグタイの部分の地図については、さらに最初の子音が [g] であるか [ŋ] であるかの音声的特徴をとりだして地図を作ることもできる。



第 2 图

われわれは、この基礎図を、地理調査所発行の5万分の1地形図を手掛りとして組み立てた。5万分の1地形図は、正確であってしかも手近にある。

地点番号は、次に説明する組織によって幾ケタかの数字によって表わされる。簡単に要約すれば、地点の番号を、その地点の属する区域の番号によって示すシステムである。まず第一図を使って説明しよう。この図では、日本がいくつかの長方形のブロック—東西 $2^{\circ}30'$ 、南北 $1^{\circ}40'$ —によって区別けされている。

(このブロックは、それぞれ5万分の1地形図100枚すなわち地形図を縦横10枚ずつ並べた地域にあたる)。最初、このブロックに2ケタの番号を与える。その番号は第一図でわかるように縦横に一定の組織がある。次に、各ブロック内の5万分の1地形図にあたる縦横10ずつ計100の区域—東西 $15'$ 、南北 $10'$ —を、左上すみから横に順々に00, 01, 02……とし(右下すみ99に至る)、この2ケタの数字を、さきのブロックの番号に続けて、5万分の1地図1枚にあたる区域の番号とする。第2図で説明しよう。この図は、第1図における65番のブロックを拡大したものである。図の小さなます目一つ一つが、それぞれ5万分の1地形図一枚にあたる\*。たとえば、左上すみの6500のます目は、5万分の1地形図「宮津」にあたる。京都市の中心部は6533(地形図でいえば「京都東北部」)にある。従って、京都市(東北部)で調査した場合は、地点番号は、大まかに言えば6533と言ってもよい。

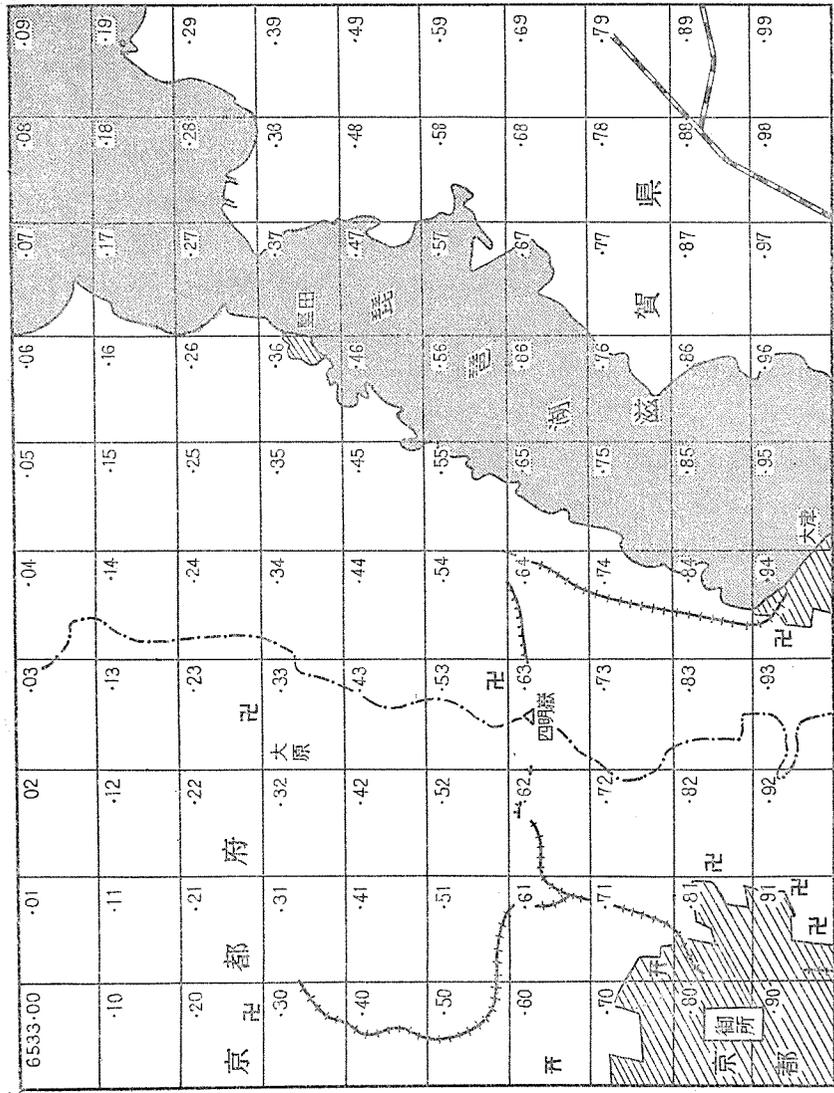
しかし、調査地点は、4ケタの数字であらわされるます目にいつも一箇所とは限らない。4ケタの番号では一つのます目に2つ以上の地点をとる場合に、違った地点が同じ番号であらわされることになる。そこで、それぞれのます目をさらに縦横ともに10等分し、東西 $1'30''$ 、南北 $1'$ の100の小区画に分割して調査

---

\* ただ、ここで、このます目が現行の大部分の5万分の1地形図と厳密には一致しないことに注意しておく必要がある。3色刷りの最新版のものを除いて、現行の5万分の1地形図には $10''/4$ の測量誤差があり、基礎図のます目に対してわずかばかり東に寄った地域が記載されている。

また、外海の島についての5万分の1地形図の外わくには、われわれのシステムと一致しないものがある。例：山形県「飛島」、東京都「八丈島」、鹿児島県「喜界島」など。別に5万分の1地形図の中には、1枚の図面に東西 $15'$ 、南北 $10'$ のわくからはみだした部分を含むものがある。例：福島県「相馬中村」茨城県「潮来」福井県「福井」静岡県「浜松」など。これらの場合は、現行の5万分の1地形図の図面にこだわらず、ブロックを100分するという方式で東西 $15'$ 、南北 $10'$ のます目をかけて番号をつけた。

35°10'



35°

135°45'

第3図

地点番号は、その地点が属する小区画の番号であらわすこととした。第3図で説明しよう。第3図は、6533のます目をさらに拡大したもので、このます目を縦横ともに10等分し、100の小区画に区切る。そして、左上のすみから横に右下のすみへむかって、順々に00から99までの数字を与える。小区画の番号は、ます目の番号の次に点をおいて、この2ケタの数字を並べて示す。図のように、左上すみの小区画は6533・00であり右下すみの小区画は6533・99となる。具体的な例で言えば、近江八景の堅田で調査したとすれば、地点番号はその小区画の番号、つまり6533・36である。大原の里で調査すれば、6533・33となる。

地点番号のつけ方は以上の通り、つまり、この基礎図の構想では、地点の番号をその地点の属する区域の番号によって示すシステムであり、さらに、その区域と区切る外わくの線は、5万分の1地形図のわくの線——経・緯線——を基準としたシステムということになる\*。

われわれは、基礎図として150万分の1の白地図（B版全紙）を作った。その図には、5万分の1地形図にあたるます目が、ほぼ15mm×13mmの大きさで書き込まれている（それ以下の小区画を示す線は省略した）。しかし、基礎図はいわば一つのシステムであるから、かならずしも150万分の1の縮尺である必要はない。同一システムによるならば、300万分の1の地図であってもあるいは80万分の1の図であってもさしつかえない。また、調査が、ある地域に限られる場合は、この日本語地図のための基礎図のような、日本全土の白地図でなければならぬ理由もない。同一システムであれば、一つの県、一つの地方のものであってもかまわないわけである。この基礎図は、いわば経線・緯線を基準としているから、今後行政区画および地名にどんな変更があっても動かない。つまり、同じ地点は永久に一定の地点番号を持つことになる。さらにこの基礎図はシステムによって調査地点を示すことが一般的になるならば、互に無関係に行われた別の調査の結果も簡単に比較することができ、そのまま一枚の地図に整理することができるようになるであろう。上に述べたような意味か

---

\* なお、日本語地図作成のための調査では、点以下2ケタだけで示せばじゅうぶんと考えたのだが、もっと地点を細かくする調査、東西1'30"南北1'の小区画の中に2地点以上をとる調査では、同じ100進法の方法によっていくらでも細かく番号をつけることができる。

ら、方言言語研究室では、このシステムが広く普及することを希望している\*。

5. 調査開始前の準備 年報8での記述は昭和32年3月現在のところで終わっているが本年度の調査にさきだって若干の準備作業があったので、ここで補っておこう。昭和32年3月行われた山梨県中巨摩郡豊村での調査結果を参考として調査票I・Jが作られた。ほとんど現在のものに近い姿であったが項目数は233（うち被調査者判定のための第1調査票は26項目）。この調査票を土台として所員間での意見交換が行われ、項目の入れ替え、配列の検討が加えられて現在の調査票が最終的に決定した。

6. 来年度以降の見通し この調査は、今後ひきつづき6年間、昭和38年度まで継続する予定である。第2年度以降も調査方法は第1年度と全く同じ方法を取り、調査地点は毎年約330地点ずつふえ、その網の目をだんだん細かくしていく。なお、沖縄地方は、第1年度調査の地域に入れることができなかったが、元来日本語地域ではあるし、言語的に特に重視すべき地方であるから、調査地域にくり入れるよう努力する。

本報告4・1の終りのところでの述べた同行調査は、調査者全員ができるだけ統一した方法によって調査を行うための作業だから、7年間調査計画のうちなるべく早い時期にすますため、方言言語研究室の室員は、できるだけ多くの地方に出張する。第2年度には北海道および本州東部地方で同行調査を行う予定である。

（徳川）

---

\* なお、この基礎図は、言語の地理的調査ばかりでなく、地理的分布を扱うあらゆる調査研究に利用することができる。たとえば民俗学である民具そのものの分布を示すときにも使えるし、また考古学上の遺物の分布図にも利用できるなど。

# 琉球首里語辞典の編修

## A. 目的

琉球首里出身の琉球研究家、島袋盛敏氏執筆の原稿「琉球語辞典」（収録語数約1万2千）に検討を加え、訂正増補した上で琉球首里方言辞典として刊行する。

## B. 前年度までの経過

そのため、昭和29年度から31年度にかけて、全項目について音声・アクセントの観察、意味の補正、用例の追加、項目の整理と補充などを行った。その上で、原稿を全部書き改める作業にとりかかり、32年度に持ち越した。

## C. 昭和32年度の実施経過と担当者

原稿を書き改める作業は、若干の疑問項目をのぞいて、32年12月までに終了した。33年1月からは、標準語引きの索引のためのカードを作成することに着手し、同時に、残った疑問項目の処理を進めた。32年度もひき続いて上村幸雄が担当した。疑問項目の処理には、首里出身の琉球史家、比嘉春潮が非常勤職員（32年11月～33年3月）として協力した。

## D. 来年度の予定

予定より進行が遅れているが、昭和33年3月末現在、標準語引き索引カード作成の半分を終り、残り半分の作成とその配列・書き改めた原稿の配列・音韻と文法の解説の執筆などを残している。これらの作業は昭和33年8月までに完了する予定である。

（上村）

# 言語能力の発達に関する調査研究

## A. 研究経過，本年度の実施の概要

この調査研究は昭和28年度からはじめた。昭和28年度に小学校に入学した児童の、一学級（約50人）のひとりひとりについて、その言語能力がどのように伸びて行くかを、継続して、追跡的に調べて来た。この児童たちが今年度は5年生になった。言語能力の発達は、発音、文字、語彙、文法、読むこと、つづること、話すこと、聞くことのすべてにわたり、発達の条件としては、環境、知能、性格、身体的状況、学習などを調べている。方法はテスト、観察（逸話記録、チェック・リスト）、質問紙調査などを主に行っている。テストや質問紙はだいたい自作である。なお、昭和28年度入学児について調べ切れなかったことを翌昭和29年入学の児童について調べている。この児童は今年度4年生である。したがって、次に掲げる各学校で各2学級の児童が研究調査の対象になっている。今までに中間報告として国立国語研究所報告7「入門期の言語能力」、同10「低学年の読み書き能力」を出したが、今年度は同14「中学年の読み書き能力」をまとめながら、調査研究を続けた。

本年度の実験学校、協力学校（いずれも最初からの継続校である）

|            |                       |
|------------|-----------------------|
| 実験学校       | 東京都新宿区四谷第六小学校         |
| 実験学校に準ずる学校 | 神奈川県中郡比々多小学校          |
| 協力学校       | 東京都杉並区方南小学校           |
|            | 東京都中野区新井小学校（29年入学児だけ） |
|            | 神奈川県逗子市久木小学校          |
|            | 静岡県静岡市中田小学校           |
|            | 長野県上水内郡豊野西小学校         |
|            | 長野県埴科郡松代小学校           |
|            | 栃木県小山市小山第二小学校         |
|            | 滋賀県大津市中央小学校           |
|            | 兵庫県氷上郡北小学校            |

本年度の調査担当者は、興水実、芦沢節、高橋太郎、村石昭三であった。

次に本年度のおもな検査や調査を実施順にあげる。それから、今まで中間報告をしていなかった中学年の話す能力の発達、聞く能力の発達について報告する。

## I 各学期末のテスト

### 第1学期

- 1) 文字力（漢字書字・漢字読字）
- 2) 読解力（黙読理解）
- 3) 読書速度（黙読・音読）
- 4) 語い力
- 5) 文法能力
- 6) 話し方
- 7) 聞き方
- 8) 作文

### 第2学期

- 1) 文字力（漢字書字・漢字読字）
- 2) 読解力（黙読理解）
- 3) 読書速度（黙読）
- 4) 語い力
- 5) 文法能力
- 6) 聞き方・話し方
- 7) 聞き方速度
- 8) 話す・聞く（質問紙）
- 9) 話す（録音）
- 10) 作文

### 第3学期

- 1) 文字力（漢字書字・漢字読字）
- 2) 読解力（黙読理解）
- 3) 読書速度（黙読・音読）
- 4) 語い力
- 5) 文法能力
- 6) 聞き方・話し方
- 7) 作文

## II そのほかの調査

- 1) 読書ノートの配布・回収
- 2) 読書調査
- 3) オフサルモ・グラフによる調査

4) 話し方調査

5) 読書練習器による読書速度の調査

### Ⅲ 協力学校への所員の出張

1) 長野県埴科郡松代小学校 高橋太郎 (33・3)

Ⅱ の3) 4) 5) の調査は実験学校の児童 (29年度入学児, 5年生) に研究所に来てもらって集中的に行なった。(興永)

## B. 中学年の話す能力の発達

——同じ問題に対する答の発達——

昭和31～32年度に、実験学級の3～4年生 (31年に3年生, 32年に4年生) に対して、話す能力を種々の観点から調べたが、そのうち、ここでは

(i) 毎学期末に行なう言語能力の総合検査の一環として作られたテスト問題によって調べたもののうち、

(ii) 直接話させず、紙に書いた選択枝から正答を選び出す、客観法形式をとったもので、しかも、

(iii) 同じ (または、等価と考えられる) 問題で2回以上行なったものだけについてのべることにする。

### 1. テスト問題

(1) 問題は次に示すA～Fの6題で、これは、いずれも、前置の話や説明は実験者が読み聞かせ、被験者は、選択枝だけを書いた解答用紙に○印をつけるものである。

なお、AとBとは、それぞれ聞き方テストにすぐ続いて提出したもので、Aは聞き方の「11. ディズニー映画」の、Bは聞き方の「13. 子どもの新聞」の、それぞれすぐあとに続いている。(なお「C中学年の聞く能力の発達」参照)

〔問題A〕 よしお君が読み終ると、「ほくもだそう。いつまでに出せばいいの。」とだれかが聞きました。四人のお友だちが答えました。どれがよいでしょうか。

- (1) ほくなんかもうずっと前に出したよ。新聞にのった時すぐ出しちゃった。
- (2) 君はあまりうまくないからだめだよ。もう山ほどたまっているんだもの。
- (3) 三十日のゆうびんのけしいんがあればうけつけるよ。早く出せよ。
- (4) 作文はひとりでもちょくせつ送ってもいいんだよ。新聞社に早く出せよ。

〔問題B〕 このラジオが終った時、お父さんが会社から帰って来ました。

「あさって、二、三日の予定で新潟へ出張することになった。こんなに暖かだから、仕事が終わったらスキーをしてこようと思っていたができないな。新潟にある会社の出張所へ行くんだよ。」こんな話をしてから、すみれさんたちにむかって、「みんなおぎょうぎよくラジオを聞いていたね。なにかあった?」とお聞きになりました。すみれさん、なぎささん、春男さんはさっそく、お話をしました。だれのお話がいちばんよいと思いますか。

- (1) 「春 男」 お父さん、ラジオだね。今晚あたりから寒くなって、裏日本は大雪がふるって。だからスキーはできるよ。
- (2) 「すみれ」 ラジオだね。新潟県の奥の子たちはね。六年生がかみをかけてあげるんだって。だから床屋さんにいかないんだって。お父さん、見てらっしゃいよ。
- (3) 「なぎさ」 長野県を通して、軽井沢によってね。そこの子たちはお人形をつくらせて、マナスルの登山隊にあげるんですって。お父さん、長野を通るでしょ。

〔問題C〕 山田先生が国語の時間に、「これから君たちの家で、今、何新聞をとっているか、ひとりひとり調べます。」と言われました。二郎君の家では、毎日新聞をとっています。しかし、二郎君はクリチャンの漫画が大好きです。そこできのう、おかあさんに「朝日新聞をとって下さい。」とお願いしました。けれども「お父さんが毎日新聞がいい、朝日はだめだとおっしゃってますからね。」とおっしゃって、とってもらえませんでした。山田先生が、「はい、二郎君の家は何新聞をとっていますか。」とおたずねになりました。二郎君は何とお答えしたらいいでしょう。

- (1) 毎日新聞をとっています。
- (2) 朝日新聞の方がいいけどいまは毎日新聞です。
- (3) 毎日新聞です。あれはクリチャンがないからつまらないです。
- (4) ぼくのうちはお父さんが毎日新聞ときめているんです。

〔問題D〕 あきら君は隣のまさる君といっしょに道を歩いていると、学校の先生にあいました。まさる君は幼稚園に行っていて、自分のことを「マーチャン」と言います。先生があきら君に「この子は誰ですか。君の弟かね。」と聞きました。あきら君はまさる君をどう言ったらよいでしょうか。

- (1) ぼくにはおとうとなんかいません。
- (2) まさるっていうんです。まだ学校に行っていません。
- (3) いいえ、ちがいます。ぼくのうちのとなりの子です。
- (4) いいえ、ちがいます。「マーチャン」です。

〔問題E〕 山田君が目の手術をして学校を休んでから、もう二週間になります。山田君は今まではお昼休みになると杉田君たちとスモウをとって遊び、とても強い子です。

ある日、杉田君はお友だちと一緒に、病院に山田君をお見舞いに行くことにしま

した。山田君は非常に喜びました。しかし、まだ目に大きなほうたいをしていて、からだを動かすと痛そうに顔をしかめます。

杉田君は、どう言ってお見舞したらいいでしょうか。

- (1) はやくよくなってね。ぼくもここに來たらなんだか目がへんになったみたいだ。
- (2) はやくよくなって、またすもうをしょうね。みんなまってるよ。
- (3) ずいぶん大きなほうたいをしているんだね。まだとれないの。
- (4) おべんぎょう、すごく進んだよ。テストもすんじャった。はやくよくなってね。

〔問題F〕 「正男さん、おかあさんね。P. T. Aの会に出て來ますから三郎とよくおるすばんしててね。4時にはきつと帰りますからね。」おかあさんはそう言っ出て行きました。はじめ三郎さんも、おとなしく本など読んでいましたが、あきてしまっ、家の中でひとりでボール遊びをはじめました。と、ガチャーンとガラスをわってしまいました。3時頃になっ、しんせきのおばさんがみえました。そして「おかあさんが帰ってきたら、すぐわたしの家にくるよういって下さいな。」といっ、おばさんが帰って行きました。少しして、正男さんの友だちの山田君がきて「野球を原っぱで四時からするから、すぐおいでよ。」と正男さんを誘いにきました。正男さんはおかあさんが早くかえっこないかと、待ち遠してたまりませんでした。「ただいま」おかあさんが、約束の4時に30分もおくれて帰ってきました。正男さんは、どういっことをはじめにお伝えしたらよいでしょうか。

1. さぶろうちゃんはね、ガラスをわったよ、おかあさん。
2. 山田君が4時から野球をするといってきたから、すぐいっいいい、おかあさん。
3. しんせきのおばさんがきてね、「すぐうちにおいでください」っていいましたよ、おかあさん。
4. おかあさん、4時にかえるといっのに いやだよ、三十ぶんもおくれるんだもの。

(2) 各問題を行なった学年・学期、およびその被験者数は、「2. 結果」の表に示す通りである。2年生の時から連続実施している問題は、あわせて同じ表に示した。

(3) テスト問題の等価性については、単に語をかえただけのものは、等価とみなした。たとえば、問題Cで新聞社名をかえたもの。Eで病気の種類をかえたものなどである。2年2学期に行なった問題Dおよび問題Eは、選択枝の構成法が、他の時期に行なったD、Eと少し異なるので、結果を〔 〕に入れて示した。この問題は、問題D'、および問題E'とよぶことにする。問題D'および問題E'は、次の通りである。

〔問題D'〕 山本君が親せきのまさる君といっしょに公園にキャッチボールをしに行く途中で、学校の先生にお会いしました。まさる君は千葉の学校の一年生です。自分のことをマー坊と言います。先生がまさる君を見て、山本君に、「この子は誰ですか。君の弟かね。」とお聞きになりました。山本君はまさる君を先生にどうお伝えしたらよいでしょうか。

1. いいえ、ぼくに弟なんかありません。
2. まさるという子です。ぼくたちいっしょにキャッチボールに行くところです。
3. いいえ、ちがいます。千葉にいる親せきの子で、まさるといいます。
4. いいえ、ちがいます。この子はマー坊です。

(なお、これはDと比較しやすいように、選択枝の番号と並べ方をかえたものである。問題実施原文では、2, 4, 3, 1の順である。)

〔問題E'〕 石田さんがかぜをひいて学校を休んでから、もう3週間になります。石田さんはボール遊びが大好きでした。お友だちの岡本さんは学校から帰って石田さんの家にお見舞に行きました。石田さんは大変喜びました。しかし顔も青く、ひどくやせていました。岡本さんは、どう言ってお見舞したらよいでしょうか。

1. 石田さん、早くよくなってね。おくすりのんでる？ 私、あなたの顔を見てみると、なんだかかぜをひきそうだわ。
2. 石田さん、早くよくなってね。そしてまたボール遊びをしましょうよ。みんなで待ってるわ。
3. 石田さん、まあ、ずいぶんやせたわね。顔も青いわよ。早く、よくなってね。私淋しいの。
4. 石田さん、国語のお勉強すごくすすんだわよ。あとお勉強皆に追いつくの大変だわね。

(なお、これはEと比較しやすいように、選択枝の番号と並べ方をかえたものである。問題実施原文では、2, 3, 1, 4の順である。)

(4) このテスト問題のねらいは、ペーパーテストであることによって大きな制限を受けているが、A～Dでは、主として、相手の間に対する応答のあり方を、Eでは、相手の気持を考えた上での発言のしかたを、Fでは、報告のしかたを調べることを、ねらいとしている。

## 2. 結果

結果は、次の表の通りである。○印は正答の選択枝、および正答者の人数、[ ]内はテストD'またはE'に対する反応結果を示している。

| 学年・学期                                   |           | 2年         |   |   | 3年 |    |    | 4年 |    |    |    |    |    |    |
|-----------------------------------------|-----------|------------|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
|                                         |           | 1          | 2 | 3 | 1  | 2  | 3  | 1  | 2  | 3  |    |    |    |    |
| 問題                                      | 選択校       | 人          | 男 | 女 | 24 | 24 | 24 | 26 | 23 | 23 | 27 | 20 | 27 | 20 |
|                                         | 1         | ぼくなんかもう……  |   |   |    |    |    | 0  | 1  |    |    |    | 0  | 0  |
|                                         | 2         | 君はあまり……    |   |   |    |    |    | 1  | 0  |    |    |    | 0  | 2  |
|                                         | ③         | 三十日のゆうびん…… |   |   |    |    |    | ⑳  | ㉑  |    |    |    | ㉒  | ㉓  |
| 4                                       | 作文はひとりで…… |            |   |   |    |    | 5  | 11 |    |    |    | 2  | 6  |    |
| B<br>( <small>子新聞</small><br>と聞<br>きもの) | ①         | ……今晚あたり……  |   |   |    |    |    | ⑬  |    |    |    |    | ⑮  | ⑰  |
|                                         | 2         | ……床屋さん……   |   |   |    |    | 6  | 5  |    |    |    |    | 5  | 3  |
|                                         | 3         | ……お人形……    |   |   |    |    |    | 8  | 10 |    |    |    | 5  | 5  |
| C<br>(何新聞)                              | ①         | ……をとっています  |   |   | ⑮  | ⑫  | ⑦  |    |    | ⑧  |    |    | ⑬  | ⑱  |
|                                         | 2         | ……方がいいけど…… | 7 | 9 | ⑩  | ⑬  | ⑰  | ⑥  |    | ⑱  | 15 | 8  | 11 | 5  |
|                                         | 3         | ……つまんないです  | 2 | 2 | 7  | 5  | 7  |    |    |    | 1  | 1  |    | 0  |
|                                         | 4         | ……お父さんが……  | 1 | 2 | 4  | 6  | 3  |    |    |    | 5  | 5  | 3  | 2  |

(脚) B欄の3年3学期に女児1名, 4年3学期に男女児各1名の無登があった。

| 学年・学期     |               | 2年 |    |    | 3年 |    |    | 4年 |    |    |    |
|-----------|---------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
|           |               | 1  | 2  | 3  | 1  | 2  | 3  | 1  | 2  | 3  |    |
| 問題        | 選択枝           | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 |    |
|           | 人数            | 男  | 女  |    |    |    |    |    |    |    |    |
| D (マーチャン) | 1 ……弟いない……    | 1  | 0  |    |    |    | 1  |    |    |    | 1  |
|           | 2 ……まだ学校に……   | 9  | 0  |    |    | 16 |    |    |    |    | 11 |
|           | ③ ……となりの子……   | ⑨  | ⑩  |    |    | ⑪  |    |    |    |    | ⑫  |
|           | 4 ……マーチャン     | 5  | ⑬  |    |    | ⑭  |    |    | ⑮  |    | ⑯  |
| E (見舞)    | 1 ……へんになった……  |    | 1  | 9  |    | 2  |    |    | 0  |    | 1  |
|           | ② ……はやくよく……   |    | 3  | ⑫  |    | ⑬  |    |    | ⑭  |    | ⑮  |
|           | 3 ……大げさな……    |    | ⑯  | 1  |    | 1  |    |    | 0  |    | 0  |
|           | 4 ……勉強進んだ……   |    | 2  | 10 |    | 7  |    |    | 9  |    | 8  |
| F (るす番)   | 1 ……ガラスわった……  |    | 5  | 7  |    |    |    |    |    | 3  |    |
|           | 2 ……野球に……     |    | 6  | 0  |    |    |    |    | 0  |    |    |
|           | ③ ……お婆さん来て……  |    | ⑭  | ⑮  |    |    |    |    | ⑯  |    | ⑰  |
|           | 4 ……三十分もおくれ…… |    | 2  | 1  |    |    |    |    | 2  |    | 0  |

### 3. 考察

結果の表を見るとその発達のあとが正答率にはっきりとあらわれているものは、ほとんどない。ただ傾向としては、中学年になって向上したのものとして、E・F、4年生になって向上したのものとしてA・B・Dをあげることができる。しかし、これも男女の両者について厳密に見て行くと、完全な発達傾向と認めることはできない。

そこで、これをただ正答率だけでなく誤答の傾向もあわせて検討し、また話し方の機能という面からもながめて、考察を加えることにする。

#### (1) 質問に対する応答としての妥当性の発達

質問に対する応答の形で提出されている問題はA、C、Dの3つである。この3つは、いつ？、なに？、だれ？ に対する応答を要求している。Aは、3・4年の間に発達が見られ、男子は、4年生で完成に近づいている。Cは4つの選択肢がともに応答に必要な要素をそろえていて、ここで正答と誤答の区別は別の余分な条件をもっているかいないかという点にある。Cの正答の発達になかだるみがあることは、選択肢の2が次第に勢力を増してくることにある。つまり応答の必要条件以外のものに何か別の要素（あとでのべる）がくわわると、質問一応答という形がくずされる傾向のあることを示している。Dはことばづらだけをたどれば、「だれ」に対して名前が出て来るのは当然で、これは相手の理解の度合に対する考慮がなければ、まともに答えられない。その意味でこれもやはり別の要素が加わっている。これが次第に正答率を高めながら、同時に、中学年で、選択肢2にも集中することの理由と考えられる。

中学年では、質問に対する応答の意識は発達するが、それは別の要素によって乱されがちになるものと考えられよう。

#### (2) 自分の役割から、言うべきことを言う能力の発達

Fは、るす番の役割には、報告という任務があるということを知覚しなければ解けない。この任務の自覚は、2年から3年へと次第に進んでいるようである。

#### (3) 情報を伝達することの発達

さきに、CやDで、選択肢2が集中傾向を持っているとのべたが、この選択

枝2を見ると、ともに、問われていない情報を伝達しようとした発言であることがわかる。このことは、Eの選択枝4についても言えることである。Eの誤答も、3年から4年に進むにしたがって、一つにしぼられていっている。このように情報を豊富に伝達しようとすることも、やはり中学年における発達と考えられよう。そしてその発達は、ある場合、必要なことだけを伝えようとするものの発達と矛盾する。そこに正答率の乱れの問題があるのだろう。

#### (4) 相手の立場を考えて話すことの発達

話す場合に相手の立場を考えることは重要であるが、このテスト問題からも立場の考え方の3種をひき出すことができる。

(4-1) 相手の要求を考えること：これは問題Bにあらわれている。この問題は、3年から4年へと、次第によくできるようになっている。

(4-2) 相手の理解の仕方を考えること：これは問題Dにあらわれている。だれ？ とたずねて、ただ固有名詞で答えられても、予備知識のない者にはわからない。そのことがわかっていないと、Dはとけない。そのことがわかっていなければ、名前を答えることが「いいえ」のぶんも答えることになると思ってしまう。そういう意識の上に、豊富な情報伝達をねらった結果がDにおける選択枝2への集中傾向を生み出したのであろう。相手の理解度に対する理解は中学年では、まだあまりのびないものと思われる。

(4-3) 相手の気持を考えること：これは問題Eにあらわれている。この問題でも、2年は別として、3年と4年の間に大差がない。この場合にも、情報伝達傾向が関与している。

以上のように考察したが、これには、ペーパーテストという限られた条件と傾向の解釈という主観的な要素とがはいっているので、一般的なものと判断することはできない。これは、他の、話し方の諸調査とともに、もう一度全体の中で考察して、報告したい。

なおこのテスト問題の作成は、村石昭三が担当した。

(高橋太郎)

### C. 中学年の聞く能力の発達

ここで報告する、主たる内容はつぎの二つである。

小学校中学年の聞く能力の調査結果(Ⅰ,Ⅱ)

小学校中学年の聞く能力と他の言語能力・要因との関係(Ⅲ,Ⅳ)

### I. 問題の構成

聞く能力として、中学年で調査のためにとりあげた各能力はつぎのとおりである。

- 1) 話(情報)の詳細なことがらを聞きとる。(伝えられる話・情報の具体的な事実を正確に聞いて理解する。)
- 2) 話(情報)の内容の時間的・空間的關係を聞きとる。(‘いつ’‘どこで’‘なにをし’それから‘なにをした’,など,時間・空間関係,推移を聞いて理解する。)
- 3) 目的に即した情報の聞きとりをする。(伝えられる情報の中から,自分の問題と関係づけ,そのために必要なことだけを聞いて理解する。)
- 4) 話の欠陥を聞きわける。(伝えられる話の内容上の矛盾を文脈から判断して,理解する。)
- 5) 話の要点を聞きとる。
- 6) 文脈に即して,話(情報)のカギとなる語句の意味を聞きとる。
- 7) 話のくみたてを聞きとる。(話を必要な段落に分け,そのくみたてを理解する。)
- 8) 話の主題を聞きとる。
- 9) 話し手の意図を聞きとる。
- 10) 話す速度に応じて聞きとる。

中学年の聞く能力は以上のように,聞きとり(聴解)能力が主になっている。そのためにとりあげた問題の名称,および調査学期を一覧表にするとつぎのとおりである。

| 問題番号と名称  | 能力               | 調査学期 |     |     |     |     |     |
|----------|------------------|------|-----|-----|-----|-----|-----|
|          |                  | 3-1  | 3-2 | 3-3 | 4-1 | 4-2 | 4-3 |
| 1 雨降りの登校 | 話の欠陥を聞きわける       | △    |     |     | △○  |     |     |
| 2 校内放送   | 目的に即した情報の聞きとりをする | △    | ○   | ○   |     |     |     |
| 3 速達     | ”                | △    |     | ○   | △   |     |     |

|             |                           |   |   |   |    |   |    |
|-------------|---------------------------|---|---|---|----|---|----|
| 4 天気予報      | 目的に即した情報の聞きとりをする          | △ | ○ |   | △  |   |    |
| 5 電話の誘い     | 話し手の意図を聞きとる               |   | △ | △ |    |   | ○  |
| 6 帽子忘れ      | 話の内容の時間的・空間的關係を聞きとる       |   | △ |   |    |   | ○  |
| 7 猫と魚       | 〃                         |   | △ |   |    |   | ○  |
| 8 ボート遊び     | 〃                         |   | △ |   |    |   | ○  |
| 9 白という犬     | 〃                         |   | △ |   |    |   | ○  |
| 10 たなばた     | 話のくみたてを聞きとる               |   | △ |   | ○△ |   |    |
| 11 ディズニー映画  | 広告文の要点を聞きとる               |   |   | △ |    |   | ○△ |
| 12 ラジオ・ニュース | 文脈に即して、情報のカギとなる語句の意味を聞きとる |   |   | △ |    |   | ○△ |
| 13 子どもの新聞   | 情報の詳細を聞きとる                |   |   | △ |    |   | ○△ |
| 14 白鳥       | 話の要点を聞きとる                 |   |   | △ |    |   | ○△ |
| 15 追想       | 〃                         |   |   | △ |    |   | ○△ |
| 16 おみやげ     | 目的に即した情報の聞きとりをする          |   |   | ○ |    |   |    |
| 17 さけとつばめ   | 話題・要点・文脈を聞きとる             |   |   |   | ○  |   | △  |
| 18 動物園      | 話の詳細なすじを聞きとる              |   |   |   | △  |   |    |
| 19 おまわりさん   | 話し手の意図を聞きとる               |   |   |   | △  |   |    |
| 20 事故の解説    | 解説文の詳細・要点・意図              |   |   |   |    |   | △  |
| 21 火事 他     | 話す速度に応じて聞きとる              |   |   |   |    | △ |    |

(註) 調査学期は学年学期をさす。たとえば、3—1は3年1学期をさす。テスト期日はどの学期とも学期末である。○△印はその学期で調査したことを示し、○印は昭和28年度入学児童、△印は昭和29年度入学児童をさす。

問題は全部で21題である。継続研究というたてまえから、低学年でだした同じ問題もあり、中学年向き、高学年向きの問題もある。そして同じ問題をふたたび与える場合には、1年間の隔りをおき、また、むずかしさが変らぬ程度に、話や情報の内容を変えた。(たとえば、主人公の名前を変える、時間・場所・事件を変えるなど。)

#### 一般的な実施要領

- 1) 全部の問題が集団で、いっせいにするテスト形式である。
- 2) 教師は答案用紙(設問と選択枝だけ用意したもの)を裏返しにさせておいて、問題をゆっくり読んで聞かせる。あまり誇張した読みかたをしないで、しかし児童たちによくわかるような説明をして下さい。
- 3) 答案の表を見させ、教師が選択枝を読んで聞かせ、正しい思うものに

ひとつだけ○をつけさせる。

- 4) 紙を裏返しにして、教師は次の話を聞かせる。
- 5) お話はすべて一回だけとし、くりかえして読まない。

ただしこの実施要領を適用していない問題もある。  
たとえば、問題1. 10. 18. 21.

## II. 調査問題と結果

### 問題1 雨降りの登校

これからお話をしますが、その中にまちがったところがあります。まちがっているところはどこか、どうしてか、お話がすんだあとで書いてもらいます。よく聞いてください。

ゆうべはひどい雨でした。強い風が吹きました。しかし、朝になって学校に行く時は、ちょうど雨が止んでいました。私はおかあさんに「かさを持って行きなさい。」と言われましたが、きっと晴れると思ってかさは持たずに学校に行きました。

途中でどこかの男の子が、はなおの切れたげたを手にもって、はだしで歩いているのであいました。わたくしはその子がきのどくでなりませんでした。

少し行った道のまがりかどで一年生の女の子がこわそうにして、にげごしになっていました。みると、向うから黒い大きな犬が、のそのそ歩いてくるのです。

わたしもこわくなりました。もじもじしていると、犬がこちらを見ました。ワンワン、犬が大きな声でほえました。わたしはびっくりしましたが、にげませんでした。女の子が急に泣きだして、持っていた下駄をほうり出して、わたくしのうしろにつかまったからです。

そうすると、その下駄は犬のからだにあたりました。犬はびっくりして、キャンキャンとなきながら逃げていきました。「もういっちゃったわ。だいじょうぶよ。」わたしは、その女の子といっしょに学校までついて行ってやりました。雨がまた少し降ってきました。その女の子はかさを持っていなかったので、わたしのかさに入れてやりました。

- (1) お話のどんなところがまちがっていますか。 (4—1)\*
  - 1 <正答例> 雨がふりだして、かさをさした。 } .....84.0%\*\*  
(または、かさを持っていかなかった。)
  - 2 <正答例> 女の子が、下駄をほうりだした。..... 4.0%\*\*
- (2) どうしてまちがっていますか。
  - 1 <正答例> この子はかさを持っていかなかったから。 } .....70.0%\*\*  
(または、かさに入れてあげたというから。)

- 2 <正答例>女の子は、下駄もっていなかった。 } ..... 2.0%\*\*  
 (または、下駄を持っていたのは男の子。)

(注) \* 調査をした学年学期を示す。

\*\* 各項目における反応率を示す。とくに、昭和29年度入学児童の反応率はイタリック数字で示す。以下、問題の結果の表示はこの方式に準じてある。

ふたつの設問とも、1に該当する反応が多かった。2に該当する反応がきわめて少ないのは、先行の1反応に固執すること、および男か女かという詳細なことがらの理解はむずかしかったためであろう。なお、反応の中には“文の表現法・修辞”がおかしい、と誤って反応するものもあった。

### 問題2 校内放送

正子さんたちが給食のパンをいただいていた時、次のような校内放送が聞こえて来ました。「全校生徒にお伝えます。今から学年別にちがう所に集まってもらって、遠足のことについて、相談をしますから、よく聞いて下さい。」ということでした。正子さんは2年生ですが、足にけがしているので遠足には行きません。正子さんはどこに集ったらよいか、放送を聞いてあげましょう。

「6年生は体育館に集まって下さい。5年生は朝礼台のところに集まって下さい。4年生と3年生と2年生は文化室に集まって下さい。1年生だけは教室に残って、お勉強をします。遠足に行かない人は職員室前に集まって下さい。」

|                | (3—1) | (3—3) |
|----------------|-------|-------|
| 1 教室.....      | 0%    | 0%    |
| *② 職員室の前.....  | 79.2% | 97.9% |
| 3 文化室.....     | 20.8% | 2.1%  |
| 4 朝礼台のところ..... | 0%    | 0%    |

\* 正答を示す。以下、正答の選択枝はこのように、番号を○印でかこんで示す。

参考までに低学年の正答率は、2—1 57.1%、2—3 64.6%であった。したがって、このような問題で、どこに集まったらよいか、という目的に即した情報の聞きとり能力は3年にはいって完成する。

### 問題3 速達

「お母さん、田舎のおじさんから速達の手紙が来たのは土曜日の……なんじ頃来たの？ 朝来たの？」

一郎さんは夕御飯をたべているとき、こう聞きました。皆さんも、お母さんたちの話から、土曜日の速達の手紙はなんじ頃来たのか、朝でしたでしょうか、

よく聞いてあげて下さい。

お母さんがいいました。「そうね、たかし、お母さんはね、午後の2時から  
のP. T. A.の会に出なくてはいけなかったのね、その前にね、デパートに買  
いものに行ったんですよ。デパートで買いものをして帰ってきたら、たかしが、  
手紙、田舎のおじさんからですよって言ったから、たしかあれは土曜日でし  
たね。」次にお父さんがいいました。「そうかね。お父さんが夕方、会社から帰  
って来たら、お母さんがP. T. A.の会のお話と手紙のお話をしていたね、土曜  
日に。だから速達の手紙がきたのは夕方じゃないかい？」たかし兄さんがいい  
ました。「お父さん、手紙が来たのは、お昼ですよ。僕、土曜日ね、学校が  
お昼までなんで、すぐ帰って来たら、郵便屋さんもいっしょに玄関について、  
やあ、坊ちゃん同じですねって笑い合ったんだもの。」またお父さんがいいまし  
た。「そうかね。たかし、田舎からくる手紙は、いつもはよく朝とか夕方ばかり  
に来てたんだがね。」

|       | (3—1) | (4—1) |
|-------|-------|-------|
| 1 朝   | 10.8% | 4.0%  |
| ② 昼   | 59.3% | 64.0% |
| 3 土曜日 | 21.7% | 20.0% |
| 4 夕方  | 8.3%  | 12.0% |

この問題は3人の話し手の内容から、どの話し手のいったことが、より事実  
に即し、正確かを判断させ、解決を求める問題である。選択枝3の土曜日に比  
較的反応が多いのは、土曜日の何時頃、朝だったか？ という設問の聞きとり  
につまずいているためである。

#### 問題4 天気予報

あしたは、うんどうかいです。あしたの天気気が気になります。ラジオの天気  
予報を聞きましょう。

中央気象台の発表によれば、今晩は北後南の風、小雨がふるでしょう。この  
雨はあすの朝までには止み、あしたの日中は一日中くもりがち、東京地方\*は  
時々、日もさすことでしょう。気温は30°でかなり暑いでしょう。あしたの晩  
はおそくなって、また、雨となるでしょう。

|                                  | (3—1) | (3—2) | (4—1) |
|----------------------------------|-------|-------|-------|
| ① くもりがちだが、うんどうかいはで<br>きる。        | 70.8% | 75.5% | 80.0% |
| 2 くもひとつない、にほんばれで、う<br>んどうかいはできる。 | 23.8% | 14.3% | 8.0%  |

- 3 とちゅうから 雨が ふるが うんど  
うかいができる。…………… 4.3%          6.1%          4.0%
- 4 こさめがふって、うんどうかいは  
むずかしい。…………… 2.2%          4.1%          8.0%

参考までに、低学年での正答率は、2—1 42.9 %であった。このような問題での、運動会はできるか、という目的に即した情報の聞きとり能力は、4年にはいってほしい完成する。選択枝2に比較的、反応があつまるのは、〈あしたの日中は一日中くもりがち、東京地方は時々、日もさすことでしょう〉の聞きとりが、十分でないためである。くもりがちだけれども、東京地方は時々、日がさす、と理解せずに、他の地方はくもりがちだが、東京地方は快晴だと判断する。

\*東京地方は東京の実験学校だけに使った。他の地域の協力学校では、それをその地域の名前（たとえば、大阪地方、山陰地方など）に変えた。

#### 問題5 電話の誘い

ある日、次郎君のおねえさんから電話がかかってきました。秋男君が電話に出ました。お母さんがそばで聞いていて、「次郎さんのおねえさんからね、なんていってきたの」とたずねました。次郎さんのおねえさんはなんのために電話をかけてきたのでしょうか、その電話をいいますからきいてください。

「もしもし、あっ、秋男さんね、こんにちわ、私、まさ子です」

（こんにちわ、僕、秋男です）

「秋男さん、きょうの日曜日、なにしてるの、お勉強？うちの次郎はお父さんと映画に行ったの」

（そうですか）

「あのね、菊の花がきれいに咲いたわよ、この春あなたのおじいさんがいらっしゃって、うちの次郎と二人でお庭にうえた菊なの、とってもきれいよ、赤や白や黄色もあってね、家中みんな喜んでます。そして、おじいさんはやっぱり菊を作る名人だねって話しています」

（よかったですね、ぼくのうちの菊も咲きましたよ）

「そう、よかったわね、次郎はね、秋男さんの家の菊を見に行きたい、行きたいって言ってるのよ。その前にね、こんどの11月3日に、あなたのおじいさん私のうちの菊を見にいらっしゃいませんか。父がそう言っていましたから、父もその日は久しぶりの休日在家におり、お会いするのをたのしみにしています。どう、こられるかしら」

（おじいさん、今かぜで休んでます）

「あっ、それはいけませんね。ひどく悪い？お大事になって言ってくださいね。もしなおったら、ぜひいらっしゃるように言ってください」

(はい、行けるかどうか聞いてみます)

「じゃ、さようなら、おかあさんによろしく」

(はい、さようなら)

なんのために次郎君のおねえさんは電話をかけてよこしたのでしょうか。

|                                  | (3-2) | (3-3) | (4-3) |
|----------------------------------|-------|-------|-------|
| 1 おじいさんのびょうきのおみまい……………           | 0%    | 0%    | 0%    |
| 2 じろうくんがあきおくんのうちに菊を見にくるおしらせ…………… | 54%   | 12.7% | 14.9% |
| ③ おじいさんに菊を見においでくださいというおさそい……………  | 44%   | 87.2% | 83.0% |
| 4 じろうくんはえいがにいったというおしらせ……………      | 2%    | 0%    | 2.1%  |

この問題では、話し手の意図がどこにあるかわかって、話の中心話題とそうでない話題との区別ができなくてはならない。この結果に関するかぎり、それがわかるのは3年の末である。なお、電話の経験の有無がかなり結果に影響するという報告がいくつかの協力学校からあった。

#### 問題6 帽子忘れ

まさる君は、月曜日、学校に行こうとして帽子がないのに気がつきました。おかあさんにたずねました。「どこかへ忘れたんでしょう。よく考えなさい。それとも、きのうのお昼、かぶって外へ出たから、置き忘れてきたかも知れないわね。」と、おっしゃいました。おにいさんも考えてくれました。みなさんもこれから話をよく聞いて、一緒に考えてください。

おにいさんが、いいました。「まさるときのう、学校の前の道で会った。その時はまさるは帽子をかぶっていなかったよ。」そこでまさる君がいいました。「おにいさんと会ったのは学校へ野球を見に行く途中だったんだよ。きのうはね、昼ごはんをたべてから、おかあさん帽子って言って、帽子をかぶって、山田君の家に行って本を読んだの。それから野球を見に学校へ行ったの。それから帰って来て裏のあき地で、キャッチボールをしたんだよ。」そこまで聞いていたおにいさんは、「わかった。」といいました。

(1) おにいさんは、どこに帽子があると気づきましたか。

|             | (3-2) | (4-2) |
|-------------|-------|-------|
| 1 自分の家…………… | 0%    | 0%    |

- |          |       |       |
|----------|-------|-------|
| ② 山田君のうち | 84.0% | 95.6% |
| 3 学校     | 6.0%  | 0%    |
| 4 あき地    | 10.0% | 4.4%  |
- (2) まさる君がきのう行ったところの順に番号をつけましょう。
- |            |   |       |       |
|------------|---|-------|-------|
| (1) 山田君のうち | } | 78.0% | 66.7% |
| (2) 学校     |   |       |       |
| (3) あき地    |   |       |       |
- (3) まさる君がしたこと順に番号をつけましょう。
- |              |   |       |       |
|--------------|---|-------|-------|
| (1) 本を読む     | } | 78.0% | 75.6% |
| (2) 野球をする    |   |       |       |
| (3) キャッチ・ボール |   |       |       |

まさる君という主人公が「どこで」「なにを」という行動的变化を文脈にそって理解することは、中学年の児童には容易である。

問題7 猫と魚

お休みの時間です。正君が数人のお友達の中に入って、さかんにおしゃべりをしています。猫のお話のようです。ひとりの男の子が、正君に聞きました。「正君、その時、君はどこにいたの。」また別の女の子も聞きました。「それ、どこのうちの猫、その猫、お魚どうしたの？」さあ、これからよく聞いてください。

正君の猫の話はこうなのです。

「日曜日、ぼくひとりですばんをしていたんだ。あまり寒いので日当りのよい縁側で本を見ていたのね。そしたらコトッと音がした。泥棒かなと思ったらこわくなっちゃった。それで台所の方を見ると、泥棒じゃなくて、猫だったの。猫が台所の調理台に上って、魚をくわえるところだったの。縁側のガラス障子から見えたからね、ぼくが、シッと行って手をあげたら、その猫、ぼくの方をて、ちょっと首をすくめてゆうゆうと出ていったよ。魚はたべられなかったよ。だけとおかあさんはきたながって、捨てちゃった、その魚を。」正君の横から、別の女の子がいました。「私の家の猫、お行儀がとても悪い。平気できない足でざしきに上って来るのよ、犬の方が私、すき。」正君はまた、「隣りの家の猫はよく盗みに来るんだよ。本当にずうずうしいよ。ぼくも犬の方が好きだな。」

- |           |           |       |       |
|-----------|-----------|-------|-------|
|           |           | (3—2) | (4—2) |
| 正君は魚をおうとき | { 1 ざしき   | 4.0%  | 6.7%  |
|           | { 2 だいどころ | 28.0% | 15.4% |
|           | { ③ えんがわ  | 68.0% | 77.8% |

|      |   |                                        |       |       |
|------|---|----------------------------------------|-------|-------|
| その猫は | { | 1 正君のうちの猫.....                         | 2.0%  | 2.2%  |
|      |   | ② となりのうちの猫.....                        | 60.0% | 69.9% |
|      |   | 3 どこかわからないどろぼう猫.....                   | 38.0% | 28.7% |
| 魚は   | { | 1 猫がたべてしまったので、正君はいただけな<br>った.....      | 0%    | 0%    |
|      |   | 2 猫にたべられずすんだので、ただし君はおい<br>しくいただけた..... | 6.0%  | 2.2%  |
|      |   | ④ おかあさんが捨ててしまったので、正君はいた<br>だけなかった..... | 94.0% | 97.8% |

この問題は正君がどこにいたか、その猫はどこ猫かということよりも、魚がどうなったかという方が正答率が高い。話のすじからいってもその方が大事である。

問題8 ポート遊び

まさる君のクラスでは、きのうの日曜日にしたことをひとりずつ発表しています。まさる君の番になりました。まさる君はどこでなにをしたか、よく聞いてあげましょう。

ぼくは、きのう、松岡へ、にいさんのおともで、にいさんのシャツを買いに行きました。にいさんのシャツを買って帰る途中、にいさんが急に自転車のハンドルをまげたので「どこへ行くのだろう」と思って聞くと、「高田湖へ行くのだ」と教えてくれました。ぼくははじめて高田湖を見ました。たくさんの人が魚を釣っていました。ボートに乗っている人もありました。にいさんがボートを借りて来たので、ふたりで乗りました。練習をしたら、僕も少しこげるようになりました。一時間くらい乗ってから帰りました。

(3—2) (4—2)

|                     |       |       |
|---------------------|-------|-------|
| (1) まさる君は           |       |       |
| 1 釣をした.....         | 2.0%  | 0%    |
| ② ボートに乗った.....      | 96.0% | 97.8% |
| 3 じぶんのシャツを買った.....  | 2.0%  | 2.2%  |
| (2) まさる君はたかだ湖で遊んでから |       |       |
| 1 シャツを買いにいった.....   | 10.0% | 2.2%  |
| 2 釣を見にいった.....      | 8.0%  | 6.6%  |
| ③ 家に帰った.....        | 82.0% | 91.1% |
| (3) まさる君はたかだ湖に行くことを |       |       |
| 1 はじめから知っていた.....   | 2.0%  | 2.2%  |
| ② 知らなかった.....       | 96.0% | 95.6% |

3 にいさんにまえからお願いしていた…………… 2.0% 2.2%

問題9 白という犬

のりさんはある日、クラスのお友だちに、家でかっている犬のお話をしました。皆さんは、あとでこの話を聞かなかった人にお話してあげられるようによく聞いてください。のりさんのお話はこうです。

私が2年生になった時、私の家では親戚の家からエスという、茶色の毛で、目がくりくりしたかわいい犬をもらってきました。ところが、去年の秋、私が学校に行っていたるすに、その犬は犬とりのおじさんに連れて行かれました。そのとき、私は悲しくて泣けてしょうがありませんでした。だけど、エスはともかわいい子犬をうんでいました。うんだのは3匹でしたが、そのうち2匹は死んでしまいました。私は親犬のいないたった一匹の子犬が淋しいだろうと思いました。また、お乳がのめない子犬をかわいそうに思って、その日から毎日牛乳をその子犬に飲ませてやりました。子犬はおいしそうにベチャベチャ音を立てながら牛乳のみました。その飲み方のかわいかったことは今でも覚えています。その小さかった犬はすくすくと大きくなり、今では連れて行かれたエスよりも大きくなりました。私はこの犬に「白」という名前をつけています。白い毛で目はとてもエスに似てきれいです。エスをなくした私はエスよりもかわいがっています。

- |                            |       |       |
|----------------------------|-------|-------|
|                            | (3—2) | (4—2) |
| (1) 白という犬は                 |       |       |
| ① エスの子ども……………              | 82.0% | 95.6% |
| 2 しんだ子犬の名前……………            | 18.0% | 4.4%  |
| 3 よそからもらってきた……………          | 0%    | 0%    |
| (2) エスという犬は                |       |       |
| ① 犬とりのおじさんに連れて行かれた……………    | 98.0% | 97.8% |
| 2 よそへあげた……………              | 0%    | 0%    |
| 3 しょうきでしんだ……………            | 2.0%  | 2.2%  |
| (3) 白とエスと似ているところは          |       |       |
| 1 からだの大きさが同じ……………          | 0%    | 6.6%  |
| ② 毛の色……………                 | 96.0% | 84.4% |
| 3 目……………                   | 4.0%  | 8.9%  |
| (4) 犬とりのおじさんがきたとき、今かっている白は |       |       |
| 1 にげた……………                 | 0%    | 0%    |
| 2 まだうまれなかった……………           | 74.0% | 91.1% |
| ③ 子犬だった……………               | 26.0% | 8.9%  |

以上、問題6, 7, 8, 9のような児童の生活記録的な話題では、その内容の時

間的・空間的推移関係を理解することは、中学年で完成する。

問題10 たなばた祭り

つぎのお話は3人の子どもが先生に質問したことについて、先生がまとめて話されたことです。3人の子どもは、それぞれ、なんといって質問したでしょうか。(みじかく書きましょう。)先生はこんなお話をなさいました。

きょうはたなばたまつりです。たなばたまつりというのはね。天の川の東の岸にいるひこ星と、西の岸にいるはたおり星が会おうのを祝いするお祭りなのですよ。

あまの川というのは、水のある川ではありませんよ。あのおちちのように、ぼうっと白く流れて見えるのは、たくさんの星がかたまって光るからなのです。それはそれは遠い所にある星だからあんなにぼんやり見えるのです。ひこ星は天の川の東に、はたおり星は西にいるというのですが、ひこ星は泳いでいくではありません。かささぎというとりがならんでつくった橋を渡っていくのです。

(3-2) (4-1)

- |                          |           |       |
|--------------------------|-----------|-------|
| 1 (たなばた祭りというのはどんなお祭りですか) | } ……33.5% | 47.0% |
| 2 (天の川というのは水のある川ですか)     |           |       |
| 3 (ひこ星は泳いでいくのですか)        |           |       |

この解答は自由解答法によった。客観法によれば、もっと正答率は高まるであろうが、話のくみだてを理解することは、中学年ではまだ十分でない。

問題11 ディズニー映画

「ディズニー映画」を見た人ある？作文をうまく書けばただでアメリカへ行かれるんだぞ。よしお君が新聞の広告を掲げていました。みんなで「なにになに、読んでよ」といいました。よしお君が読みました。

「ディズニー映画を見て」という作文、いよいよ明日しめきり、本社が全国の小・中学生から募集している「ディズニー映画を見て」の作文は、一番うまい作文を書いた人をアメリカに招くことが、たいそう人気をよんでおります。もう本社にたくさんの作品の山がきずかれています。しめきりはあす30日です。30日のけし印のあるものでもうけつきます。ひとりで直接本社に送っても、学校でまとめて送ってもいいのです。

どんな広告でしたか、正しいのに○印をつけましょう。

(3-3) (4-3)

- 1 「ディズニー映画」の中で一番ためになったことに

|                                                        |       |                  |
|--------------------------------------------------------|-------|------------------|
| ついでに感想文のぼしゅう……………                                      | 0%    | { 2.1%<br>4.2%   |
| 2 「ディズニー映画」はあすまでだから見おとさない<br>ようにというおしらせ……………           | 6.5%  | { 2.1%<br>8.5%   |
| ③ 「ディズニー映画を見て」という題で書いた作文の<br>ぼしゅう……………                 | 61.8% | { 53.2%<br>52.2% |
| 4 うまい作文を送ると「ディズニー映画」をアメリカ<br>に見せにつれていってくれるというおしらせ…………… | 31.6% | { 42.5%<br>33.9% |

3年から4年へと、正答率は高くなっていない。子どもは(3)の広告の主旨よりも、効果の方に反応する傾向が強いが、それは子どもの広告文にたいする態度のひとつの特徴かもしれない。

問題12 ラジオ・ニュース

ラジオからニュースがきこえてきました。「ことし最高です。」と放送していますが、どんなことでしょうか。よく聞いてください。

長いこと、よい天気がつづいた空もくずれ、27日、午後から東京はじめ、関東、中部地方などの表日本をおそった雪は28日朝までに、東京では10センチを越え、山梨県などの山地では30センチもつもりました。この雪のために東京都では交通事故がたくさんあって、28日はことし最高で、午後2時までに、死んだ人が3人、おもいけがにんが24人で、軽いけがの人が23人もありました。

|                                       |       |                  |
|---------------------------------------|-------|------------------|
|                                       | (3—3) | (4—3)            |
| 1 お天気が長くつづいたことはことし最高であった……………         | 2.1%  | { 8.5%<br>8.5%   |
| ② 28日の東京都の交通事故の数はことし最高であっ<br>た……………   | 57.4% | { 36.2%<br>53.2% |
| 3 28日、表日本をおそった雪はことし最高であっ<br>た……………    | 17.0% | { 8.5%<br>21.3%  |
| 4 東京で10センチも雪がつもったのはことし最高であっ<br>た…………… | 23.4% | { 46.7%<br>17.6% |

3年の成績と4年の成績とくらべて、正答率はむしろ4年の方が低い。文脈に即して、カギとなる語を理解することは容易でないことを示す。

問題13 子どもの新聞

子どもの新聞です。新潟県の南町の小学校のお友だちは、道が遠いので、学校に床屋さんを開きました。勉強がすんでから、6年生のお兄さんが、床屋さんに早変わりをして、バリカンでチョキン チョキンと髪の毛をかるのです。校長先生がかおそりをしてくださる時もあります。床屋さんになる6年生たちも、この頃はとても上手になり、「トラがりなどは、ぜったいにしません」とじまんしています。

つぎのお話。長野県の軽井沢町にある学校のお友だちは、こんどの三回目のマナスル登山隊のみなさんが元気で山の頂上にのぼれるようにと、かわいらしいマスコットのお人形を作って登山隊の人たちに送ることになりました。このマスコットの材料は皆でお金をためて買ったそうです。

終りに天気予報。このところ、暖かな天候がつづいて、きょうなどは4月の上旬頃の天候ですが、全国的に今晚から天気も急に下り坂になり、また寒さがきびしくなるでしょう。とくに、新潟県などの裏日本では大雪が降るでしょう。しかし、東京地方は、高気圧の影響で、気温も平年並で、晴れたり、曇ったりでしょう。

つぎの答のうちただしもののに○をつけましょう。

- |                                          | (3—3) | (4—3)            |
|------------------------------------------|-------|------------------|
| ① 長野県のお友だちはマナスル登山隊にお人形を送ることにした……………      | 44.7% | { 60.6%<br>55.3% |
| 2 新潟のある学校の6年生は卒業祝に校長先生からかおそってもらった……………   | 10.6% | { 8.5%<br>10.6%  |
| 3 東京地方は今晚あたりから小雪が降りだす……………               | 0%    | { 4.3%<br>0%     |
| 4 おうちが床屋をしているお兄さんたちが学校で床屋をひらいた……………      | 21.3% | { 10.6%<br>19.2% |
| 5 長野県のお友だちは登山隊がマナスルにぶじに上ったのでお人形を送った…………… | 23.3% | { 16.0%<br>14.9% |

このような情報で、これだけは正しいという選択枝を選びだすことができるためには、情報を詳細に聞きとることができなければならない。しかし詳細なことがらを正確に聞きとることは、読みとることにくらべてはるかに困難である。したがって、4年生になっても正答率はかならずしも高くない。

以上、問題11, 12, 13から、情報の要点やカギとなる語の理解、詳細な情報の聞きとりは、いずれも正答率は70%の域に達することができない。これらの問

題は、あの意味では、問題2, 3, 4など目的に即した情報の聞きとり能力の問題を、より複雑にしたものとみることができるから、むずかしい問題であると思われる。

問題14 白鳥

えり子さんは皆につぎのような話をしました、このお話の中で、おじいさんが出て来ますが、どんな人かよく聞いてください。

「えり子、えり子、早く来てごらん。白鳥よ」おかあさんがお堀端に立って呼びました、みると数羽の白鳥がおかあさんの方に泳いでくるのです、黒いお堀の水に泳ぐ白鳥はいっそう白く、すばらしい美しさをたたえていました。「このお堀端に白鳥を飼っているという話は聞かなかったわね」おかあさんはそう言って、じっと白鳥を見えています。えり子さんはたいへんかわいく思って、「いつまでも、このお堀にいてくれるといいのにな、そうしたらこのお堀がどんなに楽しくなるか、知れやしないわ」えり子さんがそう言った時、「そいつは無理だな、おじょうさん」としゃがれた低い声がしました。驚いてえり子さんが声のする方をみると、黒のオーバーを着たおじいさんが静かに立っていました。やはり白鳥の方を見たままです。「わたしの子どもの頃には、毎年春になると、シベリアへ帰る途中、たくさんの白鳥が数日このお堀に泳いでいたものですよ。それも長くて一週間か、十日位でしたね。ところがある年、いたずら者が鉄砲をうって白鳥をいじめたことがありますね。その次の年からは白鳥はここへ来なくなってしまった。わたしは子ども心に白鳥をうった男がにくらしくてしかたがなかった。それでも、この年になるまで、いつかは白鳥が来てくれると信じていましたよ」おじいさんはしばらくつかしそうに見ていましたがまた「あの頃の白鳥の孫か、またその孫の白鳥でしょうな。しかし、この白鳥は長くても十日もここにはいないでしょう、それまでの間、しずかに過ごさせてやりたいものですね」えり子さんもおかあさんも深くうなづきました。

(1) おじいさんは、なんのためにお堀にきていたのですか。

- |                                  | (3—3)                                                           | (4—2)                                                       |
|----------------------------------|-----------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------|
| 1 今いる白鳥は小さい時に見た白鳥の孫かどうか調べる…12.7% | $\left\{ \begin{array}{l} 8.5\% \\ 23.3\% \end{array} \right.$  |                                                             |
| 2 白鳥が子どもにいたずらされないように番をする……19.2%  |                                                                 |                                                             |
| ③ 白鳥がひじょうに好きでお堀でおよく白鳥を見る……51.0%  | $\left\{ \begin{array}{l} 80.9\% \\ 61.9\% \end{array} \right.$ |                                                             |
| 4 昔、白鳥にたずらをしたので、そのおわびをする……17.1%  |                                                                 |                                                             |
|                                  |                                                                 | $\left\{ \begin{array}{l} 4.2\% \\ 0\% \end{array} \right.$ |

(2) えり子さんが「白鳥がずっといつまでもいればいい」といった時、おじいさんは

どうして「無理ですな」といったのでしょうか。

- |                                              |                                                                 |
|----------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------|
| ① 白鳥はこのお堀には十日ぐらいしかいないならおし<br>にっている……………10.6% | $\left\{ \begin{array}{l} 38.3\% \\ 25.4\% \end{array} \right.$ |
| 2 白鳥は昔いたずらされたので人をこわがっている……………59.6%           |                                                                 |
| 3 じきに冬がきて氷がはって白鳥は泳げなくなる……………10.6%            | $\left\{ \begin{array}{l} 8.5\% \\ 14.8\% \end{array} \right.$  |
| 4 白鳥はまただれかにいたずらされるにきまっている……………19.2%          |                                                                 |

おじいさんがなぜ「無理ですな」といったのかという設問は、問題12と同様に、文脈に即して、その句を理解しなければならない。問題12と同様にやはり正答率が低いのは、読解にたいする聞きとりの特徴であり、さらに選択枝2に反応が高いという子どもの情緒的な反応に注意したい。

問題15 追想

国語の時間に、学級委員の杉田さんが前に出てお話をしました。どんなお話か、よく聞きましょう。

きのう、机の中をせいとんしていたら、古ぼけた一冊の本が出て来ました。その本は私が一年のとき使った教科書でした。それをみていると小さい時の思い出がうかんできました。その頃、私は朝、学校へ行く前にときどき家ですねました。本を読む時にも、はじめのうちには知らない字が多かったのですが、いつのまにか、早く読めるようになりました。絵を書いても、女の子か、チェリッや家ばかり書いていました。学芸会や運動会がくると、とびあがって喜んだものでしたが、大きくなると、あまり嬉しくなくなってきました。また、私はよくとなりのかおるさんに、字や読み方や百まで教えるのを教えてもらいました。かおるさんが、学校に入学するとき、私も学校へ行きたい、行きたいといってだだをこねたものです、こういう思い出が一冊の教科書を眺めているあいだに浮かんでくるのです。私はその本を大事にしまって、時どきは小さい時の思い出をしたいと思っています。おわり。

つぎのことで正しいのに○をつけましょう。

- |                                |                                                                 |                                                             |
|--------------------------------|-----------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------|
|                                | (3—3)                                                           | (4—3)                                                       |
| ① かおるさんは杉田さんより年がうえです……………38.3% | $\left\{ \begin{array}{l} 67.8\% \\ 60.9\% \end{array} \right.$ |                                                             |
| 2 杉田さんは今三年生です…………… 8.5%        |                                                                 | $\left\{ \begin{array}{l} 0\% \\ 4.3\% \end{array} \right.$ |
| ③ 杉田さんはきのうはたのしい一日でした……………17.0% | $\left\{ \begin{array}{l} 17.0\% \\ 28.3\% \end{array} \right.$ |                                                             |



問題17 さけとつばめ

私の家の近所にはいろいろなお店があります。八百屋さんがあります。魚屋さんがいます。パン屋さんもあります。このひとつひとつについて、思い出した事を書いて見ます。

私の前のうちが八百屋さんです。店が広くていろいろの物が店いっぱいに並んでいます。ここのおじさんも、おばさんも元気がいいので、野菜もみんな生き生きしているように見えます。私はよくお芋を買いに行きます。ですから、私が買いに行くと、すぐに「へーい、お芋ですか」とこちらで何も言わないのに聞きます。この店には、「お春さん」という優しいお姉さんが去年まで働いておりました。いつか、私がすいかを買って帰る途中で、手から落してわってしまいました。「お春さん」があとでそのことを知って、わざわざ、前より大きいのを届けてくれました。おかあさんが、お金を払おうとしましたが、どうしても受け取ってくれませんでした。

魚屋さんは八百さんの隣です。この村からは海が遠いのですが、いろいろな魚が店に選ばれて並んでいます。魚屋さんのおじさんは、ときどき魚のお話をしてくれます。かつお釣りや鰯とりの話をしてもらいました。魚はみな船で運ばれ、汽車で運ばれ、トラックで運ばれてくるのだそうです。魚のお話の中で面白かったのは、「さけ」というさかなでした。これは、川で卵からかえるのだそうですが、すこし大きくなると、海に出て行きます。海で3年か4年たって大きくなり、卵をうむ頃になると、川に上ってきます。その時、自分の生まれた川に間違いなく上ってくるのだそうです。川は何百となく、何千となく流れているのに、よく間違えないで上ってくるものだと感じました。「自分の生まれ故郷をなつかしがるのは人間だけではありませんよ」とおかあさんがおっしゃいました。

パン屋さんは、魚屋さんと道をへだてて向かい合っています。店には大きな茶色の犬がいつもすわっています。としは七つになるのだそうです。この犬はいつもパン屋のおじさんについて歩きます。おじさんが自転車に乗って走ると、その後から走って行きます。車をいっしょにひいている時もあります。風呂敷包みを口にくわえて、お使いに行く事もあります。この頃はパン屋の小さな子どもと遊んでいます。この家の軒先にはつばめの巣があります。今年もこの巣につばめが来て、子つばめを産みました。毎年この巣にもどってくるつばめは、同じつばめだということや、遠い遠い海のむこうから間違いなくこの巣にもどってくる事などを本で読んだ事があります。「さけ」と「つばめ」が似ていると思いました。

私の近所には、まだこのほかに、ラジオ屋さんや、肉屋さんもあります。今度またこのつづきを書くつもりです。私が大きくなった時、この村の様子ほど

うなっているでしょう。その頃、私はどこかへ行っているかも知れませんが、私も、自分が生まれたこの村がきつとなつかしくなるだろうと思います。

(1) このお話にはどんな題がよいでしょうか。

(4—3)

- 1 やさしいむらの人たち……………17.0%
- 2 さかなやさんとパンやさん……………10.6%
- ③ きんじょのおみせやさん……………68.1%
- 4 わたしのおつかい…………… 4.2%

(2) 「さけとつばめが似ていると思いました。」と書いてありますが、この子はどんなことが似ていると思ったのでしょうか

- 1 さけもつばめも、この子のきんじょのおみせにやっ  
てくる…………… 4.3%
- 2 さけもつばめも、たまごからうまれる…………… 8.5%
- 3 さけもつばめも、みなみのほうからやってくる…………… 4.3%
- ④ さけもつばめも、じぶんのうまれたところにもどっ  
てくる……………83.0%

(3) お話のおわりに「大きくなって、どこかへ行っているかもしれないが、私も村がなつかしくなるだろう」と書いてあります。この子はどんな気持で「私も」と書いたのでしょうか。

- 1 おはるさんのように、大きくなったらどこかへいっ  
ているかもしれない……………12.7%
- ② さけやつばめのように、うまれたこの村がなつかしく  
なるだろう……………74.5%
- 3 おかあさんのように、うまれた村をなつかしがらだ  
ろう…………… 8.5%
- 4 こんなにたのしい思い出は、もう二度とこないだろう… 4.3%

参考までに、低学年のときの正答率をみると、最初の設問<どんな題がよいか>では、2—3, 43.7%, つぎの設問<似ているところ>では、2—3, 8.3%, 最後の設問<私もという気持>では、2—3, 27.1%であった。低学年に比べて、中学年では、後のふたつの設問、要点、文脈の理解度がいちじるしく発達している。

#### 問題18 動物園

##### ○実施上の注意事項

れんしゅうをやり、場面設定の文をよくよんで子どもに状況を思いださせる。

それから<教示のための文>をよんでいく。アンダラインのところは一回くりか

えし読みをする。

○教示のための文の読みかた。

「ボクハ……………セイタカノッポノ〇〇〇、カナアミノ……………アルイテ イマシタ。くりかえします。セイタカノッポノ……………アルイテ イマシタ。さあ、〇〇〇はなんでしょう。答案へ書いてください、はい、ではそのつぎを読みます。トキドキ……………ナガイ〇〇〇カナアミノ……………ダシマス。くりかえします。トキドキ……………ダシマス。さあ、〇〇〇はなんでしょう。答案へ書いてください。」  
(以下同じ……………)

注意：〇〇〇は、文字数にかかわらず、マル マル マルと3度いう。

**れんしゅう** (次の文を読んでやって、子供に答えさせる。)

- 1 夏はあつい、冬は〇〇〇・この〇〇〇はどんなことばでしょう。
- 2 字をかくとき、手に力を入れすぎたので、〇〇〇しんが おれてしまいました。この〇〇〇は、なんということばでしょう。

答 1 さむい 2 えんびつの

こんどは、少し長いお話を聞いてから、テストをしてもらいますが、その前にあきら君がおとうさんと日曜日に動物園へ行ったお話をしてあげますから、よく聞いてください。

#### 問題設定の文

あきら君はね、日曜日におとうさんと、動物園へ行ったのです。何を見たかという、きりんとカンガルーとらくだです。

はじめに、きりんを見にいったのです。きりんはせいたかのっぽですね。かなあみの中で、のっし、のっしと歩いていたのです。ときどき、それを見ていたあきら君たちの方に近づいてきてね、首が長いでしょう、キリンは。その首をね、かなあみの上から出したりしたそうです。

次に、カンガルーを見ました、カンガルーは おなかに袋がありますが、その中に赤ちゃんを入れていたのです。小さい前足を上にあげて、長いあと足で、ピョンピョンと飛んだそうです。それを見ていたおとうさんが「カンガルーは はぼとびの選手みたいだ。」とおっしゃったそうです。

カンガルーの次には、らくだを見ました。らくだには こぶが二つありますね。それから、歩くとそのたびに足の裏がひろくなるのだそうです。このわけは、らくだが砂原を歩くのにちょうど都合がいいように、足の裏がひろがるのだそうです。

あきら君たちはいろいろなものを面白く、夢中になって見ていくと、いつのまにか動物園の門のところにてしまいました。もう終りです。あきら君は動物園のおじさんに、「どうもありがとう。」とあいさつして、帰って来たのです。

今のは、あきら君が動物園に行ったお話でした。このあとであきら君は作文を書きました。書き終って読み返す時、傍にあったコップの水が紙の上にこぼれて、と

ころどころ見えなくなっていました。先生があきら君の作文を読んでいって、そのよく見えなくなったところを〇〇〇と言いますから、それがどんなことばか、わかった人は、答の欄に書いてください。

ぼくたちは、にちよう日におとうさんと 動物園へ いきました。きりんとカンガルーと らくだをみました。

せいたかのっぼの 1〇〇〇 かなあみの中で、のっしのっしとあるいていました。 | ときどき近よってきて、長い 2〇〇〇 かなあみの上から出します。 |

カンガルーは、あかちゃんを おなかの ふくろにいていました。小さい 3〇〇〇あげて、長いあとあしでピョン ピョンとびます。 | おとうさんが笑いながら「カンガルーは、はぼとびの 4〇〇〇 おっしゃいました。」

らくだは、せなかに大きなこぶがふたつあります。あるくたびに、あしの 5〇〇〇 ひろがります。 | これは、すなはらあるくのにつごうよくできているのだそうです。

だんだん あるいて いくと、 6〇〇〇 どうぶつえんのものところへ出しました。 | ぼくは どうぶつえんの おじさんに「どうもありがとう。」とあいさつ 7〇〇〇 かえました。 |

4—1

|              |      |           |      |
|--------------|------|-----------|------|
| 1. きりんは      | 58.0 | 5. うらが    | 64.0 |
| 2. くびを       | 82.0 | 6. いつのまにか | 24.0 |
| 3. まえあしを     | 34.0 | 7. して     | 76.0 |
| 4. せんしゅだね。」と | 36.0 |           |      |

このテスト法はいくつかの文節はあらかじめ消去して、それを児童に聞いて埋めさせる、というタイラー (Taylor) のクローズ法にヒントをえて試みたものである。全部で78文節あり、11文節目を規則的に消去した。したがって、上のような埋めるべき文節で非常にやさしい場合と、そうでない場合とがでてくる。

とくに、クローズ法をとりあげたのは、聞きとりテスト形式におけるクローズ法の位置づけを考えたためである。各問題の正答率および後のテスト間の相関係数から判断して、クローズ法は

- 1) 生活文の場合には、クローズ法は有効である。
- 2) 詳細なことがらを聞く力、文脈に即した聞きとり能力を測定するときに、クローズ法は有効である。

- 3) しかし、大意、要点、意図を聞きとる力を測定するためには、クローズ法は無理がある。

問題19 おまわりさん

きょう、池田君の学校へ、けいさつの人に来て、お話をしてくれました。けいさつの方は、にこにこしながら、「みなさん今日は。こうしてみなさんの顔を見てみると、わたしもみなさんのお友だちになれそうです。おまわりさんはこわいという人もありますが、けっしてこわくありません。」といって、次のようなお話をしてくれました。このけいさつの方は、しげる君たちにどういうつもりで次のお話をしたのでしょうか。よく考えてください。

このごろは、皆さんの間にずいぶん野球がはやっていますね。つい三日前に実際にあったことです。名前は仮の名前にしておきましょう。

すすむ君という6年生の子、ひろし君という5年生の子、それに、こうじ君という5年生の子と、その三人が学校から帰ってから、大通りで野球をしていました。こうじ君の投げたボールがはずれて、ころころと道のまん中へころがり出しました。ひろし君とこうじ君はボールを追いかけてとび出しました。そのとき、キーキーっとものすごい音がしました。走って来たタクシーが急にとまったのです。ひろし君と、こうじ君はおどろいてタクシーのすぐそばに倒れてしまいました。タクシーのおじさんは、「あぶなかった。もう少しで、ひいてしまうところだった。」といって、急いで二人をだきおこしました。下じきになったと思った二人は、手を少しけがしただけでした。近所の人が大勢かけて来ました。ひろし君も、こうじ君も、わあっと泣き出しました。「よかった、よかった。もう少しで大変なことになるところだった。」と集った人たちはいいました。そばにいたすすむ君は、胸をどきどきさせてぶるぶるふるえていました。だれかが「はやく家へ連れて行って、クスリをつけた方がいい」といったので、すすむ君は泣いているひろし君と、こうじ君を自分のうちに連れて帰りました。そうしておかあさんにお話して、すぐ薬をつけてもらいました。

すすむ君のおかげで、ひろし君とこうじ君は、じきになおりました。

みなさん。ひろし君とこうじ君は、大けがでなくてよかったですね。もし、タクシーにひかれていたら、どうでしょう。」

おまわりさんの話はまだ続きます。けれども聞いていた人達は、もうこれでおまわりさんが何を言おうとしているのか、わかってきました。

では、このおまわりさんは、いったいなにを言おうとしているのでしょうか。二つだけ○をつけてください。

(4—1)

- 1 けいさつの方は、けっしてこわい人ではありません…………… 4.0%  
2 こうじ君とひろし君のけががなおったのは、すすむ君のおかげです…12.0%

- 3 自動車がスピードをだしていたら、けいさつにとどけてください……… 2.0%
- 4 子どもが大通りでやきゅうをしていて、自動車にひかれそうになった…18.0%
- ⑤ 子どもが大通りであそんでいると危険まけんです………70.0%
- 6 つい二、三日前にじっさいにあった話をします……… 2.0%
- ⑦ 大通りのあそびにはきをつけな<sup>い</sup>といけ<sup>ない</sup>………58.0%
- 8 友だちがけがをした時には、すぐにたすけなければいけ<sup>ない</sup>………30.0%

選択枝5は話の表面的な意図であり、選択枝7は話の内面的な意図というか、中心となる意図である。前者より後者の方が正答率が低いのはそのためである。選択枝8に比較的、反応が多いのは、子どもたちがこうした話を聞いたときには、個人的な道徳判断をすること、また、強いられているという生活意識、または生活経験の反映であろう。

#### 問題 20. 事故の解説

みなさんもおぞんじのように、先日、静岡県の十国峠の近くで、広島県三次（みよし）市の高校二年生男女五十三名をのせた観光バスが、道路から五十メートルの下へころがり落ちて、二十一人の重軽傷者を出したという事件が起りました。

修学旅行のシーズンになると、きまってこの種の事件が起ります。こんどは幸いに、いつかの相模湖や参宮線の事故のときとちがって、死んだひとがなかったことはなによりでしたが、メチャメチャになった車内の腰かけや天井には、血がべっとりついて、調べた警官が身ぶるいしたといえますから、相当の重傷者もあったことでしょう。全く気の毒だと思えます。

□ それにしても、この種の事故がどうしてくり返して起るのでしょうか。こんどの事件の原因は、現場はなだらかな坂の直線コースであるから、車に故障があったか、運転手が居眠り運転をしていたか、どちらかしか考えられぬと県の警察本部ではいっているそうです。いずれにしても、バス会社の責任というほかはありません。もし運転手の居眠りであるとしたら、私はその過失を責めるより前に、その過労に同情したい気持です。熱海から箱根へ行くあの道路は、みなさんがたのなかでも修学旅行で知っている人が多いと思いますが、いまのシーズンでは、毎日ひっきりなしにたくさんの観光バスが走っています。それほどお客が多いわけで、そのために運転手はどうしても、はたらきすぎにならざるをえないのです。その結果いろいろの無理が出てきて、それが積り積って、大きな事故を起すのだと思えます。

労働過重といえば、修学旅行そのものが相当の強行軍ではないでしょうか。私はときどき、往来や駅などで、修学旅行の団に出会うことがあります。みんなが気の毒なほど疲れきっているのを見て、若い元気なひとたちが、これ

ほど疲労するのだから、よほどの無理があるのではないかと考えないでいられません。

できるだけ費用を切りつめて、短い期間に、できるだけたくさんの方を見物したいと思う修学旅行団と、一方、できるだけバスをフルに動かしてお金をもうけようとしているバス会社と、両方の無理が重なって、いろいろの事故が起るのではないのでしょうか。その対策は、一日も早く日本が豊かな国になり、みんながあまりがつがつしないようになる以外にはないと思います。そして、それは決して不可能なことではないでしょう。

(1) この話はどんな事故をとりあげて書いていますか。

(4—3)

|   |       |         |       |
|---|-------|---------|-------|
| 1 | 高校三年生 | }が      | 33.9% |
| ② | 高校二年生 |         | 29.8% |
| 3 | 高校一年生 |         | 4.3%  |
| 4 | 中学三年生 |         | 31.8% |
| 1 | さがみ湖  | }でおきた事故 | 12.7% |
| 2 | 参宮線   |         | 0%    |
| 3 | みよし坂  |         | 19.1% |
| ④ | 十国峠   |         | 63.1% |

(2) 警察本部では、この事故の責任はどこにあるとみたのですか。

|   |      |       |   |     |       |
|---|------|-------|---|-----|-------|
| ① | バス会社 | 42.5% | 3 | 運転手 | 48.8% |
| 2 | 生徒   | 6.4%  | 4 | 学校  | 2.1%  |

(3) これを書いた人はこの事故のどういう原因を重くみようとしているか。

|   |                          |       |
|---|--------------------------|-------|
| 1 | 会社が故障のでも車を使っていた          | 4.3%  |
| ② | 運転手がかかれすぎている             | 74.5% |
| 3 | 生徒がかかれすぎている              | 2.1%  |
| 4 | 道がまがりくねっているうえに、けわしい坂があった | 19.2% |

(4) これを書いた人は私たちに何を言おうとしているか。

|   |                       |       |
|---|-----------------------|-------|
| 1 | 車にのるときは、さわがないようにしましょう | 27.6% |
| ② | 無理なことをするのがいちばんいけない    | 61.7% |
| 3 | 車にのって旅行することはやめよう      | 2.1%  |
| 4 | けがをした生徒がかわいそうだ        | 8.5%  |

この問題は、ある中学生新聞にのった、さる評論家の随筆文（あるいは低次の論説文）である。

各設問における正答率の上では、「何年生」という詳細なことがらを聞きとることが一番むずかしいとでている。そうして、書き手の意図や文章の要点

聞きとる設問では、正答率が高くでている。このことは、聞きとる場合は、詳細なことがらより、意図や要点を聞きとることはやさしいともいえるし、読字力の低抗がなければ、中学年の子どもでも、中学生向きの文章を結構、理解できるのではないかと、ともいえる。

問題21 火事 他

1) テスターが文章を読む速さを3段階にわけ、各段階での聞きとり理解点の結果から、速度の理解に与える影響を調べる。

2) 問題は 15題

- A. 外国の報道記事 5題
- B. 読速度テスト用の児童の生活文 5題
- C. 聞きかたテスト用の文(手紙文を聞く, 発表を聞く, 放送を聞くなど) 5題

ここでは、読む速さの3段階における外国の報道記事3題を例示し、結果をあげるにとどめる。

1-A  
火事 (全文を36秒で読む)

カナダのフリン・フロンという町で、このほど消防署が火事になりました。原因は、ベアールという消防手が、タバコをすいながら宿直室に寝たため、気がついたときには、夜具もベットもみんなもえだし、はいていたゴムグツはとけかかっていたそうです。さいわい大火事にはなりませんでした。他人の火事の報告を書きなれているベアールさんも、この日ばかりは、いやな思いで報告書をだしました。

(1) ベアールさんは、なんでいやな思いで報告書をだしたか。

(4-2)

- 1 毎日報告書をかいているから..... 3.9%
  - ② 自分のふしまつを、自分で報告書にかかなければいけないから、.....47.1%
  - 3 宿直の人が、タバコをすいながらねたのを、見つけられなかったから...31.4%
  - 4 火事になるはずのない消防署が火事になったから.....17.6%
- (2) ベアールさんは
- ① 消防手.....78.4%
  - 2 こづかいさん..... 2.1%
  - 3 おまわりさん..... 7.8%
  - 4 けいびいん.....11.7%

2-A  
スイス (全文を35秒で読む)

スイスには、多くの国から観光客がやって来ます。ところで、観光客たちは、みんなカメラを持って来ますが、急ぎの旅行者たちはどこをとってよいのかわかりません。こうした不便をなくすために、来年の夏から写真をとる人のための地図が出来るそうです。この地図には、同じ場所でもどこからとればよい写真が出来るか、とるのに一番よい時間はいつかということが一目でわかるようになっており、また撮影の許可があるものには、それを許可する人のところの電話番号までのっているそうです。

(1) この地図をみれば、

(4—2)

- ① 上手な写真がとれるようになる……………49.0%
- 2 写真をとらなくてもすむようになる……………11.8%
- 3 写真をとりに行って道に迷わないようになる……………19.6%
- 4 こことここは、とってはいけない、ということがわかる……………19.6%

(2) この地図はだれのために作ったのか。

- 1 スイスの少年たち……………9.8%
- ② スイスに来る外国のお客さん……………60.8%
- 3 山登りをする人たち……………17.6%
- 4 外国へ旅行するスイスの人たち……………11.8%

3—A  
学 位

(全文を28秒で読む)

アメリカのある女の人が、このほどミミズの研究で学位を取りましたが、その研究によると、ミミズは見かけによらず頭がよいということです。この人はT型のガラスの管の中にミミズをはわせ、まちがった出口に出たミミズには、ばつとしてサンド・ペーパーの上をはわせたり、弱い電気にふれさせたりしました。一方、よい出口に出たものは、虫をやってほめることにしました。そして、これをくりかえしたところ、ミミズたちは40回ぐらいやっているうちに、ほとんどが出口をまちがえないようになりました。

(1) この実験でどういうことがわかったか。

(4—2)

- 1 ミミズは思ったより長生きする……………0%
- ② ミミズは思ったより頭がよい……………76.5%
- 3 電気にふれさせたり、サンド・ペーパーをやるとよるこぶ……………7.8%
- 4 だんだんやっていると、40匹ぐらいはまちがえなくなる……………15.7%

(2) ミミズはどこに入れられたか。

- 1 どろで作ったあな…………… 7.8%
- 2 ビニールのふくら…………… 3.8%
- ③ ガラスの管……………88.3%
- 4 木の箱…………… 0%

以上、読む速度を3段階に区別して聞かせたが、速度が理解の障害になっているという結果はえられなかった。正答率の高低は、速さより、ここでは問題、設問の難易に影響している。速さが理解に影響を与えるのは、時間をかけて考えなければならぬ論説文、論理的な文章の場合であると思われる。

### III. 聞く能力と他の言語能力・要因との関係

#### 1. 聞く能力相互の相関

聞く能力として、中学年では10の下位能力をたてた。そこで、各下位能力相互のテストの結果から、重点的につぎの4つの能力の相関係数をもとめた。

話のくみたて・要点文脈の理解・話の欠陥・目的に即した聞きとりにおける相関はつぎのとおりである。

| 能力 | 1<br>話のくみたて | 2<br>要点・文脈 | 3<br>話の欠陥 | 4<br>目的に即した情報の聞きとり |
|----|-------------|------------|-----------|--------------------|
| 1  | —           | 0.39       | 0.49      | 0.36               |
| 2  | 0.39        | —          | 0.24      | 0.04               |
| 3  | 0.49        | 0.24       | —         | 0.02               |
| 4  | 0.36        | 0.04       | 0.02      | —                  |

参考までに、低学年における、1. 音声の聞きわけ 2. 目的に応じた情報の聞きとり、3. 要点・文脈 4. 思考化の速度 5. 話の欠陥の各テストの相関はつぎのとおりである。

| 能力 | 1<br>音声の聞きわけ | 2<br>目的に応じた情報の聞きとり | 3<br>要点・文脈 | 4<br>聞きとり数 | 5<br>話の欠陥指示 |
|----|--------------|--------------------|------------|------------|-------------|
| 1  | —            | 0.32               | 0.19       | 0.35       | 0.44        |
| 2  | 0.32         | —                  | 0.18       | 0.26       | 0.28        |
| 3  | 0.19         | 0.18               | —          | 0.28       | 0.25        |
| 4  | 0.35         | 0.26               | 0.28       | —          | 0.39        |
| 5  | 0.44         | 0.28               | 0.25       | 0.39       | —           |

ここで、相関係数を求めた能力の間では、中学年でいちばん相関の高いもの

は、話のくみたてを理解する能力と話の欠陥を指適する能力との相関であり、ほとんど相関のないものは目的に即した情報の聞きとり能力と要点文脈の理解および話の欠陥を指適する能力の相関である。このことは低学年での相関を求めたものにもそうである。

なお、4年1学期におこなったクローズ法によるテスト結果と、(1)話す速度に応じて聞きとる能力、(2)要点・意図を理解する能力、および(3)話の内容の時間的・空間的關係を聞きとる能力との相関係数は、それぞれ (1) 0.09 (2) 0.05 (3) 0.29 であった。この相関係数はクローズ法が時間・空間關係など文脈・詳細なことがらの理解の測定に、要点・意図の理解の測定より有効であることを示すものである。

## 2. 聞く能力と他の言語能力との相関

聞く能力と他の言語能力との相関をもとめた。聞く能力との相関の対象になった言語能力は、つぎの9能力である。

漢字読字力、漢字書字力、読書速度、黙読理解力、音読技能、語彙、文法作文、話す力

| 能力<br>学期 | 漢字<br>読字力 | 漢字<br>書字力 | 読書<br>速度 | 黙読<br>理解力 | 音読<br>技能 | 語彙   | 文法   | 作文   | 話す力   |
|----------|-----------|-----------|----------|-----------|----------|------|------|------|-------|
| 3—1      | /         | /         | /        | /         | /        | /    | /    | /    | /     |
| 3—2      | 0.18      | 0.14      | 0.16     | 0.15      | /        | 0.29 | 0.04 | 0.33 | 0.12  |
| 3—3      | 0.18      | 0.19      | 0.06     | 0.14      | /        | 0.22 | /    | 0.11 | -0.17 |
| 4—1      | 0.22      | 0.40      | 0.44     | 0.39      | /        | 0.45 | 0.56 | 0.46 | 0.32  |
| 4—2      | /         | -0.05     | 0.31     | 0.21      | 0.11     | 0.25 | 0.38 | 0.13 | 0.32  |
| 4—3      | 0.12      | 0.17      | 0.17     | 0.06      | /        | 0.26 | 0.31 | 0.22 | 0.19  |

この表でえた相関係数に関するかぎりでは、聞く能力と相関の高い言語能力は、つぎのふたつの能力である。

文法能力                      語彙力

参考までに、低学年における聞く能力と語彙力・文法力および話す力との相関はつぎのとおりである。

聞く力と語彙力              0.49

聞く力と文法力 0.36

” と話す力 0.28

黙読理解力と聞く力との相関は、中学年では、0.06～0.39であり、かならずしも高いとはいえない。しかし、同じ問題について、読解力テストをし、また聞きとりテストをした結果では、つぎのように、比較的高い相関係数をえた。

(2—3) 0.44

(3—1) 0.52

### 3. 聞く能力とそれを規定する要因との相関

言語能力を規定する要因として想定したものは、知能の要因、身体の要因、環境の要因、社会性の要因、情緒性の要因、家庭における読書の要因、言語生活の要因などである。それらの要因と聞く能力との相関をみたものがつぎの相関表である。

| 要因<br>学期 | 知能   | 身体    | 環境   | 社会性   | 読書   |
|----------|------|-------|------|-------|------|
| 4—2      | 0.52 | 0.02  | 0.13 | 0.25  | 0.17 |
| 4—3      | 0.45 | -0.06 | 0.23 | -0.05 | 0.13 |

参考までに、低学年における聞く能力とそれを規定する要因との相関をみた結果ではつぎのようになっており、低学年・中学年ともに知能との相関がいちばん高い。

| 要因<br>学期 | 知能   | 身体    | 環境   | 社会性  | 言語生活 |
|----------|------|-------|------|------|------|
| 2—2      | 0.54 | -0.08 | 0.13 | 0.28 | 0.20 |

知能と他の各言語能力との相関をみると、中学年では、たとえば黙読理解能力とは、0.11～0.43、読書速度0.45～0.71、音読技能0.36～0.70、作文力0.26～0.73となっている。したがって、中学年では知能と言語能力との相関が高いといわれている場合に、聞く力も例外ではない。

#### IV. 中学年の聞く能力の特徴

1. 話（情報）の詳細なことがらを聞きとることは、具体的な問題によって、正答率にかなりな変化がでるが、傾向としては、話の要点からはずれたことがらであればあるほど、詳細なことがらの聞きとりはむずかしい。読みにおける

詳細なことがらの読みとりにくらべて、聞きとりでは再認ができないというコミュニケーションの条件によるためである。詳細なことがらの中でも、登場人物の性別を聞く、名前を聞く、日付を正しく聞きとることはことにむずかしい。

(問題1. 20)

2. 話の内容の時間的・空間的關係推移の把握は、詳細なことがらを聞きとる能力に含まれるが、児童の生活記録的な話題ならば容易に聞きとることができる。それは、いつ、どこでということが話の内容の中心的な位置を占めているために、詳細なことがらでも聞きとりやすい。(問題6. 7. 8. 9)

3. 目的に即して、課せられた話の必要なことがらだけを聞きとる能力は中学年で完成する。あらかじめ、ある話から、聞きとるべきことを指示しておけば、中学年では、それに適応した態度で、内容を取捨選択しながら聞くことができる。(問題2. 4. 5) しかし、話の欠陥を指適したり(問題1)、ラジオ・ニュースなどの論理的な問題解決を求める情報の聞きとりになると、中学年ではまだ完成しない。(問題11. 12. 13)

4. 話の要点を聞きとる能力は中学年で完成する。それにしても、物語の要点の把握より、情報の要点の把握の方がむずかしい。(問題16)

5. 文脈に即して、カギとなる語の意味を聞きとることは、中学年では困難である。(問題14. 17) ここにも、先の1で述べたと同様な聞きとるコミュニケーションのもつ悪い条件が働く。

6. 話し手の意図や話の主題を聞きとることは、中学年でかなり発達している。(問題17. 19. 20)

7. 中学年では、話や情報を伝える速度は聞きとりに影響しない。(問題21) この調査のかぎりでは、正答率の変化は、むしろ内容の難易による。

8. 聞く能力の下位能力には相関の高いものや、ほとんど相関のないものがある。たとえば、話をくみたてる能力と話の欠陥を指摘する能力とは相関が高いが、話をくみたてる能力と目的に即した情報の聞きとり能力とは相関がない。

9. 聞く能力は文法能力や語彙力と相関が深い。

10. 聞く能力は知能との相関がいちばん高い。

(村石)

# 新聞の文章の漢字使用に関する 実験的研究

## A. 調査の目的と前年度までの経過

新聞の文章を現状よりもさらに読みやすくするためには、用字・用語・文章構造・記事内容の扱い方など、いろいろの点で改善を必要とすると考えられるが、われわれは、昭和31年度に、まず漢字を中心とする用字の問題を取りあげた。すなわち、漢字の使用をどのようにしたらよいか。その改善にあたっては、どのような問題があるか。一般に読みやすさ・わかりやすさと用字との関係はどうか。これらのことを実験的に調べてみようとしたのである。

以上の目的のもとに、主として次のような実験的研究を行なった。

1. 実際の新聞記事から抜きだした文章を書きかえたものを編集して、実験新聞を作り、中学生・高校生計100名を対象として、読みにくさ・わかりにくさに関する集団調査をした。
2. 原文や書きかえ文など17種の実験文章を、中学生・高校生・大学生各5名ずつの被験者に読ませて、その眼球運動を、オフサルモグラフ（読書生理の観察実験機械）で記録し、読みやすさという観点から、分析研究した。これらの結果については、年報8に詳しく報告した。

前に述べたとおり、われわれは、用字、とくに漢字使用に関する問題を中心にすえたが、読みやすさ・わかりやすさの問題は、用字の面からだけ見るわけにはいかない。用語や文章構造などもからみあっている。それらを含めて得られた結果を、年報8に報告したのであるが、なお、残された問題点について今年度、分析研究を継続した。

## B. 担当者

この研究は、言語効果研究室に属する次の3名の所員の共同研究であるが、以下に報告するDについては、林が、Eについては、渡辺が主として分担した。

永野 賢          林 四郎          渡辺友左

なお、筆生1名が所員を助けた。

### C. 今後の見とおし

昭和31・32年度の継続研究により、主として表記の面から見た新聞文章の読みやすさ・わかりやすさの問題点が、いくつか明らかにされた。これらの成果を含めて、33年度からは、新聞文章に関する総合的な研究を進めていくことを予定している。 (永野)

### D. 実験新聞に用いられた漢字表記語への抵抗の調査

#### 1. 調査のあらまし

昭和31年度に、われわれが作成した実験新聞60枚の中から10枚を選んで一部の中学生と高校生とについて、読みにくい場所の調査をした。その抵抗が語・表記の種類別や書きかえの有無やによって、どう分布しているかを検討した。そのあらまきは、年報8に報告してある。

実験新聞の漢字は、当用漢字別表にかかげられた881字（以下、教育漢字という）に限られた（不注意その他によって多少例外はあったが）。本年度は、この範囲内で漢字への抵抗が諸要因によってどのように変化するかを見た。

そこで、用いられた漢字表記語のすべてについて、次の角度から検討を加えた。

#### 1) その語の構造はどうなっていたか

ここで語とは、書きことば研究室で総合雑誌の語彙調査の際、語認定の基準に用いた $\beta$ 単位をさす。 $\beta$ は、ほぼ、語の最小単位であるから、 $\beta$ にすれば、複合語はバラバラに分割される。だから、ここでいう語の構造とは、その語の内部構造ということではなく、その語の他との関係のことである。語が独立で使われたか、複合して使われたか、複合したなら、1回か2回か3回以上かの区別をした。たとえば、「政府は／4日、／定例／政府／会議に／引きつづき／……」という文において、「政府」という語は、はじめは独立で使われているが、2度目には「定例—政府—会議」という。3箇の $\beta$ から成る複合語の中

で使われている。だから、「政府」という語から見れば、これは、他の2語と複合している。すなわち、2回複合している。「定例」も「会議」も、同じく2回複合の形式で使われている。ここでいう何回複合とは、すべてこういう意味である。

## 2) 語の種類は何に属するか

種類別は、漢語、和語、混種語の3種とする。副次的は、固有名詞か数詞・助数詞かも調べた。地名・人名はみな片かな書きとしたのであるが、国名のあるものや団体名・会社名などの漢字表記語があり、その他、固有名詞の中に、「トウキョウ都」「コニシ・ツトム君」のような固有名に付随する称呼を含めた。数詞はアラビア数字で書いたのだが、「1億3千万」のような書き方をしたので、一部は漢数字が残った。

## 3) もとのままか、かきかえか

実験新聞を作るについては、別表外の漢字を消すために、語の言いかえ、書きかえを行った。そのやり方については、年報8にくわしく述べたので略するが、本年度の調査の対象になった「かきかえ」の語とは、別表外の漢字を用いて表記されていた語を、教育漢字を使って言いかえた結果できた語をいう。

(年報8, 148ページ②「書きかえの実例」の①⑤⑨⑩に当る)

## 4) 被験者からどれだけの抵抗を受けたか

被験者は、早稲田中学校2年生50名(男子)と、東京都立九段高等学校2年生50名(男女各25)とで計100名であるが、100名全部が同一の新聞を読んだのではない。1人は3枚ずつ読み、同一の新聞を読んだ被験者は中・高各15名、計30名である。この30名のうち、①だれも抵抗を示さなかった、②3名以下が抵抗を示した、③4名以上が抵抗を示した——以上3種に区別した。

以上4項目について、それぞれの区分を施し、2項目ずつの関係をみた。

次に漢字表記語の異語表を作った。

次に、語を文字別に配当し、文字別に抵抗の度合を調べた。

## 2. 調査の結果

### (1) 全部で延べ何語あったか

漢字表記語は延べ5,038語あった。この中には「殺キン」「引きあげ」のよ

うなまぜ書きを含んでいる。なお、助詞・助動詞だけを除き、全語数は 9,248 であるから、語全体の半分以上が漢字で表記されていたわけである。

(2) 漢字表記語の種類と構造との関係は怎么样了か

第 1 表

| 構造<br>性質 | 独立          | 複合          |            |            | 計                |
|----------|-------------|-------------|------------|------------|------------------|
|          |             | 1回          | 2回         | 3回以上       |                  |
| 漢語       | 1315(34.61) | 1257(33.08) | 727(19.13) | 501(13.18) | 3800(100)[75.43] |
| 和語       | 977(80.15)  | 155(12.72)  | 66(5.41)   | 21(1.72)   | 1219(100)[24.20] |
| 混種語      | 13(68.42)   | 3(15.79)    | 3(15.79)   | 0(0)       | 19(100)[3.77]    |
| 計        | 2305(45.75) | 1415(28.09) | 796(15.80) | 522(10.36) | 5038(100)[100]   |

第 1 表のとおりで、漢語がいちばん多く、四分の三強を占めている。混種語はごくわずかで、ほとんど問題とするにたりない。

独立性（裏返していえば複合性）の点では、漢語と和語との間に、著しい性質の違いがある。漢語は複合性が強く、「独立」「1回複合」「2回以上複合」がそれぞれ三分の一ずつを占めるのに対し、和語は、8割以上が独立で用いられている。

(3) 漢字表記語が受けた抵抗は、その語の種類別によって違いがあったか。

第 2 表

| 性質<br>しるし | 0           | 1~3         | 4以上       | 計         |
|-----------|-------------|-------------|-----------|-----------|
| 漢語        | 2726(71.74) | 874(23.0)   | 200(5.26) | 3800(100) |
| 和語        | 1000(82.03) | 175(14.36)  | 44(3.61)  | 1219(100) |
| 混種語       | 12(63.16)   | 4(21.05)    | 3(15.79)  | 19(100)   |
| 計         | 3738(74.20) | 1053(20.90) | 247(4.90) | 5038(100) |

第 2 表のとおりで、漢語中抵抗を受けなかったのが約 72% であるのに対し、和語では、それが 82% である。同じく教育漢字で語を記しても、漢語よりも和語のほうが、やや抵抗が少ないかに見えるが、はっきりしたことはいえない。

あわせて、固有名詞と数詞・助数詞に使われた漢字がどういう抵抗を受けたかを見ると第 3 表のようになっている。

助数詞は読みやすく固有名詞は読みにくいように見えるが、これは、漢字そ

第3表

| しるし  | 0          | 1~3        | 4以上      | 計        |
|------|------------|------------|----------|----------|
| 固有名詞 | 271(64.52) | 117(27.86) | 32(7.62) | 420(100) |
| 助数詞  | 360(91.37) | 32(8.12)   | 2(0.51)  | 394(100) |

のもの問題ではなくて、固有名詞の前に書かれた片かな、数詞・助数詞の前に書かれたアラビア数字の問題である。固有名詞を片かなで書くのはきらわれ、数をアラビア数字で書くことはきらわれなかった現象の延長がここにあらわれたものであろう。

(4) 漢字表記語が受けた抵抗は、その語の構造別によって違いがあったか。

第4表

| 構造 | しるし  | 0           | 1~3         | 4以上       | 計         |
|----|------|-------------|-------------|-----------|-----------|
| 独立 |      | 1888(81.91) | 347(15.05)  | 70(3.04)  | 2305(100) |
| 複合 | 1回   | 998(70.53)  | 315(22.26)  | 102(7.21) | 1415(100) |
|    | 2回   | 507(63.69)  | 241(30.28)  | 48(6.03)  | 796(100)  |
|    | 3回以上 | 345(66.09)  | 150(28.74)  | 27(5.17)  | 522(100)  |
| 計  |      | 3738(74.20) | 1053(20.90) | 247(4.90) | 5038(100) |

第4表のとおりである。独立で用いられた語の約82%は抵抗を受けていないが、それが、1回複合の語では70.5%、2回複合の語では63.7%、3回以上複合の語では66.1%と、概して減少の傾向が見える。このことから直ちに複合性という要因を抽象して、複合が語を読みにくくすると結論することはできないが、語がいろいろに複合する現象の中に、雑多な要素が盛りこまれて、結局語の読みにくさが、ましてくるらしいという見当はつけてもいいだろう。つまり複合性即読みにくさではないが、複合性が、語の読みにくさを育てる温床になるのではないかということである。

そうして、最初に見たように、複合は漢語に特有な現象であるから、漢語と複合性の問題が、読みにくさの上から考えなければならぬ問題になってくる。

(5) 漢字表記語が受けた抵抗は、その語がもとのままの語かかきかえでできた語かの区別によって違いがあったか。

第5表のとおりである。5,038の漢字表記語の95.7%に当たる4,823語は

第5表

| しるし   | 0           | 1~3         | 4以上       | 計         |
|-------|-------------|-------------|-----------|-----------|
| もとのまま | 3582(74.27) | 1001(20.75) | 240(4.98) | 4823(100) |
| かきかえ  | 156(72.56)  | 52(24.19)   | 7(3.26)   | 215(100)  |
| 計     | 3738(74.20) | 1053(20.90) | 247(4.90) | 5038(100) |

もとのままのもので、かきかえは4.3%の215語にすぎない。ところが、それが受けた抵抗の度合による分布を見ると、もとのままもかきかえも、全く似ている。だから、同じ教育漢字のワクの中で、もとのままもかきかえも、全く混然となっているわけである。年報8で、153ページの第3表、155ページの第4表から推論して、155ページに「同じ教育漢字で書かれた語でも、もとの記事に使われていたままのものには、まだ、読みにくいものがあるが、われわれが書きかえたものは、大部分が読みやすくなっている。」と書いたのは誤りであった。

(6) 漢字表記語5,038は何語の異なり語から成っていたか。異なり語についての考究

異なり語数は1,844であった。同じ語でも、置かれた場所によって抵抗の受け方は違っている。異なり語として、各1語を選ぶに際しては、抵抗をもっとも多く受けたものを選んだ。これを語の種類と受けた抵抗の度合とによって分けると、第6表ようになる。

第6表

| 性質  | しるし | 0           | 1~3        | 4以上        | 計                |
|-----|-----|-------------|------------|------------|------------------|
| 漢語  |     | 699(51.97)  | 484(35.99) | 162(12.04) | 1345(100)[72.94] |
| 和語  |     | 322(66.39)  | 121(24.95) | 42(8.66)   | 485(100)[26.30]  |
| 混種語 |     | 7(50.0)     | 4(28.57)   | 3(21.43)   | 14(100)[0.76]    |
| 計   |     | 1028(55.75) | 609(33.03) | 207(11.23) | 1844(100)[100]   |

どの種類の語においても、抵抗のなかった語の占める比率は、延べ語数の場合よりずっと減少しており、抵抗の多かった語ほど、その全語中に占める比率が増している。ということは、抵抗の少なかった語ほど使用頻度が高いという傾向があったことである。逆にいえば、使用頻度の高い語ほど、抵抗が少ない

傾向があったということであるから、ここに、語の基本度の問題が出てくる。

(7) 文字別の難易度

漢字を制限して使うということは、むずかしい漢字を使わないことによってむずかしい語をなくそうとする考えにもとづいている。教育漢字のワクは、本来漢字制限のワクではないが、われわれは、かりに、これを制限のワクに転用して、実験新聞を作ったわけである。この考えをもっと進めれば、教育漢字の中にも難易度の段階によるいくつかのワクづけが考えられてくる。われわれは、ここで、そういうワクを作ろうとは考えなかったし、見出そうとも考えなかった。が、ともかく、このごく小さい調査の範囲内でも、漢字表記語への抵抗の度を一応文字別に考察しておく必要があると考えたので、ある方法によって、文字別の抵抗度を算出した。その方法はこうである。

例えば、「安」という字は「不安」1回、「安い」2回、「安全」3回、「公安」1回、「安易」1回、計8回使われた。そのうち「不安」「安い」「安全」は、どの場合でも抵抗を受けなかった。「公安」は3人以下の抵抗を受け、「安易」は4人以上の抵抗を受けた。いま、語の違いを無視して、回数だけを問題にすると、8回使われたうち、6回は無抵抗であり、1回が3人以下の抵抗、1回が4人以上の抵抗を受けたことになる。そこで、「無抵抗」1回につき0点、「3人以下の抵抗」1回につき0.5点、「4人以上の抵抗」1回につき1点を与え、その合計を、使われた総度数で割り、100をかけて百分比化する。すると、「安」の場合は

$$\frac{0 \times 6 + 0.5 \times 1 + 1 \times 1}{8} \times 100 = 18.75$$

となる。この数値をもって、一応、文字別の抵抗度の指数とした。このような算出法は、分母の数が小さい場合に非常な不安定を生ずるので、決して適当なものではなかったが、今はかりにこれによった。

使われた漢字は、全部で713字であったが、これを上のようにして算出した抵抗度によって区分すると、次のような分布を示した。

| 抵抗度 | 0%  | 50%未満 | 50% | 50%を超え<br>100%未満 | 100% |     |
|-----|-----|-------|-----|------------------|------|-----|
| 文字数 | 184 | 452   | 49  | 15               | 13   | 713 |

0%、50%、100%というきりのいい所に比較的密度が高いのは、点数の与え方からきた当然の結果である。

この調査は、なにぶんにも被験者の数が少なく、読まれた語数も少ないので、一つ一つの文字の抵抗度を示す数値には、あまり意味がない。したがって、ここに資料を記述することはしないことにする。この方法をさらに拡大し、精密化すれば、文字別難易度の指数を得る見通しがあることを述べるにとどめておく。

(林四郎)

## E. 眼球運動の記録の分析研究

### 1. 問題の設定

読書行動という人間の生理—心理的な行動を、単に眼球による文字の知覚という生理的次元にだけ限って見た場合、眼球は、通常、文章を構成している文字群を一字一字知覚していくのではなく、常に何字かの文字群を同時に知覚していくものと考えられる。すなわち、人間の眼球は、文字を知覚するのではなく、文字群を知覚するのである。なぜなら、オフサルモグラフによるこれまでの眼球運動の記録では、眼球の停留・凝視の数は、その文章の文字数よりも常に少なかったからである。

読書行動における人間の眼球は、知覚の心理学における「ゲンタルトの法則」に従って、この何字かから成る文字群を、常に何らかのまとまりがあるものに体制づけ、意味づけて知覚しようとする。すなわち、語・文節または連文節のような言語上の意味的・文法的統一体として体制づけ、知覚しようとする。この点は、人間の知覚における「ゲンタルトの法則」を認める限り、あらためて実験によって検証する必要はないものとする。

したがって、ある被験者が、ある文章を読んだ際の眼球運動の停留・凝視の数が他の文章を読んだ場合のそれよりも、その文章の語数・文節数に比して著しく多かったということは、彼がこの場合、上述のような体制づけ(意味づけ)に著しく困難を感じていること、すなわち、その文章が彼にとって何らかの読みの上における抵抗を感じさせているものと推測できるわけである。同様に停留・凝視の数が少ない時は、逆の推測が可能なのである。文章の読みや

すさ・わかりやすさの問題を、このようにしてわれわれは、もっぱら眼球運動の記録に結びつけて考えようとしたのである。

## 2. 実施計画と実施経過

### (1) マイクロリーダーによる記録フィルム of 拡大作業

われわれは、1956年11月15日から1957年1月18日まで、だいたい10日おきに前後7回にわたって、15名の被験者に実験文章を読ませ、オフサルモグラフでその際の眼球運動を記録した。(註)

そのうち原文と書きかえ文との比較のために使用した次の4種の実験文章をとりあげ、まずその際の眼球運動を記録したフィルム部合延べ60人分を、作業の精確さを期するためにマイクロリーダーにかけ、別紙に拡大複写する作業を行なった。

4つの実験文章を次に掲げる。すべて横組み、5号活字、28字詰の体裁をとっている。書きかえは、実験新聞の場合と同じ原則に従った。

#### ○〔原文〕日本とインドに文化センターを建設

宗教、文化の交流を通じて日本とインド両国の親善関係をさらに深めようと、そのよりどころとなる両国の文化センターをお互の国に建設する計画が親善友好団体、宗教団体の間で進められている。この計画は来る八月東京で開かれる宗教世界会議へのインド代表の出席下交渉のため同会議発起人下中 弥三郎氏（平凡社社長、日印友の会会長）がインドに渡ったさい、カルカッタの印日友好協会会長カリダス・ナグ博士（カルカッタ大学教授）から提案されたものである。

(1 a) (註) ——略称「日印文化センター（原文）」——

#### ○〔書きかえ文〕日本とインドに文化センターを建設

宗教、文化の交流を通じて日本とインド両国の親善関係をさらに深めようと、そのよりどころとなる両国の文化センターをおたがいの国に建設する計画が親善友好団体、宗教団体の間で進められている。この計画は、きたる8月トウキョウで開かれる宗教世界会議へのインド代表の出席を前もってコウショウするため、同会議発起人シモナカ・ヤサブロウ氏（ヘイボン社

---

(註) 被験者の内訳は、大学生5名（教育大3，慶応大2，いずれも心理学専攻）高校生5名（東京都立九段高校2年生）中学生5名（私立早稲田中学2年生）である。

長、日印友の会会長)がインドにわたったさい、カルカッタの  
日印友好協会会長カリダス・ナグ博士(カルカッタ大学教授)  
から提案されたものである。

(2 a) ——略称「日印文化センター(書きかえ文)」——

○〔原文〕新映画「新・平家物語」(大映)の迫力

日本映画も、遂に、ここまで豪華な作品を生み出すまでにな  
った。永田雅一を中心に大映製作スタッフがイーストマン天然  
色の研究を続けて来た成果である。

特に、群衆撮影の迫力は注目される。冒頭の野外市の壮観と  
か、平家一族が戦いから疲れ果てて帰って来るところ、叡山の  
備兵たちの示威行進など、これまでの日本映画にはなかったも  
のだ。

(2 b) ——略称「新映画(原文)」——

○〔書きかえ文〕

新エイガ「新・平家物語」(ダイエイ)のハクリョク

日本エイガも、ついに、ここまでゴウカナ作品を生み出すま  
でになった。ナガタ・マサイチを中心に、ダイエイ製作スタッ  
フがイーストマン天然色の研究を続けてきた成果である。

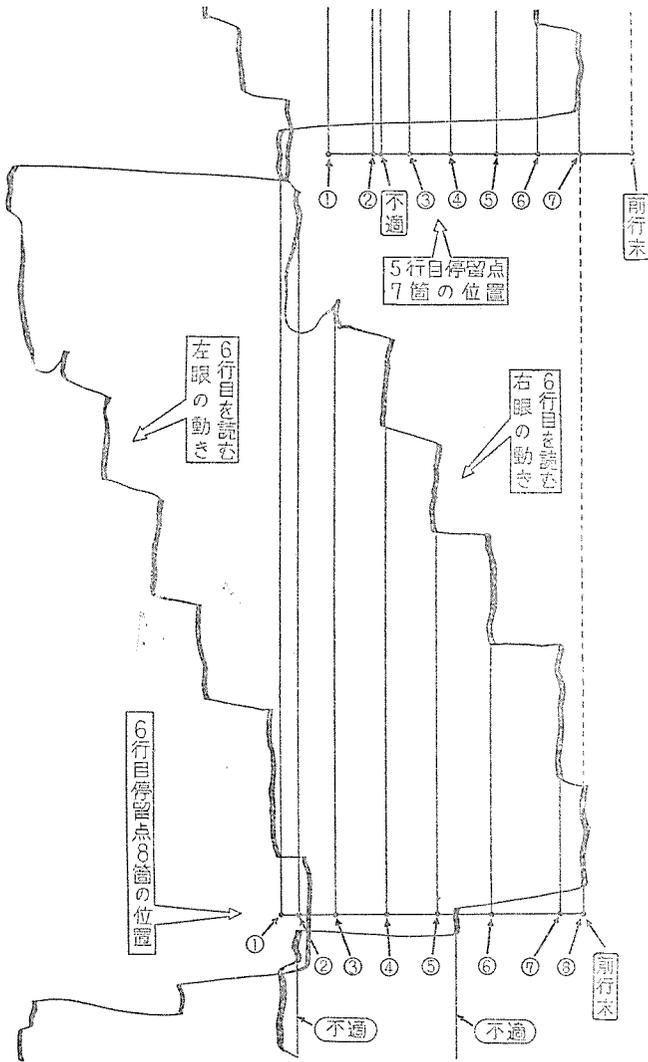
特に、群衆サツエイのハクリョクは注目される。最初の野外  
市のすばらしいながめとか、平家一族が戦いからつかれ果てて  
帰って来るところ、エイ山のソウ兵たちのデモ行進など、これ  
までの日本エイガにはなかったものだ。ミゾグチ演出は、これ  
らの群衆を突にうまく処理している。

(1 b) ——略称「新映画(書きかえ文)」——

なお、記録フィルムを拡大複写したもののうちから一例をあげておく。被験  
者は、高校生、実験文章1 aの5行の最後、6行全部、7行の最初の部分を読  
んだ際のもの。不適は不適応凝視のこと。

(2) 実験文章の読みやすさ・わかりやすさの比較

さて、この拡大複写された資料をもとにして、われわれは、前述したような  
考えのもとに、実験文章各行一語あたりの平均所要停留数を求め、それを基礎  
にしておのおの実験文章の各行相互の間における読みやすさ・わかりやすさ  
の相対的な比較を試み、さらにそれが原文と書きかえ文との場合で、どのよう  
に変化、相違しているかをさぐろうと試みた。この場合、語の認定は、一応国  
研報告「現代語の総合雑誌の用語」における〈 $\beta$ 単位〉の原則に従った。なお一



語が二つの行にまたがって表記されている場合は、おのおのを0.5語とした。また、実験文章の最初と最後の行は、分析・調査の資料としては、その信頼性を欠いているものと考えられるので、これらはすべて以下分析調査の範囲外におくことにした。

### 3. 結果

以上の調査の結果を次に述べる。まず4種の実験文章において被験者が各行一語を平均何停留で知覚し得たか。それを一覧表にしたのが、第1表、第2表である。おのおの各行の上段の数値は実数、下段の数字は、平均停留数の少ない順による順位づけを示す。

〔第1表〕

| 実験文章<br>被験者 | 1a 日印文化センター(原文) |             |             |             |             |           |             |             | 2a 日印文化センター(書きかえ文) |             |             |             |             |             |             |           |  |
|-------------|-----------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-----------|-------------|-------------|--------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-----------|--|
|             | 2               | 3           | 4           | 5           | 6           | 7         | 8           |             | 2                  | 3           | 4           | 5           | 6           | 7           | 8           | 9         |  |
| 01          | 0.84<br>2       | 1.18<br>6   | 0.87<br>4   | 0.82<br>1   | 0.89<br>5   | 0.86<br>3 | 1.47<br>7   |             | 0.84<br>1          | 1.06<br>3.5 | 1.08<br>5   | 1.06<br>3.5 | 1.00<br>2   | 1.27<br>6   | 2.00<br>8   | 1.37<br>7 |  |
| 02          |                 |             |             |             |             |           |             |             |                    |             |             |             |             |             |             |           |  |
| 03          |                 | 0.94<br>6   | 0.78<br>1   | 0.82<br>3   | 0.81<br>2   | 0.86<br>5 | 0.84<br>4   |             | 0.84<br>1          | 1.73<br>8   | 1.08<br>5   | 1.18<br>6   | 1.90<br>2   | 1.36<br>7   | 1.06<br>4   | 1.05<br>3 |  |
| 04          | 0.53<br>2       | 0.82<br>6.5 | 0.78<br>5   | 0.82<br>6.5 | 0.44<br>1   | 0.67<br>4 | 0.63<br>3   | 1.05<br>4   | 1.20<br>7          | 1.00<br>3   | 1.29<br>8   | 1.10<br>6   | 0.73<br>2   | 1.06<br>5   | 0.53<br>1   |           |  |
| 05          | 1.37<br>2       | 1.29<br>1   | 1.39<br>3   | 1.55<br>4   | 1.78<br>6   | 1.62<br>5 | 2.42<br>7   | 1.26<br>3   | 1.33<br>4          | 1.17<br>2   | 1.41<br>5.5 | 1.60<br>8   | 1.45<br>7   | 1.41<br>5.5 | 1.16<br>1   |           |  |
| 06          | 0.74<br>4.5     | 0.82<br>7   | 0.61<br>2   | 0.64<br>3   | 0.59<br>1   | 0.76<br>6 | 0.74<br>4.5 | 0.95<br>7   | 1.20<br>8          | 0.75<br>2   | 0.94<br>6   | 0.80<br>3   | 0.73<br>1   | 0.82<br>4   | 0.84<br>5   |           |  |
| 07          | 0.42<br>1       | 0.47<br>2   | 0.52<br>3.5 | 0.64<br>6   | 0.52<br>3.5 | 0.67<br>7 | 0.63<br>5   |             |                    | 0.67<br>4   | 0.59<br>1   | 0.60<br>2   | 0.64<br>3   | 0.82<br>5   | 0.95<br>6   |           |  |
| 08          | 0.95<br>1       | 1.06<br>3   | 1.30<br>6   | 1.09<br>4   | 1.26<br>5   | 1.05<br>2 | 1.58<br>7   | 1.05<br>3.5 | 1.20<br>8          | 0.83<br>1   | 1.06<br>5   | 1.00<br>2   | 1.09<br>6   | 1.18<br>7   | 1.05<br>3.5 |           |  |
| 09          | 0.95<br>4       | 1.29<br>7   | 0.96<br>5   | 0.82<br>3   | 0.74<br>1   | 0.76<br>2 | 1.16<br>6   | 0.74<br>2   | 0.93<br>5          | 0.67<br>1   | 0.82<br>3.5 | 1.00<br>8   | 0.82<br>3.5 | 0.94<br>6   | 0.95<br>7   |           |  |
| 10          | 0.95<br>1       | 1.65<br>6   | 1.48<br>5   | 1.18<br>2   | 1.19<br>3   | 1.33<br>4 | 2.00<br>7   | 0.84<br>1   | 1.06<br>2          | 1.08<br>3   | 1.18<br>5.5 | 1.10<br>4   | 1.18<br>5   | 1.29<br>5   | 1.37<br>8   |           |  |
| 11          |                 |             | 1.48<br>3   | 1.09<br>1   | 1.33<br>2   | 1.62<br>5 | 1.58<br>4   | 1.37<br>2   | 1.73<br>7          | 1.25<br>1   | 1.53<br>3.5 | 1.60<br>6   | 1.55<br>5   | 1.53<br>3.5 | 1.79<br>8   |           |  |
| 12          | 0.74<br>1       | 1.06<br>5   | 0.96<br>3   | 1.00<br>4   | 1.11<br>6   | 1.14<br>7 | 0.95<br>2   | 1.05<br>2   | 1.46<br>8          | 1.08<br>3   | 1.29<br>6   | 1.10<br>4   | 1.00<br>1   | 1.18<br>5   | 1.37<br>7   |           |  |
| 13          | 0.74<br>1       | 1.41<br>6   | 1.04<br>2.5 | 1.18<br>5   | 1.04<br>2.5 | 1.14<br>4 | 1.89<br>7   | 1.05<br>3   | 1.60<br>8          | 1.08<br>4   | 1.41<br>6   | 1.10<br>5   | 1.00<br>2   | 1.53<br>7   | 0.53<br>1   |           |  |
| 14          | 1.05<br>7       | 0.94<br>6   | 0.70<br>3   | 0.55<br>1   | 0.67<br>2   | 0.86<br>5 | 0.84<br>4   | 0.74<br>3.5 | 0.80<br>5          | 0.58<br>1   | 0.82<br>6.5 | 0.70<br>2   | 0.91<br>8   | 0.82<br>6.5 | 0.74<br>3.5 |           |  |
| 15          | 1.37<br>5       | 1.41<br>6   | 1.13<br>3   | 1.09<br>2   | 1.04<br>1   | 1.33<br>4 | 1.47<br>7   | 0.84<br>2   | 1.33<br>7          | 1.00<br>4   | 1.18<br>6   | 1.40<br>8   | 0.64<br>1   | 0.94<br>3   | 1.16<br>5   |           |  |

いま、各被験者ごとに第1位、2位に順位づけられた行(すなわち最も読みやすいと推定される行)に○印、それに次ぐ行に●印を、最下位から数えて第

[第2表]

| 実験文章<br>行<br>被験者 | 1b 新映画 (書きかえ文) |             |           |             |             |           |             | 2b 新映画 (原文) |             |             |             |             |             |  |
|------------------|----------------|-------------|-----------|-------------|-------------|-----------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|--|
|                  | 2              | 3           | 4         | 5           | 6           | 7         | 8           | 2           | 3           | 4           | 5           | 6           | 7           |  |
| 01               | 1.29<br>6.5    | 1.29<br>6.5 | 0.94<br>3 | 1.13<br>4   | 1.14<br>5   | 0.70<br>1 | 0.88<br>2   | 0.84<br>1   | 1.06<br>5.5 | 1.00<br>3   | 1.05<br>4   | 1.06<br>5.5 | 0.86<br>2   |  |
| 02               |                |             |           |             |             |           |             |             |             |             |             |             |             |  |
| 03               | 0.82<br>1      | 0.86<br>2   | 0.94<br>4 | 1.38<br>7   | 1.29<br>6   | 0.90<br>3 | 1.00<br>5   | 0.84<br>2   | 1.06<br>6   | 1.00<br>5   | 0.95<br>4   | 0.94<br>3   | 0.76<br>1   |  |
| 04               | 0.71<br>4      | 1.14<br>7   | 0.47<br>1 | 0.88<br>6   | 0.86<br>5   | 0.70<br>3 | 0.50<br>2   | 1.05<br>4.5 | 1.06<br>6   | 0.50<br>1   | 1.05<br>4.5 | 0.71<br>3   | 0.67<br>2   |  |
| 05               | 1.18<br>1      | 2.29<br>7   | 1.41<br>3 | 1.63<br>4.5 | 2.00<br>6   | 1.40<br>2 | 1.63<br>4.5 | 1.37<br>2   | 1.41<br>3   | 1.33<br>1   | 1.58<br>6   | 1.53<br>5   | 1.52<br>4   |  |
| 06               | 0.47<br>1      | 0.71<br>4   | 0.59<br>2 | 0.88<br>6   | 1.00<br>7   | 0.70<br>3 | 0.75<br>5   | 0.74<br>2   | 0.94<br>4   | 0.83<br>3   | 1.05<br>5   | 1.29<br>6   | 0.57<br>1   |  |
| 07               | 0.47<br>1      | 0.57<br>2   | 0.59<br>3 | 0.63<br>5.5 | 1.00<br>7   | 0.60<br>4 | 0.63<br>5.5 | 0.42<br>1   | 0.59<br>4   | 0.50<br>2   | 0.74<br>6   | 0.71<br>5   | 0.57<br>3   |  |
| 08               | 1.18<br>6      | 1.00<br>3.5 | 0.82<br>1 | 1.13<br>5   | 1.29<br>7   | 0.90<br>2 | 1.00<br>3.5 | 0.84<br>3   | 0.94<br>4.5 | 0.67<br>1.5 | 0.95<br>6   | 0.94<br>4.5 | 0.67<br>1.5 |  |
| 09               | 0.82<br>3      | 1.00<br>5.5 | 0.71<br>1 | 1.00<br>5.5 | 1.29<br>7   | 0.80<br>2 | 0.88<br>4   | 0.74<br>2   | 1.18<br>6   | 0.67<br>1   | 0.95<br>5   | 0.82<br>4   | 0.76<br>3   |  |
| 10               | 1.06<br>1      | 1.71<br>7   | 1.53<br>5 | 1.38<br>4   | 1.57<br>6   | 1.30<br>3 | 1.13<br>2   | 0.63<br>1   | 1.41<br>6   | 1.00<br>3   | 1.16<br>4   | 1.29<br>5   | 0.95<br>2   |  |
| 11               | 1.06<br>2      | 1.71<br>6.5 | 1.18<br>5 | 1.13<br>3.5 | 1.71<br>6.5 | 1.00<br>1 | 1.13<br>3.5 | 1.26<br>2   | 1.65<br>5.5 | 1.17<br>1   | 1.37<br>3   | 1.65<br>5.5 | 1.43<br>4   |  |
| 12               | 0.94<br>1      | 1.29<br>4.5 | 1.06<br>2 | 1.75<br>7   | 1.29<br>4.5 | 1.10<br>3 | 1.38<br>6   | 1.05<br>3   | 1.06<br>5   | 1.00<br>1   | 1.05<br>3   | 1.41<br>6   | 1.05<br>3   |  |
| 13               | 0.94<br>1      | 1.43<br>4   | 1.18<br>2 | 1.50<br>5   | 2.57<br>7   | 1.40<br>3 | 1.63<br>6   | 0.95<br>1   | 1.29<br>4   | 1.17<br>3   | 1.47<br>5   | 1.53<br>6   | 1.14<br>2   |  |
| 14               | 0.94<br>4      | 1.14<br>6   | 0.82<br>2 | 1.13<br>5   | 1.29<br>7   | 0.90<br>3 | 0.75<br>1   | 0.53<br>2   | 0.71<br>4.5 | 2.00<br>6   | 0.21<br>1   | 0.71<br>4.5 | 0.57<br>3   |  |
| 15               | 1.18<br>3      | 1.71<br>7   | 1.06<br>1 | 1.50<br>6   | 1.43<br>5   | 1.10<br>2 | 1.25<br>4   | 1.26<br>3   | 1.41<br>5   | 1.00<br>1   | 1.47<br>6   | 1.29<br>4   | 1.24<br>2   |  |

1位, 2位の行(すなわち最も読みにくいと考えられる行)には×印, それに次いで停留数の多かった行には/印をそれぞれ与えてみると, 四つの実験文章は, おのおの第3表, 第4表に示したようになる。すなわち実験文章 1a では, 2行, 4行, 5行, 6行の各行, 実験文章 2a では2行, 4行。同じく1b では, 2行, 4行, 7行, 2b では2行, 4行, 7行の各行がおのおの他の諸行に比して比較的○印, ●印が集中している。すなわちこれらの行は, 他の行に比して比較的被験者に読みの抵抗を感じさせるところが少なかったのではないかと

[第3表]

| 実験文章<br>行<br>被験者 | 1a 日印文化センター(原文) |   |   |   |   |   |   | 2a 日印文化センター(書きかえ文) |   |   |   |   |   |   |   |
|------------------|-----------------|---|---|---|---|---|---|--------------------|---|---|---|---|---|---|---|
|                  | 2               | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 2                  | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
| 01               | ○               | × |   | ○ | / | ● | × | ○                  | ● |   | ● | ○ | / | × | × |
| 02               |                 |   |   |   |   |   |   |                    |   |   |   |   |   |   |   |
| 03               |                 | × | ○ | ● | ○ | × | / | ○                  | × |   | / | ○ | × |   | ● |
| 04               | ○               | × | / | × | ○ |   | ● |                    | × | ● | × | / | ○ |   | ○ |
| 05               | ○               | ○ | ● |   | × | / | × | ●                  |   | ○ | / | × | × | / | ○ |
| 06               | /               | × | ○ | ● | ○ | × | / | ×                  | × |   | / | ● | ○ |   | ○ |
| 07               | ○               | ○ | ● | × | ● | × | / |                    |   | / | ○ | ○ | ● | × | × |
| 08               | ○               | ● | × |   | / | ○ | × | ●                  | × | ○ | ○ | ○ | / | × | ● |
| 09               |                 | × | / | ● | ○ | ○ | × | ○                  |   | ○ | ● | × | ● | / | × |
| 10               | ○               | × | / | ○ | ● |   | × | ○                  | ○ | ● | / |   | / | × | × |
| 11               |                 |   | ● | ○ | ○ | × | × | ○                  | × | ○ | ● | / |   | ● | × |
| 12               | ○               | / | ● |   | × | × | ○ | ○                  | × | ● | / |   | ○ |   | × |
| 13               | ○               | × | ○ | / | ○ |   | × | ●                  | × |   | / |   | ○ | × | ○ |
| 14               | ×               | × | ● | ○ | ○ | / |   | ●                  |   | ○ | × | ○ | × | × | ● |
| 15               | /               | × | ● |   | ○ |   | × | ○                  | × |   | / | × | ○ | ● |   |

[第4表]

| 実験文章<br>行<br>被験者 | 1b 新映画(書きかえ文) |   |   |   |   |   |   | 2b 新映画(原文) |   |   |   |   |   |  |
|------------------|---------------|---|---|---|---|---|---|------------|---|---|---|---|---|--|
|                  | 2             | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 2          | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |  |
| 01               | ×             | × | ● |   | / | ○ | ○ | ○          | × | ● | / | × | ○ |  |
| 02               |               |   |   |   |   |   |   |            |   |   |   |   |   |  |
| 03               | ○             | ○ |   | × | × | ● | / | ○          | × | × | / | ● | ○ |  |
| 04               |               | × | ○ | × | / | ● |   | /          | × | ○ | / | ● | ○ |  |
| 05               | ○             | × | ● | / | × | ○ | / | ○          | ● | ○ | × | × | / |  |
| 06               | ○             | ○ | ○ | × | × | ● | / | ○          | / | ● | × | × | ○ |  |
| 07               | ○             | ○ | ● | × | × |   | × | ○          | / | ○ | × | × | ● |  |
| 08               | ×             | ● | ○ | / | × | ○ | ● | ○          | ○ | ○ | × | / | ○ |  |
| 09               | ●             | × | ○ | × | × | ○ |   | ○          | × | ○ | × | / | ● |  |
| 10               | ○             | × | / |   | × | ● |   | ○          | × | ● | / | × | ○ |  |
| 11               | ○             | × | / | ● | × | ○ | ● | ○          | × | ○ | ● | × | / |  |
| 12               | ○             | / | ○ | × | / | ● | × | ○          | × |   | × | × | ○ |  |
| 13               | ○             |   | ○ | / | × | ● | × | ○          | / | ● | × | × | ○ |  |
| 14               |               | × | ○ | / | × | ● |   | ○          | × | × | ○ | × | ● |  |
| 15               | ●             | × | ○ | × | / | ○ |   | ●          | × | × | × | / |   |  |

推測されるわけである。

これに対して、実験文章 1a では、3 行、7 行、8 行、同じく 2a では 3 行、5 行、8 行、1b では 3、5、6 の各行、2b では 3、5、6 の各行には比較的 ×印、／印が集中しており、被験者は、これらの行を読む際に、読みの上へ何らかの抵抗を感じたものと推測される。

ところで、1a と 2a、1b と 2b は、おのおの同一の文章の原文と書きかえ文とであるから、いま同一文章の原文と書きかえ文との比較という観点から以上の結果をながめてみると、両者の間にはかなりの著しい共通点があることに気づく。すなわち〔日印文化センター〕の場合は、

宗教、文化の交流を通じて日本とインド両国の親善関係の部分と

お 互 の国に建設する計画が親善友好団体、宗教団体の間で  
たがい  
の部分、原文、書きかえ文を通じて被験者に読みの抵抗を感じさせるところが少なく、

深めようと、そのよりどころとなる両国の文化センターを  
の部分と

日印友の会会長) がインドに 渡 ったさいカルカッタの  
わた  
の部分、被験者に原文、書きかえ文を通じて読みの抵抗を感じさせているものと推測される。(—線の下は、書きかえ文。以下同じ。)

また、

この計画は 来る 八月 東京 で開かれる宗教世界会議へ  
きた トウキョウ  
のインド代表の出席 下交渉 の ため 同会議発起人 下中弥三郎 氏  
を前もって交渉する シモナカ・ヤサブローウ  
の部分、書きかえを施すことによって、かえって被験者に読みの抵抗を感じとらせたようである。

また、2a における

日印友好協会会長カリダス・ナグ博士 (カルカッタ大学  
の部分、1a におけるそれよりも被験者に読みの抵抗が少なく感じられてい

るのは、おそらく2aを1aのあとに読んだことによる学習効果が作用しているものとする。

〔新映画〕の場合には、以上のような共通点をもっとはっきりしている。

すなわち、

日本映画も、遂に、ここまで豪華な作品を生み出すまで  
エイガ つい ゴウカ

の部分と、

研究を続けて来た成果である。

僧兵たちの示威行進など、これ  
ソウ デモ

の部分は、原文、書きかえ文を通じて被験者に読みの抵抗を感じさせることが少なく、これに対して、

永田雅一を中心に大映制作スタッフが  
ナガタ・マサイチ ダイエイ

の部分と、

特に、群衆撮影の迫力は注目される。冒頭の野外市の壮観  
サツエイ バクリョク 最初 すばらしいなが

めとか、平家一族が戦いから疲れ果てて  
つか

の部分は、原文、書きかえ文を通じて被験者に読みの抵抗を感じとらせていると推測される。

#### 4. この調査の反省

さて、以上に述べたように14人の被験者が、大体一致して原文、書きかえ文のいかんを問わず、共通して文章のある同一の部分に読みの抵抗を感じる事が多く、同じく他の同一の部分に共通して読みの抵抗を感じる事が著しく少なかったと推測されることは、よしんば、それが語数に対する停留数の比較だけによる推測ではあったにせよ、この場合、この限りでの書きかえの効果は、全く現れなかったことを示すわけである。これは、われわれにとって意外な結果であった。

しかし、これは、前年度の年報にわれわれが報告しておいた次のような事実と一致する。すなわち、前年度の調査では、原文と書きかえ文とを読ませた場

合、単位時間あたりに読みとる字数は、書きかえ文のほうが多いが、しかし、それは、書きかえによって生じた文章全体の文字数の増加をカバーするまでにはいっていないことが確められている。今年度の調査結果は、この事実と表裏をなすものである。

また、なぜこれら特定の行において平均一語あたりの所要停留数が多く、また、なぜ他の特定の行において少なかったのかについては、これら各行の文章の内部にそれをひき起す何らかの因子が潜んでいるものと考えられるが、これだけの資料では、このような推測を裏づけるには充分でない。もう少しこの目的のために、新しくいくつかの実験文章を作って、実験も試みる必要がある。

(渡辺)

# 明治時代語の調査研究

## A. 総記

昭和30年度から着手した「明治時代語の調査研究」は、昨年度までに約10万枚の採集カードを得、これにもとづいて、集計カードを作成したのであるが、今年度は、語彙表の作成・異なり語の補充・分析研究の三つの作業を行った。

この研究は、「郵便報知新聞」の明治10年(1877)11月から明治11年(1878)10月までの1年分を対象とし、標本調査法によって、語彙(いわゆる自立語)を概観し、あわせて助詞・助動詞、語の構造、表記、文体などの実態を明らかにしようとするものである。調査の目的・資料・方法については、「昭和30年度 国立国語研究所年報7」に報告してあるので、省略する。

## B. 担当者

本年度も、前年度に引続き、次の5名がこの研究に従事した。

山田 巖 見坊冨紀 広浜文雄 市川 孝 進藤咲子  
なお、標本調査の実施について、所員水谷静夫の協力を得た。  
また、臨時筆生2名が所員を助けた。

## C. 作業の経過

### (1) 語彙表の作成

前年度末から着手した語彙表作成の作業を実施した。作成した表は、次のものである。

- 1) 五十音順語彙表  $\left\{ \begin{array}{l} \text{A表 (度数10以上の語)} \\ \text{B表 (度数9以下の語)} \end{array} \right.$
- 2) 使用率順語彙表
- 3) 別表(五十音順配列)
  - a) お・ご・みの類

- b) 君・公・氏の類
- c) す・なす・致すの類
- d) 回・箇月・時の類
- e) その他(たとえば、接頭的要素では、諸、全、各など。接尾的要素では、外、中、等など。)

(2) 異語補充

(3) 分析

語彙表の作成が9月にほぼ完了したので、10月以降は、本表、集計カード、採集カードなどによって、次の事項の分析を行い、それぞれについて報告書のための原稿を執筆した。

- 1) 助詞・助動詞
- 2) 語の構造
- 3) 文体と用語
- 4) 表記

この調査研究は、本年度の作業で一応終了した。諸種の語彙表および分析の詳細については、刊行を予定されている調査報告書にゆずることにするが、この年報9には、以上のうちの(1)異語補充の概要 (2)分析のうちの(i)「語の構造」とくに三文字の漢字語の構成要素一」と、(ii)「表記」の一部分を摘記することにする。

(山田)

## 1. 異語補充

この語彙調査で採集された異なり語数は、数詞、固有名詞をのぞいて約二万二千である。しかし、これはもちろん郵便報知新聞にあらわれた異なり語の全部ではない。そこで、われわれは次の方法による異なり語の主観的補充採集をこころみた。

- 1. 調査対象 郵便報知新聞の全記事(本文、物価、広告)
- 2. 層わけ 本文と物価・広告との二つの層にわけける。
- 3. 抽出単位 一日分の記事全体

#### 4. 抽出比率 等間隔に、1/12

すなわち、298個の台帳から、等間隔に25個の標本台帳をぬきとり、未採集と思われる用語を主観的にひろいだすという方式によるのである。

ただし、抽出比率 1/12 といっても、この中には、すでに採集済みの本文が 1/12だけふくまれている。これは当然調査対象とならないので、本文にかぎり、抽出比率は1/12よりも  $1/12^2$  だけ小さい。

採集のしかたは、まず標本台帳を通読しながら、まだ採集しなかったと思われる用語を赤鉛筆でかこみ、あとで前後の文脈とともにカードに写しとった。

ただし、次の項目のどれかにあてはまる用語は、採集ならびに集計にさいして除外した。

1. 語彙表に記録されている用語。すなわち、採集済みの用語。
2. 同じ日付け、または別な日付けの記事からかさねて採集された用語。
3. 人名・地名・数詞（助数詞つきをふくむ）など、語彙表にふくまれない用語。

以上の手続きによって、異語補充のために採集したカードは、どの層も未採集の異なり語だけの集合となり、同じ語形のカードが一枚もふくまれないことになった。

異語補充のために採集したカードを集計整理した結果は、次の表のとおりである。

| No.   | 1      | 2            | 3         | 4(=3/1) | 5(=2/1) |
|-------|--------|--------------|-----------|---------|---------|
| 区分    | 当初採集数  | 重複分などを差引いた正味 | 語彙表に未登録の語 | 補充率(%)  | 正味の率(%) |
| 本文    | 11,427 | 10,571       | 7,597     | 66.5    | 92.5    |
| 物価・広告 | 1,696  | 1,513        | 1,249     | 73.6    | 82.2    |
| 計     | 13,123 | 12,084       | 8,846     | 67.4    | 92.1    |

この補充調査は、主観的な用語採集の能率（補充率その他）についてある種の見通しを持つ、というねらいをもふくめて行われた。補充率に関しては、予想以上の良好な数字を得た。しかし、このような方法を何回もくりかえしたさいに、補充率がどう変化するであろうかという問題、また、別な調査単位（た

たとえばβ単位)で行ったばあいには、補充率がどうなるかという問題は、追求することができなかった。(見坊)

## 2. 三文字の漢字語の構成要素

語の構造の分析では、漢字だけを使って日本語を表記し、その中の少なくとも一文字は音読する語(仮に漢字語と呼ぶ)を対象とした。別に刊行予定である報告書には、三文字の漢字語(異なり語約2千)の各構成要素の間の意味の関係を七つの型に分けて考察した。ここでは、報告書には扱わない、三文字の漢字語の構成要素について分析したものについてのべる。

三文字の漢字語を採り上げた理由は、ほぼ同じ調査単位で調査したものに、第二研究室(現「書きことば研究室」)の報告4『婦人雑誌の用語』がある。この報告によると「主婦の友」の用語では、三文字の漢字語は、60語しかなかった。一方、明治10~11年の郵便報知新聞の用語調査では、約2千語出ている。同じ調査単位であるのに、その差があまりにも大きすぎる。もちろん、一方は婦人雑誌というかたよった資料であるということが大きく影響しているだろうことは予想できるが、それにしても差がありすぎるので、やはり、ここに時代による用語の性格の差が出ているものと考えたいのである。

三文字の漢字語の構造を、その意味のかかり方に視点を置いて分析すると、大部分は、二文字の構成要素と一文字の構成要素の組合せになる。度量衡・早中晩のような一文字の並列もあるが、これは少ない。その一文字が前に来た場合には接頭語、後に来た場合には接尾語である例が多い。しかし、その接頭語・接尾語の認定について、必ずしもすべての人が一致しているわけではない。そこで、そのような意見を参考にしながら、われわれは、一定の範囲の語を定めて、調査を進めた。誤解を避ける意味もあって接頭語、接尾語の呼び方をせず、接頭的要素・接尾的要素の語を使うことにする。接頭的要素としては、相・幾・各假・舊・現・古・在・衆・準・諸・新・全・前・總・第・何・非・不・某・眞每・無・兩・御(オン・ゴ・ミ・オ)があり、接尾的要素としては、宛・上・表・下・外・方・形・方・毎・頃・中・上・過・筋・製・達・中・等・通・共内・輩・辺・向・様・用・來・裡・流・連・的と、君・氏などの人に付くもの

に限った。これは、あくまでも、作業の上での約束であって、品詞を定めようなどというのではない。この調査の目的からしてもそのことは容易に了解できることであろう。

①三文字の漢字語の中で、前に付く構成要素（前要素）

ここでは、上述の接頭的要素を除いた前要素について、「どんな要素が多く使われているか」を分析してみた。二文字の漢字語が現代語よりも多い、ということは、二文字と一文字とに分けて考えた場合、その一文字の要素に生産力のあるものが多いに違いないとにらんだからである。その結果は、〈大〉が30の異なり語に付いているのが、もっとも多い例であった。〈大〉のつく異なり語を列挙してみよう。

大：～英断　～會議　～勸進　～患難　～奸物　～機關　～吉日　～強勇　～議論  
～劇戰　～交代　～祭式　～事業　～試験　～事件　～沙漠　～集會　～盡力  
～水門　～青嶂　～政府　～團圓　～當惑　～都府　～繁昌　～評判　～風雨  
～拂底　～變動　～流行

これに次ぐものでは、〈好〉（好結果・好政事・好時節など）の9つの異なり語に付くものである。〈小〉（小會議・小科目・小變遷・小石橋など）も9つの異なり語に付いている。

接頭的要素では、〈諸〉62，〈各〉57，〈不〉28という数が出ている。少ない例では、一つの異なり語にしか付いていない〈古〉〈準〉があるが、これは〈古〉〈準〉などが、二文字の語に付いていた例がそれぞれ例であったということなのである。だから、〈大〉の例にしても、一文字、三文字の語に付いたものまでも含めると、異なり語は81になる。そうなると、三文字の語というわくをとって言えば、〈諸〉よりも〈大〉の方が語の生産力が高かったということも言える。

②三文字の漢字語の中で、後に付く構成要素（後要素）

この例では、〈者〉が63の異なり語に付いているのが目立っている。

者：爲政～　違法～　有縁～　演説～　枉屈～　開業～　管守～　眼病～　管保～  
奇特～　及第～　舊任～　起立～　輕罪～　建義～　權理～　工學～　好劇～  
工商～　幸福～　産出～　執權～　死亡～　守舊～　主行～　主唱～　受賞～  
受章～　出品～　主任～　受罰～　所有～　信心～　新任～　星學～　製造～

戦死～ 全治～ 先導～ 創業～ 卒業～ 代理～ 通信～ 同業～ 當局～  
 同志～ 廢疾～ 被告～ 被治～ 貧困～ 貧賤～ 瘋癲～ 負債～ 負傷～  
 編輯～ 傍觀～ 保護～ 模範～ 有識～ 有志～ 力役～ 旅行～ 勞働～

<者>と同じ意味を持っている<人>の例は、

人：移住～ 受取～ 營業～ 往來～ 開産～ 感染～ 鑑定～ 共立～ 禁獄～  
 汲取～ 怪我～ 原告～ 見物～ 小作～ 搾取～ 差配～ 参詣～ 止宿～  
 疾病～ 支配～ 縦覧～ 授産～ 出品～ 證據～ 殖民～ 所持～ 製造～  
 撰擧～ 惣代～ 代議～ 代言～ 代書～ 代理～ 懲役～ 溺死～ 當該～  
 投書～ 取扱～ 仲買～ 乗組～ 乗込～ 拜觀～ 犯罪～ 引合～ 引受～  
 引取～ 被告～ 筆記～ 編集～ 傍聽～ 保證～ 發起～ 捕縛～ 名代～  
 有志～ 養育～ 流罪～ 勞作～

で58の異なり語に付いている。<者>と共通しているのは、

出品 製造 代理 被告 編集 有志

の6語だけである。

使われた延べ回数は、<者>が85回に対して、<人>の方は125回である。

また、あらわれ方を、層によってみると、

| 層 | 者  | 人   |
|---|----|-----|
| a | 6  | 25  |
| b | 15 | 1   |
| c | 26 | 88  |
| d | 1  | 1   |
| e | 37 | 10  |
| 計 | 85 | 125 |

となっている。<人>がc層にかたまっているというのは、報道記事に多く使っているからであり、文体は、軟文体である。一方、<者>の方は、c層にも26回使っているが、b、eの両層に多く出ている。b層は社説欄で純粹の漢文訓読体、e層は投書、訂正記事等であり、文体から言えば、漢文訓読文体に近いものである。そうなると、<～者>は硬文体に、<～人>は軟文体に多く使われた語であると、この分析から言えるかもしれない。

また、a層は、公用文であるから、公用語としては、<～人>の型が多かったとも見られる。

<者><人>に次いで多く使っているのは、<場><家><金><所>である。これを見ると、<者><人><家>は、ある仕事をする〔人〕であることを示し、<場><所>は、位置を示す語であるということで、それぞれ一つのグループにまとめることができよう。そこで、同じ意味をもつ和語の<モノ><ヒト><トコロ>といった語の、自立語としての使用度数を見ると、

|       |         |      |
|-------|---------|------|
| <モノ>  | 1,118 回 | 第4位  |
| <ヒト>  | 219 回   | 第28位 |
| <トコロ> | 388 回   | 第11位 |

であり、使用度数順でも上位の語である。このことは、<者> <人> <家> <場>などが、漢字語の構成要素として、大きな生産力を持っていることの裏付けとなるものではなからうか。(広浜)

### 3. 表 記

表記では、つぎの事項について調査した。

1. 集計カードの表記欄の分析調査（使用度数10以上の語について）
2. 漢字と仮名の割合
3. ルビ
4. その他表記上の事に関する調査

これらについては、近く刊行を予定されている郵便報知新聞の語彙調査の報告書に、分析の一部として報告されることになっている。それゆえ、調査手続結果などについては、ここでは省略する。

以下に掲げる表は、上記の調査事項1「集計カードの表記欄の分析調査」から作成されたものである。刊行予定の報告書には、紙数の都合上、省かざるを得ないので、当年報に資料として報告することにしたのである。

表は、送り仮名、仮名づかい、仮名書きの語、漢字の4種類である。

#### 送り仮名表

まえがき

1. この送り仮名表は、使用度数10以上の語について、送り仮名（送り仮名零のものを含む）に、二通り以上のうごきのあるものを調査した結果を、品詞別、五十音順（現代仮名づかいによる）に整理して掲げたものである。
2. この表の作成にあたって
  - (1) この表の用例として記載する漢字の部分の代表形は、それぞれ次のようにきめた。
    - (イ) 漢字表記一種の語は、その漢字表記
    - (ロ) 漢字表記二種以上の語は、送り方のうごきの種類の多いものの漢字表記

- (ハ) その他の場合は、使用度数の高い漢字表記
- (2) この表の用例として記載する仮名の部分は、(イ)仮名づかいは、歴史的仮名づかいに統一し、(ロ)清濁の問題については、濁音発音のものには濁点を付し、(ハ)平仮名、変体仮名、合字などは、すべて片仮名書きに統一した。

(1)(2)について、具体的に用例をもって示そう。

たとえば、動詞「アゲ・ゞ舉」は、集計カードの表記欄を、送り方のちがいによって分類すると、つぎようになる。

|   |    |    |    |    |    |
|---|----|----|----|----|----|
| 舉 | 6回 | 舉ヶ | 7回 | 舉ル | 5回 |
|   |    | 上げ | 2回 | 上る | 1回 |
|   |    | 揚ヶ | 2回 |    |    |
|   |    | 揚ヶ | 1回 |    |    |
|   |    | 昇ヶ | 1回 |    |    |

となる。これに、前項(1)の基準をあてはめると(ロ)によって、舉の漢字表記をもつグループが代表形となる。つぎに、(2)によって、これを整理すると、

|   |    |    |     |    |    |
|---|----|----|-----|----|----|
| 舉 | 6回 | 舉ヶ | 13回 | 舉ル | 6回 |
|---|----|----|-----|----|----|

となる。これが、表に掲げる代表形となるわけである。

### 3. 送り仮名欄の記入について。

(1) 無活用語は、(イ)「送り仮名無」の欄は、送り仮名のついていない形と、その回数を記入した。(ロ)「送り仮名有」の欄は、送り方のもっとも少ない形から多い形へと順に記載し、その回数を付した。

(2) 活用語は、(イ)「送り仮名無」の欄は、無活用語と同じであるが、(ロ)「送り仮名有」のはじめの列には、活用語尾から送ってあるものを記載した。これには、動詞は連用形を代表形とし、形容詞は終止形を代表形とした。(これは、本表の取り扱いに準じたものである。)下段には、(1)送り方の少ないものから順に、(2)表記上注意すべき活用形のものなどを(たとえば前出上二段動詞の「アゲ・ゞ舉」の連体形舉ル)記載した。

| 名詞   | 送り仮名無 |     | 送り仮名有 |    | 見出し  | 送り仮名無 |    | 送り仮名有 |    |
|------|-------|-----|-------|----|------|-------|----|-------|----|
| 見出し  |       |     |       |    | ウカガイ | 伺     | 39 | 伺ヒ    | 2  |
| アキラカ | 明     | 11  | 明カ    | 5  | ウワサ  | 噂     | 15 | 噂サ    | 8  |
| アタイ  | 價     | 35  | 價ヒ    | 2  | オンラベ | オ調    | 4  | オ調べ   | 7  |
| アマリ  | 餘     | 1   | 餘リ    | 8  | オノレ  | 己     | 6  | 己レ    | 14 |
|      |       |     | 餘マリ   | 1  | オモイ  | 思     | 8  | 思ヒ    | 6  |
| アヤマリ | 誤     | 9   | 誤リ    | 10 | オモムキ | 趣     | 74 | 趣キ    | 4  |
| アラタ  | 新     | 12  | 新タ    | 14 | オリ   | 折     | 14 | 折リ    | 44 |
| イカン  | 如何    | 25  | 如何ン   | 12 | オリカラ | 折柄    | 20 | 折リ柄   | 1  |
| イキオイ | 勢     | 17  | 勢ヒ    | 4  | カギリ  | 限     | 12 | 限リ    | 21 |
| イズレ  | 何     | 4   | 何レ    | 50 | カタワラ | 傍     | 9  | 傍ラ    | 5  |
| イマ   | 今     | 121 | 今マ    | 5  | カレ   | 彼     | 15 | 彼レ    | 13 |

|        |    |     |     |     |         |    |     |     |                  |
|--------|----|-----|-----|-----|---------|----|-----|-----|------------------|
| クワダテ   | 企  | 8   | 企テ  | 2   | ムカン     | 昔  | 11  | 昔シ  | 4                |
| コタエ    | 答  | 10  | 答へ  | 3   | ムキ      | 向  | 8   | 向キ  | 2                |
| コノゴロ   | 此頃 | 38  | 此ノ頃 | 1   | モト      | 元  | 15  | 元ト  | 10               |
| コレ     | 之  | 815 | 之レ  | 168 |         |    |     |     | (以前の意)           |
| コレラ    | 是等 | 23  | 是レ等 | 3   | モト      | 下  | 25  | 下ト  | 1                |
| コロ     | 頃  | 49  | 頃口  | 1   |         |    |     |     | (所の意)            |
| サカン    | 盛  | 17  | 盛ン  | 24  | モト      | 本  | 15  | 本ト  | 4                |
| サキ     | 先  | 10  | 先キ  | 23  |         |    |     |     | (原因の意)           |
| シタ     | 下  | 16  | 下タ  | 2   | ヤマイ     | 病  | 11  | 病ヒ  | 1                |
| スエ     | 末  | 27  | 末へ  | 1   | ユエ      | 故  | 91  | 故へ  | 1                |
| スミヤカ   | 速  | 34  | 速カ  | 8   | ヨシ      | 由  | 174 | 由シ  | 1                |
| セメ     | 責  | 8   | 責メ  | 2   | ワケ      | 譯  | 25  | *譯ケ | 1                |
| ソレ     | 夫  | 28  | 夫レ  | 26  |         |    |     |     | (*分け<br>分けも分らぬ~) |
| タッソ    | 達  | 12  | 達シ  | 10  |         |    |     |     |                  |
| タビ     | 度  | 22  | 度ビ  | 3   | ワリアイ    | 割合 | 13  | 割リ合 | 1                |
| タメ     | 爲  | 27  | 爲メ  | 155 | ワレ      | 我  | 34  | 我レ  | 8                |
| タレ     | 誰  | 34  | 誰レ  | 6   |         |    |     |     | 動詞               |
| ツギ     | 次  | 37  | 次ギ  | 1   | アイ、ウ    | 逢  | 2   | 逢ヒ  | 27               |
| ツヅキ    | 續  | 19  | 續キ  | 14  | アイタツシ、ス | 相達 | 69  | 相達シ | 4                |
| ツマビラカ  | 詳  | 8   | 詳カ  | 4   | アイナリ、ル  | 相成 | 14  | 相成リ | 12               |
| テツヅキ   | 手續 | 14  | 手續キ | 3   | アオギ、ク   | 仰  | 2   | 仰ギ  | 24               |
| トオリ    | 通  | 62  | 通り  | 89  | アガリ、ル   |    |     | 上リ  | 10               |
| トコロ    | 所  | 385 | 所口  | 1   |         |    |     | 上ガリ | 1                |
| トリアツカイ | 取扱 | 9   | 取扱ヒ | 2   | アゲ、ク    | 擧  | 6   | 擧ゲ  | 13               |
| ナガサ    | 長  | 6   | 長サ  | 9   |         |    |     | 擧ル  | 6                |
| ナニ     | 何  | 41  | 何ニ  | 21  | アズカリ、ル  |    |     | 與リ  | 8                |
| ナニゴト   | 何事 | 12  | 何ニ事 | 1   |         |    |     | 與カリ | 4                |
| ナン     | 何  | 19  | 何ン  | 5   | アタイ、ウ   | 能  | 1   | 能ヒ  | 89               |
| ノゾミ    | 望  | 8   | 望ミ  | 3   | アタエ、ウ   | 與  | 1   | 與へ  | 58               |
| ノチ     | 後  | 46  | 後チ  | 28  |         |    |     | 與タへ | 1                |
| ハジメ    | 初  | 12  | 初メ  | 58  | アタリ、ル   | 當  | 21  | 當リ  | 70               |
| ハナシ    | 話  | 22  | 話シ  | 4   |         |    |     | 當ヤ  | 1                |
| ヒトツ    | 一  | 102 | 一ツ  | 12  | アツマリ、ル  |    |     | 集リ  | 10               |
|        |    |     | 一トツ | 3   |         |    |     | 集マリ | 1                |
| ヒトリ    | 一人 | 24  | 一人リ | 9   | アテ、ッ    | 充  | 4   | 充テ  | 9                |
| フタリ    | 二人 | 30  | 二人リ | 16  | アヤシミ、ム  | 怪  | 1   | 怪ミ  | 10               |
| マエ     | 前  | 66  | 前へ  | 2   |         |    |     | 怪シミ | 6                |
| マレ     | 稀  | 11  | 稀レ  | 7   | アヤマリ、ル  | 誤  | 5   | 誤リ  | 15               |
| ミコミ    | 見込 | 18  | 見込ミ | 4   |         |    |     | 誤マリ | 1                |
| ミナ     | 皆  | 80  | 皆ナ  | 16  | アラタメ、ム  | 改  | 4   | 改メ  | 35               |

|          |     |    |        |               |        |    |     |   |          |     |
|----------|-----|----|--------|---------------|--------|----|-----|---|----------|-----|
|          |     |    | 改ル     | 2             |        |    | 仰セ付 | 1 |          |     |
| アラワシ、ス   |     |    | 顯シ     | 8             | オカシ、ス  |    |     |   | 冒シ       | 18  |
|          |     |    | 顯ハシ    | 11            |        |    |     |   | 冒カシ      | 2   |
| アリ、リ     | 有   | 3  | 有り     | 199           | オキ、ク   | 置  | 6   |   | 置キ       | 54  |
|          |     |    | 非<br>否 | ル<br>ンテ<br>ンバ | 6      |    |     |   | 送リ       | 53  |
|          |     |    |        |               |        |    |     |   |          |     |
| アリ、ル     | 有   | 3  | 有り     | 3             | オコナイ、ウ | 行  | 3   |   | 起コシ      | 5   |
| アワセ、ス    | 合   | 4  | 合セ     | 24            | オサメ、ム  | 取  | 1   |   | 行ヒ       | 61  |
|          |     |    | 合ハセ    | 1             |        |    |     |   | 収メ       | 23  |
| イイ、ウ     | 云   | 72 | 云ヒ     | 350           | オシ、ス   | 推  | 4   |   | 収ル       | 1   |
| イダシ、ス    | 致   | 6  | 致シ     | 22            | オシエ、ウ  |    |     |   | 推シ       | 13  |
| イダシ、ス    |     |    | 出シ     | 24            |        |    |     |   | 致ヘ       | 10  |
|          |     |    | 出ダシ    | 1             | オチイリ、ル | 陷  | 2   |   | 致ル       | 1   |
| イタリ、ル    | 至   | 31 | 至リ     | 349           | オビ、フ   | 帶  | 3   |   | 陷リ       | 13  |
| イデ、ズ     | 出   | 22 | 出デ     | 36            | オモムキ、ク | 趣  | 1   |   | 帶ビ       | 12  |
|          |     |    | 出ル     | 20            | オヨビ、フ  | 及  | 30  |   | 趣キ       | 29  |
| イトイ、ウ    | 厭   | 1  | 厭ヒ     | 14            | オリ、ル   | 居  | 2   |   | 及ビ       | 136 |
| イリ、ル     | 入   | 6  | 入り     | 76            | オリ、ル   | 降  | 1   |   | 居リ       | 20  |
| イル       | 居   | 15 |        |               | オワリ、ル  | 終  | 14  |   | 降リ       | 19  |
|          |     |    | 居ル     | 7             | カイ、ウ   | 買  | 1   |   | 終リ       | 35  |
| イレ、ル     | 入   | 1  | 入レ     | 18            | カエ、ウ   | 替  | 4   |   | 買ヒ       | 14  |
|          |     |    | 入ル     | 5             | カエシ、ス  |    |     |   | 替ヘ       | 12  |
| ウカガイ、ウ   |     |    | 伺ヒ     | 12            |        |    |     |   | 返シ       | 7   |
|          |     |    | 伺ガヒ    | 2             | カエリミ、ル | 願  | 8   |   | 返ヘシ      | 3   |
| ウカガイイデ、ズ | 伺出  | 9  |        |               | カカゲ、ク  | 掲  | 2   |   | 願ミ       | 21  |
|          | 伺ヒ出 | 1  |        |               | カカワリ、ル | 拘  | 1   |   | 掲ゲ       | 50  |
| ウケ、ク     | 受   | 9  | 受ケ     | 70            |        |    |     |   | 拘リ       | 4   |
|          |     |    | 受ル     | 15            | カキ、ク   | 書  | 2   |   | 拘ハリ      | 8   |
| ウケタマワリ、ル |     |    | 承リ     | 9             | カギリ、ル  | 限  | 1   |   | 書キ       | 8   |
|          |     |    | 承ハル    | 2             | カケ、ク   | 掛  | 4   |   | 限リ       | 34  |
| ウケトリ、ル   | 受取  | 8  | 受取り    | 10            | カシシ、ス  | 下賜 | 25  |   | 掛ケ       | 18  |
| ウシナイ、ウ   | 失   | 2  | 失ヒ     | 37            | カタリ、ル  | 語  | 1   |   | 下賜シ      | 3   |
|          |     |    | 失ナヒ    | 1             |        |    |     |   | 語リ       | 17  |
| ウチ、ツ     | 撃   | 5  | 撃チ     | 6             |        |    |     |   | *語タラ     | 1   |
| ウリ、ル     | 賣   | 3  | 賣リ     | 14            | カネ、ス   | 兼  | 7   |   | ( * 語鑑 ) |     |
| エラビ、フ    | 選   | 2  | 選ビ     | 11            | カリ、ル   | 借  | 4   |   | 兼ネ       | 4   |
| オイ、ウ     | 追   | 5  | 追ヒ     | 14            | カワリ、ル  | 代  | 1   |   | 借リ       | 16  |
| オイ、ウ     | 賀   | 2  | 賀ヒ     | 10            | カンガエ、ウ | 考  | 4   |   | 代リ       | 10  |
| オオセツケ、ク  | 仰付  | 11 | 仰付ケ    | 1             | カンシ、ス  | 關  | 1   |   | 考ヘ       | 17  |
|          |     |    |        |               |        |    |     |   | 關シ       | 45  |

|         |    |    |      |    |          |    |    |     |     |
|---------|----|----|------|----|----------|----|----|-----|-----|
| キキ、ク    | 聞  | 31 | 聞キ   | 93 | サシユルシ、ス  | 差許 | 6  | 差許シ | 4   |
| キシ、ス    | 記  | 1  | 記シ   | 62 | サダマリ、ル   |    |    | 定リ  | 7   |
| キダシ、ス   |    |    | 來シ   | 6  |          |    |    | 定マリ | 10  |
| キタリ、ル   | 來  | 1  | 來タシ  | 5  | サダメ、ム    | 定  | 2  | 定メ  | 58  |
|         |    |    | 來リ   | 51 |          |    |    | 定ル  | 3   |
|         |    |    | 來タリ  | 1  | シ、ス      | 爲  | 1  |     |     |
| キョウシ、ス  | 供  | 1  | 供シ   | 24 |          |    |    | 爲ル  | 5   |
| キワマリ、ル  | 極  | 2  | 極リ   | 5  | シカリ、ル    | 然  | 13 | 然リ  | 92  |
|         |    |    | 極マリ  | 4  | シキ、ク     | 若  | 4  | 若キ  | 11  |
| キワメ、ル   |    |    | 極メ   | 19 | シコウシ、ス   | 施行 | 7  | 施行シ | 15  |
|         |    |    | 極ル   | 1  | シタガイ、ウ   | 從  | 7  | 從ヒ  | 49  |
| クダシ、ス   |    |    | 下シ   | 12 | シッコウシ、ス  | 執行 | 2  | 執行シ | 10  |
|         |    |    | 下ダシ  | 2  | シノビ、ブ    | 忍  | 3  | 忍ビ  | 7   |
| クダリ、ル   | 下  | 1  | 下リ   | 19 | シメ、ム     |    |    | 占メ  | 16  |
| クルシミ、ム  |    |    | 苦ミ   | 10 |          |    |    | 占ル  | 7   |
|         |    |    | 苦シミ  | 5  | シメシ、ス    |    |    | 示シ  | 17  |
| クワエ、ウ   |    |    | 加へ   | 52 |          |    |    | 示メシ | 1   |
|         |    |    | 加ル   | 3  | シュツガンシ、ス | 出願 | 2  | 出願シ | 19  |
| クワダテ、ツ  |    |    | 企テ   | 11 | シヨウシ、ス   | 使用 | 1  | 使用シ | 14  |
|         |    |    | 企ル   | 3  | ショウジ、ズ   | 生  | 1  | 生ジ  | 74  |
| ケイサイシ、ス | 掲載 | 1  | 掲載シ  | 16 | ジョシ、ス    | 叙  | 5  | 叙シ  | 25  |
| コウコクシ、ス | 廣告 | 10 | 廣告シ  | 11 | シリ、ル     | 知  | 7  | 知リ  | 186 |
| コウムリ、ル  |    |    | 蒙リ   | 27 | シリゾキ、ク   | 退  | 1  | 退キ  | 13  |
|         |    |    | 蒙ムリ  | 2  | スギ、グ     | 過  | 6  | 過ギ  | 40  |
| コエ、ユ    |    |    | 超エ   | 9  |          |    |    | 過ル  | 17  |
|         |    |    | 超ル   | 1  | ススミ、ム    | 進  | 4  | 進ミ  | 32  |
| コタエ、ウ   | 答  | 8  | 答へ   | 30 | ススメ、ム    | 進  | 1  | 進メ  | 10  |
|         |    |    | 答ル   | 2  | ステ、ツ     | 捨  | 1  | 捨テ  | 17  |
| コトナリ、ル  |    |    | 異リ   | 2  | スミ、ム     | 住  | 1  | 住ミ  | 14  |
|         |    |    | 異ナリ  | 36 | スミ、ム     | 濟  | 4  | 濟ミ  | 10  |
| コトニシ、ス  |    |    | 異ニシ  | 18 | セツリツシ、ス  | 設立 | 1  | 設立シ | 12  |
|         |    |    | 異ニシテ | 1  | ソウライ、ウ   | 候  | 12 | 候ヒ  | 2   |
| サキダチ、ツ  | 先立 | 2  | 先立ち  | 6  | ソエ、ウ     | 添  | 2  | 添へ  | 16  |
|         |    |    | 先ダチ  | 1  |          |    |    | 添ル  | 1   |
|         |    |    | 先キダチ | 1  | ゾクシ、ス    | 屬  | 1  | 屬シ  | 35  |
| サケ、ク    | 避  | 1  | 避ケ   | 8  | ソソギ、グ    | 注  | 1  | 注ギ  | 16  |
|         |    |    | 避ル   | 2  | ソナエ、ウ    | 備  | 1  | 備へ  | 13  |
| サシイダシ、ス | 差出 | 20 | 差出シ  | 40 |          |    |    | 備ル  | 1   |
| サシタテ、ツ  | 差立 | 31 | 差立テ  | 1  | ソンジ、ズ    |    |    | 備ナへ | 1   |
|         |    |    | 差立ル  | 1  |          |    |    | 存ジ  | 31  |

|        |   |     |     |          |     |    |            |                |
|--------|---|-----|-----|----------|-----|----|------------|----------------|
|        |   | 存ル  | 1   | トゲ.ク     | 遼   | 1  | 遼ゲ         | 12             |
| ゾンジ.ズ  | 存 | 存ジ  | 4   |          |     |    | 遼ル         | 1              |
| タイシ.ス  | 對 | 對シ  | 1   | トドケイデ.ズ  | 届出  | 34 | 届出デ        | 1              |
| タエ.ウ   | 堪 | 堪へ  | 2   |          | 届ケ出 | 2  |            |                |
|        |   | 堪ル  |     | トドマリ.ル   |     |    | 止リ         | 12             |
| タエ.ユ   | 絶 | 絶へ  | 1   |          |     |    | 止マリ        | 7              |
|        |   | 絶ル  |     | トドメ.ム    |     |    | 止メ         | 21             |
| タオレ.ル  | 斃 | 斃レ  | 1   |          |     |    | 止ル         | 4              |
| タスケ.ク  | 助 | 助ケ  | 1   | トナエ.ウ    |     |    | 唱へ         | 18             |
|        |   | 助ル  |     |          |     |    | 唱ナへ        | 1              |
| タズサエ.ル |   | 携へ  |     | トミ.ム     | 富   | 4  | 富ミ         | 6              |
|        |   | 携ル  |     | トリ.ル     | 取   | 3  | 取り         | 78             |
|        |   | 携サへ |     | トリアツカイ.ウ | 取扱  | 5  | 取扱ヒ        | 17             |
| タズネ.ス  | 尋 | 尋ネ  | 3   | トリイダシ.ス  |     |    | 取出シ        | 7              |
|        |   | 尋ル  |     |          |     |    | 取り出シ       | 6              |
| タダシ.ス  | 質 | 質シ  | 1   | トリシラベ.フ  | 取調  | 10 | 取調べ        | 3              |
|        |   | 質ダシ |     | トリタテ.ッ   | 取立  | 8  | 取り立テ       | 2              |
| タチ.ッ   | 絶 | 絶チ  | 4   |          | 取り立 | 1  |            |                |
| タチ.ッ   | 立 | 立チ  | 15  | トリハカライ.ウ | 取計  | 10 | 取計ヒ        | 4              |
| タテ.ッ   | 立 | 立テ  | 6   | ナゲウチ.ッ   | 抛   | 3  | 抛チ         | 6              |
|        |   | 立ル  |     |          |     |    | (投ケ打チ 1)   |                |
| タノミ.ム  | 頼 | 頼ミ  | 3   | ナシ.ス     | 爲   | 9  | 爲シ         | 117            |
| タリ.ル   | 足 | 足リ  | 2   | ナズケ.ク    |     |    | *名ケ        | 7              |
| ツイヤシ.ス |   | 費シ  |     |          |     |    | 名ヅケ        | 7              |
|        |   | 費ヤシ |     |          |     |    | * (名付ケ 2例) |                |
| ツキ.ク   | 付 | 付キ  | 313 |          |     |    | (を含む)      |                |
|        |   | 付ル  |     | ナライ.ウ    | 傲   | 1  | 傲ヒ         | 1 <sup>1</sup> |
| ツキ.ク   | 盡 | 盡キ  | 3   | ナリ.ル     | 成   | 7  | 成リ         | 56             |
| ツクシ.ス  |   | 盡シ  |     | ニンジ.ズ    | 任   | 22 | 任ジ         | 15             |
|        |   | 盡クシ |     | ネガイ.ウ    | 願   | 1  | 願ヒ         | 14             |
| ツクリ.ル  |   | 造リ  |     | ネガイイデ.ズ  | 願出  | 10 | 願出デ        | 1              |
|        |   | 造クリ |     |          | 願ヒ出 | 8  | 願出ル        | 2              |
| ツケ.ク   | 付 | 付ケ  | 4   |          |     |    | 願ヒ出デ       | 2              |
| ツゲ.グ   | 告 | 告ゲ  | 6   |          |     |    | 願ヒ出ル       | 2              |
|        |   | 告ル  |     | ノガレ.ル    | 遁   | 1  | 遁レ         | 13             |
| ツヅキ.ク  | 續 | 續キ  | 1   | ノコシ.ス    |     |    | 遣シ         | 11             |
| ツミ.ム   | 積 | 積ミ  | 1   |          |     |    | 遣コシ        | 1              |
| テラシ.ス  |   | 照シ  |     | ノセ.ス     |     |    | 載セ         | 20             |
|        |   | 照ラシ |     |          |     |    | 載ル         | 1              |
| トイ.ウ   | 問 | 問ヒ  | 3   | ノゾキ.ク    | 除   | 6  | 除キ         | 19             |

|         |    |    |      |    |         |    |    |      |     |
|---------|----|----|------|----|---------|----|----|------|-----|
| ノゾミ、ム   | 臨  | 2  | 臨ミ   | 18 | ムケ、ク    | 向  | 21 | 向ケ   | 28  |
| ノベ、フ    | 述  | 5  | 述ベ   | 21 | メイジ、ズ   | 命  | 1  | 命ジ   | 25  |
|         |    |    | 述ル   | 8  | モウケ、ク   | 設  | 1  | 設ケ   | 57  |
| ノボリ、ル   | 昇  | 1  | 昇リ   | 21 |         |    |    | 設ル   | 3   |
| ハイシ、ス   | 廢  | 1  | 廢シ   | 19 | モウシ、ス   | 申  | 16 | 申シ   | 15  |
| ハカリ、ル   | 謀  | 3  | 謀リ   | 60 | モウシイデ、ズ | 申出 | 14 | 申出デ  | 1   |
| ハジ、ズ    | 恥  | 2  | 恥ヂ   | 6  | モウシタテ、ツ | 申立 | 14 | 申立テ  | 7   |
|         |    |    | 恥ル   | 2  |         |    |    | 申立ル  | 7   |
| ハジマリ、ル  | 始  | 1  | 始リ   | 4  |         |    |    | 申シ立テ | 2   |
|         |    |    | 始マリ  | 5  |         |    |    | 申シ立ル | 2   |
| ハナチ、ツ   | 放  | 2  | 放チ   | 13 | モウシツケ、ク |    |    | 申付   | 22  |
| ハライ、ウ   | 掃  | 2  | 掃ヒ   | 12 |         |    |    | 申付ル  | 6   |
| ヒキ、ク    | 引  | 6  | 引キ   | 22 | モチ、ツ    | 持  | 3  | 持チ   | 12  |
| ヒキイ、ル   | 率  | 2  | 率キ   | 9  | モチイ、ウ   | 用  | 1  | 用ヒ   | 49  |
| ヒキウケ、ル  | 引受 | 1  | 引受ケ  | 8  | モチイ、ル   | 用  | 7  | 用キ   | 3   |
|         |    |    | 引受ル  | 1  |         |    |    | 用ル   | 9   |
|         |    |    | 引キ受ケ | 1  | モツテシ、ス  |    |    | 以シ   | 3   |
| ヒキツヅキ、ク | 引續 | 2  | 引續キ  | 8  |         |    |    | 以テシ  | 33  |
| ヒラキ、ク   | 開  | 7  | 開キ   | 92 | モトメ、ム   |    |    | 求メ   | 32  |
| フコクシ、ス  | 布告 | 5  | 布告シ  | 5  |         |    |    | 求ル   | 5   |
| フタツシ、ス  | 布達 | 26 | 布達シ  | 4  | モヨオシ、ス  |    |    | 催シ   | 10  |
| フヨシ、ス   | 付與 | 1  | 付與シ  | 9  |         |    |    | 催フシ  | 2   |
| フルイ、ウ   | 振  | 2  | 振ヒ   | 12 | ヤトイ、ウ   | 雇  | 2  | 雇ヒ   | 9   |
| フレ、ル    | 觸  | 1  | 觸レ   | 13 | ヤミ、ム    | 止  | 10 | 止ミ   | 36  |
| ホドコシ、ス  | 施  | 1  | 施シ   | 26 | ヤリ、ル    | 遣  | 2  | 遣リ   | 9   |
| マカセ、ス   |    |    | 任セ   | 15 | ユキ、ク    | 行  | 7  | 行キ   | 19  |
|         |    |    | 任カセ  | 2  | ユズリ、ル   | 讓  | 1  | 讓リ   | 18  |
| マチ、ツ    | 待  | 10 | 待チ   | 31 | ユルシ、ス   | 聽  | 1  | 聽シ   | 51  |
| マツトウシ、ス |    |    | 全シ   | 2  |         |    |    | 聽ルシ  | 8   |
|         |    |    | 全ウシ  | 8  |         |    |    | 聽シテ  | 1   |
| マヌガレ、ル  |    |    | 免レ   | 14 | ヨビ、フ    | 呼  | 3  | 呼ビ   | 20  |
|         |    |    | 免カレ  | 4  | ヨビイダン、ス | 呼出 | 1  | 呼出シ  | 9   |
| マワシ、ス   |    |    | 廻シ   | 4  |         |    |    | 呼ビ出シ | 3   |
|         |    |    | 廻ハン  | 7  | ヨミ、ム    | 讀  | 2  | 讀ミ   | 19  |
| マワリ、ル   |    |    | 廻リ   | 12 | ヨリ、ル    | 依  | 49 | 依リ   | 151 |
|         |    |    | 廻ハリ  | 1  | ワカチ、ツ   | 分  | 2  | 分チ   | 14  |
| ミチ、ツ    | 満  | 6  | 満チ   | 10 | 形容詞     |    |    |      |     |
| ミトメ、ム   | 認  | 2  | 認メ   | 30 | アソ      |    |    | 惡シ   | 7   |
|         |    |    | 認ル   | 1  |         |    |    | 惡キ   | 3   |
| ムカイ、ウ   | 向  | 30 | 向ヒ   | 30 | オオシ     | 多  | 3  | 多シ   | 159 |

|        |          |    |       |    |       |    |     |      |       |
|--------|----------|----|-------|----|-------|----|-----|------|-------|
| オナジ    | 同        | 1  | 同ジ    | 37 | イカガ   | 如何 | 10  | 如何ガ  | 1     |
|        |          |    | 同ク    | 18 | イカニ   | 如何 | 1   | 如何ニ  | 9     |
| オビタダシ  | 夥        | 1  | 夥シ    | 12 | イササカ  | 聊  | 4   | 聊カ   | 17    |
|        |          |    | 夥ダシ   | 1  | イタク   | 痛  | 1   | 痛ク   | 14    |
| カクノゴトシ | 如斯       | 10 | 如斯シ   | 3  | イタッテ  |    |     | 至テ   | 10    |
|        |          |    | 斯ノ如シ  | 38 |       |    |     | 至ッテ  | 3     |
|        |          |    | 斯クノ如シ | 13 | イト    | 最  | 2   | 最ト   | 8     |
| クルシ    | 苦        | 7  | 苦シ    | 9  | イナヤ   | 否  | 2   | 否ヤ   | 9     |
| クワシ    | 委        | 2  | 委シ    | 18 | イマ    | 今  | 36  | 今マ   | 1     |
| スクナシ   | 少        | 25 | 少シ    | 28 | イマダ   | 未  | 3   | 未ダ   | 109   |
|        |          |    | 少ナン   | 24 | イヤシクモ |    |     | 苟モ   | 13    |
|        |          |    | 少ラ(ズ) | 1  |       |    |     | 苟クモ  | 7     |
| トオン    | 遠        | 2  | 遠シ    | 21 |       |    |     | 苟シクモ | 2     |
| トボン    | 乏        | 1  | 乏シ    | 16 | イヨイヨ  | 彌  | 13  | 彌ヨ   | 4     |
|        |          |    | 乏ク    | 1  |       |    |     | 彌々   | 5     |
| ナシ     | 無        | 46 | 無シ    | 81 |       |    |     | 彌〜   | 2     |
|        |          |    | 無リ    | 4  | イワク   | 曰  | 142 | 曰ク   | 92    |
| ハナハダシ  |          |    | 甚シ    | 46 | イワンヤ  |    |     | 況ヤ   | 11    |
|        |          |    | 甚キ    | 6  |       |    |     | 況ンヤ  | 21    |
|        |          |    | 甚タン   | 3  |       |    |     | 謂    |       |
| ヒサシ    | 久        | 1  | 久シ    | 19 |       |    |     | 云    | ハンヤ 2 |
|        |          |    | 久キ    | 3  | オオイニ  |    |     | 大ニ   | 113   |
| ヒトシ    |          |    | 均シ    | 9  |       |    |     | 大ヒニ  | 4     |
|        |          |    | 均ク    | 3  | オノズカラ |    |     | 自ラ   | 34    |
| ヒロシ    |          |    | 廣シ    | 16 |       |    |     | 自カラ  | 5     |
|        |          |    | 廣ロン   | 1  | オヨソ   | 凡  | 39  | 凡ソ   | 68    |
| フカシ    | 深        | 1  | 深シ    | 33 | カエッテ  |    |     | 却テ   | 34    |
| ヨシ     | 能        | 5  | 能シ    | 25 |       |    |     | 却ッテ  | 2     |
| ヨロシ    |          |    | 宜シ    | 9  | カク    | 斯  | 7   | 斯ク   | 29    |
|        |          |    | 宜ク    | 1  | カツ    | 且  | 75  | 且ツ   | 65    |
|        |          |    |       |    | カツテ   |    |     | 嘗テ   | 44    |
| 副詞     |          |    |       |    |       |    |     | 嘗ッテ  | 1     |
| アエテ    | 敢        | 1  | 敢テ    | 39 | カナラズ  | 必  | 10  | 必ズ   | 37    |
| アタカモ   |          |    | 恰モ    | 23 |       |    |     | 必ラズ  | 7     |
|        |          |    | 恰カモ   | 10 | カネテ   |    |     | 兼テ   | 48    |
| アニ     | 豈        | 37 | 豈ニ    | 7  |       |    |     | 兼ネテ  | 1     |
| アマリ    |          |    | 餘リ    | 10 | キワメテ  |    |     | 極テ   | 5     |
|        |          |    | 餘マリ   | 1  |       |    |     | 極メテ  | 16    |
| アラカジメ  |          |    | 豫メ    | 14 | ケダシ   | 蓋  | 4   | 蓋シ   | 60    |
|        |          |    | 豫ジメ   | 1  | ケッシテ  |    |     | 決テ   | 4     |
| アルイハ   | (接続詞を見よ) |    |       |    |       |    |     |      |       |

|       |    |     |    |      |    |      |    |
|-------|----|-----|----|------|----|------|----|
| コトゴトク |    | 決シテ | 59 | ノコラズ |    | 俄カニ  | 5  |
|       |    | 盡ク  | 37 |      |    | 残ズ   | 1  |
|       |    | 盡トク | 1  |      |    | 残ラズ  | 14 |
| コレ    | 是  | 是レ  | 89 |      |    | 不殘   | 2  |
| サイワイニ |    | 幸ニ  | 14 | ハジメテ |    | 始テ   | 8  |
|       |    | 幸ヒニ | 2  |      |    | 始メテ  | 21 |
| サキニ   |    | 糞ニ  | 25 | ハタシテ |    | 果テ   | 2  |
|       |    | 糞キニ | 10 |      |    | 果シテ  | 96 |
| サラニ   |    | 更ニ  | 98 | ハナハダ | 甚  | 甚ダ   | 51 |
|       |    | 更ラニ | 18 | ヤ    | 早  | 早ヤ   | 9  |
| シキリニ  |    | 類ニ  | 3  | ヒソカニ |    | 窃ニ   | 23 |
|       |    | 類リニ | 14 |      |    | 窃カニ  | 6  |
| シバシ   | 暫  | 暫シ  | 9  | ヒトリ  | 獨  | 獨リ   | 46 |
| シバシバ  | 屢  | 屢々  | 7  | フタタビ | 再  | 再ビ   | 51 |
| シバラク  |    | 暫ク  | 18 |      |    | 二タ度  | 1  |
|       |    | 暫ラク | 3  | ホトンド |    | 殆ド   | 10 |
| スグ    | 直  | 直グ  | 24 |      |    | 殆ンド  | 33 |
| スグニ   |    | 直ニ  | 12 | マサニ  |    | 將ニ   | 25 |
|       |    | 直グニ | 4  |      |    | 將サニ  | 11 |
| スベテ   |    | 總テ  | 46 | マズ   | 先  | 先ヅ   | 44 |
|       |    | 總ベテ | 6  | マスマス | 益  | 益々   | 26 |
| ソモソモ  | 抑  | 抑モ  | 33 |      |    | 益    | 1  |
|       |    | 抑々  | 2  | マタ   | 亦  | 亦タ   | 49 |
|       |    | 抑   | 2  | マッタク |    | 全ク   | 73 |
| ソレ    | 夫  | 夫レ  | 64 |      |    | 全タク  | 1  |
| タガイニ  |    | 互ニ  | 30 | ミズカラ |    | 自ラ   | 45 |
|       |    | 互ヒニ | 1  |      |    | 自カラ  | 10 |
| タダ    | 唯  | 唯ダ  | 4  | ミダリニ |    | 漫ニ   | 7  |
| タダチニ  |    | 直ニ  | 23 |      |    | 漫リニ  | 8  |
|       |    | 直チニ | 42 | ムシロ  | 寧  | 寧ロ   | 12 |
| タチマチ  | 忽  | 忽チ  | 37 | モン   | 若  | 若シ   | 77 |
| タトイ   | 假令 | 假令ヒ | 10 | モンソレ | 若夫 | 若シ夫  | 1  |
| タマタマ  | 偶  | 偶マ  | 10 |      |    | 若シ夫レ | 12 |
|       |    | 偶々  | 2  | モットモ | 最  | 最モ   | 74 |
|       |    | 偶マ  | 1  | モツバラ | 專  | 專ラ   | 22 |
| チヨット  | 一寸 | 一寸ト | 1  |      |    | 專バラ  | 1  |
| ナオ    | 猶  | 猶ホ  | 63 | モハヤ  | 最早 | 最早ヤ  | 1  |
| ナンゾ   |    | 何ゾ  | 32 | ヤヤ   | 稍  | 稍ヤ   | 4  |
|       |    | 何ソゾ | 1  |      |    | 稍々   | 8  |
| ニワカニ  |    | 俄ニ  | 16 | ヨウヤク |    | 漸ク   | 71 |

|            |    |    |        |     |            |    |      |        |     |
|------------|----|----|--------|-----|------------|----|------|--------|-----|
|            |    |    | 漸ヤク    | 2   |            |    |      | 而シテ    | 92  |
| ヨク         | 能  | 2  | 能ク     | 76  | シタガッテ      |    |      | 隨テ     | 21  |
| ヨロシク       |    |    | 宜ク     | 10  |            |    |      | 隨ッテ    | 1   |
|            |    |    | 宜シク    | 5   | スナワチ       | 則  | 40   | 則チ     | 123 |
| ワズカニ       |    |    | 僅ニ     | 26  | タダシ        | 但  | 85   | 但シ     | 19  |
|            |    |    | 僅カニ    | 10  | ナラビニ       | 并  | 39   | 并ニ     | 83  |
| <b>接続詞</b> |    |    |        |     | ナントナレバ     |    |      | 何トナレバ  | 11  |
| アルイハ       | 或  | 1  | 或ハ     | 215 |            |    |      | 何ントナレバ | 3   |
|            |    |    | 或ヒハ    | 1   | マタ         | 又  | 267  | 又タ     | 19  |
| オヨビ        | 及  | 58 | 及ビ     | 179 | モシクハ       |    |      | 若クハ    | 11  |
| ココニオイテ     | 於是 | 11 | 是ニ於テ   | 30  |            |    |      | 若シクハ   | 3   |
| サテ         | 擬  | 9  | 擬テ     | 3   | モットモ       | 尤  | 17   | 尤モ     | 14  |
| シカシ        | 併  | 1  | 併シ     | 13  | モッテ        | 以  | 3    | 以テ     | 145 |
| シカシテ       | 而  | 6  | 而テ     | 26  | ヨッテ        |    |      | 因テ     | 51  |
|            |    |    | 而シテ    | 92  |            |    |      | 因ッテ    | 4   |
| シカラバ       |    |    | 然バ     | 5   | <b>連体詞</b> |    |      |        |     |
|            |    |    | 然ラバ    | 19  | アル         | 或  | 6    | 或ル     | 29  |
| シカリシコウシテ   |    |    | 然リ而テ   | 1   | イワユル       | 所謂 | 23   | 所謂ル    | 1   |
|            |    |    | 然リ而シテ  | 12  | カカル        | 斯  | 1    | スル     | 29  |
| シカリトイエドモ   | 然雖 | 5  | 然リト雖   | 1   | カノ         | 彼  | 10   | 彼ノ     | 44  |
|            |    |    | 然リト雖モ  | 15  | キタル        | 來  | 7    | 來ル     | 39  |
|            |    |    | 然リト雖ドモ | 3   | コノ         | 此  | 600  | 此ノ     | 114 |
| シカレドモ      |    |    | 然ドモ    | 3   | サル         | 去  | 15   | 去ル     | 128 |
|            |    |    | 然レドモ   | 91  | ソノ         | 其  | 1535 | 其ノ     | 159 |
| シコウシテ      | 而  | 6  | 而テ     | 26  | ワガ         | 我  | 150  | 我が     | 40  |

[参考]

I. 二通り以上の送り方をもつ語の品詞別一覧。

|     |                  |
|-----|------------------|
| 名詞  | 70語 (859語のうち)    |
| 動詞  | 227語 (349語のうち)   |
| 形容詞 | 18語 (27語のうち)     |
| 副詞  | 82語 (139語のうち)    |
| 接続詞 | 21語 (25語のうち)     |
| 連体詞 | 9語 (16語のうち)      |
| 計   | 427語 (1,415語のうち) |

II. 送り方が一通りしかあらわれなかったものについて。

1. 無活用語

イ, 名詞

i. 送り仮名無 兄, 有様, 委員, 以下の類

781語

|                    |                                                                                                                                                                                    |     |                            |     |     |                                 |    |
|--------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|----------------------------|-----|-----|---------------------------------|----|
| ii. 「々」を送るもの       | 一々, 云々, 近々, 種々, 夫々<br>人々, 日々, 我々                                                                                                                                                   | 8語  |                            |     |     |                                 |    |
| ロ, 副詞              |                                                                                                                                                                                    |     |                            |     |     |                                 |    |
| i. 送り仮名無           | 一旦, 早速, 暫時, 餘程の類<br>(此程, 先頃, 何程, 何分を含む。)                                                                                                                                           | 19語 |                            |     |     |                                 |    |
| ii. 送り仮名有          |                                                                                                                                                                                    |     |                            |     |     |                                 |    |
| 一字送り               | <table border="0"> <tr> <td>助詞</td> <td>{ 今ヤ, 追テ, 迎モ, 何ゾ<br/>誠ニ, の類</td> <td>23語</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>{ 概ネ, 少シ, 頗ル, 將タ, 未ダ,<br/>馳テ, 僅カ</td> <td>7語</td> </tr> </table> | 助詞  | { 今ヤ, 追テ, 迎モ, 何ゾ<br>誠ニ, の類 | 23語 | その他 | { 概ネ, 少シ, 頗ル, 將タ, 未ダ,<br>馳テ, 僅カ | 7語 |
| 助詞                 | { 今ヤ, 追テ, 迎モ, 何ゾ<br>誠ニ, の類                                                                                                                                                         | 23語 |                            |     |     |                                 |    |
| その他                | { 概ネ, 少シ, 頗ル, 將タ, 未ダ,<br>馳テ, 僅カ                                                                                                                                                    | 7語  |                            |     |     |                                 |    |
| 二字送り               | <table border="0"> <tr> <td>助詞</td> <td>{ 如何ニモ, 固ヨリ</td> <td>2語</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>{ 多クハ, 少シク, 譬ヘバ,<br/>早クモ</td> <td>4語</td> </tr> </table>                          | 助詞  | { 如何ニモ, 固ヨリ                | 2語  | その他 | { 多クハ, 少シク, 譬ヘバ,<br>早クモ         | 4語 |
| 助詞                 | { 如何ニモ, 固ヨリ                                                                                                                                                                        | 2語  |                            |     |     |                                 |    |
| その他                | { 多クハ, 少シク, 譬ヘバ,<br>早クモ                                                                                                                                                            | 4語  |                            |     |     |                                 |    |
| iii. 「々」を送るもの      | 追々, 往々                                                                                                                                                                             | 2語  |                            |     |     |                                 |    |
| ハ, 連体詞             |                                                                                                                                                                                    |     |                            |     |     |                                 |    |
| i. 送り仮名無           | 一昨, 該, 故, 昨, 當, 本, 翌                                                                                                                                                               | 7語  |                            |     |     |                                 |    |
| ニ, 接続詞             |                                                                                                                                                                                    |     |                            |     |     |                                 |    |
| i. 送り仮名有           |                                                                                                                                                                                    |     |                            |     |     |                                 |    |
| 一字送り               | 又ハ, 故ニ                                                                                                                                                                             | 2語  |                            |     |     |                                 |    |
| 二字送り               | 左レド, 然ルニ                                                                                                                                                                           | 2語  |                            |     |     |                                 |    |
| 2. 活用語             |                                                                                                                                                                                    |     |                            |     |     |                                 |    |
| イ, 動詞 (活用語尾のみ送る。)  |                                                                                                                                                                                    |     |                            |     |     |                                 |    |
| 四段活用               | 集メ.ム, 抱キ.クの類<br>(複合動詞忍 <sub>レ</sub> 入りを含む)                                                                                                                                         | 40語 |                            |     |     |                                 |    |
| 上一段活用              | 居ル, 見ル, 似ル, 出來ル                                                                                                                                                                    | 4語  |                            |     |     |                                 |    |
| 下一段活用              | 出ル<br>テ                                                                                                                                                                            | 1語  |                            |     |     |                                 |    |
| 上二段活用              | 用イ.ユ                                                                                                                                                                               | 1語  |                            |     |     |                                 |    |
| 下二段活用              | 得.ウ, 覺エ.ウの類                                                                                                                                                                        | 15語 |                            |     |     |                                 |    |
| カ行変格活用             | 來.ク                                                                                                                                                                                | 1語  |                            |     |     |                                 |    |
| サ行変格活用             | 演説シ.ス, 應ジ.ス, 課シ.スの類                                                                                                                                                                | 59語 |                            |     |     |                                 |    |
| ラ行変格活用             | 如何ナリ.リ<br>イカ                                                                                                                                                                       | 1語  |                            |     |     |                                 |    |
| ロ, 形容詞 (活用語尾のみ送る。) |                                                                                                                                                                                    |     |                            |     |     |                                 |    |
| ク活用                | 厚シ, 重シの類                                                                                                                                                                           | 9語  |                            |     |     |                                 |    |

仮名づかいの表

まえがき

1. この仮名づかいの表は、使用度数10以上の語(すなわちA表)の集計カードの表

記欄にあらわれた仮名づかいについて、歴史的仮名づかいにもとるものを誤りとし、その誤りの全例を掲げたものである。

2. 用例の漢字書きの部分については、仮名づかいの誤りをふくむ漢字を代表形とした。漢字が、二種類以上になった場合は、仮名づかいの誤りを多くふくむものを代表形とした。仮名づかいの誤りが、同数の場合は、漢字表記の度数の高いものを代表形とした。
  3. 用例の仮名書きの部分は、すべて、片仮名書きに統一した。
1. 「い、ゐ、ひ」の仮名づかいに関するもの。
- A 「い」を「ひ」と表記したもの。9語23例。(便宜上、動詞には助詞「テ」を送る。)
- |          |             |          |
|----------|-------------|----------|
| 書ヒテ (1例) | 聞ヒテ (1例)    | 退ヒテ (2例) |
| 就ヒテ (2例) | 續ヒテ (3例)    | 引ヒテ (2例) |
| 開ヒテ (1例) | 以上7語動詞カ行音便形 |          |
| 宜ヒ (7例)  | 口語形容詞       |          |
| 大ヒニ (4例) | 副詞          |          |
- B 「ひ」を「い」と表記したもの。1語1例
- |          |         |
|----------|---------|
| 思イテ (1例) | 動詞ハ行音便形 |
|----------|---------|
- C 「ゐ」を「ひ」と表記したもの。1語8例
- |          |         |
|----------|---------|
| 率ヒテ (8例) | 動詞ワ行上一段 |
|----------|---------|
2. 「え、ゑ、へ」の仮名づかいに関するもの。
- A 「え」を「へ」と表記したもの。4語92例
- |           |           |           |
|-----------|-----------|-----------|
| 覺へテ (24例) | 越へテ (4例)  | 絶へテ (11例) |
| 見へテ (53例) | 以上動詞ヤ行下二段 |           |
- B 「え」を「ゑ」と表記したもの。1語1例
- |          |         |
|----------|---------|
| 越エテ (1例) | 動詞ヤ行下二段 |
|----------|---------|
- C 「ゑ」を「へ」と表記したもの。2語20例
- |                                  |          |
|----------------------------------|----------|
| 末へ (1例)                          | 故へ (19例) |
| (以上名詞の一部。故へはゆへ18例を含む。なおゆゑは114例。) |          |
- D 「へ」を「え」と表記したもの。7語17例
- |         |         |             |
|---------|---------|-------------|
| 與エ (9例) | 訴エ (9例) | 具エ (1例)     |
| 堪エ (1例) | 唱エ (2例) | 以上5語動詞ハ行下二段 |
| 問エ (2例) | 動詞ハ行四段  |             |

返エシ (1例) 動詞非活用部分

E 「へ」を「ゑ」と表記したもの。4語4例

與エ (1例) 改エ (1例) 備エ (1例)

堪エ (1例) 以上動詞へ行下二段

3. 「を」と「ほ」の仮名づかいに関するもの。

A 「ほ」を「を」と表記したもの。1語1例

猶ヲ (3例) 副詞

4. 「ほ」と「ふ」の仮名づかいに関するもの。1語1例

A 「ほ」を「ふ」と表記したもの。1語1例

催フシ (1例) 動詞非活用部分

5. 「う」と「ふ」の仮名づかいに関するもの。

A 「う」を「ふ」と表記したもの。17語50例

逢フテ (1例) 云フテ (2例) 追フテ (4例)

負フテ (2例) 買フテ (3例) 協フテ (3例)

従フテ (3例) 救フテ (1例) 傳フテ (1例)

問フテ (2例) 願フテ (2例) 雇フテ (2例)

以上12語動詞へ行音便形

同フシ (11例) 少フシ (3例) 無フシ (1例)

齊フシ (1例) 全フシ (8例) 以上形容詞

B 「ふ」を「う」と表記したもの。1語1例

逢フ(コト) (1例) 動詞へ行四段連体形

6. 「は」と「わ」の仮名づかいに関するもの。

A 「は」を「わ」と表記したもの。5語7例

能ワズ (2例) 云ワズ (1例) 厭ワズ (1例)

罷ワズ (1例) 行ワズ (2例) 動詞へ行四段未然形

7. 「じ」「ぢ」「ず」「づ」の仮名づかいに関するもの。

A 「ぢ」を「じ」と表記したもの。1語1例

恥ジ (1例) 動詞タ行上二段

B 「づ」を「ず」と表記したもの。1語1例

願出ズ (1例) 動詞ダ行下二段

8. その他

A「やう」を「よう」と表記したもの。1語1例

ヨウ (1例) ヤウ (4例) 様 (65例)

〔補記〕 以上57語 229例を得た。ここには、ルビにあらわれた字音仮名づかいは除外してある。

仮名書き語の表

まえがき

同一語形内において、漢字表記と仮名表記との対立のあるものは、度数10以上の異なり語1,407語のうち、104語であった。

仮名書き語の表は、この104語について、

1. 仮名書き度数の多いものから、順次に排列記載した。
2. 用例には、便宜上、漢字を用いた。
3. その語の使用度数の半分以上に仮名書き表記が用いられていた場合には、用例の頭に\*印をつけた。
4. 一部仮名書きのもの（すなわち、まぜ書き）には、その部分に〰〰をつけた。
>

| 用例                 | 仮名書き回数     | 用例                 | 仮名書き回数    |
|--------------------|------------|--------------------|-----------|
| *有リ.リ              | 1,393      | 又, 亦 (接, 副)        | 12        |
| *爲.ス               | 597        | 這                  | 8         |
| 事                  | 565        | 爲                  | 8         |
| *無シ                | 551        | *未 <sup>シ</sup> ダ  | 8         |
| 者, 物               | 426        | 能 <sup>シ</sup>     | 8         |
| *成リ.ル              | 331        | 名 <sup>ヅケ</sup> .ク | 7 (付との対立) |
| *爲シ.ス              | 185        | 愈                  | 6         |
| *故 <sup>シ</sup>    | 132        | 如何ニモ               | 6         |
| *云イ.ッ              | 94         | 夫レ (名詞)            | 5         |
| *由                 | 83         | 様                  | 5         |
| 時                  | 81         | 斯                  | 5         |
| 依リ.ク               | 79         | 是レ                 | 5         |
| 善シ                 | 41         | 彼ノ                 | 5         |
| 之レ                 | 28         | 善イ                 | 4         |
| *有リ.ル              | 15         | 所                  | 3         |
| 如何ナリ.リ             | 14         | 年 <sup>トコロ</sup>   | 3         |
| 此ノ                 | 13         | 始 <sup>トシ</sup>    | 3         |
| 其ノ                 | 13         | 儘 <sup>ハジメ</sup>   | 3         |
| 此                  | 12         | 付キ.ク               | 3         |
| 何レ                 | 11         | 取リ.ル               | 3         |
| 内                  | 10         | 未                  | 3         |
| *オ <sup>イ</sup> 調べ | 10 (御との対立) | 茲 <sup>イマダ</sup> ニ | 3         |

|      |            |     |   |
|------|------------|-----|---|
| 共ニ   | 3          | 遺リル | 2 |
| スル   | 3          | 宜シ  | 2 |
| コレヲ病 | 2(虎列刺との対立) | 最   | 2 |
| 皆    | 2          | 暫ク  | 2 |
| 思イウ  | 2          | 假命  | 2 |
| 係リル  | 2          | 然レド | 2 |
| 掛ケク  | 2          | 併シ  | 2 |
| 先ダチッ | 2(先立との対立)  | 嗚呼  | 2 |
| 止ミム  | 2          |     |   |

以下は、仮名書き回数1のものである。

跡、今、上、彼、心、事ドモ(共との対立)、此方、何、程、昔、能イウ、當リル、到リル、入リル、打チッ、及ビ、フ、書キク、聞キク、知リル、過ギク、盡シス、造リル、免レル、見ル、持チッ、行キク、讀ミム、悪シ、高シ、早シ、如何、如何ニ、兼ネテ、殊ニ、夫レ(副詞)、猶ホ、早ヤ、不風、益、若シ、躰テ、稍、并ニ

なお、漢字書きのもので、于今、不殘、甚敷、委敷、夥敷(各1例)が見られた。しかし、上記のものとは、性質を異にするので、調査から除外した。

### 漢字の表

まえがき

- この漢字の表は、集計カードの表記欄にもとづいて、使用度数10以上の語の表記に用いられた漢字のすべてを掲げたものである。
- 漢字の配列は、原則として、字音(主として通音)によって整理し、一部訓読によった。排列は現代仮名づかいによる五十音順とした。同音のものでは、字画の少ないものから配列を行った。
- 漢字の表の作成にあたっては、俗字などを、本字に集合整理することをしていない。

あ 悪 遍 按案 或  
い 已以衣位委畏尉惟異移爲意違維遣噫謂 育 一壹 逸 引因員院  
う 于右吁雨 云  
え 永曳盈英衛嬰營 易益驛 曰悦越 宛延爰掩揆圓厭演 遠  
お 於嗚 往押旺歐横應 屋憶 乙  
か 下加可火何果花架科家假華貨過暇嘉夥寡價課 瓦我俄 回改怪屈皆恠海廻械開會  
蓋懷 外害該漑概 各角革格較獲稷覺 額 割管 干完罕官函看威患陷換敢問堪慣  
管館還鑿簡關勸灌艦鑑觀 含限顔願 且 叶  
き 己企希季其紀記起豈氣基寄既規崎跛喜幾揮期貴稀粟溼器機冀窳歸虧 宜義儀議



へ 丙平兵並併秉柄弊蔽弊 米 關 別 返邊變 便勉  
 ほ 歩保哺捕 母募 方奉奉抱拋放法逢報 亡乏防忘胃某望傍質暴謀 北 撲 本翻  
 凡 旁妄貌  
 ま 麻 每枚 又亦 末 漫滿  
 み 未 密 民  
 む 無務夢 娘  
 め 名命明 冤面  
 も 茂摸 木目 蒙 勿 門問  
 や 夜 役約譯 驢  
 ゆ 由愈輸踰 唯 尤有酉宥郵猶誘  
 よ 予余臚預與餘 用洋要容揚業椽膺 抑欲翌  
 ら 來賴 落樂 覽  
 り 吏利理裡裡 陸 立律率 畧 流溜隆 了良兩竜料聊量饋龍 力 厘倫臨  
 る 厭 涙類  
 れ 令例禮齡 歷 列 廉  
 ろ 路魯露 老郎 六鹿錄 論  
 わ 話 猥限

(進藤)

## 特殊問題の調査研究

資料調査室の調査室では、他の研究室に属さない特殊問題の調査研究を行っているが、昭和32年度には、前年度に引き続き、次の調査を行った。

I 正書法に関する基礎問題についての資料の収集調査

II 漢字の字体に関する基礎研究

調査は、松尾拾、村尾力、大久保愛が当たった。

### I. 正書法に関する基礎的問題についての資料の収集調査

本年度は送りがなに関する資料の収集調査を行った。

#### I. 調査の目的

送りがなについてはこれまでいくつかの基準が立てられているがそのうち、あるものは文語文を土台においた送りがな法であるために、現代の文章の実際には適さない面があり、またあるものは読む立場の便宜にかたより、あるいは反対に書く立場の能率に主眼を置きすぎ、一方慣習の久しいものはその送り方にいくつもの例外をもたらす等の事情があり、今日なお送りがな法として統一したものを作り得ない状態にある。このため現在、社会に行われる文章には各種の送りがな方式がいろいろ乱れ、実務上また教育上の障害になっている。この実態を認識した上方途が講ぜられるべきであるが、実態調査は短時日には実現すべくもないので、調査室では調査の範囲を今日社会に行われる送りがなの基準が相互にどのような点に差異を示しているかを調べることを主眼とした。そのためにはそれらの基準が一々の語にどのような形で現れているかを調べる。したがって予想される結果は、次のような形で要約されることになる。

1. どのような語に基準の違いが多く現れてくるか、言いかえれば、どのような語が送りがなのゆれを示すか。
2. どのような語に基準の違いがないか、言いかえれば、どのような語が送りがなとしては安定した姿を示すか。

なお、これに加えて、

3. どのような語が送りがなのゆれを避けて、かながきを採用しているか、をも合せて調査する。これは送りがなの問題としては消極面であるが、送りがなを単にかなの送り方の問題としてとらえず、正書法の一部としてとらえる観点に立つならば、近時著しくなりつつある、語をかながきにする傾向も送りがなの問題とからんでとりあげるべきだと考える。

## 2. 調査の資料

資料として次の14種の用語集を用いた。

|     |                  |                                 |            |       |
|-----|------------------|---------------------------------|------------|-------|
| (速) | 日本速記協会           | 「会議録用字の手引き」                     | 日本速記協会     | 1951年 |
| (河) | 河北新報社編集局         | 「河北ハンドブック」                      | 河北新報社      | 1953年 |
| (国) | 衆議院・参議院記録部       | 「国会会議録用字例」                      | 衆議院・参議院記録部 | 1954年 |
| (表) | 文部省調査普及局         | 国語課「国語の書き表わし方」                  | 立春社        | 1950年 |
| (公) | 文部省              | 「公用文の書き方」(国語シリーズ21)             | 文部省        | 1954年 |
| (今) | 毎日新聞社総合調査室       | 「今日の新聞用語」                       | 毎日新聞社      | 1956年 |
| (産) | 産業経済新聞社編集局       | 「サンケイハンドブック」                    | 産業経済新聞社    | 1957年 |
| (教) | 関俣市・富山民蔵編        | 「新国語表記辞典」のうち文部省著作中学校・高等学校用国語教科書 | 毎日新聞社      | 1950年 |
| (西) | 西日本新聞社           | 「新聞記者手帳」                        | 西日本新聞社     | 1956年 |
| (用) | 日本新聞協会新聞用語懇談会    | 「新聞用語集」                         | 日本新聞協会     | 1956年 |
| (朝) | 朝日新聞社用語課         | 「新聞用語の手びき」                      | 朝日新聞社      | 1956年 |
| (広) | 広田栄太郎            | 「用字用語辞典」                        | 東京堂        | 1956年 |
| (三) | 三省堂編集所           | 「用字用語必携」                        | 三省堂        | 1957年 |
| (読) | 読売新聞社スタイル・ブック委員会 | 「読売スタイル・ブック」                    | 読売新聞社      | 1954年 |

現在社会で行われている各種の基準としてはこれらが代表的なものと思われる。なお教科書の送りがなについては、今日関係各社ごとにそれぞれの基準をたてているようであるが、いろいろの事情で入手することができなかった。やむを得ずこの調査には(教)を用いてこれにかえた。(教)は終戦後の国定教科書の送りがなを基にして編まれたもので、教科書の検定制度が実施されるに際し、その検定基準に、送りがなに関しては、おおむね国定教科書のそれによるべきむね定められたため検定教科書の送りがなの一応のよりどころとなったものである。しかし「おおむね準拠すべき」ものとして示されているので、現行の教科書には(教)とはかなり違った方式をとっているものがある。

### 3. 調査の経過

上述した資料により一々の語についてかなの送り方を調査し、資料により送りがなにゆれのある語とゆれない語とに類別した。この調査では次の点に注意をはらいながら整理する必要があった。

1. 資料が語を網的に示した辞書形式のものではなく実務上問題となる、あるいは誤りやすい語の表記を示すことを目的としているため、収録語が必ずしも多くなく、またかたよりがある。たとえば複合語はことに収録数が少ない。多くの資料は複合語の送りがな的一般原則をその初めに示すことで終り、原則の適用または類推にゆだねている。これに対して、われわれは原則に基いてその複合語の送りがなを作り出すことはせず、語例にあげてある複合語についてのみ調査した。基準のゆれの有無を調べるのが主眼であったからである。
2. 後述するように、資料の性質は必ずしも等しくない。その使用目的の違いが相当はっきりとこの調査の結果には現れている。したがって、ただある語の送りがなの一々の送り方が他方の送り方より数の上で多数を占めていても、それはただちに現在社会において有力な送り方ということにはならない。

### 4. 調査の結果

調査の結果を「送りがなの調査」（プリント版）としてまとめた。以下その要点をとって記述する。

#### 〔動詞〕

#### I 送りがなの一定しているもの

単独の動詞では、その活用語尾を送ることに一定しているものが量的にも最も多いことはもちろんである。これに対して、語幹から送り、その送り方が一定しているものは次の諸語である。

- (1) 味わう 異なる 群がる  
重んじる 省みる 願みる 試みる 軽んじる  
甘んずる 重んずる 軽んずる 先んずる 全うする 安んずる
- (2) 「す」「る」「せる」を語尾にもつ語、たとえば  
飽かす 動かす 切らす 寝かす 及ぼす 等

揚がる 集まる 埋まる 加わる 助かる 詰まる 連なる 等  
 赤らめる 食わせる 狂わせる

(1)の類は本来は単一の語ではなかったと思われるものであり、(2)の類も派生語とも思われる語尾をもつ語である。語幹から送るのは理由がないわけではない。

Ⅱ 送りがなにゆれのあるもの

調査した資料に現れた限りの送りがなのゆれは次のとおりである。

- (1)④ { 誤る 広・教・表・速・読・三・産・今 { 偽る 広・教・表・速・読・三・産  
 { 誤まる 国 { 偽わる 国
- { 浮ぶ 産・国・速・読・公・表 { 承る 広・教・表・速・読・三・産・公  
 { 浮(か)ぶ 広・広の表・三 { 承わる 国  
 { 浮かぶ 教
- { 断る 広・教・表・速・読・三・産 { 費す 表・国・速・三・産・公・読  
 { 断わる 国 { 費(や)す 広  
 { 費やす 教
- { 慎む 広・教・表・速・読・産・三 { 伴う 表・国・速・公・読  
 { 慎しむ 国 { 伴(な)う 広・広の表・三  
 { 伴なう 教
- { 向う 国・速 { 現れる 表・三  
 { 向かう 広・教・表・読・三・産・公 { 現われる 広・教・公・今・用・国・速・読・産
- { 分れる 国・表・用・三・読  
 { 分(か)れる 広  
 { 分かれる 教
- ⑦ { 振う 速・公 { 基く 意・国・速・表・産・三・公・読  
 { ふるう 広・教・表・国・読・産・用・三 { 基(づ)く 広  
 { 基(づ)く 教  
 { もとづく 公
- { 交る 教 { 免れる 広・教・表・国・速・三・読  
 { 交じる 広・表・読・用・三・公 { まぬがれる 産  
 { まじる 国・速
- (2)④ { 荒す 表・速・公 { 合す 速 { 暮す 表・国・速・読  
 { 荒(ら)す 広 { 合わす 広・教・読・国・三 { 暮(ら)す 広・広の表・三  
 { 荒らす 国・速・読・三 { 暮らす 教
- { 過す 速 { 尽す 表・国・速・産・公・読  
 { 過ごす 広・表・教・国・読・三・公 { 尽(く)す 広・三  
 { 尽くす 教

|                                                   |                                             |                                 |
|---------------------------------------------------|---------------------------------------------|---------------------------------|
| { 照す 表・速<br>照(ら)す 広・三<br>照らす 教・国・読・公              | { 果す 国・表・速・公・読<br>果(た)す 広・三<br>果たす 教        | { 上る 国・速<br>上がる 広・教・表・読・三・<br>公 |
| { 下る 国・速<br>下がる 広・教・表・三・公・読                       | { 締る 国・速<br>締まる 広・表・三・教・公・読                 |                                 |
| { 曲る 表・国・速・公・読<br>曲(が)る 広・三<br>曲がる 教              | { 積る 表・国・速・公・読<br>積(も)る 広・三<br>積もる 教        |                                 |
| { 押える 表・国・速・読・三・用・産・公<br>押(さ)える 広・広の表<br>押さえる 教・今 | { 浮べる 表・国・速・読・公<br>浮(か)べる 広・広の表・三<br>浮かべる 教 |                                 |
| { 浮れる 国・速・読<br>浮(か)れる 広・三<br>浮かれる 教               | { 合せる 国・速<br>合わせる 広・教・表・読・三・公               |                                 |
| { 生れる 表・速・読・河・公<br>生(ま)れる 三<br>生まれる 広・広の表・教・今・国・西 | { 確める 公<br>確かめる 広・教・表・国・速・読・三               |                                 |
| { 捕える 広・表・国・速・読・産・三・公<br>捕らえる 教                   |                                             |                                 |

⑨

|                                                       |                                                   |                                           |
|-------------------------------------------------------|---------------------------------------------------|-------------------------------------------|
| { 来す 速<br>来たす 教・国<br>きたす 広・読・産・三                      | { 任す 読<br>任かす 広・表・今・三<br>まかす 国                    | { 分つ 国<br>分かつ 用<br>わかっ 広・教・速・読・三          |
| { 当る 国・速・読・今・公・表<br>当(た)る 広・広の表・三<br>当たる 教<br>あたる 表・西 | { 変る 表・国・公・読<br>変(わ)る 広・広の表・三<br>変わる 教<br>かわる 速・産 | { 替る 読<br>替(わ)る 広・三<br>替わる 教<br>かわる 国・速・産 |
| { 換る 読<br>換(わ)る 広<br>換わる 教<br>かわる 国・速・産               | { 代る 表・公・読<br>代(わ)る 広・広の表・三<br>代わる 教<br>かわる 国・速・産 | { 泊る 国<br>泊まる 広・教・表・読・三<br>とまる 速          |
| { 混る 三<br>混ざる 広・表・読・公<br>まざる 教・国・速                    |                                                   |                                           |

(1)は普通の動詞。(2)は語尾が派生語とも考えられるもの。④は二様の送り方があるもの。⑨は二様の送り方のほかにかながきもあるものである。

(1)④および(2)④を量的にみると次のような特徴が見られる。

a. (1)④では向う、現れるの2語が他の9語と反対の傾向を示し、語幹から送

る方が多い。

b. (2)①では

i 上がる, 合わす, 過ごす, 下がる, 締まる, 合わせる, 確かめる, では大部分の資料は語幹から送る。

ii 暮す, 尽す, 積る, 果す, 曲る, 押える, 浮べる, 浮れる, 捕えるでは大部分の資料が語尾のみを送る。

iii 語尾のみ送る方法と語幹から送る方法とが量的にほぼ均衡がとれているのは, 荒す, 照す, 生れるの3語だけである。

c. (2)②では, 以上のような量的なかたよりは見られない。なお(1)②にも量的なかたよりは見られるが, その少数例が種々の資料に散らばっている点が(1)①(2)①と異なる。

以上, 3種の特徴を資料の性質に関係させてみる。そのためには例外ともいふべき少数の例がどのような資料に現れているかを見てゆく。

a. (1)①では「誤まる・偽わる・承わる・断わる・懐しむ」と書くのは(国)だけであり, 「費やす・貰ぬく・伴なう」と書くのは(教), 「浮かぶ」と書くのは(教)と(表)である。「向かう」と「現われる」は一般傾向に反するが, ここで語幹を送らない方式をとる, 「向う」は(国)と(速), 「現れる」は(表)と(三)に現れている。つまり, (1)①では, ゆれがあるといっても, 国会あるいは教科書が示すゆれがほとんどである。

b. (2)①では

(i) 「上がる」の類7語のうち, 「確かめる」を除いては, 語幹を送らない方式をとるのは(国)と(速)だけである。

(ii) 「暮す」の類9語を語幹から送って「暮らす」と書く方式をとるのはすべて教科書である。わずかに「押さえる」に(教)以外に(今)が現れるだけである。

このように, (2)①でも資料の性質の違いによって著しいかたよりがみられる。

資料にあらわれた単独動詞のゆれは以上に尽きるが, これを要約すれば, 単独動詞については, それぞれの類に一般傾向に反する少数例があるが, これら少数例が生じる原因は資料の性質の違いに基くものである。つまり国会および

速記が採る方式、教科書が採る方式がそれぞれ一般事務・新聞編集関係の採る方式と異なる所がある、ということができる。したがって、問題になるゆれは資料の性質の違いにかかわらずゆれがいろいろの資料に現れている(1)㉔、(2)㉔に属する17語に認められることになる。

それでは、送りがなのゆれは、資料の性質の違いに相応じていて、それぞれの群の資料内部では統一されているかという点、(国)(速)が、(1)㉔ではほとんど語幹を送るに対し、(2)㉔の「上がる」の類では語尾のみを送るという相反した現象を呈し、また(教)が、(2)㉔の「暮らす」の類ではいっせいに語幹から送るのに、(1)㉔では語尾のみを送る方式をとるものが多い。このように一群の資料が一つの送りがな方式で統一されているわけではない。このことは、各級の例外、たとえば(1)㉔の「向う」「現れる」、(2)㉔の「確かめる」における(国・速)、「押さえる」における(今)にも見られる。これらの不統一は活用語尾のみを送るという慣習に対して次のような点を考慮することが原因になっていると思われる。

- (i) 連関をもつ他の語との関係を考えて語幹から送る。現<sub>○</sub>われる←表<sub>○</sub>わす  
上<sub>○</sub>がる←上(のぼ)る 確<sub>○</sub>かめる←確<sub>○</sub>かに 等
- (ii) 読みやすくするため、語幹から送る。向<sub>○</sub>こう 暮<sub>○</sub>らす 尽<sub>○</sub>くす 等
- (iii) ある音節以上を機械的に送る。押<sub>○</sub>さえる 捕<sub>○</sub>らえる 等

以上、単独動詞の送りがなには種々の不統一な面もあるが、概していえば、一般事務・新聞編集関係の資料では原則として活用語尾のみを送り、難読・誤解のおそれのあるものには語幹から送るという方式をとっている。これに対し、教科書はつとめて語幹から送り、誤読のおそれが明らかでない場合には、慣習に従って語尾のみ送るという方式である。この二方式に対して、国会と速記はある場合は前者を、ある場合は後者をとり、必ずしも統一しようとしていないようである。これは速記という特殊な実務の要求に応じたものであらうと思われる。

### Ⅲ かながきにもするもの

この類は、前述したように送りがなとしてみれば一定しているわけであるが種々の送りがなの基準がどのように実際に現れているかという観点からこれをながめる場合、別に一類を立てるべきである。

1. 語尾を送るかかながきにもするもの。

合う 有る 言う 行く 歌う 居る 置く（「…ておく」の形ではかながき）  
構う 見る 過ぎる（「…にすぎない」の形ではかながき） 請ける 慣れる 出  
す 成す 知れる（「かもしれない」の形ではかながき）等

これらは使用度の高い語である。補助動詞として用いられることがあるものがこれらの中には多い。かながきにもするものは、そのためと思われる。上述のほかにもこの類に属する語は多い。たとえば 起る・興る、押す、凝る、悟る、繕う、計る・測る・図る、祭る、降りる、当てる、収める・納める、代える・替える・変える・換える、留める・止める・泊める、別れる・分ける、放す、回す、立てる、破れる 等

しかし、これらでかながきを採るものは一、二の資料にとどまり、大部分の資料では語尾を送る方式をとる。ここで注目されるのはかながきを採るのはほとんどが（国）と（速）であることである。新聞関係では（産）のみが時々かながきを採っている。また、「おこる・はかる、おさめる、かえる、とめる」のように、それにあてるべき漢字がいくつかあり、その使い分けがある場合、わずらわしさをかながきにすることによって避けようとする意図がうかがえる。

2. 語幹から送るかかながきにもするもの

縮かむ 和らぐ° 揺する° 揺らぐ° 混じる°  
表わす 踊らす° 脅かす 降ろす° 疑らす 懲らす 閉ざす  
慣らす° 抜かす 震わす° 紛らす° 蒸らす 煩わす  
修まる° 収まる° 納まる° 掛かる° 決まる° 窮まる° 静まる 携わる  
止まる° 留まる° 丸まる° 焦がれる 平らげる° 和らげる°

ここでも、○印を付けた語は（国）と（速）ではかながきにしていることが注目される。（教）がかながきを採るのは「閉ざす、蒸らす、携わる、焦がれる、平らげる、揺する、揺らぐ」である。

3. 語幹から送るか、語尾を送るか、またはかながきにするもの

「ゆれのあるもの」の項に掲げた。

以上、かながきにもする語は調査資料には相当数現れるが、かながきのほうが普通になっている語は案外少なく、次の5語である。

わかる、こうむる、たぼねる、ふるえる、ひやかす。

また、かながきしかない語は次のとおりである。

あそばす、いただく、おっことす、こづく、ごまかす、しまう、つまづく、なくす、なくなる、ふるまう、めいる、もくろむ、ゆすぶる、ゆるがす、おっこちるできる、ゆすれる、けしかける。

これらを採るのは一、二の資料にとどまらない。したがってかながきが安定した書き方になっているものである。

### 〔複合動詞〕

複合動詞で送りがなが問題になるのは、前半の動詞の送りがなに起るゆれである。このゆれがなく、一定した書き方をする語は調査した資料の範囲では非常に少ない。これは資料が複合動詞をあまり例示していないことにもよるのであろう。

1. 落着き払う、引直す、引離す（語尾のみ送るもの）  
生まれ合わす（一落ちる）（語幹から送るもの）
2. 取っかかる（一払う） 取り合う（一急ぐ、一おろす、一囲む、一殺す、一さばく、一去る、一ずがる、一散らす、一はずす、一ひしぐ、一回す、一下げる、一のける、一分ける） 打ち砕く（一建てる、一のめす） 差し向ける（語尾のみを送るもの）  
打取る（語尾を送らぬもの）

2は接頭語とみるべきものかもしれない。これに対し、ゆれのあるものは、その数は多いが、この場合、前半の動詞の語尾を送っていないのは、ほとんど（読）か（速）に限られていて、わずかに次の数語が他の資料で採られているにすぎない。

1. 締出す、染直す、立上る、引延ばす
2. 打抜く（一破る） 取上げる（一入れる）

しかし、新聞関係では、（読）ばかりでなく、大半が前半の活用語尾を送らない方式を実際にはとっているようである。

なお、動詞が単独に使用されたとき、送りがなにゆれのあるものは複合しても同様にゆれを示す。

|      |       |            |           |         |
|------|-------|------------|-----------|---------|
| 向い合う | 向かい合う | 生れ変る       | 照(ら)し合わせる |         |
|      |       | 生(ま)れ変(わ)る |           | 照らし合せる  |
|      |       | 生まれ変わる     |           | 照らし合わせる |

要するに、複合動詞の前半の送りがなは（読）と（速）がこれを省き、その他の資料では送るという形でほぼ安定しているということができる。

〔形容詞〕

形容詞の送りがなはほとんど安定している。ゆれを示すのは、次の語にすぎない。

|                                                                                        |                                                                                           |                                                                                           |                                                                                               |
|----------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|
| $\left\{ \begin{array}{l} \text{危い} \\ \text{危(う)い} \\ \text{危うい} \end{array} \right.$ | $\left\{ \begin{array}{l} \text{表・読・三・公} \\ \text{広} \\ \text{教・国・速} \end{array} \right.$ | $\left\{ \begin{array}{l} \text{少い} \\ \text{少ない} \end{array} \right.$                    | $\left\{ \begin{array}{l} \text{国・速・公} \\ \text{広・教・表・読・産・今・朝・三・公} \end{array} \right.$       |
| $\left\{ \begin{array}{l} \text{短い} \\ \text{短かい} \end{array} \right.$                 | $\left\{ \begin{array}{l} \text{広・教・読・表・三・公} \\ \text{国・速} \end{array} \right.$           | $\left\{ \begin{array}{l} \text{明るい} \\ \text{明(か)るい} \\ \text{明かるい} \end{array} \right.$ | $\left\{ \begin{array}{l} \text{国・速・読・公} \\ \text{広・広の表・三} \\ \text{表・教} \end{array} \right.$ |

（国）（速）が、「少い」を採りながら、一方では「危うい」「短かい」を採っているのは注目される。

かながきにもするものは次のとおりである。

淡い 潔い 堅い 難い 臭い 無い 丸い 良い 悪い  
細かい 眠たい

痛々しい 著しい 麗しい 雄々しい 悔しい 詳しい 寂しい 等しい 優しい

しかし、かながきをとるほうが普通なのは「痛々しい、悔しい、無い、良い」だけである。

他の品詞に派生語がついて形容詞となるものでも、その送りがなは安定している。ゆれを示すのは動詞をもととする次のものである。

|                                                                                            |                                                                                           |                                                                                             |                                                                                           |
|--------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|
| $\left\{ \begin{array}{l} \text{恥かしい} \\ \text{恥ずかしい} \\ \text{はずかしい} \end{array} \right.$ | $\left\{ \begin{array}{l} \text{国・公} \\ \text{広・教・表・三・読} \\ \text{速} \end{array} \right.$ | $\left\{ \begin{array}{l} \text{紛わしい} \\ \text{紛らわしい} \\ \text{まぎらわしい} \end{array} \right.$ | $\left\{ \begin{array}{l} \text{公} \\ \text{広・教・表・三・読} \\ \text{国・速} \end{array} \right.$ |
|--------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|

〔形容動詞〕

形容動詞の送りがなも次のような形で安定している。

(1) 語幹末一字から送る

新た 愚か 静か 盛ん

(2) 語幹末二字から送る

穏やか 清らか

(3) 形容詞と共通語幹に接尾辞「げ」のついたもの

暖かげ 怪しげ 危うげ

ゆれのあるものはないが、かながきにもするものには次のものがある。

豊か 浅はか 花やか

後の二つはほとんどの資料がかながきを採っている。

[名詞]

名詞の送りがなで問題になるところは、活用語（特に動詞）から転じた名詞（複合名詞をふくむ）である。すなわち、活用語本来の送りがなをつけるか、誤読、難読の恐れがないとして、その送りがなの一部または、全部をはぶくかどうかということである。

1. 取り扱った資料のほとんどが誤読、難読の恐れがないとして送りがなをはぶいた語例

隣 話 貸家 建物 気持 役割 受付 取引 待合室 吸取紙 等

2. 活用語本来の送りがなをほとんどの資料が送っている語例

- (1) 一字を送るもの

憂い 書き方 思い出 値上げ 居限り 歩み寄り 等

- (2) 二字を送るもの

味わい 憎まれ口 向こう払い 根絶やし 見計らい、寄り集まり 等

3. 資料相互で送りがながまちまちな語例

- (1) 送らぬ、一字を送るの対応があるもの

|   |      |       |   |       |           |   |       |       |
|---|------|-------|---|-------|-----------|---|-------|-------|
| { | 祝    | 表・読   | { | 控 室   | 国・表・速・公・読 | { | 届出    | 公・国・速 |
|   | 祝(い) | 広・三   |   | 控(え)室 | 広・三       |   | 届(け)出 | 広・三   |
|   | 祝い   | 教・速・国 |   | 控え室   | 教         |   | 届け出   | 教・読   |

|   |        |         |   |        |       |   |       |     |
|---|--------|---------|---|--------|-------|---|-------|-----|
| { | 買出し    | 表・速・読・公 | { | 取 扱    | 表・公   | { | 首飾    | 表・読 |
|   | 買(い)出し | 広・三     |   | 取扱い    | 国・速・読 |   | 首飾(り) | 広・三 |
|   | 買い出し   | 教・国     |   | 取(り)扱い | 広・三   |   | 首飾り   | 教・国 |
|   |        |         |   | 取り扱い   | 教     |   |       |     |

|   |       |           |   |        |     |      |       |     |
|---|-------|-----------|---|--------|-----|------|-------|-----|
| { | 支 払   | 今・表・読・河・公 | { | 飢え死    | 読   | {    | 照 焼   | 読   |
|   | 支払(い) | 広・三       |   | 飢え死(に) | 広・三 |      | 照(り)焼 | 広・三 |
|   | 支払い   | 教・国・用・速   |   | 飢え死に   | 教・国 |      | 照り焼   | 教   |
|   |       |           |   |        |     | 照り焼き | 国     |     |

|   |          |     |   |          |     |
|---|----------|-----|---|----------|-----|
| { | 貸切       | 読   | { | 組立       | 読・公 |
|   | 貸(し)切(り) | 広・三 |   | 組立て      | 速   |
|   | 貸し切り     | 教・国 |   | 組(み)立    | 三   |
|   |          |     |   | 組(み)立(て) | 広   |
|   |          |     |   | 組み立て     | 教・国 |

(2) 一字を送る, 二字を送るの対応があるもの

|   |           |           |   |           |             |   |       |         |
|---|-----------|-----------|---|-----------|-------------|---|-------|---------|
| { | 集り        | 読・公       | { | 見積り       | 広・表・国・三・公・読 |   |       |         |
|   | 集(ま)り     | 広         |   | 見積もり      | 教           |   |       |         |
|   | 集まり       | 教・表・国・速・三 |   |           |             |   |       |         |
| { | 手合せ       | 国・速・読     | { | 取計い       | 公・読         | { | 病み上り  | 国・速     |
|   | 手合(わ)せ    | 広・三       |   | 取(り)計(ら)い | 広・三         |   | 病み上がり | 広・教・三・読 |
|   | 手合わせ      | 教         |   | 取り計らい     | 国           |   |       |         |
| { | 組合せ       | 表・読・公・速   | { | 埋合せ       | 表・公         |   |       |         |
|   | 組(み)合(わ)せ | 広・三       |   | 埋め合(わ)せ   | 広           |   |       |         |
|   | 組み合わせ     | 教         |   | 埋め合わせ     | 教           |   |       |         |
|   | 組み合わせ     | 国         |   | 埋め合せ      | 速・国         |   |       |         |
|   |           |           |   | 埋合わせ      | 読           |   |       |         |
| { | 向い合せ      | 速・国       |   |           |             |   |       |         |
|   | 向かい合わせ    | 広・教・三・読   |   |           |             |   |       |         |

(3) 送らぬ, 一字を送る, 二字を送るの対応があるもの

|   |           |     |
|---|-----------|-----|
| { | 取締        | 表・公 |
|   | 取締(り)     | 三   |
|   | 取締り       | 国・読 |
|   | 取(り)締(まり) | 広   |
|   | 取り締まり     | 教   |

以上のように、語構成の面からみると、動詞連用形+動詞連用形からなる複合名詞には、送りかたにさまざまな種類があることがわかる。次に資料の面からみると、一般事務・新聞編集関係では、単独名詞も複合名詞の前半の語も、誤読・難読の恐れがないとして送らぬ傾向が強く、自他の対応がある動詞からの転化名詞なども、語幹末一字から送ってない。教科書系統はその反対で読みやすくする方針のもとに、できるだけ活用語尾あるいは語幹末一字から送っている。国会は、速記がどちらかといえば少なく送るのに対して、多く送る傾向をもつ。たとえば、単独名詞では、頂き、趣き、答え、包み、務め、問い、と教科書系でも送ってないものに国会では送っている。しかし、

卸, 係, 届, 雇, 割, などは送ってない。複合名詞では, 教科書系をのぞいた他の資料が, ほとんど前半の語を送ってないのに国会だけ送っている。たとえば, 受け入れ, 売り切れ, 押し入れ, 買い上げ, 書き出し, 聞き込み, 切り下げ, 繰り込み, 立ち入り, 詰め込み, などである。

#### 4. 三語以上の複合名詞の傾向

二語の複合名詞が三語の複合名詞になった場合は, ほとんどの資料が誤読難読の恐れがないとして, あるいは慣用として送りがなをつけない傾向が強い。たとえば次のようである。

- (1) 見張り 広・教・表・国・速・三・読 → [見張番] 広・教・三・読
- (2)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{売上げ} \quad \text{表・速・読} \\ \text{売(り)上げ} \quad \text{広・三} \\ \text{売り上げ} \quad \text{教・国} \end{array} \right. \rightarrow \text{[売上金]} \text{ 広・教・国・三・読}$

(2)の類には次のような語例がある。〔借入金〕〔繰越金〕〔繰入金〕〔引揚者〕〔呼出電話〕〔貸出金〕〔立合(会)人〕〔引受人〕〔引込線〕〔引取人〕〔申込書〕

#### 5. 複合名詞と複合動詞との間における前半の語の送りがなのちがいは

動詞でのゆれは, 名詞に転じてもほとんどそのまま受けつがれているが, 複合動詞と複合名詞での前半の語の送りがなはどうであろうか。その結果は, 次にあげる語例のように, 名詞では前半の語を送らない資料でも動詞になると, 前半の語を送る傾向がみられる。

- $\left\{ \begin{array}{l} \text{受入れ} \quad \text{広・表・速・読・三・公} \\ \text{受け入れ} \quad \text{国} \end{array} \right. \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{受入れる} \quad \text{速・読} \\ \text{受け入れる} \quad \text{広・教・表・公・国・三} \end{array} \right.$
- $\left\{ \begin{array}{l} \text{話合い} \quad \text{表・速・読} \\ \text{話(し)合い} \quad \text{広・三} \\ \text{話し合い} \quad \text{教・国} \end{array} \right. \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{話合う} \quad \text{読} \\ \text{話し合う} \quad \text{広・教・速・三・国} \end{array} \right.$
- $\left\{ \begin{array}{l} \text{譲渡し} \quad \text{公} \\ \text{譲(り)渡し} \quad \text{三} \\ \text{譲り渡し} \quad \text{広・国・速・読} \end{array} \right. \rightarrow \text{譲り渡す} \text{ 広・教・国・三・公・読}$
- $\left\{ \begin{array}{l} \text{受取} \quad \text{広・教・表・今・朝・用・読・河・三・公} \\ \text{受取り} \quad \text{速・読} \\ \text{受け取り} \quad \text{国} \end{array} \right. \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{受取る} \quad \text{速・読} \\ \text{受け取る} \quad \text{広・教・表・国・三・公} \end{array} \right.$

#### 6. かながき

動詞のばあいと同じく複合名詞も, 後半の語の表記をかながきにしているものが現在多くなっているのではないだろうかという見通しのもとに送りが

なの調査と並んで正書法の観点から、漢字で書かれる名詞、かなで書かれる名詞、まぜ書きの名詞の調査を行った。次にながきの語例をあげる。

(1) 全部かながきの語例

\*たてまえ \*おりふし \*はがき \*ものさし \*おりおり さしがね ありさま ひっ  
かかり \*あたりまえ \*ひとめぐり \*きもいり \*しあわせ \*むかっばら \*こまぎれ  
\*おこない ふるまい だしぬけ \*とりきめ

(2) 前半の語がかながきの語例

でき合い つき合い(あい) \*くされ縁 \*すてばち \*ゆくえ \*よるべ \*こづかい  
\*かるはずみ \*できばえ

(3) 後半の語がかながきの語例

- (a) △考えごと △尽きめ 粘りけ △笑いもの △売りことば △申しぶん △持ちまえ  
(b) 心がけ 手ごたえ 気がね 気がかり 裏づけ まぐれあたり △落ちつき △振  
りつけ △引きかえ 気づまり  
(c) 口ぶり 男だて 顔だち 顔つき

[注] \*は、多少は漢字で書いてあるものもあるが、ほとんどの資料がかながき  
のもの。下線は当用漢字で書けない語。△は一定の資料のみがかな書きをし  
ているもの

(1)全部かながきになっている語については、漢字のもつもとの意味がその語としてはうすれてきているばあいとか、一語としての意識が強くなっているばあいとかいう理由づけができそうである。(2)についても、同じことが言えそうであるが、もう一つはだきあわせをきらうので、かな書きにしたと言えるかもしれない。しかしこれだけの語例ではなんともいえない。(3)この中では前述したように教科書系統の資料とか、国会の用語集とかの特定の資料がかな書きをとっているばあいが多し。たとえば、「もの」は速記・国会、「め」は教科書がかながきをしている。ただ、接尾語的につかわれている語はかながきにする傾向が強いと言えそうである。しかし、以上述べたように、この調査だけではこの語はかならずかながきとして表記されるとは言えない。

〔副詞〕

本来の副詞では、たとえば、「少し」「必ず」「再び」「最も」と一字を送り、または、「直ちに」「大して」と二字を送り、活用語と関連をもつ副詞では、その活用語の語尾から送る(思わず・重ね重ね・等しく・明らかに等)という法

則は安定したものになっているが、諸資料とも、当用漢字表の「使用上の注意事項」の中の「副詞・接続詞・連体詞等はなるべくかながきにする」の項の  
とって、右にあげたような本来の副詞ばかりでなく、他の品詞と関連をもつ  
「勢い・幸いに」や「至って・決して・努めて・果して・翻って」、「至る所・  
相変わらず」などの類までも、漢字を用いる一方、かながきをも採用している。  
ゆれのあるものとしては、「生まれながら」と「生れながら」が、動詞の送りが  
なのゆれを副詞にもそのまま持ち込み、「折り入って・折入って・（おりい  
って）」が、複合動詞前半の送りがなのゆれをそのまま伝え、「少なくとも・少  
くとも」が、同様形容詞のゆれを伝えているくらいのものである。

#### 〔接続詞〕

接続詞でも、「及び・且つ・又は・若しくは・従って・並びに」は漢字を用  
いる一方、かながきをも採用する資料が多い。というよりも漢字を用いるのは  
国会・速記あるいは憲法という、特殊性のある資料に限られている。接続詞に  
関しては、副詞よりもいっそうかながきのうつりゆきの度合が早いようである。

#### 〔連体詞〕

ゆれがあるのは

|   |     |         |
|---|-----|---------|
| { | 来たる | 教・表・国   |
|   | 来る  | 速       |
|   | きたる | 広・読・産・三 |

だけである。その他の連体詞にはかながきにするものが多い。

#### 〔結 び〕

以上、品詞別に述べたが、概括すれば送りがなのゆれは、どの品詞でもそん  
なに多いものではないということが明らかになった。一見ゆれがはなはだしく  
見えるものでも、一二の資料のたてる基準が他の資料のそれと違うために起る  
ものであり、大部分の資料の間では安定しているという場合が多い。ただ、国  
会と速記はそのたてる基準に必ずしも統一がないこと、さらに相当数の語をか  
ながきにしている点が特徴をなしている。注目すべきゆれといえば、動詞では  
(1)㊥、(2)㊥に属する17語、形容詞では「明るい・危い・短い・少い・恥かしい  
紛わしい」くらいのものであるが、複合動詞から転じた複合名詞には、もとの

動詞のゆれをそのままもちこむためにゆれているものが多い。送りがなは一つの語がその送り方に慣習をもっているために、これを画一的に法則化することは容易ではない。この解決は、そのなう慣習と文法的な法則化との妥協をどこではかるかにかかっているといえるが、それを一つの語について吟味しなければならない所に困難がある。調査した資料から得る帰結はこのようなものである。また、資料の中には、積極的にながきを採用するものもあった。これは送りがなを別の観点から処理する行き方である。しかし、この方式を最も妥当な線で採り入れるためには、かながきにしたために、文中ではかえって読みにくくなる恐れがないかという点が常に考慮されなければならないのではあるまいか。

(松尾・大久保)

## II. 漢字の字体に関する基礎的研究

この研究は、年報8に述べたように、実際には中共の漢字簡素化を材料として、漢字字体の簡略化及びこれに伴う諸問題を調査研究するものである。漢字簡素化を含む中共の文字改革は、人為的に行う言語政策の一環として目下進行中のものであるが、この研究は、その文字改革全般の動きの中から上記諸問題をうかがおうとするものであり、そして今日までの調査研究のうち、諸情勢よりみて重要と思われるものは次のとおりである。

1. 人為的に行う文字政策として、中共がいかなる手続をとってきたか、その経過の大体を、漢字簡素化の点から記すと次のとおりである。

1955(昭和30)年1月、中国文字改革委員会(國務院直屬)は「漢字簡化方案草案」を公表した。これは、簡体字(略字)として798字、整理統一すべき異体字として400組、手写における偏旁簡略体として251種、の標準を示したものである(その序文中には、「文字はぜひとも一定条件のもとで改革されねばならない」、その方向は「世界共通たる音標化の方向に進むべきだ」という毛沢東の語が引用されている)。この草案は、江湖の批判修正を受けてのち國務院から正式に公布する、という前提のもとに公表されたものである。この手続、まず草案を広く一般に公表し、ある期間の批判・討議・修正を経たのちに正式方案として公布するという手続は、重要な施策に対しては中共がよく行う

方法であって、かつての憲法も現下の農業綱要も同様である。この漢字簡化草案も同様に、公表後各方面の批判修正を受け、また同'55年10月の「全国文字改革会議」にも上程された。かように批判にゆだねる一方、草案中の一部、最も問題のないと思われるものは、「人民日報」以下の新聞や一般雑誌において「試用」することとなり、草案公表後の1年間に3回に分けて計261字が次々と試用されていった（'55年5月から57字、8月から84字、'56年1月から120字）。また'55年11月教育部は、各学校において簡化漢字を推進すべき旨、また公用文から学生のノートに至るまで横書にすべき旨の通知を出している（ちなみに、横書横組についていえば、'55年元旦から新聞「光明日報」が横組となり；同10月の全国文字改革会議で公用文・新聞・図書の間組横書が決議され；'56年元旦から「人民日報」が縦組となり；同1月18日付で國務院秘書庁から公用文の横書横組の通知が出されている）。

かように、草案に対して討論修正と一部試用が行われたのち、1956年1月末國務院は「漢字簡化法案」を公布した。これは、公認字体として決定した簡体字230字(第1表)、今後一般に「試行」すべきものとして285字(第2表)、偏旁簡化として54種、という形式である（偏旁簡化とは、たとえば纒→亦と規定し指示することによって、変弯湾蛮恋などの関連する字が自動的に一括して成立してゆく方法）。これを草案と比較すると、前記「試用」中の2字は1字に合併され(𠂇𠂇→𠂇)、試用中の30字は偏旁簡化扱いとなり、また草案中の一部は後述の異体字整理扱いとなっていて、すなわち草案は、簡略化の扱い方についても個々の字についても、かなりの修正や変動が行われた。第1表230字とは前記「試用」のものであるが、これは同2月1日から全面的に公式に用いられることとなった。一般新聞図書についていえば、更にこのほかに前記偏旁簡化扱いとなった30字が行われ、また第2表中の95字が'56年6月から、70字が'58年5月から「試行」されている。国語の教科書や一部特殊な図書では、第2表まで含めて全部が行われ、更にそれらの一部では、偏旁簡化の多くも実行されている。

なお草案にあった異体字整理は、'56年の國務院公布からははずされているが、すでに'55年12月に文化部と文字改革委員会との共同名義で発布され、や

はり '56年2月から実施された。この第1回整理では、810組1,865字のうち1,055字を異体としてふるいおとし、810字を規定した。異体字という場合、たとえば韻と韻、汚と汙、庵と菴（それぞれ前者を使用することに規定）などの類は、常識上でも単なる異体と考えられるが、しかし厳密に考えてゆくと異体字という概念にはかなり不明の点がある。たとえば第1回整理表の中でも、（以下挙例中括弧内を廃止する）泪（涙）、昇（興）、灾（災）、杰（傑）、吃（喫）、窗（窓）などがあり、また分化学の廃止、果（菓）、周（週）、志（誌）の如きも含まれている（字種制限を意図としたこれら同音代用については別に後述する）。

以上が、漢字簡素化として行われつつある具体的手続の概略である。以上の経過からも分るように、中共が今日行っている漢字簡素化は、字種の制限と字体の簡略（中国語でいえば字種精簡と筆画精簡）とによるものであり、その具体的実施は「ゆるやかに順を追って」（穩歩前進，逐漸簡化）という方針によっている。なお付言すれば、字種と字体の二点から漢字簡素化に着手することはわが日本も中国も共通である。ただ日本の場合には、その言語的、歴史的条件のため、このほか更に音訓の整理という問題があるが、中国の場合には、この問題は本質的には存在しない。

なお現在の分期漸次簡化という方針に対しては、全面一律簡化をとなえる反対論もある。その主張は、現在のように一定期間においては一定字数ずつ改変してゆくのは非常な浪費である；そのたびに新聞図書、公用文、教科書などに変化を生ずるし、ことに古典の処置には混乱を伴う；初学や文盲の識字においても大きな浪費を伴うし、また現在すでに漢字を知り用いる者にとっても絶えざる負担を強制するものだ；それよりも今日われわれが漢字に対してもつ類推力を駆使して、目標の一定字数を一挙に改変する方が、浪費も少ないうえにより早く効果があがるではないか云々というものである。この説を実行するためには、字体を簡略化する技術上にも今日とは異った方法が要求されるし、また活字鑄造という経済上の大問題もあって、その実行は容易なものではない。しかし日中ともに、今後の漢字改革には考慮さるべき問題かと思われる。

なお、政治権力によって政策として行われる文字改革そのものに反対する論

も、ないではないようである。この考は、'57年に抬頭したいわゆる右派の言論中に一端を現わしているが、その主張は、文字というものは文化現象でありことに伝承性の強いものだ；かかる文化遺産は時の政治権力によって左右さるべき筋合のものではないし、また、不可能なことだ；唐の則天武后はわずか19字（e. g. 日→☉, 星→○, 臣→惡など）を強行しようとして失敗したではないか；もし現在文字について整理改善をはかろうとするなら、それは純粹の文化関係者によって討議さるべきものであって、強制を伴う政治権力は介入すべきではない云々というものである。しかしこの説は、今日の文明社会を対象とするとき、社会観・社会制度の如何を問わず、非現実的なもののように思われる。

2. 個々の簡体字について、その構成を概観すれば次のとおりである（分類も大体であり、挙例も一部である。なお△印のものは未公認である）。

A. 字形・筆画を簡略化したもの

1. 旧繁体の一部を符号化したもの

- 又 { 戏(戏剧) 对 汉 难 叔 观 欢 鸡 仅 凤 邓 树 双 撰 婁 叔△  
 戲(戲劇) 对 漢 難 權 觀 歡 鷄 僅 鳳 鄧 樹 双 撰 轟 擅  
 { 坟△又△  
 { 堆 觀
- 云 { 层 尝 偿 动 会 夙△〔坛 耘△邳△馱 运(运动会)〕  
 層 嘗 償 動 會 夙 壇 檀 鄆 馱 運(運動會)  
 括弧内は形声とも考えられるもの。c. f. 日本の云, e. g. 伝転耘△法△佞△
- 扌 { 执 报 热 塾 势 塾△褻  
 執 報 熱 塾 勢 塾 褻
- 不 { 怀 坏 还 环  
 懷 壞 還 環

2. 繁体の一部の省略, 或は他の方法による字形簡化

- { 业(农业) 电 务 隶 录 类 亲 杂 丽 寻 奋 夺 归 扫 妇  
 { 業(農業) 電 務 隸 錄 類 親 雜 麗 尋 奮 奪 歸 掃 婦
- { 飞 儿 兎△广 扩 犷△产 开 术 气 悬 垦 董 际 标 宁 厅  
 { 飛 兒 兎 廣 擴 犷 產 開 術 氣 懸 墾 董 際 標 寧 庁
- { 币 灭 仓 疮 荻 秧△盘 委△恶 虑 虜 过 迥△爰 罗 陆  
 { 幣 滅 倉 瘡 荻 秧 盤 委 惡 慮 虜 過 迥 爰 羅 陸
- { 泽(毛泽东) 译 彑△匕△忌△大△亓△彡△桂△誼△賤△扌△沪△彳△  
 { 沢(毛沢東) 訳 彑 能 態 戴 出 無 構 講 購 按 編 飛

{ 无 薳△ 喆△ 杰 泪 昇 吊 义 仪 议  
 { 無 算 哲 傑 淚 異 弔 義 儀 議

3. 草書の楷書化

{ 发(发电) 废 为 伪 农 浓 脓 东 冻 练 炼 乐 专 传 转  
 { 発(發電) 廃 為 偽 農 濃 膿 東 凍 練 煉 楽 專 伝 転  
 { 书 韦 伟 违 孙 逊 长 胀 在△ 夸△  
 { 書 韋 偉 違 孫 遜 長 脹 在 無

B. 会意法によるもの

4. { 尘(灰尘) 蚕 休 灶 笔 护(拥护) 阴 阳 豨△ 込△ 垫△ 卒△  
 { 塵(灰塵) 蚕 休 竈 筆 護(擁護) 陰 陽 飛 進 野 聞

ちなみに、これらは決して今回の創造ではなく、旧来伝えられたものであり、たとえば、尘は「字彙補」に古字としてみえるし、また阴阳などはわが江戸期刊本にも往々みかけるものである。なお漢字は、いわゆる望文生義が可能で、たとえば上記の灭、これは今次の改革に際して創造された唯一の文字であるが、この灭字は「野火を消すには、もえる火の上に棒をふりかざす」ことに由来する会意字なりと説くものがある。

C. 形声法によって一部を改めたもの

5. { 艺(艺术) 亿 忆 肱△ 呓△ 妃△ 迄△ 益△ 私△ 沆△ 扈△ 迄△ 拥 侷  
 { 芸(芸術) 億 憶 臆 噫 姨 遺 益 移 液 揖 疫 擁 僂  
 { 痾 堀△ 种 肿 钟 重△ 迂 紆 疗 辽 仵△ 町△ 宾 滨  
 { 癒 堀 種 腫 鐘 衆 遷 糞・織 療 遼 僚 瞭 賓 浜  
 { 优 扰 犹 兰(兰花) 栏 拦 烂 邮 恣 战 递(通信) 肤 裒  
 { 優 擾 猶 蘭(蘭花) 欄 攔 爛 郵 態 戰 遞(通信) 膚 褻  
 { 葯 华 阶 极 砗 洁 桔△ 枸 沟 购 讲 訛 詛△ 酿 祥 运 馱  
 { 薬 華 階 極 礎 潔 橘 構 溝 購 講 讓 讓 醸 様 運 馱  
 { 响 惊 职 织 识(認識論) 积(积极) 跃 厉 卫(卫生) 征△ 衍△  
 { 響 驚 職 織 識(認識論) 積(積極) 躍 歴・曆 衛(衛生) 衛 衛

ここにいう形声文字とは、今日の結果からみて、半形半声の構成なるものをいい、字源的に云々される諧声文字ではない。形声の声符が字音の音節全部を正しく示すとは限らないのは歴史的な事実であるが、上例中の訛や讲なども同様な構成である。末例の卫は、わが片仮名に由来する。

D. 同音代用によるもの

6. { 丰 (丰産) 范 才 后 几 (幾何) 丑 秋 千 (秋千) 果 (果子)  
 { 豊 (豊産) 範 讎 後 幾 (幾何) 醜 鞦 韆 (鞦韆) 菓 (菓子)

これら同音代用は、言語政策上意図的に多く規定され、'56年方案中だけでも90余組が指示されたが、これについては後述する。

以上が公表を主とする簡体字であるが、このほかことに解放前後には、いわゆる複合字(複音詞字・合体字)、たとえば

解(解放) 問(問題) 什(什麼; what?) 干(干部) 團(青年團)  
 共(共産党) 幣(人民幣) 工(工人階級) 資(資産階級)  
 帝(帝國主義)

などの類が一部に行われたという。いったい殷虚出土の亀甲文字には「十三月」(潤年)や「五千」をそれぞれひとかたまりの1字にした複合字があるし、日本でも合字とか省文とよばれて、古くは麿(麻呂)、号(善導)、辻(浄土)など、近くは圖(図書館)の類が一部に行われた。しかしこれらは、遂に正式文字とはなりえなかった。いわゆる簡体字は、依然として本来の漢字の性質、すなわち1語1音節1四角という原則からはずれなかったのである。これは、今後にも注意すべき現象かと思われる。

なお日中の字体を対照して、字形はきわめて類似しながら全く別義異字なるもの的一端をあげると;日本の壳(うる)と中共の壳(殼;日本補正案の字):日本で経径莖などの旁たる圣(近来は圣由東京駅の如く独立して使用される)は、中国では「聖」の略体「圣人=聖人)であり、中国では莖→圣(スとエ)たとえば経径莖である、などがある。

以上が現在の簡体字の大略である。わずかな上例からも分るように、簡体字の大部分は、多少なりとも現実に通行するものを主体としており(公認中のものでは滅1字が新造である)、従って方針として「俗に通用するもの」(約定俗成)とよばれる所以である。これらを、前述のように「穩歩前進、逐漸簡化」しようというのが今日の動きである。しかし同時に、過渡期には多少の混乱と浪費を伴うこと、また漢字相互間に系統的連関を失いがちであること、を招来することも前述のとおりである。

以上の分類からも分るように、簡体字の構成の多くは、上記AとCとである

(これは歴史的にみても然りである)。わが日本の場合は、多くはA, すなわち純粹の字形簡化である。わが国にも、杵・許・杻・屮・屮(機織権層屋)のように、日本的に字式を改変した略字はないではないが、この類はきわめて少なく、大部分は字形簡略のものである。また歴史的にみても、かつて日本の一部では「遷」の形声略字として「迂」を使ったことがあるが(中国では迂=遷)、遂に一般化しなかった(今日では遷→遷; 中共は→选)。こうした傾向にこそ、母国語の文字として漢字を操る中国人と、本質的には異国語の文字たる漢字を借用する日本人との差が象徴されているように思われる。今後、日本で簡化を意図するときには、杵よりは棧; 職織識については中共の职織识よりは戔絨綫(綫はかつて用例がある)のほうが妥当かと思われる。主として視覚的にのみ漢字を扱う日本人には、字形簡化の中でも、旧繁体の大体をハウフツさせる、いわゆる輪廓字[e. g. 无(無) 龟(過) 马(馬) 鸟(鳥)の類]が、無難かと思われる。

最後に、中共での現行の一例を、陳毅の詩の一節で例示する。

病苦最<sub>ㄉ</sub>难<sub>ㄉ</sub>当 此中无<sub>ㄉ</sub>豪<sub>ㄉ</sub>雄 吾病犹<sub>ㄉ</sub>如此 轉<sub>ㄉ</sub>念及工<sub>ㄉ</sub>农 医<sub>ㄉ</sub>药<sub>ㄉ</sub>两<sub>ㄉ</sub>缺乏  
 生<sub>ㄉ</sub>死<sub>ㄉ</sub>等<sub>ㄉ</sub>蚁<sub>ㄉ</sub>虫 社会<sub>ㄉ</sub>制度<sub>ㄉ</sub>坏 病<sub>ㄉ</sub>亦<sub>ㄉ</sub>分<sub>ㄉ</sub>富<sub>ㄉ</sub>穷 誰<sub>ㄉ</sub>能<sub>ㄉ</sub>疗<sub>ㄉ</sub>此<sub>ㄉ</sub>疾 马<sub>ㄉ</sub>列<sub>ㄉ</sub>人<sub>ㄉ</sub>中<sub>ㄉ</sub>龙  
 (。印の字は、難・無・猶・転・農・藥・阿・蟻・壞・窮・療・馬・竜)

3. 上記「方案」によれば、個々の簡体字として提出されているものは全 515 字であるが、偏旁簡化を一律に適用すれば、字体を改変するものは、常用字を六七千として、1,700 以上に及ぶと計算される。文字改革委员会主任・呉玉章の報告によると、常用字六七千字の半ばまでを簡化する方針とのことゆえ、現在の成果は予定の大体半分というわけである。また同報告によれば、今日の簡体字('56年方案の第1表と第2表)と旧繁体とを比較すると、

旧繁体で全 544 字 平均筆画数 16.08 画

簡体字で全 515 字 平均筆画数 8.16 画

(総字数が異なるのは、たとえば臺臺颱→台の如く、旧体の数字を1字に合併して簡化したことによる。cf. 日本の辨辯辯→弁)

10画以下の字 旧繁体で 34字 簡体で 409字

11画の字 " 35字 " 35字

12画以上の字 旧繁体で 475字 簡体で 71字

更に、第1・2表の全 515 字に対して、方案が規定する偏旁簡化を行うと（貝→贝，見→见，言→讠の類），平均画数は上記 8.16 画がさらに 6.5 画と減少する。これは、旧繁体の16画に比べて40%強に当る簡化である。ちなみに、わが当用漢字 1,850 字についていえば、平均画数は12画，10画以下の字は 979 字，11画は 178 字，12画以上は 693 字である。

画数の多い字は、時にその識別上に抵抗を伴う、ことに旧時の木版本の大活字に比べて、今日の小活字の場合とはくに然りである。が、6～8画で適当に構成された簡体字は、かかる難点を大いに改善した。更に書写に至っては、非常な効果をもたらした。たとえば、小学1年国語教科書に出る「開學了」（計30画）なる文字は、2時間かかっても児童は書けなかったが、「开学了」（計14画）と改まってからは、15分間で書くのを覚えたとか；農民がその識字学習において、「農業」（計26画）の2字はいつまでも書けなかったが、「农业」（計11画）と改まってからは楽に書けるようになったとか、この類の報告は少くない。

さて以上のように、簡体字は、識別上またとくに書写上に効果をもたらしたが、これに対する批判もないではない。そのおもなものを略述すると、下記の如くである。

現在公認されている簡体字は、その字数がはなはだ少なく、日常の用を果すのに十分でない、という批判がある。現在の簡体字は、前述のように偏旁簡化を応用しても、1,700～2,300字である。また、きわめて常用の字でありながら簡化されていないものがある（たとえば、整・繁・禁などの類）。当局者のいうように、通用字を六七千としてその半ばを簡化するとしても、現在なお 1,500 字以上が未簡化で残っている。しかもそれらの字について、従来どおり「約定俗成」の方針で既成の略字を広く社会に求めても、すでに種切れに近い状態である。こうした簡体字の不足、また繁体と簡体と並ぶ不格好（e. g. 尊严・产額），かかる理由から人々はますます自己流に造字して、混乱に拍車をかけている。これがこの批判の主張である。この主張は、理論的に追究してゆくと、「約定俗成」による「逐漸簡化」という原則自体への批判、疑問ともなりかね

ないものである。

次には、現在の簡体字は系統的でない、相互間に有機的連関がなく乱雑な集積だ、という批判がある。たとえば上記分類の1の「又」は好例で、「又」という符号は実に10種以上の旧体偏旁を代行している。さらにその間には類推がきかない。たとえば、鷄→鶏つまり奚→又という事実から類推して、溪→汉としたいが、実は別途の簡化で汉=漢(莫→又)が成立している。すなわち、在来の漢字がもっていた有機的系統が打破され混乱している。これでは、今の簡体字は、少なくとも在来の識字者には全くのマル暗記を強制するものだし、また今後の新学習者にも任意造字の心理を助長するものだ云々と主張する。この主張は、漢字習得上におけるある事実、すなわち、始は個々にマル暗記で漢字を習得していても、ある程度、段階に達すると、漢字相互間のある系統を心得するという事実を考えると、全く無視しきることはむずかしいであろう(なおかかる心得は、われわれ日本人には得られることきわめて少ないように思われる。それは、漢字各字の応用、駆使という点にも現れているように思われる)。

次には、漢字の書きやすさ、あるいは筆勢という点からみた批判がある。たとえば、書きやすさというものは必ずしも筆画の多少によるものではない、それは筆勢が連貫するか否かによるのだ。横書において、次の字と筆勢が通順するためには、各字の末筆が撇(左にハネルもの)であることは筆勢のトンズを来し、書写を阻害する。現在の簡体字はこの点が無視されている云々との主張である。そしてこの主張者は、この解決の暗示として草書を採用する。すなわち縦書における草書はきわめて通順なものであるが、草書のもつこの特長を横書の簡体字にも考慮し応用すべきだ、と主張する。単に書写速度からいえば、在来の草書や各種速記文字がすぐれていよう。しかしこれらの文字は、各字の示差単位がきわめて微妙であって、一般人にとっては、識別上にも学習上にもかなり難点があるろう。しかし今後の簡化において、草書の特長を生かした楷書化、草書のもつ系統性・連関性などは、もっと考慮されてよいものかと思われる。なおこの問題は、次の問題と連関する。

最後に、印刷体と手写体を分けるか否かの問題がある。かつて'55年草案当時には、この両者がある程度まで両立させる意図があったようで、毛沢東の語

「印刷には楷書を、手写には草書を」が時に引用されていたが、その後の動きでは、はっきりした立場は出されていないようである。一部の人々は次のように主張する：欧文字母においても印刷と手写の両体には距離があるが、これは生活上必然的に要求されるものではないか；旧時は日本でも中国でも、印刷にせよ手写到せよ、公的の場合には楷書体が、私的な手写の場合には草書体が行われていたではないか；今後も手写には、印刷体と多少異った字式・字形の書体が考慮されるべきではないか云々と主張する。僅々30前後の欧文字母の手写体と漢字のそれとは、質的に同日には論じえないと思われる。しかし印刷体・手写体の問題は、今後もかなり大きな問題といえよう。

4. 簡体字の正式実施に伴って生ずる問題のうち、簡体字自体に関する問題の一二をあげれば次の如くである。

まず近似字形の発生という問題がある。今日までの簡体字のうち、字形の近似するもの的一端をあげると、

|   |    |    |    |     |    |     |     |     |     |
|---|----|----|----|-----|----|-----|-----|-----|-----|
| { | 罗岁 | 当台 | 厉  | 厉   | 准准 | 儿几凡 | 业亚並 | 天无无 | 异导寻 |
| { | 羅歲 | 当芻 | 歷  | 曆厲  | 準准 | 兒几凡 | 業亞並 | 天無无 | 異導尋 |
| { | 压庄 | 庆床 | 斗头 | 实奕奕 |    |     |     |     |     |
| { | 压莊 | 慶床 | 斗頭 | 实奕奕 |    |     |     |     |     |

という類がある。実際の文章の場合、もちろん上下文の脈絡が明確化を助けるであろう。が、従来の識字者がもつ輪廓による「ひと目よみ」の速さは、多少抵抗をうけるであろう。ことに横書横組の場合、われわれの視覚的第一印象は字の上部におもむきやすいと考えられるが、この点からみれば

|   |    |    |      |    |    |    |
|---|----|----|------|----|----|----|
| { | 风风 | 受愛 | 类婁   | 天无 | 尺尽 | 斗头 |
| { | 風鳳 | 受愛 | 類婁・婁 | 天無 | 尺尽 | 斗頭 |

などは、多少問題があろう。ことに、単に1点画の有無、或は1筆画の差異が識別上の単位たるもの、たとえば

|   |    |    |    |    |    |    |    |    |     |
|---|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| { | 厂广 | 压庄 | 木术 | 工卫 | 友发 | 隶录 | 劝欢 | 衣农 | 杀杂亲 |
| { | 廠広 | 压莊 | 木術 | 工衛 | 友發 | 隸録 | 勸歡 | 衣農 | 殺雜親 |

などの類に至っては、識別上のみならず、手写における混乱の可能性があらうかと思われる。要するに、簡体字はその各字の示差の単位を微妙化したのである。

漢字については、はやくから「弁似」ということがいわれている。わずかに数種の筆画のみを駆使して、それぞれ独立する1字1四角の語文字を形成する構成法にあっては、上例の如き字形類似、従って弁似是、ある程度不可避の現象かと思われる。筆画を減少した簡体字にあっては、この傾向は更に増大するであろう。初学や外人にとっては、土と土、人と入、因と困の如き類ですら時に混乱をもたらすものであって、簡体字におけるこうした傾向の増大は、今後に決して望ましいことではない。しかもこの傾向は、漢字に内在するひとつの宿命ともいえるものなのである。

なお現在の簡体字の一部のもの、たとえば、厂（廠） 广扩矿（広拡鉱） 产（産） 严（嚴） 飞（飛） 气（氣）の類〔実例でいえば、工厂（工廠） 产婆（産婆） 飞鳥（飛鳥）という類〕に対して、「美観を損ずる、みばが悪い」という批難が一部にある。漢字形式に対してわれわれが今日もつ意識、すなわち、四つのカドをもって均衡を保っている方形字という意識、かかる意識や感情にとっては、上記諸字は多少抵抗を与えるかと思われる。しかし、それは本質的には感情の問題であり、また簡体字には不可避の傾向でもあって、大きく云々すべき問題ではないと考えられる。

次には、同音代用に関する問題がある。中共今次の漢字簡素化が字種制限と筆画簡略とを志向することは前述のとおりであるが、その字種制限は、漢字とは異質の文字（たとえば仮名やローマ字）をもたぬ中国の場合、同じく漢字による同音代用の法によって行われた。字種制限は、漢字改革の初期にはとくに強く意図されたようで、'56年方案中でも同音代用字90余が提出され、また異体字整理のなかにも同音代用と認めうるものがいくつか出されている。

e. g. 云（雲） 云南省（雲南省） 仆（僕） 公仆（公僕） 沈（瀋） 沈阳（瀋陽） 谷（穀） 五谷丰产（五穀豊産） 斗（鬪） 里（裏） 几（幾） 丑（醜） 叶（葉） 淀（澱） 面（麵） 准（準） 志（誌） 杂志（雜誌） 周（週） 果（菓）

上例のように、「常に一律に」甲字をもって乙字の代用をはかるのが同音代用である。しかし同音代用の一部には、明らかに混乱をひき起すものがある。それは、代用の漢字自体が一個の独立した漢字であり、それ自身の意味を表出

するからである。たとえば「麵粉」は一律に「面粉」と規定されたが、これでは或場合には、パン粉がオシロイと誤解され、「鬱々」が「郁々」と規定されたのは、悲しみが喜びに化する可能性を生む。「淮河干流」だけの字面では、河の幹流をいうのか、それとも水流の乾燥をいうのか不明である。更に文言の場合になると、「隔籬呼取尽余杯」（杜甫）の余杯は、自分のを指示する余杯なのか、それとも（特定の人以外の）餘杯なのか混乱を生ずる。また混乱の可能性はすくなくとも、「一年吃八百斤谷」（穀）とか「詭論美丑」（美醜を論ず）の如きは、少なくとも今日の識字者には多少の抵抗を与えるであろう。かかる同音代用による字種制限は、草案では更に多く出されていた（e.g. 副→付、従って副主席→付主席）。この同音代用が、1語1字を原則とする古典や旧文献に対してはとくに混乱を起しやすいことは、わずかな上例からでも明らかであろう。従ってこの同音代用に対しては、近来その再検討が伝えられている。

これを逆にみるならば、形・音・義をそなえた方形の文字、語文字とよばれる漢字が、今日なおいかに強いいわゆる表意性をもつものか、といえるであろう。わが日本の場合、制限された漢字の代用は仮名によって行われうるが、仮名が純音節文字であってなんらの表意性をもたぬゆえに、中国における同音代用が招来する如き問題は起らない。社会主義化の前提として、広大な農工文盲の一掃を至上命令とする中共の場合、もしかれらに仮名ありとすれば、かれらは必ずやまず二本立政策をとり、文盲識字には仮名を全面的に利用するであろう。しかし現在の中国が漢字制限を意図すれば、上述の同音代用によるほかはなく、しかもそれが抵抗と混乱を招来することまた上述のとおりである。漢字簡素化が、ともすれば単に字体簡略にのみ傾向するのもこのためであろう。しかし中国で字種制限を意図するなら、今後とも同音代用はたえず考えられてゆくであろう。表語文字たる漢字が、そのいわゆる表意性から人為的にどれだけ脱却しうるか、それは中国語の特質や変化とからみあいつつ、今後の文字改革全般に大きく影響すると考えられる。

以上が、政策的に行う漢字簡素化、具体的な個々の簡体字、それらに伴う諸問題をとおしてみた、漢字字体に関する調査の概略である。（村尾）

# 国語関係文献の調査

国語に関する学問の一般を知り、あわせて学界の動向や世論の動きをとらえるために、前年度に引き続き、次のような文献調査を行った。

## I. 刊行書の調査

国語学・国語問題・国語教育・言語学・言語技術・国語資料・辞典などの新刊書について、書名・著（編）者名・発行所・発行年月・型・ページ数、ならびに内容を調べ、カード化した404点（1957年1月～12月）の分類目録を作った。

この目録は、下記の雑誌論文、および新聞記事の目録とともに、当研究所編「国語年鑑」（昭和33年版）に掲載されている。

## II. 雑誌論文の調査

当研究所購入の諸雑誌、ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの逐次刊行物から、関係論文を調査し、題目・筆者・誌名・発行年月・巻号数、およびページ数などを記載したカード3通を作り、分類別・雑誌別・筆者別のカード目録を作った。採録した論文の総数は2,046点（1957年1月～12月）に達した。

調査した逐次刊行物は、研究所に寄贈された分（後記、「昭和32年度に寄贈された図書の一覧(2)逐次刊行物」参照）のほか、下記のとおりである。

|         |           |             |           |
|---------|-----------|-------------|-----------|
| 解釈と鑑賞   | （至文堂）     | 思想          | （岩波書店）    |
| 文学      | （岩波書店）    | 知性          | （河出書房）    |
| 文学研究    | （文学研究会）   | 理想          | （理想社）     |
| 国語と国文学  | （至文堂）     | 社会学評論       | （日本社会学会）  |
| NHK放送文化 | （日本放送協会）  | リーダーズダイジェスト | （同 日本支社）  |
| 教育      | （国土社）     | 週刊朝日        | （朝日新聞社）   |
| 教育心理学研究 | （国土社）     | 週刊読売        | （読売新聞社）   |
| 教育心理    | （日本文化科学社） | サンデー毎日      | （毎日新聞社）   |
| 児童心理    | （金子書房）    | 週刊サンケイ      | （産業経済新聞社） |

### III. 新聞記事の調査

下記の諸新聞から、関係記事を切り抜き、その整理に当たるとともに、分類別および日付順のカード目録を作った。カードの記載形式は、見出し語・(欄名だけで、見出し語のないものは、その内容によって、適宜に題名をつけた。)・紙名・筆署名・年月日・欄名・行数・内容の順序によった。調査した紙名は次のとおりで、その切抜き数は1,163点(昭和32年1月~12月)である。

- (1) 東京出版(朝刊) 朝日 毎日 読売 東京 東京タイムズ 産経時事 日本経済  
(夕刊) 朝日 毎日 読売 東京 産経時事 日本経済
- (2) 地方出版 中部日本 同(夕刊)  
なお、大阪の山田房一氏、富山の平岡伴一氏など、地方のかたがたから関係記事のあるごとに恵送されたものがある。
- (3) 特殊新聞 日本読書新聞 図書新聞 新聞協会報 その他  
(高橋・有賀)

### 図書の収集と整理

前年度に引き続き、研究活動に必要と思われる研究書・参考書・調査資料などを収集し管理した。収集の方針、整理の方法などすべて従来どおりである。

各方面からの寄贈図書も従来と同様、当研究所の書庫の充実に大きな役割を果たしている。

昭和32年度に備えた図書の数は次のとおりである。

|     |    |             |
|-----|----|-------------|
| 単行本 | 購入 | 1,416冊      |
|     | 寄贈 | 201冊        |
| 雑誌  | 購入 | 1,089冊(65種) |
|     | 寄贈 | 753冊(251種)  |
| 新聞  | 購入 | 15種         |
|     | 寄贈 | 3種          |

本年度末の単行本の蔵書数は23,637冊である。

## 昭和32年度に寄贈された図書の一覧

寄贈者名(敬称略) 図書名

- (1) 単行本 ( ) 内は編著者名。寄贈者と同じ場合は省く。
- 愛知県教育文化研究所 「教育関係図書・雑誌資料論文目録」  
朝日新聞社用語課 「新聞用語の手びき(1956年改定版)」  
糸井寛一 「カタカナによる方言音の表記」  
稲垣正幸 「奈良田の方言」  
愛媛大学 「愛媛の方言(武智正人)」  
大沢春子 「竹陰集(歌集)」  
大森重樹 「我が国における文字以前のコミュニケーション法について」「心理学的に見た魏志倭人伝」  
奥村三雄 「近世音韻史料としての黄檗唐音」  
開国百年記念文化事業会 「明治文化史 14 総索引」  
河北新報社 「河北ハンドブック〔改訂版〕」  
鎌田良二 「尊敬表現としての「て」「に」」  
京都国立博物館 「京都国立博物館六十年史」「平安時代の美術〔特別展覧会・解説・目録〕」  
京都市教育研究所 「ロスアンゼルス市立学校の道徳教育」「小学校教科以外の活動の実態」「高校教科書社会科「社会」における倫理的内容」「親のしつけ方の態度と園児の性行」「中学生の親子関係と性格」「高等学校特別教育活動の実態」「児童訓育の研究」  
近畿方言学会 「貝塚市の方言(榎垣爽)」「近畿方言調査簿(西宮一民編著)」  
熊本市教育研究所 「熊本市立小中学校の作文教育の実態とその対策」  
国学院大学図書館 「特別蒐集目録一往来物一第一」  
国際労働調査所 「ノーマン・トーマス、ソヴィエト政権の四十年」  
国立教育研究所 「付属教育図書館増加図書目録」 1. 2. 3  
国立国会図書館 「全国特殊コレクション要覧」  
国立国会図書館 「洋書分類目録第6巻第17門日本(東洋文庫)」「逐次刊行物目録(昭和30, 31年度)」  
小松代融一 「岩手県産、淡水魚類(小山真一郎)」  
コロンビア大学図書館 「新書目録((No. 46, 47)」  
斎藤義七郎 「武相の方言(毎日新聞切抜)」「神奈川県方言研究史稿」  
佐藤茂 「我等が郷土と人物, 第三巻(福井県文化誌刊行会)」  
産業経済新聞社 「サンケイ・ハンドブック」  
三省堂出版KK 「用字用語必携」

信濃教育会 「信濃教育目次集〔続編〕」  
柴田祐定 「言語指導を通して生活指導の研究・福島県常磐地区に於ける方言の研究」  
昭和女子大学 「近代文学研究叢書」 6, 7, 8  
史料館 「史料館所蔵史料目録 第六集」  
信州大学教育学部松本分校 「雑誌目録, 補遺」  
反町茂雄 「弘文荘善本目録」  
高羽五郎 「譬喩尽六」「スピリツェル修行 原文1」  
多々良鎮男 「古里地区方言集第一集(岡本小学校方言編集委員)」  
田中巖 「明代俗字攷」「西遊記の伝本」  
中部日本新聞社 「新聞用語手帳〔改定版〕」「新聞用語手帳〔1957年版〕」  
土屋利夫 「中学校生徒の当用漢字の読解力について〔川崎市立中学校〕」  
天理図書館 「日本史籍」「泰西日本記集」「天理図書館稀書目録, 洋書之部3」  
東京教育研究所国語教育研究会 「国語教育における聞き方ドリルの研究」「国語教育における聞きとり方類型の研究」  
東京国立文化財研究所美術部 「日本美術年鑑(昭和31年版)」  
東京大学史料編纂所 「大日本近世史料」小倉人畜改帳二, 三, 四「大日本古文書」家わけ第二十 東福寺文書之二, 幕末外国関係文書之二十七「大日本史料」第五編之二十, 第七編之十五, 第九編之十二「史料綜覧」卷十六「大日本古記録」梅津政景日記四, 上井覚兼日記下「史料編纂所図書目録第一部和漢書刊本編3」  
東京大学新聞研究所 「戦後の日本における世論調査の手引き」  
東京大学付属図書館 「東京大学洋書目録第六」  
東京堂 「江戸語東京語の研究(松村明著)」「反対語辞典(塩田紀和編)」  
東京都立教育研究所研究部 「生物の観察」「子供のおこづかい」「児童期の遊び」「子どもとマス・コミ」「学級における指導法の研究」「学力と家庭環境」「東京都における社会科の学力〔小学校6年について〕」「東京都における社会科の学力〔中学校2年について〕」「昭和31年度東京都理科学力調査報告書〔小学校・中学校の部〕」「勤労青少年教育調査」  
栃木県教育委員会指導課 「小・中・高校における文法指導の手びき」  
永江秀雄 「「魚」と「舟揚場」の方言」  
中山健 「秋田方言の実態に立つ発音指導の方法と技術」  
西日本新聞社 「新聞記者手帳」  
日本映画教育協会 「1956教育短編映画〔1957年1月調査〕」  
日本学術会議 「文学・哲学・史学文献目録 VI〔国語学編〕」  
日本放送協会 「放送のためのスポーツ辞典 1. 野球」「外国地名発音辞典(訂正および追加資料)」「原子力用語集」  
博報堂出版部 「広告のことば」

- 東蒲原郡PTA連合会 「東蒲原郡方言調査報告書第2輯」
- 日野資純 「神奈川県未刊行方言資料(1)」
- 淵真吾 「警察広報読本1957(警察庁長官官房総務課)」
- 日本放送協会放送文化研究所 「幼稚園・保育園ラジオ調査の概要」「幼稚園・保育園ラジオ調査結果報告書」「学校放送等調査報告書」「音のライブラリー」  
資料リスト」「テレビのタイトルとパターンの横書きと縦書きについて」
- 前田勇 「近世上方語考」
- 松村明 「欧米人による江戸語の発音研究」
- 宮城県教育研究所 「基本文型とことばの指導」
- 民主教育協会 「戦後の教育に対する学識経験者の批判(D・J・タロウ, ミヤザキヒロシ編)」「日本歴史の学者〔1958年版〕(ミヤザキヒロシ編)」「大学卒業生の就職に関する経済的考察(統計研究会編)」「道徳・民主主義・教育(ミヤザキヒロシ訳)」
- 明治書院 「日本文法講座」1, 2, 3, 4, 5,
- 森永松定 「国語・国字の改革と新表音文字」
- 文部省 「社会教育関係団体調査報告書(昭和31年度)」「標準語と方言 第2集」  
「国語と国語教育」「国語問題問答 第5集」「敬語とその教育」「現代かなづかいと正書法」「教育漢字の学年配当」「国語審議会報告書, 付議事要録3」「科学研究費機関研究報告集録 第4集」「学術用語集, 電気工学編」  
「定時制課程(夜)生徒の生活実態調査」
- 矢野文博 「五十音図の現代的意義」
- 山口隆俊 「東北地方の樹木方言 第3報(佐藤正己)」「茨城県の植物方言予報(佐藤正己)」「荘内地方の植物方言に就いて(佐藤正己)」
- 横浜市立西中学校 「国語表記の学習指導」
- 読売新聞社 「読売スタイルブック 1957」
- 陸上幕僚監部幕僚研究室 「テレタイプ方式の比較研究中間報告」
- (2) 逐次刊行物(おもなもの)
- 愛知学芸大学国語国文学会 「国語国文学報」6集
- 愛知県教育文化研究所 「研究紀要」10, 11集
- 愛知県立女子大学 「紀要」8輯
- 青山学院大学英文学会 「英文学思潮」30巻2号
- 秋田大学学芸学部 「研究紀要」5輯16輯
- 朝日新聞東京本社記事審査部用語課 「ことば」52号～56号
- 明日香路社 「明日香路」9巻4～12号, 10巻1号～3号
- 跡見学園 「国語科紀要」6号
- いずみ会 「いずみ」20号～23号
- 上野図書館 「上野図書館紀要」第3冊

宇和島市教育研究所 「紀要」4集 「所報」5集  
愛媛国語研究会 「国語研究」25, 26号  
愛媛国語国文学会 「愛媛国文研究」6号  
愛媛県立教育研究所 「紀要」21輯, 23輯  
大分県立教育研究所 「研究報告」11輯～13輯  
大分大学学芸学部 「研究紀要」6号  
大阪学芸大学 「紀要」A5, B5  
大阪市教育研究所 「教育研究紀要」26号～29号  
大阪市立大学文学会 「人文研究」8卷3号～11号, 9卷1号  
大阪市立大学文学史研究会 「文学史研究」6号～8号  
大阪大学文学部国文学研究室 「語文」18輯, 19輯  
大下学園国語科教育研究会 「研究紀要」1号  
大谷大学 「大谷学報」36卷4号, 37卷1号～3号  
岡山県教育研修所 「叢書」17号, 18号  
お茶の水女子大学 「人文科学紀要」9卷, 10卷  
お茶の水女子大学国語国文学会 「国文」7号, 8号  
香川県教育研究所 「教育研究」10号  
香川大学学芸学部 「研究報告第1部」9号, 10号  
鹿児島大学教育学部教育研究所 「研究紀要」8卷  
神奈川県国語教育研究会 「国語教室」創刊号  
神奈川県立教育研究所 「研究報告」10集  
金沢大学教育学部 「紀要」5号  
カナモジカイ 「カナノヒカリ」418号～426号  
関西大学国文学会 「国文学」17号～19号  
関西学院大学人文学会 「人文論究」7卷6号, 8卷1号～3号  
関西学院大学日本文学会 「日本文芸研究」8卷3, 4号 9卷1号～4号  
観世界 「観世」24卷4号～12号  
関東短期大学 「紀要」4集  
九州大学国文学会 「語文研究」6号, 7号  
九州大学文学研究会 「文学論輯」1号, 2号, 4号  
九州大学文学部 「文学研究」56輯  
教育技術連盟 「教育技術」12卷1号～9号「教育技術・幼児と保育」3卷1号～9号  
「小一教育技術」11卷1号～12号「小二教育技術」10卷1号～12号「小三教育技術」11卷1号～12号「小四教育技術」10卷1号～12号「小五教育技術」11卷1号～12号「小六教育技術」10卷1号～12号「中学教育—教育技術」2卷1号～9号「社会科研究—教育技術」2卷1号～9号  
京都学芸大学 「学報」A10号, 11号 B10号, 11号

京都市教育研究所 「京都の教育」13号～15号  
京都女子大学国文学会 「女子大國文」6号, 7号  
京都大学教育学部 「紀要」Ⅲ  
京都大学国文学会 「国語國文」272号～280号  
京都大学人文科学研究所 「紀要」17号, 18号「調査報告」15号「所報」50号, 51号  
「ZINBUN」1号  
京都大学文学部心理学評論刊行会 「心理学評論」1卷1号  
共立女子大学 「紀要」2輯  
岐阜大学学芸学部 「研究報告—人文科学—」5号  
「近代文学」大阪研究会 「文学思潮」21号  
熊本女子大学 「學術紀要」9卷1号  
熊本大学法文学会 「法文論叢」9号  
クラブ尖塔 「尖塔」29号, 30号  
訓点語学会 「訓点語と訓点資料」8輯  
群馬大学 「紀要—人文科学—」6卷  
群馬大学語文学会 「語文と文学」1号  
口語俳句発行所 「口語俳句」22号  
高知大学 「學術研究報告」5卷  
甲南女子短期大学 「論叢」2号  
甲南女子短期大学国語国文学会 「甲南國文」創刊号  
甲南大学文学会 「甲南大学文学会論集」5号, 6号  
福戸市外国語大学 「神戸外大論叢」35号～37号  
神戸市教育研究所 「教育研究展望」21号  
神戸女学院大学 「論集」4卷1号～3号  
神戸市立教育研究所 「研究報告」26号  
神戸大学文学会 「研究」14号  
神戸大学国語国文学会 「國文論叢」6号  
語学教育研究所 「語学教育」236号, 237号  
国学院大学 「国学院雜誌」58卷1号～8号, 59卷1号  
国学院大学国語研究会 「国語研究」3号, 6号, 7号  
国語学会 「国語学」28輯～30輯  
国立教育研究所 「紀要」8—I, 8-II, 9「所報」36号～40号  
国立国会図書館 「国際交換通信」11号, 12号「公報」9卷2号～4号  
「古典と現代」の会 「古典と現代」1号  
小林理学研究所 「報告」7卷1号～2号  
駒沢大学 「研究紀要」15号  
駒沢大学史学会 「駒沢史学」6号

西京大学 「人文」 8号, 9号  
埼玉大学 「紀要」(教育学部篇) 1集~6卷  
佐賀県教育研究所 「研究紀要」11号, 12号  
佐賀大学教育学部 「研究論文集」7集  
佐賀竜谷学会 「紀要」5号  
作文の会 「作文教育」4巻5号~8号「小学さくぶん〔初級用〕」「小学作文〔中級用〕」「小学作文〔上級用〕」「作文〔中学用〕」各5巻5号~8号  
山陰民俗学会 「山陰民俗」10号, 11号, 14号  
三省堂出版KK 「文学・語学」3号~6号  
滋賀県立短期大学 「雑誌」B3巻3号  
滋賀コトバの会 「みんなのコトバ」2号, 3号  
滋賀大学学芸学部 「紀要」6号, 7号  
静岡県立教育研究所 「教育研究」4号  
静岡大学教育研究所 「文化と教育」87号~96号  
静岡大学文理学部 「研究報告—人文科学—」7号, 8号  
実践女子大学 「実践文学」2号  
信濃教育会 「信濃教育」845号~849号, 851号~854号  
島根県国語教育研究会 「研究紀要」1号  
島根大学 「論集」3号(社会), 7号(人文)(教育)  
昭和女子大学光葉会 「学苑」203号~211号  
東京教育大学付属小学校初等教育研究会 「教育研究」12巻4号~12号  
信州大学 「紀要」6号  
信州大学教育学部 「研究論集」8号  
成城大学文芸学部 「成城文芸」9号~12号  
聖心女子大学 「論叢」9集, 10集  
清泉女子大学 「紀要」  
誠文堂新光社 「カリキュラム」104号~109号  
全国大学国語教育学会 「国語科教育」4集  
大修館 「国語教室」64号, 66号~72号  
大正大学 「研究紀要」41号, 42号  
千葉大学文理学部 「紀要」2巻2号  
中国科学院語言研究所(北京) 「語言研究」1期  
中国語学研究会 「中国語学」60号, 62号~64号, 66号, 68号, 69号  
中国語友の会 「中国語文」57号~68号  
天理大学 「天理大学学報」22輯~24輯  
天理大学国文学研究室 「山辺道」3号  
天理図書館 「ビブリア」8号, 9号

電気通信大学 「学報」8号, 9号  
電通K. K. 「電通広告論誌」10号, 13号  
東京外国語大学 「論集」6号  
東京教育大学国語国文学会 「国語」15号～17号  
東京教育大学文学部 「紀要」13号, 14号  
東京女子大学 「論集」7卷2号, 8卷1号, 2号  
東京女子大学比較文化研究所 「紀要」4号「比較文化」4号  
東京大学教育学部 「東大付属論集」3号  
東京大学教養学部 「人文科学科紀要—国文学・漢文学—」13輯  
東京大学新聞研究所 「紀要」6号  
東京都立教育研究所研究部「研究シリーズ」34号～37号  
東京都立大学人文学会 「人文学報」16号, 18号  
統計数理研究所 「彙報」9号  
同志社女子大学 「学術研究年報」8号  
東北学院大学 「論集」28号, 30号～32号  
東北大学教育学部 「研究年報」Ⅳ号  
東北大学教育学部付属小学校 「研究紀要」1957  
東北大学文学会 「文化」21卷4号  
東北大学文学部 「研究年報」7号, 8号  
東洋大学国語国文学会 「文学論叢」7号～9号  
東洋文化研究所 「紀要」12冊, 13冊  
東洋文庫 「年報」昭和30年度  
徳島県教育委員会 「教育月報」87号～98号  
徳島県教育委員会 「教育年報」1957  
徳島大学学芸学部 「学芸紀要」6卷  
徳島大学学芸学部付属小学校 「紀要」4集  
鳥取県教育研究所 「研究紀要」9集  
富山大学文理学部 「文学紀要」7号  
名古屋大学教育学部 「紀要」3卷  
名古屋大学教養学部 「紀要」1輯, 2輯  
名古屋大学文学部 「研究論集」6号  
新潟大学教育科学研究会 「教育科学」6卷2号, 3号, 7卷1号～3号  
日仏会館 「学報」新4卷—2  
日本音声学会 「会報」93号～95号  
日本言語学会 「言語研究」31号, 32号  
日本コトバの会 「日本のコトバ」6号  
日本書籍K K 「教育手帳」69号～78号

日本新聞学会 「新聞学評論」7号  
日本大学世田谷教養部 「紀要」5輯, 6輯  
日本大学文学部 「研究年報—第三分冊—」7輯  
日本のローマ字社 「RÔMAZI NO NIPPON」60号~68号  
日本比較文学会 「会報」9号, 10号  
日本文学研究会 「文学研究」10号  
日本文学研究会 (高知市) 「日本文学研究」1号, 2号  
日本文芸研究会 (仙台) 「文芸研究」25集~27集  
日本放送協会 「NHK教養放送」19号~21号「NHK国語講座」3巻2号~6号  
日本民俗学会 「日本民俗学」4巻4号, 5巻1号, 2号  
日本民族学協会 「民族学研究」21巻1号, 2号~4号  
日本ユネスコ協会連盟 「ユネスコ新聞」181号~216号  
日本ローマ字会 「ローマ字世界」503号~510号  
花園大学 「禪学研究」47号, 48号  
一橋大学経済研究所 「経済研究」8巻2号~4号, 9巻1号  
兵庫県方言学会 「兵庫方言」5号  
広島女子短期大学 「研究紀要」8集  
広島大学国語国文学会 「国文学攷」17号, 18号  
広島大学文学部 「紀要」12号  
広島中世文芸研究会 「中世文学」11号, 12号  
福井漢文学会 「漢文学」6輯  
福井大学学芸学部 「紀要」6号, 7号  
福岡学芸大学 「紀要」6号, 7号  
福岡学芸大学久留米分校教育研究所 「研究紀要」7巻  
福岡県立教育研究所 「教育研究」25輯, 26輯  
福岡女子大学 「文芸と思想」14号  
福島大学学芸学部 「論集」8集1, 2, 3,  
文学研究会 「文学研究」15号  
米国大使館文化交流局 「アメリカーナ」3巻4号~3巻12号  
防衛大学校 「紀要」1輯  
法政大学国文学会 「日本文学誌要」復刊1号  
NHK放送文化研究所 「調査研究報告」2集「文研月報」71号~82号  
北海道学芸大学 「人文論究」16号, 17号  
北海道大学 「外国語・外国文学研究」4号  
北海道大学国文学会 「国語・国文研究」10号  
穂波出版社 「実践国語」18巻193号~206号  
萬葉学会 (吹田市) 「萬葉」23号~25号

三重県立大学 「研究年報—第一部—」2卷3号  
「未定稿」の会 「未定稿」4号  
武蔵大学学会 「武蔵大学論集」8号：英文  
武蔵野書院 「武蔵野文学」2輯～4輯  
明治書院 「古典」1号～3号  
明治大学人文科学研究所 「人文科学研究」8号  
明治大学図書館 「増加書目録」65号～80号  
明治大学日本文学会 「紀要」1号  
文部省 「年報」81年報，82年報「文部統計速報」83号・84号「教育統計」47号～49号，51号「指定統計」9号，13号，15号「初等教育資料」84号～94号「中等教育資料」6卷4号～12号，7卷1号～3号  
山形県教育研究所 「山形教育」61号～14号，66号  
山形大学 「紀要—人文科学」3卷4号，4卷1号  
山形大学教育学部国語国文学研究会 「國語研究」9輯  
山口女子短期大学 「研究報告」1号，2号，4号～9号  
山口大学文学会 「文学会誌」8卷1号，2号  
山梨県立教育研究所 「研究紀要」30集  
山梨大学学芸学部 「紀要」2号「研究報告」3号  
横浜国立大学学芸学部 「人文紀要」6輯  
立教大学文学部 「心理・教育学科研究年報」1号  
立正大学 「立正学報」2卷3号「文学部論叢」7号  
立命館大学人文学会 「立命館文学」142号～149号，152号，153号  
立命館大学日本文学会 「論究日本文学」6号  
立命館大学平安文学研究会 「平安文学研究」20輯  
龍谷大学 「論集」355号～357号  
龍谷大学国文学会 「国文学論叢」6輯  
早稲田大学教育会 「学術研究」6号  
早稲田大学国文学会 「国文学研究」15輯，16輯  
UNIVERSITY OF LONDON “BULLETIN OF THE SCHOOL OF ORIENTAL AND AFRICAN STUDIES” VOL. 19 NO.1  
UNIVERSITY OF WASHINGTON “MODERN LANGUAGE QUARTERLY” VOL.18 NO.1

(高橋・芳賀)

# 庶務報告

## A. 庁舎および経費

### (1) 庁舎

所在 東京都千代田区神田一ツ橋1ノ1

木造モルタル塗, 2階建 建坪 本館 321.709坪

軽量不燃書庫 30.501坪 閲覧室 13.985坪 計 366.195坪

### (2) 経費

昭和32年度予算 総額 29,729,000円

人件費 20,533,000円

事業費 9,196,000円

## B. 評議員会

会長 土岐善麿 副会長 波多野完治

伊藤忠兵衛 円地 文子 金田一京助

倉石武四郎 桑原 武夫 颯田 琴次

沢登 哲一 時枝 誠記 土居 光知

中島 健蔵 中島 文雄 野村 秀雄 (33.2.14就任)

服部 四郎 松方 三郎 松坂 忠則

宮沢 俊義 山崎 匡輔 永田 清 (32.11.3死亡)

## C. 組織と職員

### (1) 予算定員

教官 32 事務職員 16 合計 48

### (2) 組織および職員

|         | 職名 | 氏名   | 備考 |
|---------|----|------|----|
| 国立国語研究所 | 所長 | 西尾 実 |    |

|                   |       |                                 |                       |
|-------------------|-------|---------------------------------|-----------------------|
| 第1研究部<br>話しことば研究室 | 部長    | 岩淵悦太郎                           |                       |
|                   | 主任    | 大石初太郎<br>飯豊 毅一<br>宮地 裕<br>吉沢 典男 |                       |
|                   | 臨時筆生  | 木積きよ子                           | 33. 3. 31辞職 (旧姓樋口)    |
|                   | ”     | 大平富美子                           | 32. 4. 1採用33. 3. 31辞職 |
| 書きことば研究室          | 主任    | 林 大<br>斎賀 秀夫<br>水谷 静夫<br>石綿 敏雄  |                       |
|                   | 臨時筆生  | 橋本 圭子                           |                       |
|                   | ”     | 高木 翠                            |                       |
|                   | ”     | 岡本美奈子                           |                       |
|                   | ”     | 西尾芙美子                           | 33. 1. 28辞職           |
|                   | ”     | 西山 洋子                           | 32. 4. 1採用            |
| 地方言語研究室           | 主任    | 柴田 武<br>野元 菊雄<br>上村 幸雄<br>徳川 宗賢 |                       |
|                   | 臨時筆生  | 白沢 宏枝                           | 32. 4. 1採用            |
|                   |       |                                 |                       |
| 第2研究部<br>国語教育研究室  | 部長    | 興水 実                            |                       |
|                   | 主任    | 芦沢 節<br>高橋 太郎<br>村石 昭三          |                       |
|                   | 臨時筆生  | 根本今朝男                           |                       |
|                   | ”     | 川又瑠璃子                           |                       |
| 言語効果研究室           | 主任    | 永野 賢<br>林 四郎                    |                       |
|                   | 臨時筆生  | 渡辺 友左<br>宮地美保子                  | (旧姓高森)                |
|                   |       |                                 |                       |
| 第3研究部<br>近代語研究室   | 部長心得  | 山田 巖                            |                       |
|                   | 主任(兼) | 山田 巖<br>見坊 豪紀                   |                       |
|                   | (兼)   | 広浜 文雄                           |                       |
|                   |       |                                 |                       |

|       |       |        |                      |
|-------|-------|--------|----------------------|
|       | (兼)   | 市川 孝   |                      |
|       | (兼)   | 進藤 咲子  |                      |
|       | 臨時筆生  | 上村 泰   | 32.10.31 辭職          |
|       | "     | 田中 喜一  | 33.3.31 辭職           |
| 資料調査室 | 室長(併) | 岩淵悦太郎  |                      |
| 調査室   | 主任    | 松尾 拾   |                      |
|       |       | 村尾 力   |                      |
|       |       | 広浜 文雄  |                      |
|       |       | 市川 孝   |                      |
|       |       | 進藤 咲子  |                      |
|       |       | 大久保 愛  |                      |
|       | 臨時筆生  | 山田 立子  | 32.4.1 採用            |
| 編集室   | 主任    | 上甲 幹一  |                      |
|       |       | 高田 正治  |                      |
|       | 臨時筆生  | 織田 滌   |                      |
|       | "     | 吉村 輝一  | 32.5.7 辭職            |
|       | "     | 富田 玲子  | 32.9.1 採用 33.3.25 辭職 |
| 文献室   | 主任    | 高橋 一夫  |                      |
|       |       | 有賀 憲三  |                      |
|       | (兼)   | 芳賀清一郎  |                      |
|       | 臨時筆生  | 大塚 通子  |                      |
|       | "     | 寺尾 敏明  | 33.2.10 辭職           |
|       | 兼任所員  | 遠藤 嘉基  | 京都大学教授               |
|       | "     | 藤原 与一  | 広島大学助教授              |
|       | "     | 佐藤喜代治  | 東北大学教授               |
| 庶務部   | 部長    | 細井 房夫  | 32.11.28 東北大学に配置換    |
|       | 部長    | 尾崎源之助  | 32.12.4 高知大学から配置換    |
| 庶務課   | 課長    | 三島 良兼  |                      |
|       | 課長補佐  | 名古屋恒太郎 |                      |
|       |       | 鈴木 篁二  |                      |
|       |       | 芳賀清一郎  |                      |
|       |       | 増山 治子  |                      |
|       | 臨時筆生  | 桜井 幸子  | 32.4.1 採用 32.7.31 辭職 |
|       | "     | 根岸佐代子  | 32.8.1 採用            |

|     |      |                                                                                      |
|-----|------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| 会計課 | 課長   | 黄木得二郎<br>伊藤 仲二<br>鈴木 亨<br>三浦 清伍<br>渋谷 正則<br>西山 博<br>伏見 と志<br>江頭 健一<br>吉田芳太郎<br>金田 とよ |
|     | 臨時筆生 | 加藤 雅子                                                                                |

#### D. 内地留学生受入れ

全国都道府県から内地留学生を迎えて、研究の便をはかっている。次にその氏名・研究題目などを掲げる。

| 氏名   | 学校      | 研究題目          | 期間           |
|------|---------|---------------|--------------|
| 中坪盛二 | 富山県富山市立 | 読みの学習指導の      | 昭和32. 4.17から |
|      | 奥田小学校教諭 | 方法            | 〃 32. 7.16まで |
| 渡辺祐典 | 千葉県館山市立 | 小学校児童の話し      | 昭和32. 4.18から |
|      | 館山小学校教諭 | ことばはどう変わってくるか | 〃 33. 3.18まで |

#### E. 日誌抄

1957. 5.30～31 第16回文部省所轄並びに国立大学付置研究所長会議（日本学術会議で）
7. 9 第35回国立国語研究所評議員会議事
1. 昭和31年度研究事業報告
  2. その他
- 7.27 大阪女子大学国文学科教授玉上琢弥・学生8名研究所見学
9. 2～21 文部省主催教育委員会事務局職員（指導主事）研究講座に協力（一橋講堂で）

- 9.20 高崎市教育研究会国語部員15名研究所見学
10. 3～4 第10回文部省所轄並びに国立大学付置研究所事務協議会（京都大学楽友会館講堂で）
10. 4 衆議院事務局記録部員15名研究所見学
- 10.29～30 第8回文部省所轄機関事務協議会（緯度観測所で）
11. 6～7 文部省所轄並びに国立大学付置研究所第3部所長会議（京都大学人文科学研究所で）
- 12.17 第36回国立国語研究所評議員会議事
1. 幹事の承認
  2. 研究事業の中間報告
  3. その他
- 12.20 国立国語研究所創立記念日
1958. 2.24～25 昭和32年度 文部省所轄並びに国立大学付置研究所第3部会事務協議会（如水会館で）
- 3.24 第37回国立国語研究所評議員会議事
1. 評議員の異動
  2. 庁舎の敷地および新設について
  3. その他

昭和 33 年 12 月

国立国語研究所

東京都千代田区神田一ツ橋 1-1  
電話 九段 (33) 代表 4295

U D C 058:495.6

N D C 810.5

9455

— 国立国語研究所刊行書 —

|             |                                                |                 |   |                     |
|-------------|------------------------------------------------|-----------------|---|---------------------|
| 昭和24年度      | 国立国語研究所                                        | 年報              | 1 |                     |
| 昭和25年度      | 国立国語研究所                                        | 年報              | 2 |                     |
| 昭和26年度      | 国立国語研究所                                        | 年報              | 3 |                     |
| 昭和27年度      | 国立国語研究所                                        | 年報              | 4 |                     |
| 昭和28年度      | 国立国語研究所                                        | 年報              | 5 |                     |
| 昭和29年度      | 国立国語研究所                                        | 年報              | 6 |                     |
| 昭和30年度      | 国立国語研究所                                        | 年報              | 7 |                     |
| 昭和31年度      | 国立国語研究所                                        | 年報              | 8 |                     |
| <hr/>       |                                                |                 |   |                     |
| 国立国語研究所報告1  | 八丈島の言語調査                                       |                 |   |                     |
| 国立国語研究所報告2  | 言語生活の実態<br><small>—白河市および付近の農村における—</small>    |                 |   | (秀英出版刊)<br>¥ 300.00 |
| 国立国語研究所報告3  | 現代語の助詞・助動詞<br><small>—用法と実例—</small>           |                 |   |                     |
| 国立国語研究所報告4  | 婦人雑誌の用語<br><small>—現代語の語彙調査—</small>           |                 |   |                     |
| 国立国語研究所報告5  | 地域社会の言語生活<br><small>—福岡における実態調査—</small>       |                 |   | (秀英出版刊)<br>¥ 600.00 |
| 国立国語研究所報告6  | 少年と新聞<br><small>—小学生・中学生の新聞への接近と理解—</small>    |                 |   |                     |
| 国立国語研究所報告7  | 入門期の言語能力                                       |                 |   |                     |
| 国立国語研究所報告8  | 談話語の実態                                         |                 |   |                     |
| 国立国語研究所報告9  | 読みの実験的研究<br><small>—音読にあらわれた読みあやまりの分析—</small> |                 |   |                     |
| 国立国語研究所報告10 | 低学年の読み書き能力                                     |                 |   |                     |
| 国立国語研究所報告11 | 敬語と敬書意識                                        |                 |   |                     |
| 国立国語研究所報告12 | 総合雑誌の用語(前編)<br><small>—現代語の語彙調査—</small>       |                 |   |                     |
| 国立国語研究所報告13 | 総合雑誌の用語(後編)<br><small>—現代語の語彙調査—</small>       |                 |   |                     |
| 国立国語研究所報告14 | 中学年の読み書き能力                                     |                 |   |                     |
| <hr/>       |                                                |                 |   |                     |
| 国立国語研究所資料集1 | 国語関係刊行書目(昭和17~24年)                             |                 |   |                     |
| 国立国語研究所資料集2 | 語彙調査<br><small>—現代新聞用語の一例—</small>             |                 |   |                     |
| 国立国語研究所資料集3 | 送り仮名法資料集                                       |                 |   |                     |
| 国立国語研究所資料集4 | 明治以降国語学関係刊行書目                                  |                 |   | (秀英出版刊)<br>¥ 300.00 |
| <hr/>       |                                                |                 |   |                     |
| 国立国語研究所共著   | 日本新聞協会                                         | 高校生と新聞          |   | (秀英出版刊)<br>¥ 280.00 |
| 国立国語研究所共著   | 日本新聞協会                                         | 青年とマス・コミュニケーション |   | (金沢書店刊)<br>¥ 280.00 |
| 国立国語研究所編    | 国語年鑑                                           | (昭和29年版)        |   | (秀英出版刊)<br>¥ 450.00 |
| 国立国語研究所編    | 国語年鑑                                           | (昭和30年版)        |   | (秀英出版刊)<br>¥ 600.00 |
| 国立国語研究所編    | 国語年鑑                                           | (昭和31年版)        |   | (秀英出版刊)<br>¥ 450.00 |
| 国立国語研究所編    | 国語年鑑                                           | (昭和32年版)        |   | (秀英出版刊)<br>¥ 480.00 |
| 国立国語研究所編    | 国語年鑑                                           | (昭和33年版)        |   | (秀英出版刊)<br>¥ 480.00 |

1957~1958

ANNUAL REPORT OF NATIONAL  
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

CONTENTS

Foreword

Outline of Research from April 1957 to March 1958

Research in Sentence Patterns of Colloquial Japanese

Research on Vocabulary in Cultural Reviews

Word-construction

Research on Vocabulary in the Various Magazines

Survey for Linguistic Maps of Japan

Compilation of Dialect Dictionary of Syuri, Ryûkyû

Study of Language Development of School Children

Experimental Study on Readability of Chinese

Character used in Newspapers

Study on the Japanese Language of the Meizi Period

Research in Special Other Problems

Others

General Affairs

**THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE**

**KANDA-HITOTUBASI, TIYODA, TOKYO**